

右上隅黒一と三の六目とは、白一子を取つてそれが二目。――

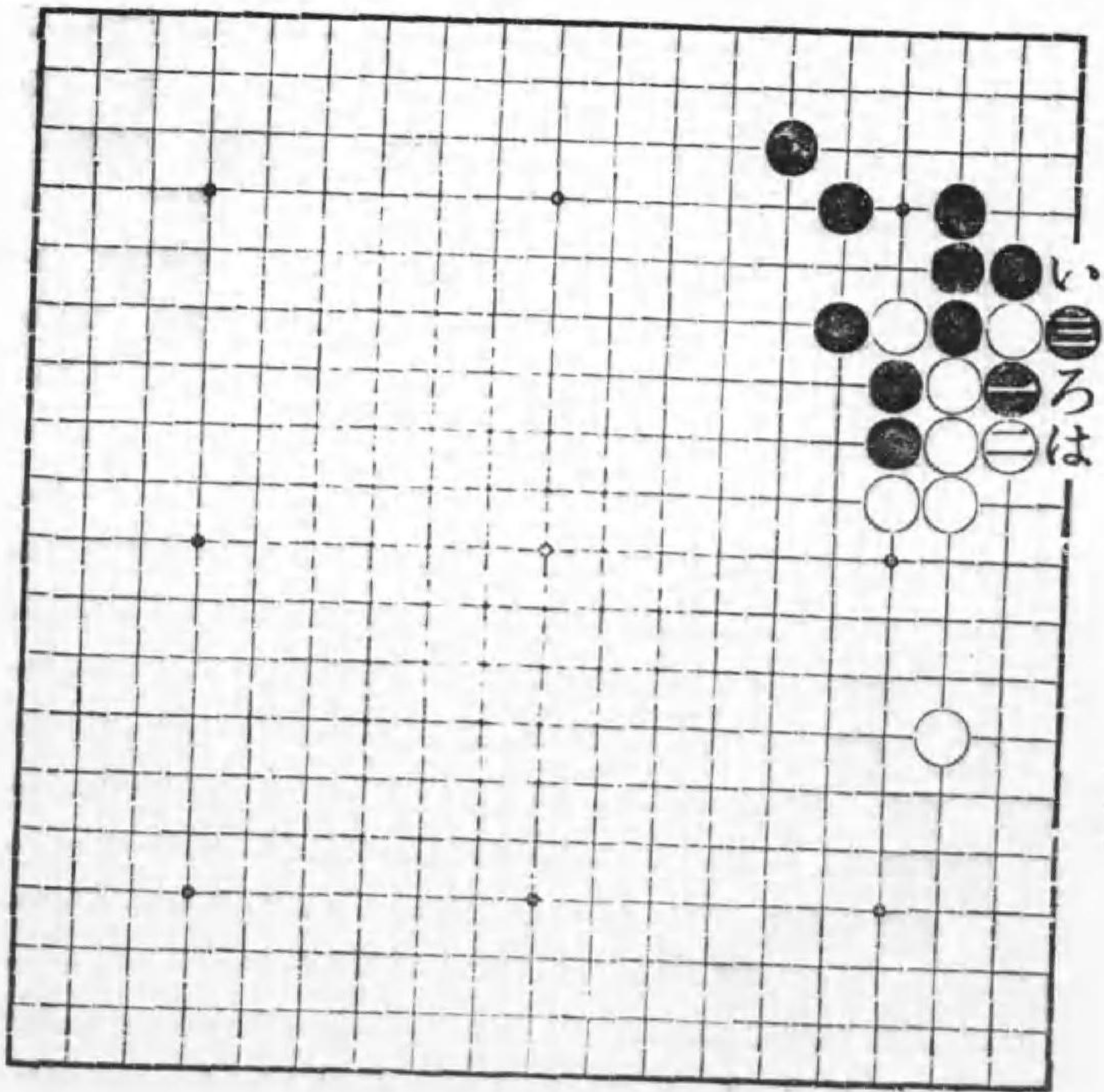
それに加えて(い)の所が黒地一目でき、計三目。

此れを白先白(ろ)だと、

一の所、二の所――

また(は)の所も白地であつて計三目。

其増減の合算六目といふのである。



一九四

右上隅黒一と三は次に――黒(い)白(ろ)また黒飛付け(は)。と大きな所である。但し黒(い)は――

周囲の工合で見合せの事

左下隅黒一と三も、次に

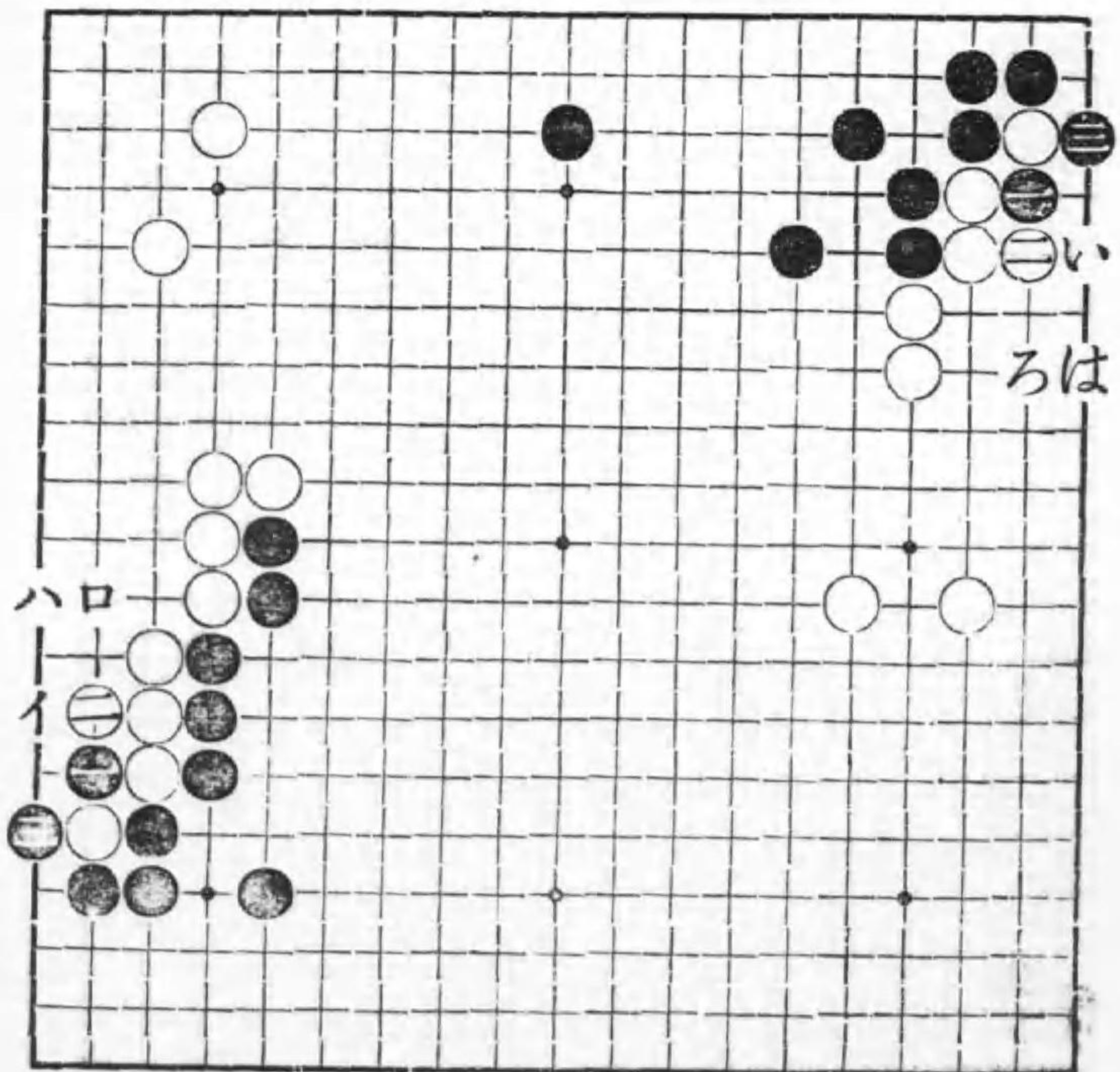
黒(イ)白(ロ)黒(ハ)。

二圖とも約十五目。假令

ば白の取石五子ある時、そ

れは十日の手、石の多少に

眼はくれないもの。



一九五

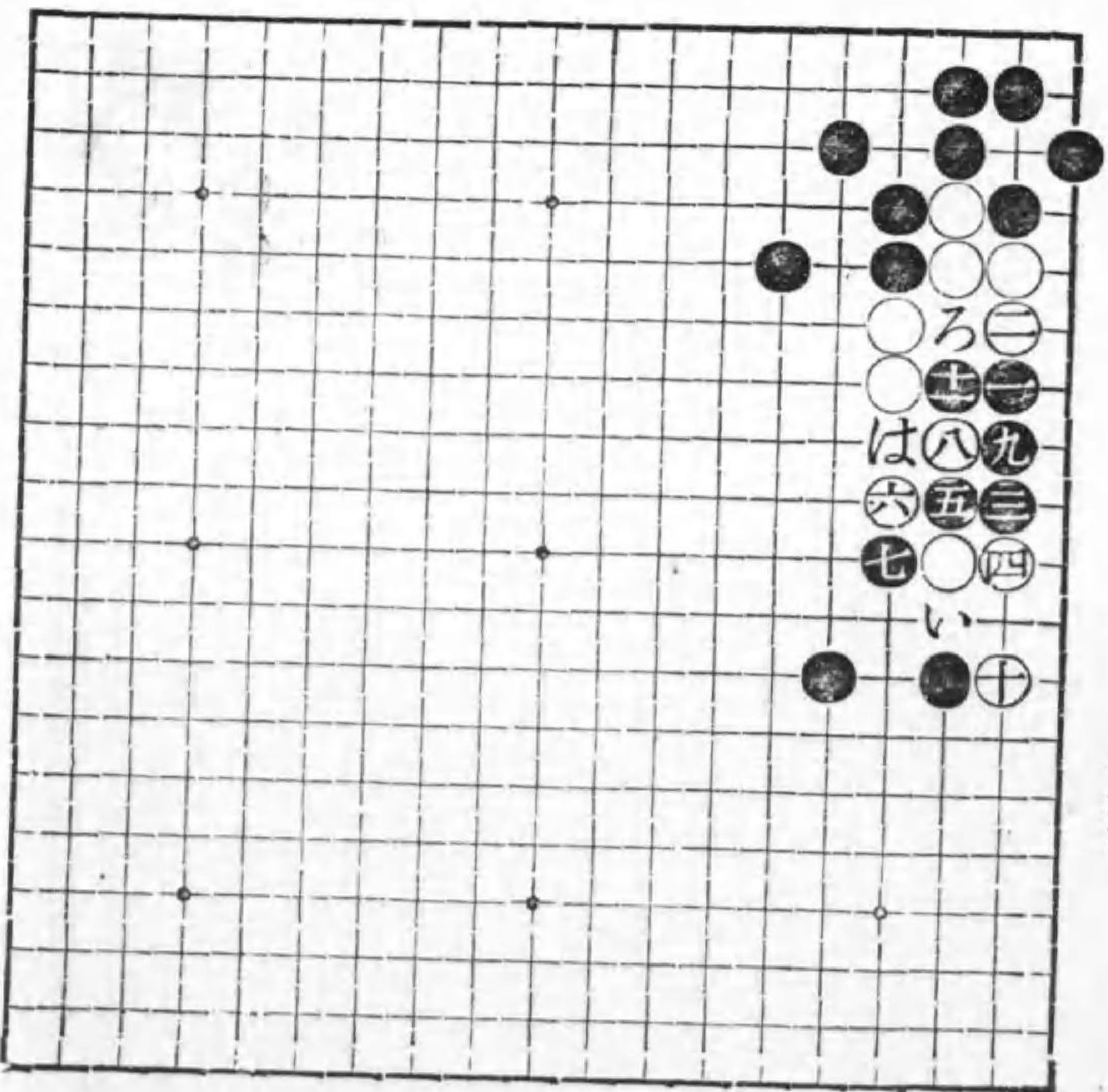
前譜右上隅黒(い)は見合せの事――

とは本圖のやうな白丸黒丸にあつては――

見られる如く黒一より十一まで。

黒一は白の痛い急所である。白十を十一だと黒(い)。また黒十一の次に――

白(ろ)は黒(は)と白八を打抜。等で黒一には白閉口の態。



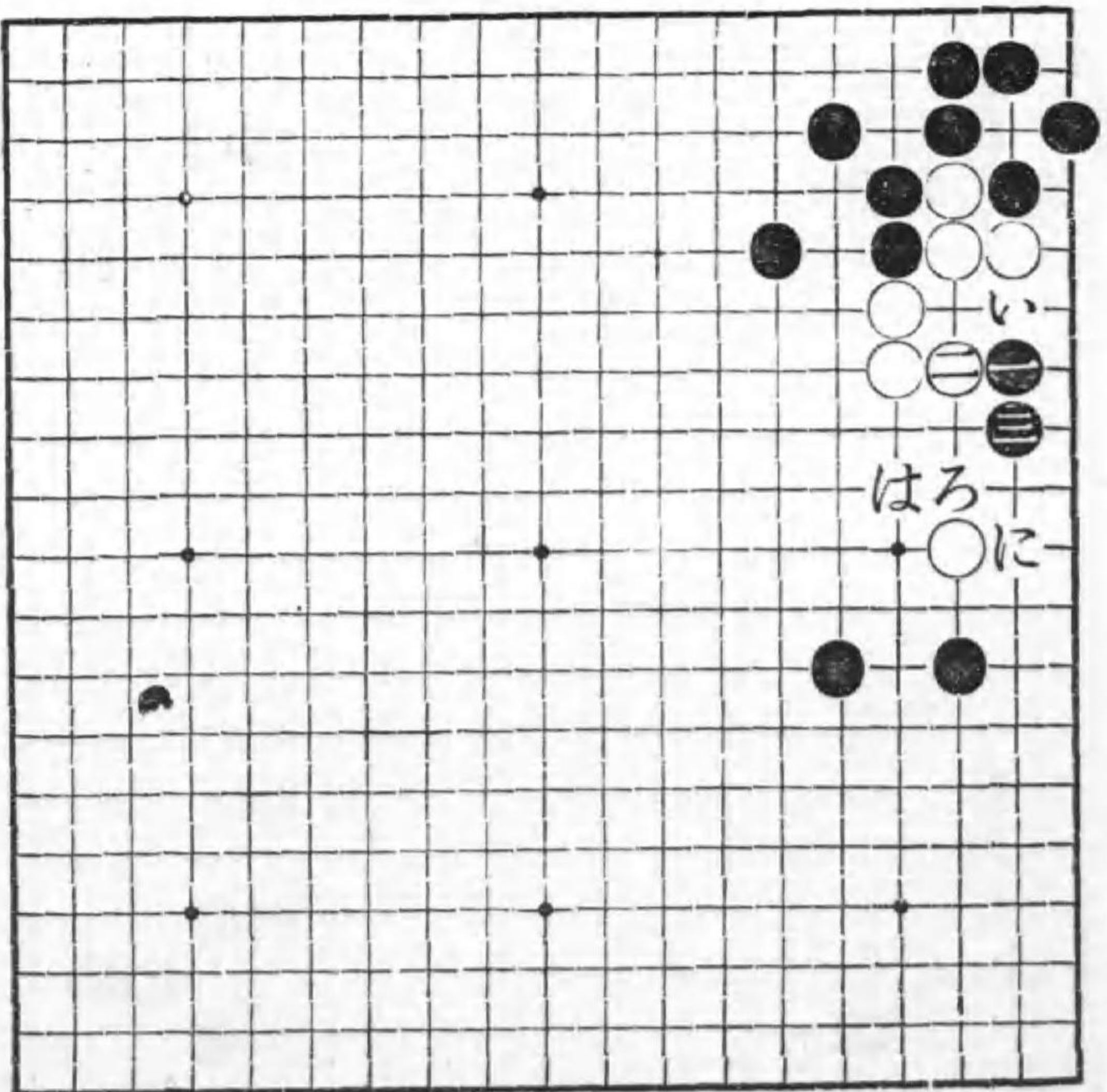
本圖黒三までにも白は大いに困る。

白次に(い)と黒の渡りを止めなら、黒(ろ)。

黒(ろ)に白(は)は――黒(に)と此方に黒渡り。

白(は)を(に)は黒――(は)と突出。

等で立場を變え、一と白に來られぬやう。黒は一に備へておくものである。



右上隅黒一は白一子を確實に取。

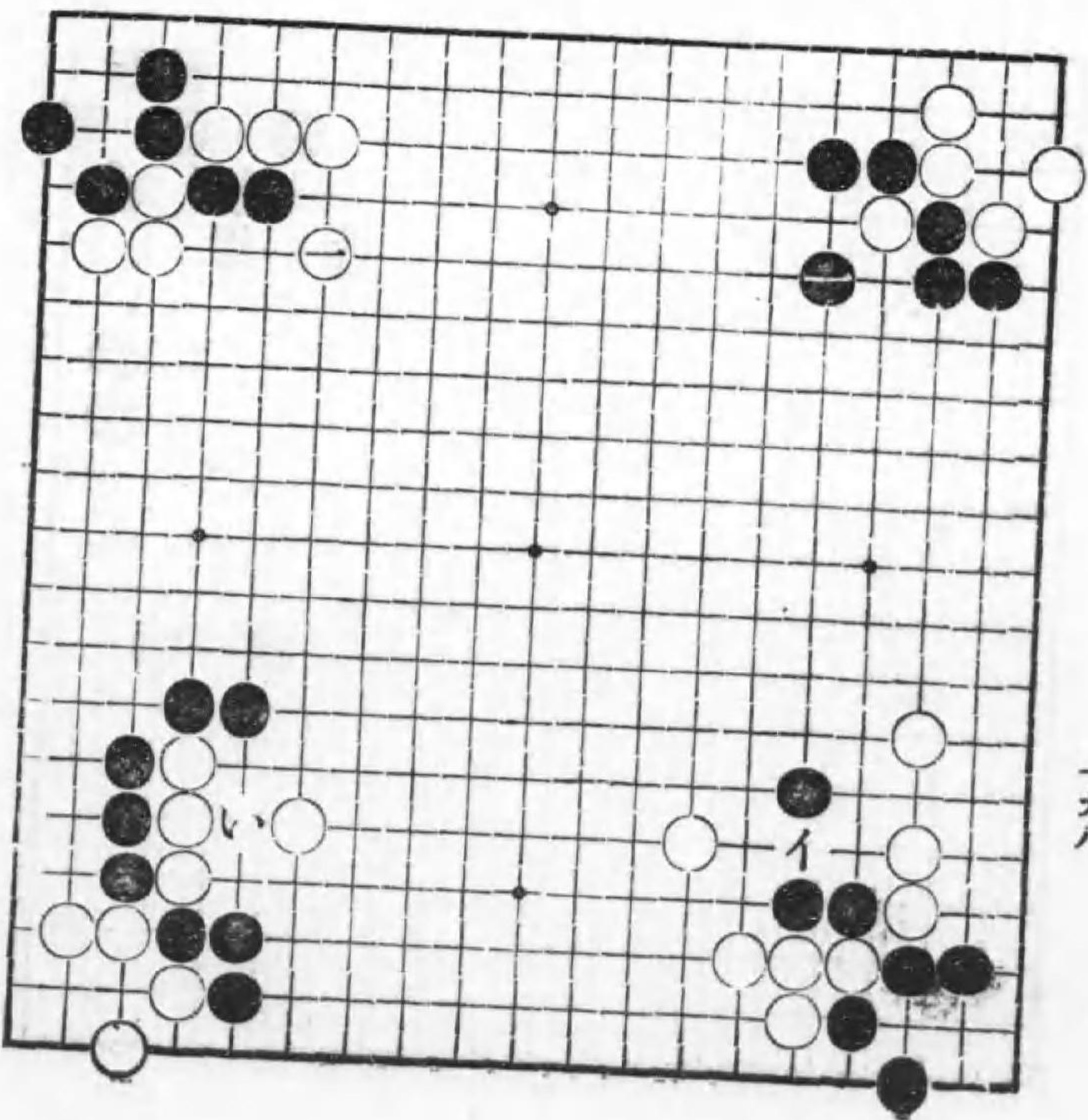
右上隅白一は黒二子を確實に取。

左下隅黒(イ)は白三子を確實に取。

右下隅白(イ)は黒二子を確實に取。

取られた總ては要石。取られて悪いのである。

右上隅は判然だらうが後の三圖を次譜に見られよ。



左上隅黒一と三でも、白

二と四で黒二子は出られない。取られ。

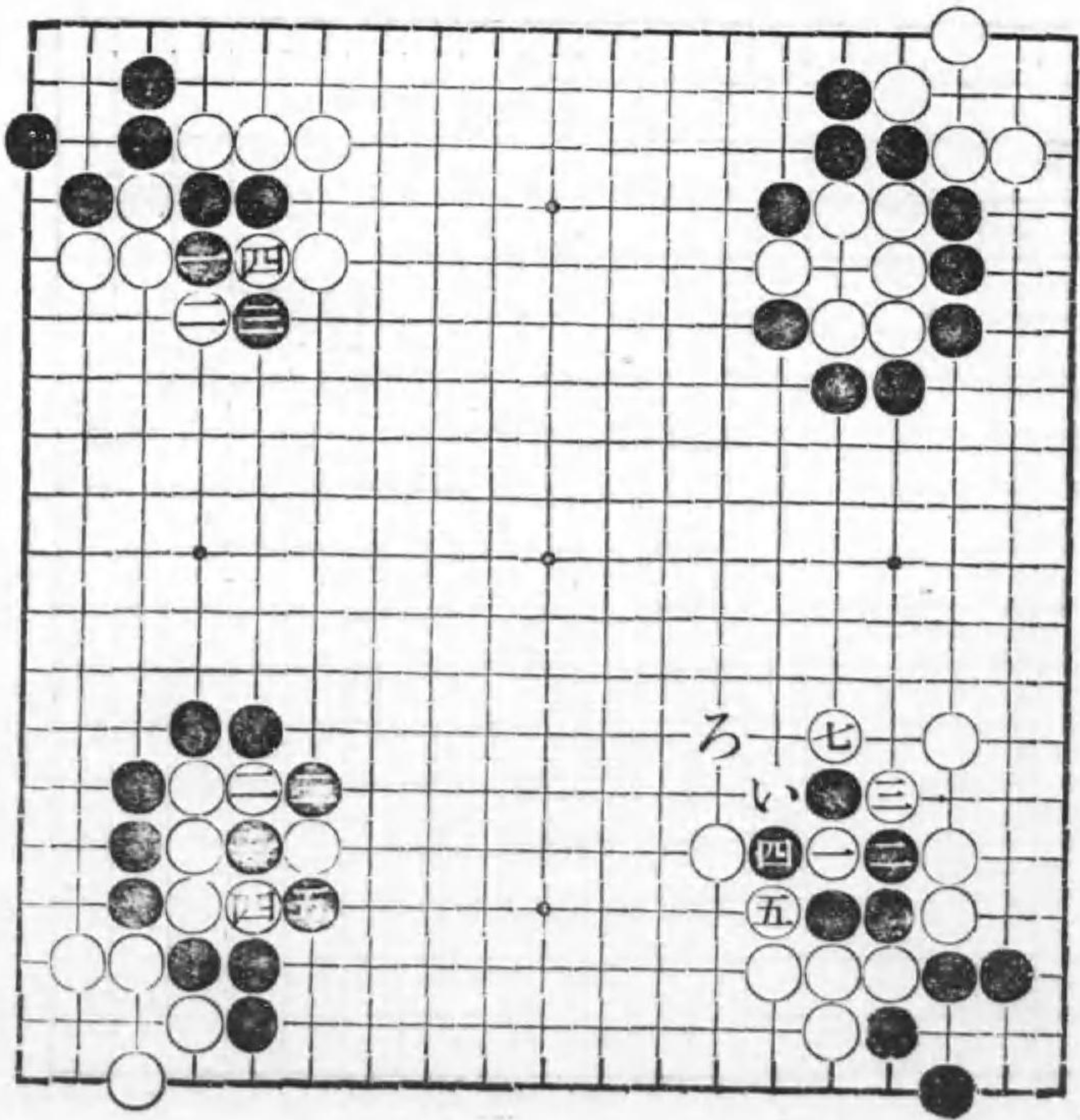
左下隅黒一に、白二と四でも黒三と五――

それが右上隅に見られる白のポカンとした態。

右下隅黒二と四でも、白五に黒一の所を粘ぎ――

そして白七。征である。だが次に黒(い)は――白

(ろ)。征に及ばず。



白に一と切られて以下白十三と成つて――

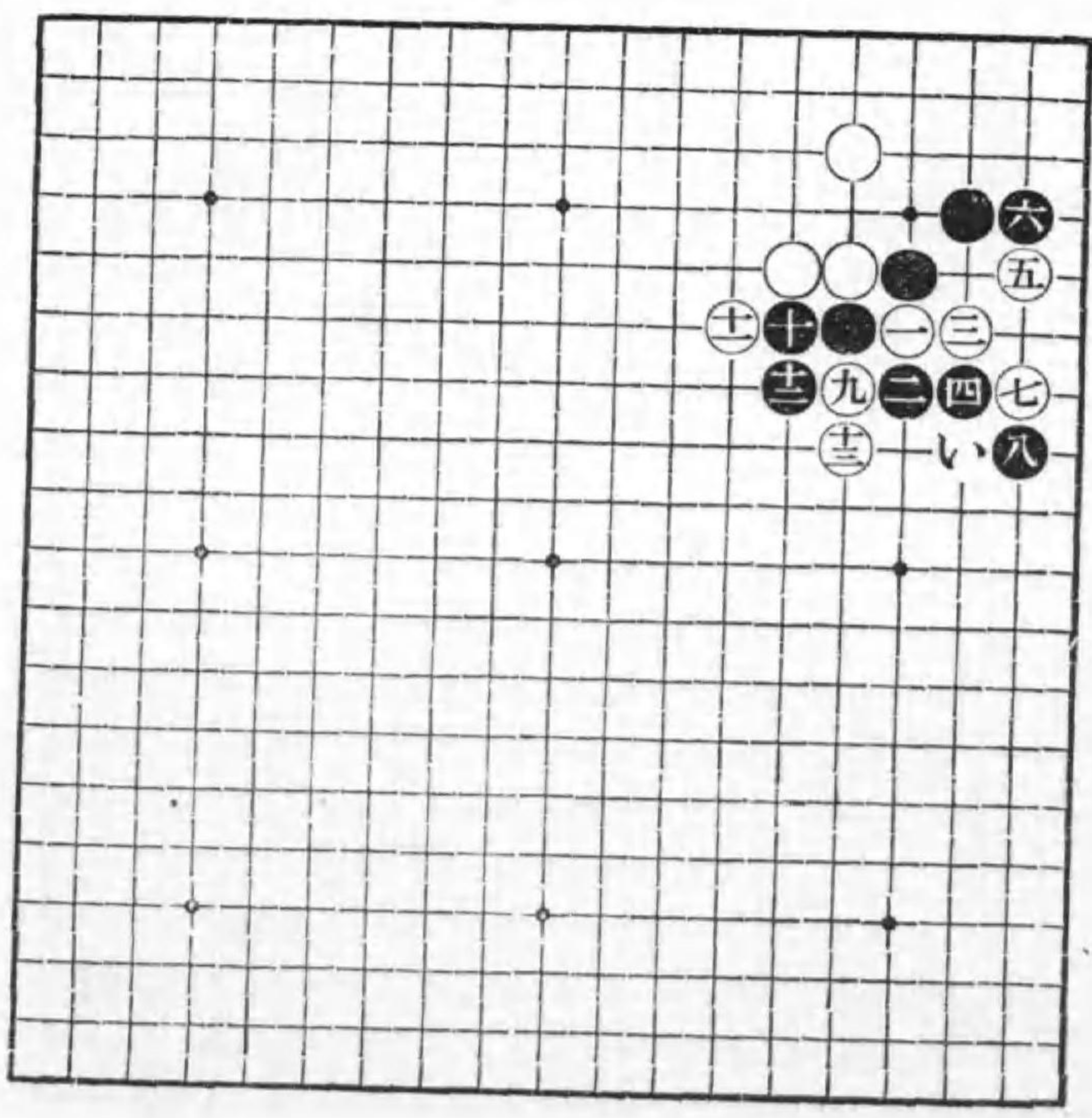
は黒大悪である。

即ち黒十二の方は征で取られ。

また白(い)と白に切られもあつて。

白十一、十三などの其調子を名調子といふのである

白一には、黒三白二黒四と黒應接が可。



1102

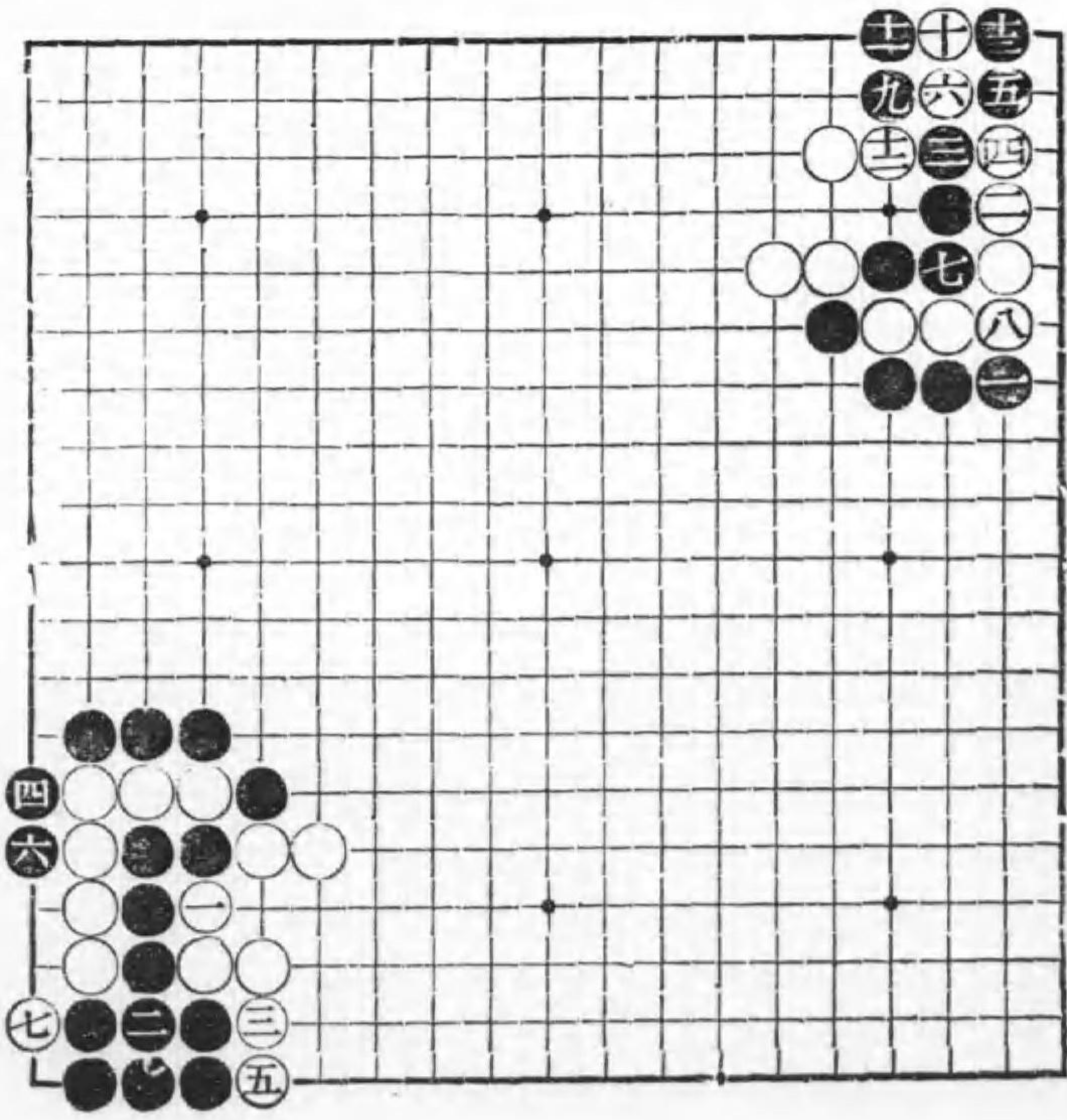
前譜黒六を本譜黒一だと
以下黒十三と――

白二子を取つても、次は
白の手番、白六に打込み、
黒次に十の所に其白一子を
取り――

それ迄が左下隅――

白一より七迄。白は一手
早い攻合であつて――

言ふまでもない黒大悪果
の現はれである。



1101

本譜黒十五までも征問題であつて――

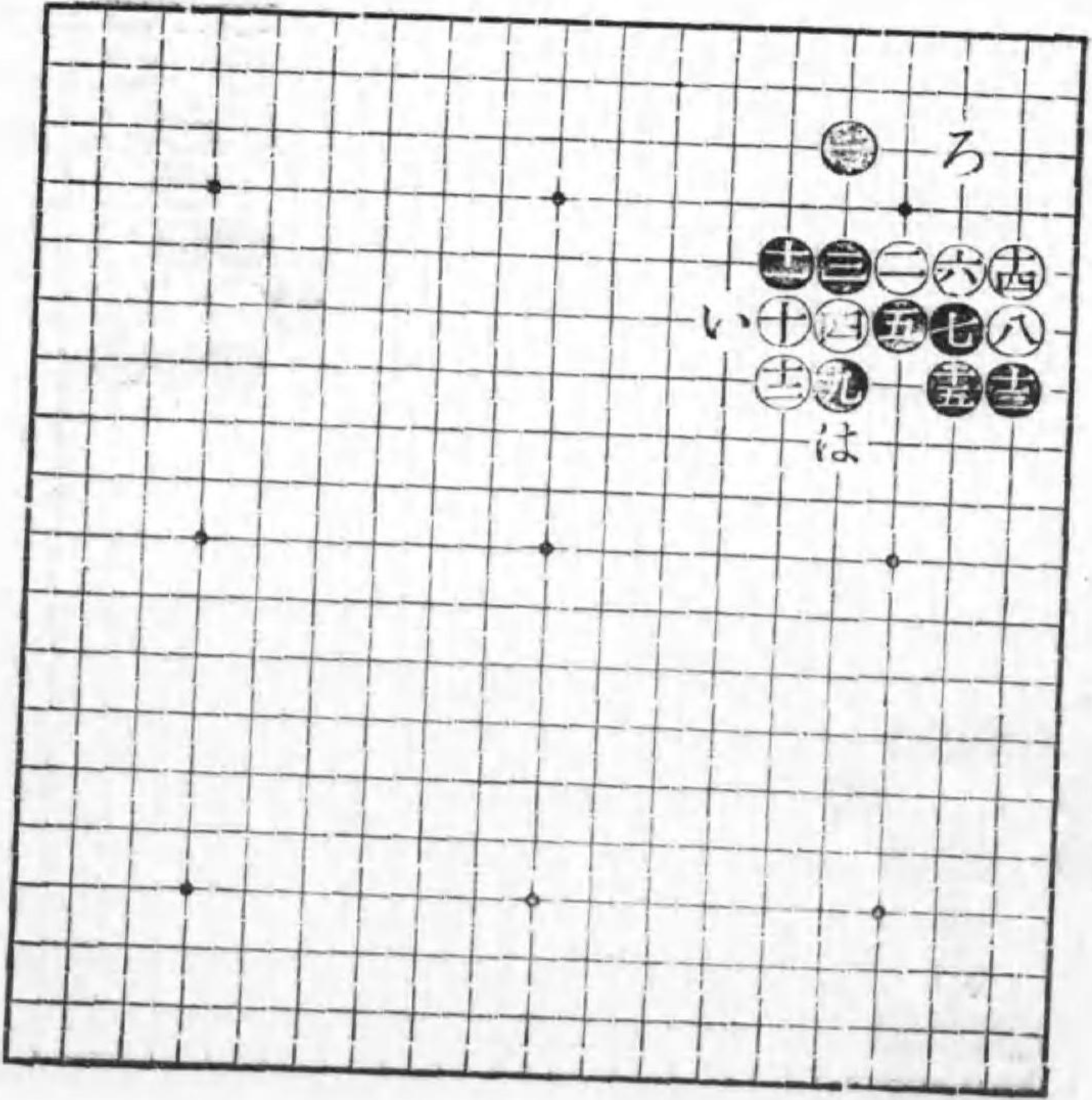
白十二は黒に(い)と征に取られるから――

黒十五は、其處へ白に切られて、黒悪いから――

と先づ観られやう。

そして白(ろ)なら無事だが、(ろ)を(は)だと、どうなる――

其白(は)を白丸までの次圖を觀られよ。



黒一を七なら白一と成る所。だが黒一で――

以下白十六まで成つて、

黒心配は無い――

それは黒(い)。

に白(ろ)の他は無い。

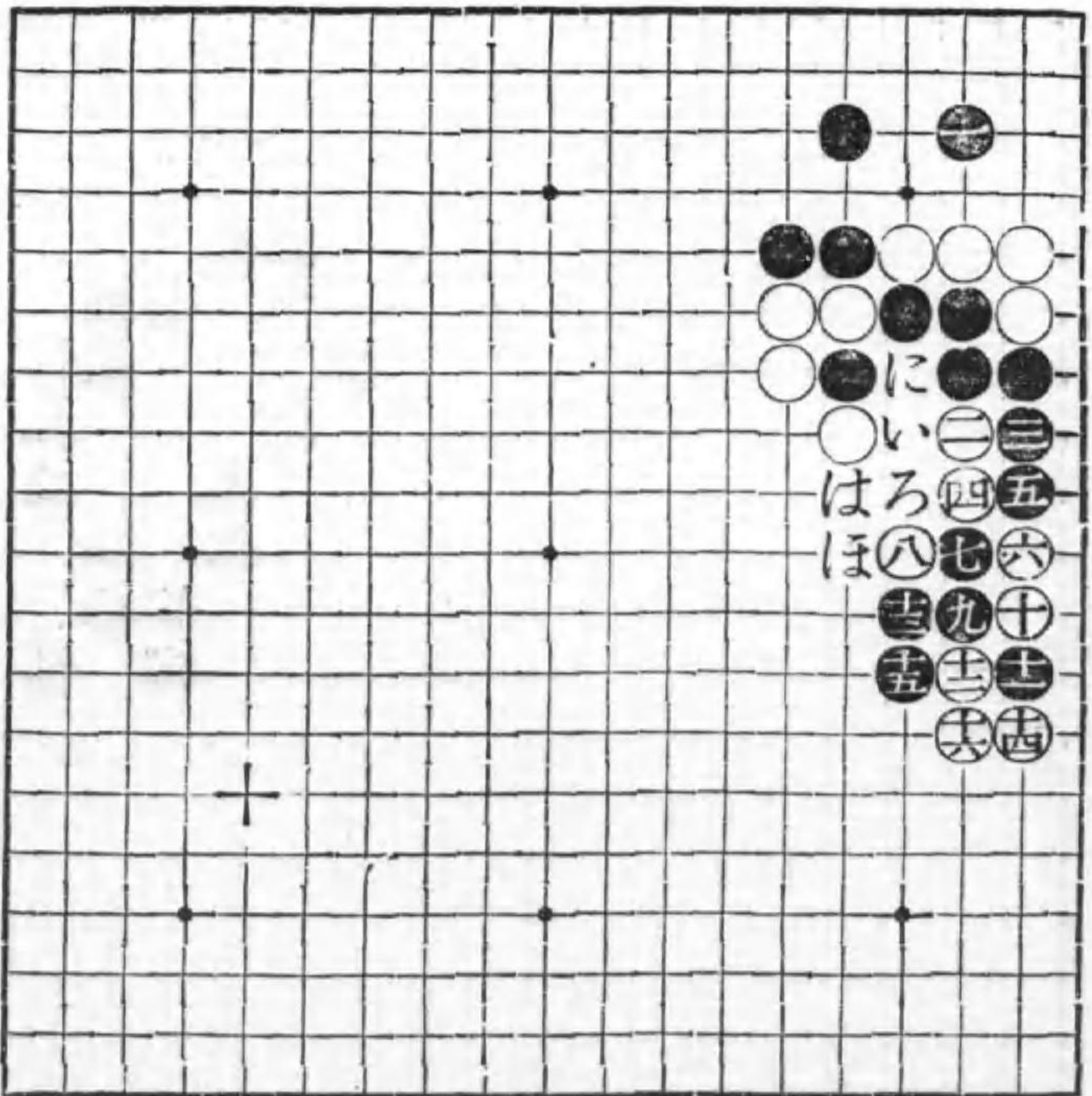
そして黒(は)。

に白(に)の他は無い。

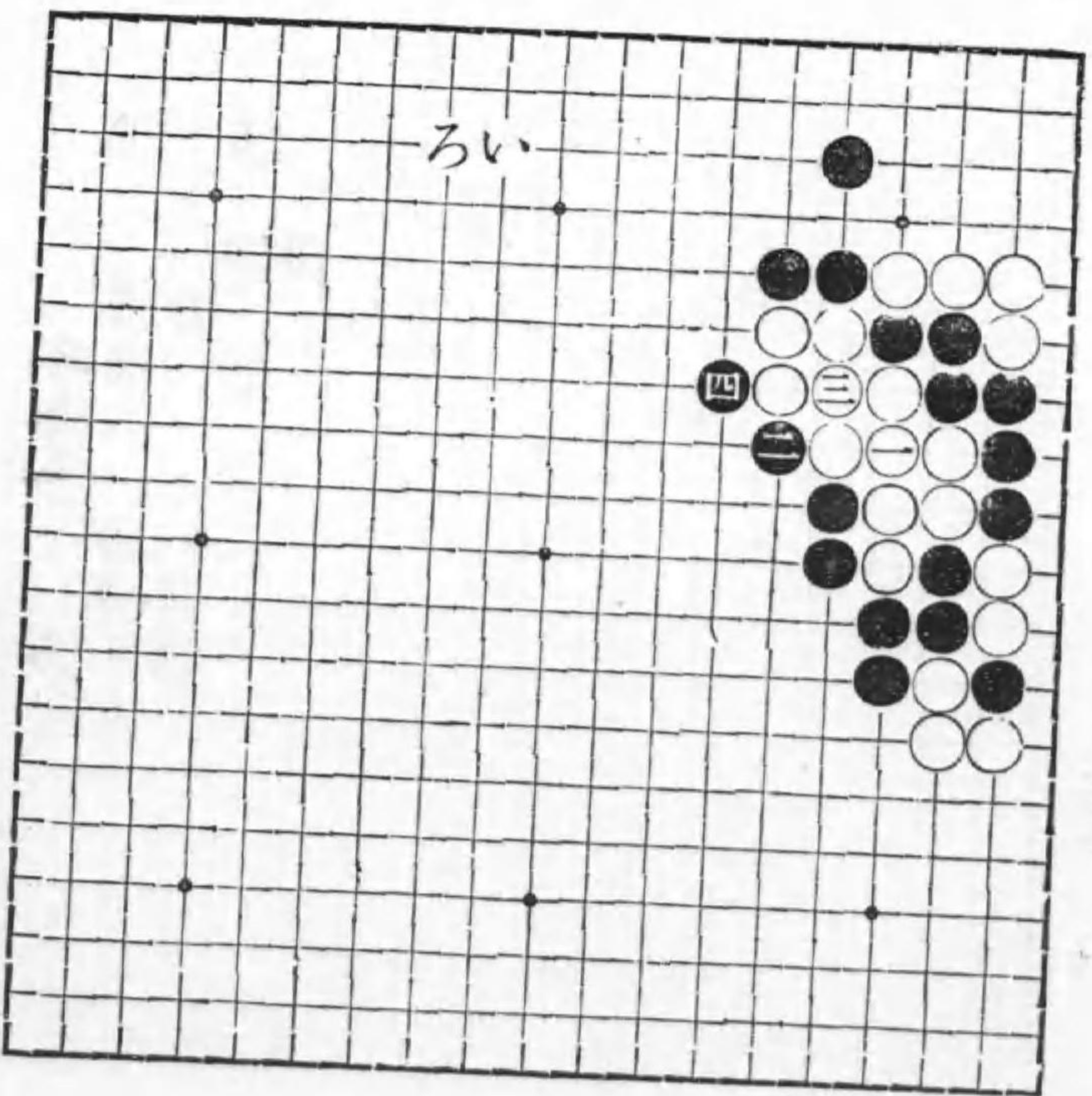
次いで黒(ほ)。

黒(ほ)は(い)の所で白四子を取れ。

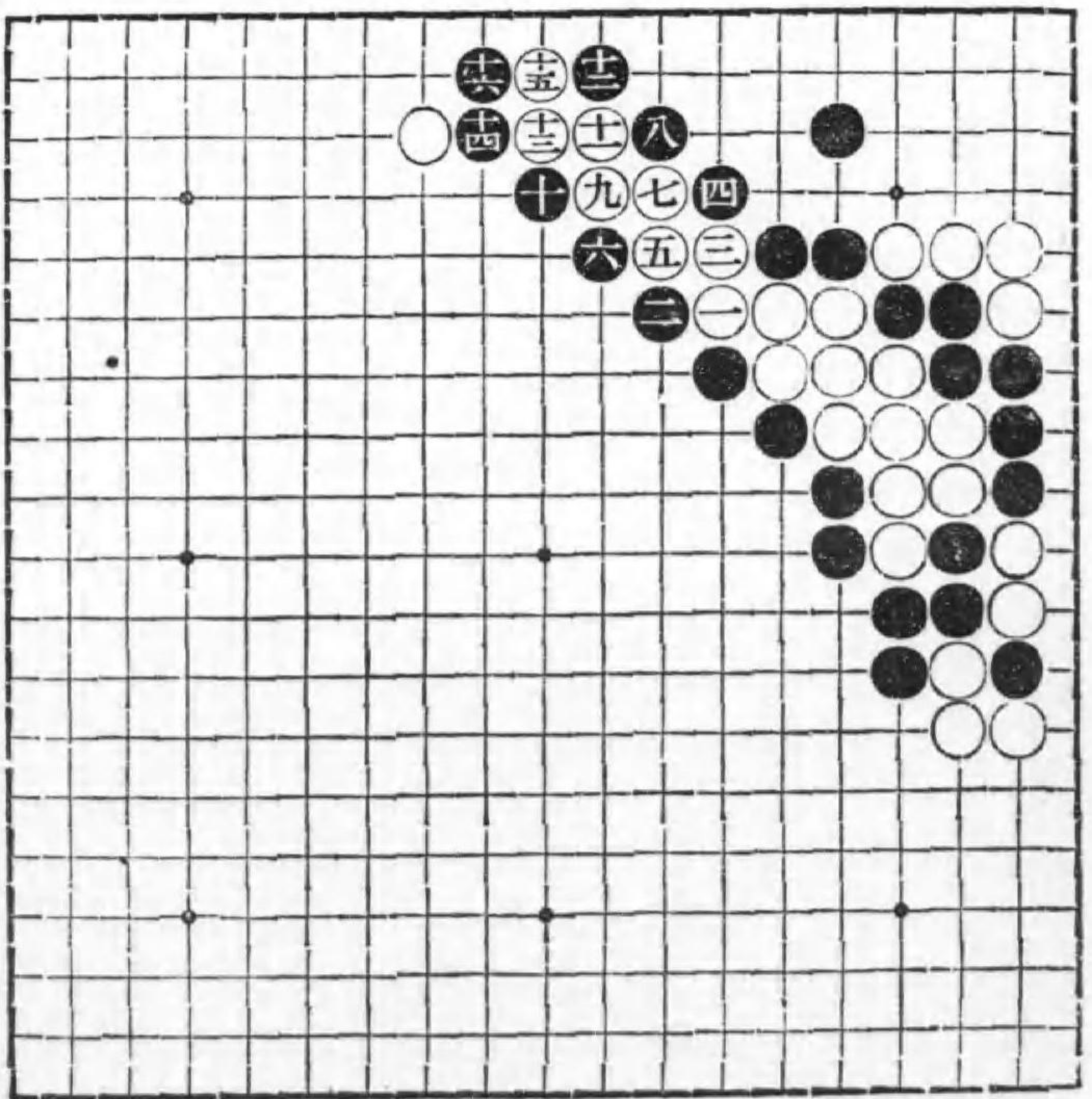
次圖を觀られよ。



白一から黒四まで、即ち白は征に取られ。こんな方に征とは一寸氣付かぬ。人もあらうといふもの。此れ等を逆征といつて、左下隅の方へ氣を取られ、白大失敗である。然し上邊に白(い)と在る場合は黒悪化。白(ろ)なら黒可である。それが次圖。



白一と出ても、黒十六まで成つてダア——白は一舉大敗といふのである。黒十六を飽まで征の方式だと黒は大變。黒十四の左の白丸が在つて、白一と出る見損じも某五段にあつて、但し故人、後の笑草となつた。何れにしても手所は注意肝要である。



前譜白惡果の征の原因は
本譜黒二十一に――

白(い)であつた。

それで白二十二だと、黒
次に(ろ)。

そして白(い)は黒(は)。

後は説くまでもない黒一手
勝。

即ち残るものは白三手黒
四手である。

白十八を二十だと何とな
る。次圖を見られよ。



二〇六

白一より黒六まで成つて
白一手攻合敗。

次に白(い)は黒(ろ)。

また白(い)を(ろ)だと黒

(は)白(に)黒(ほ)。此れが

左下隅の現はれである。

黒六の要領を覚えられよ

黒六で(い)等は悪い黒道草

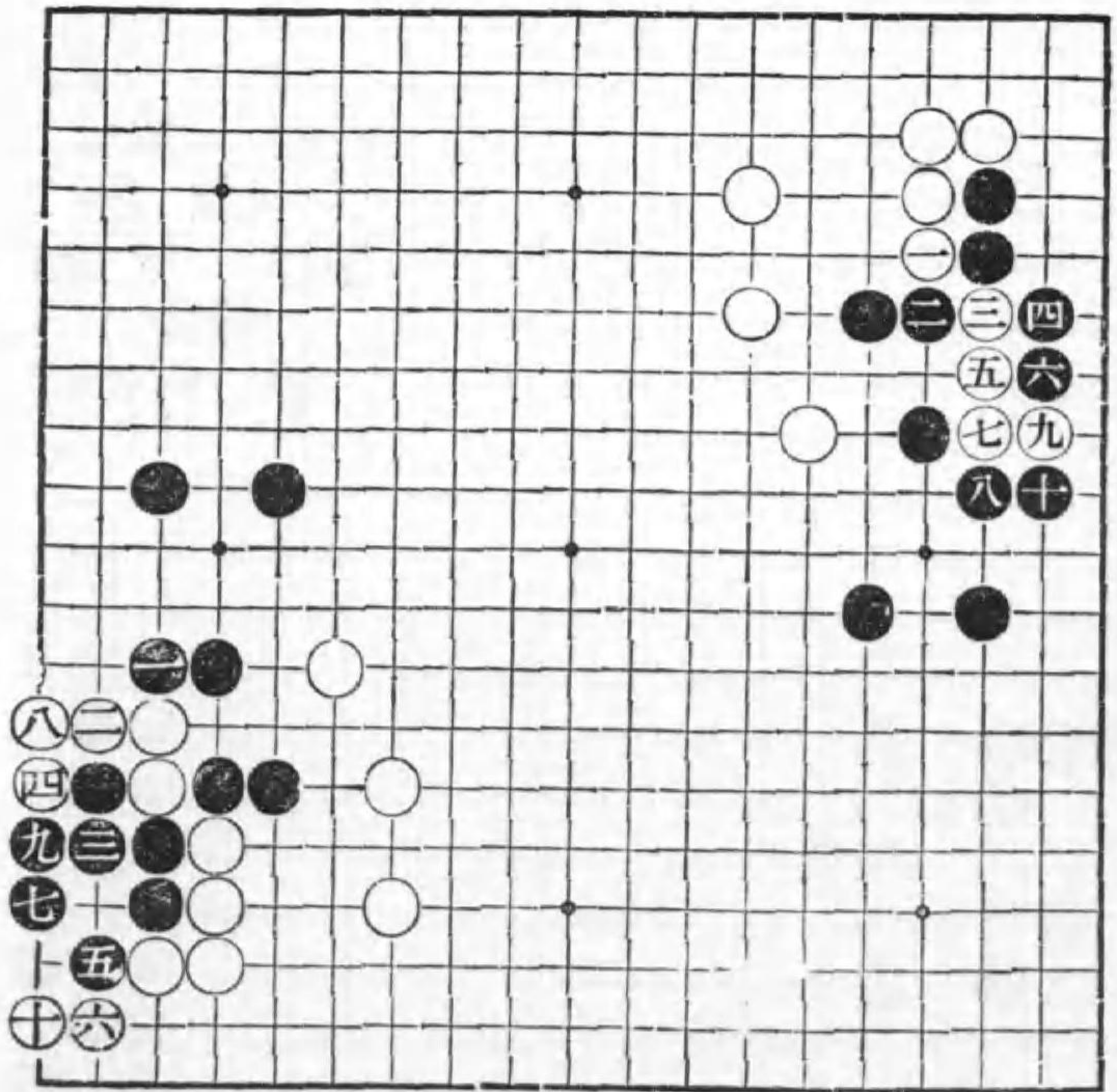
である。



二〇五

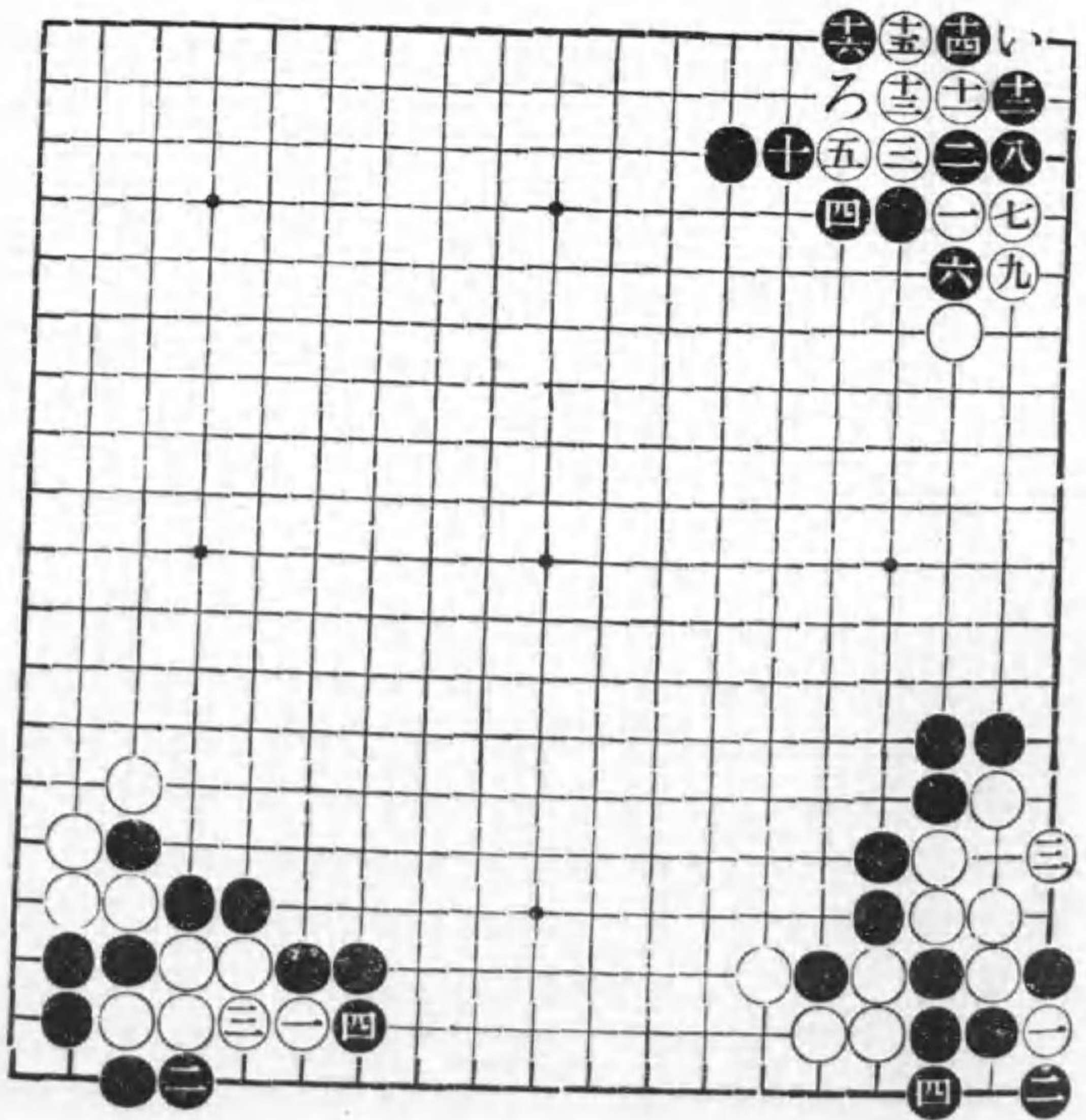
碁 観

右上隅白一黒二の時——
 白三と切つたら、黒四より以下黒十まで——
 即ち危険の無い應答である。黒六を七だと——
 其黒七を一とした左下隅白十と成つて——
 見られる如く白は三手黒は二手、黒先手でも黒一手攻合敗。
 此二圖とも多く出る手所である。



110

右上隅黒十は、それで白三と五を取れ。
 即ち以下黒十六と成つて白(五)なら——
 黒(ろ)で十四の所に當りであつて。
 左下隅は白十五から變化である。
 白一は以下黒四、黒は一手勝。黒二を四だと、右下隅黒四と後手。だが黒に危険が多い。と究められよ。



109

今までの全部を讀んで、學校でいふなら中學二三年の學識と思はれる。此直前の前譜などは小學生の學課、その前には中學生の學課、と難易で分るであらう。

初段は中學を出て大學一二年在學中のものである。大學を出れば先づ三段位、五段以上は將士である。

大學を出ても實務は前の如く、本書の今までの分では初段に二三子では勝負にならない。が度々失敗する中、對抗できる原理は與えてある。初段に二子で對抗できれば自づと工夫も暢達、それが初段への道程である。

左圖は中學課題であつて、中の黒十子を黒(い)白(ろ)黒(は)白(に)——そして、黒(ほ)等の活き——

ではない、黒に上分別。があるのである。

それは次圖に出るが、先づ本譜で成程、白(に)と粘がし、白から(へ)と白に手段を残し黒面白くない。ぐらゐを認識され度い。さすれば本譜で上分別。

人が豪がつて自分以上の

人と思ひながらも——

其人に下らない如く、碁

でも井目なのは七目、七目

なのは五目——

といふ工合に置くのを嫌

ふものである。

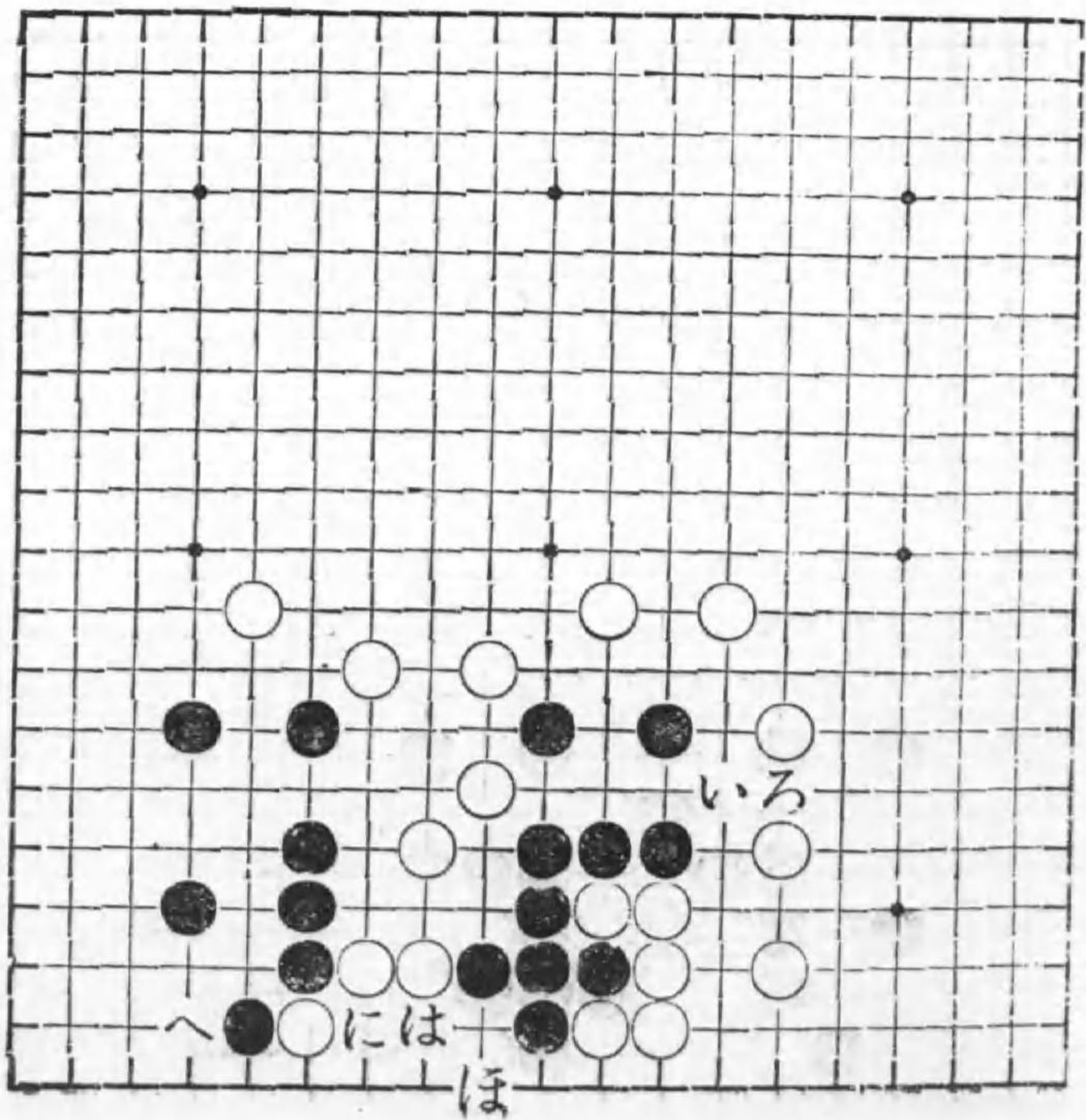
それで相手になるものも

馬鹿らしくなる。

知らぬ事に先輩に聞く如

く碁も強がらないのが前途

達成の人。



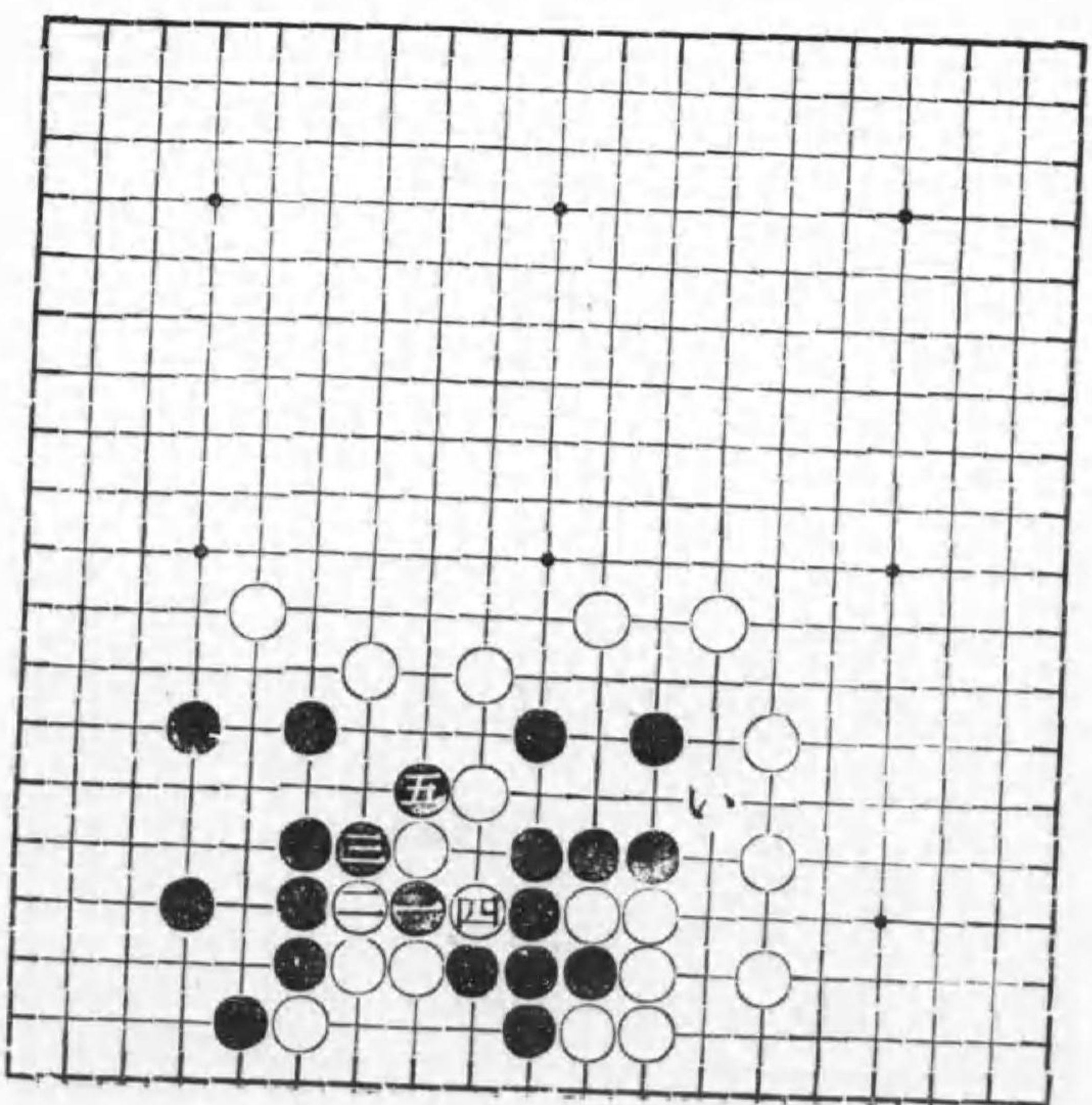
黒一より五までが白を兩斷、黒好果である。

即ち黒一と一を捨石に使つて、白四以下六子を取れ。

黒一の時、他に黒打ちたい急場が――

あるとしたら、黒他に轉じ。といふ事も考えるのである。

それは黒(い)と黒活きと前譜でいつてもある。



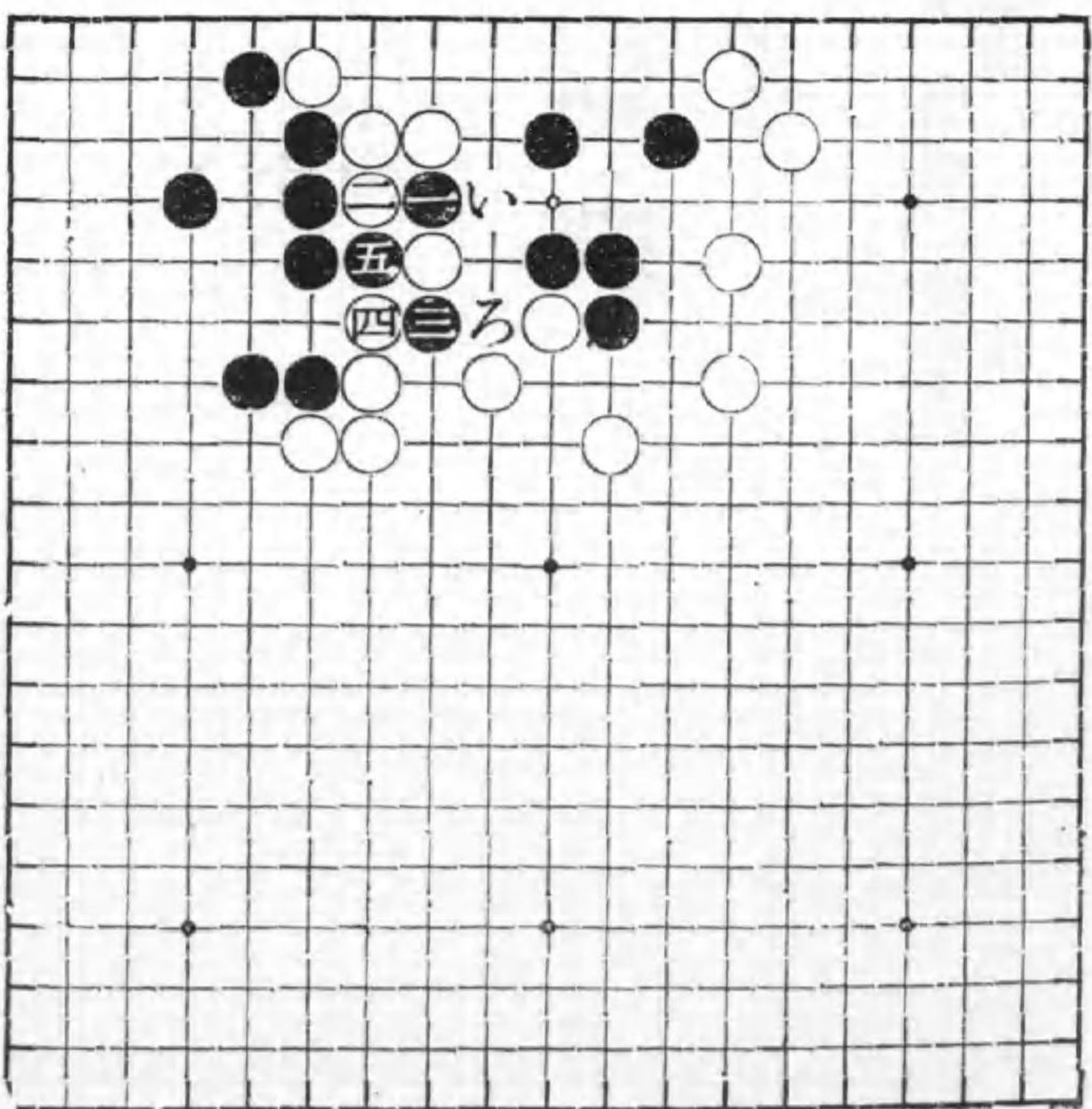
本譜も黒五子の方を何と活きたものか――

と先づ考える所で、併し活點も容易に見當らない。

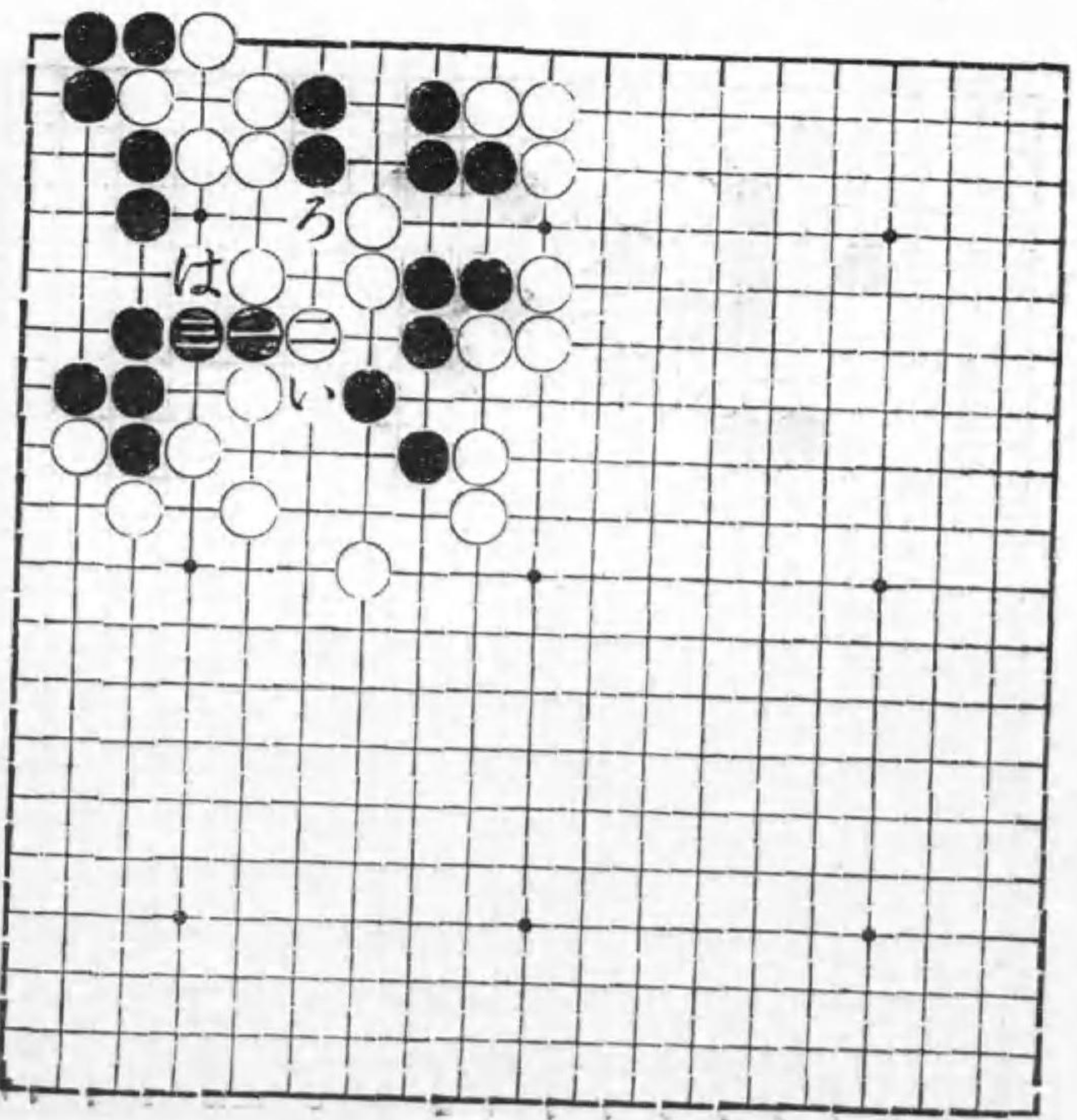
さてどうした事かと腕組み四五分――

それで考え出したのが黒一より五まで。

次に白(い)なら黒(ろ)。要するに白は切られて、黒成功である。

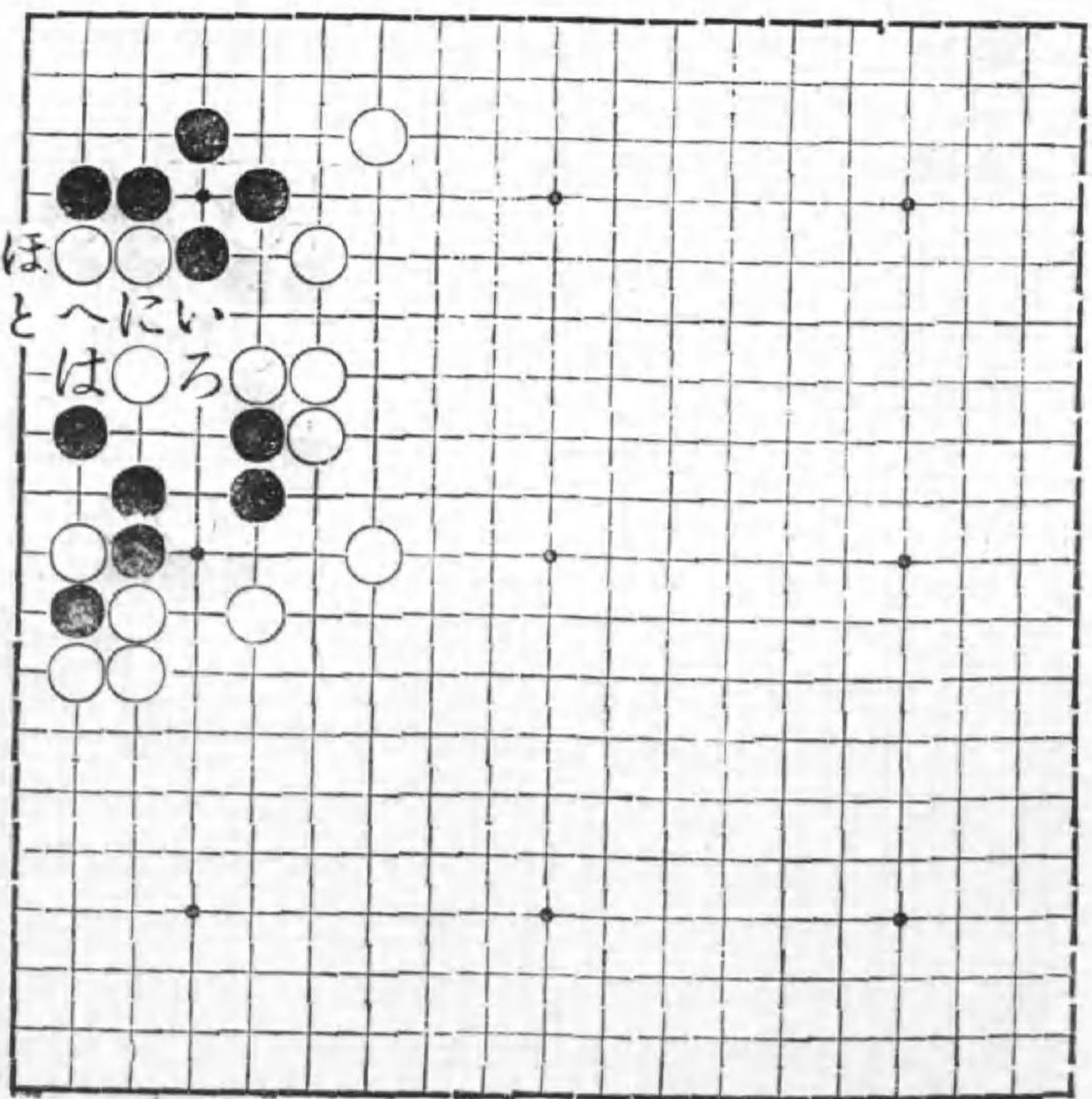


中の黒十子は一見——
 險惡に直面、問題は此の
 事と明瞭であらう。
 さて黒一と三で白を兩斷
 即ち次に白(い)は言ふまで
 もない黒(ろ)。
 白二を三なら黒二で、此
 れも白を兩斷。
 黒一で(ろ)等は白(は)、
 黒に活なし。
 と黒一の前直感できやう。



此れは中の黒五子を左上
 隅へ連絡の問題である。
 黒(い)白(ろ)黒(は)では
 白(に)で——
 黒は俗筋、黒悪いのであ
 る。

更に黒(ほ)白(へ)、そし
 て黒(は)。
 に白(と)は黒(い)で白が
 悪い。
 要するに黒(ほ)が妙であ
 る。即ち最早の一手。

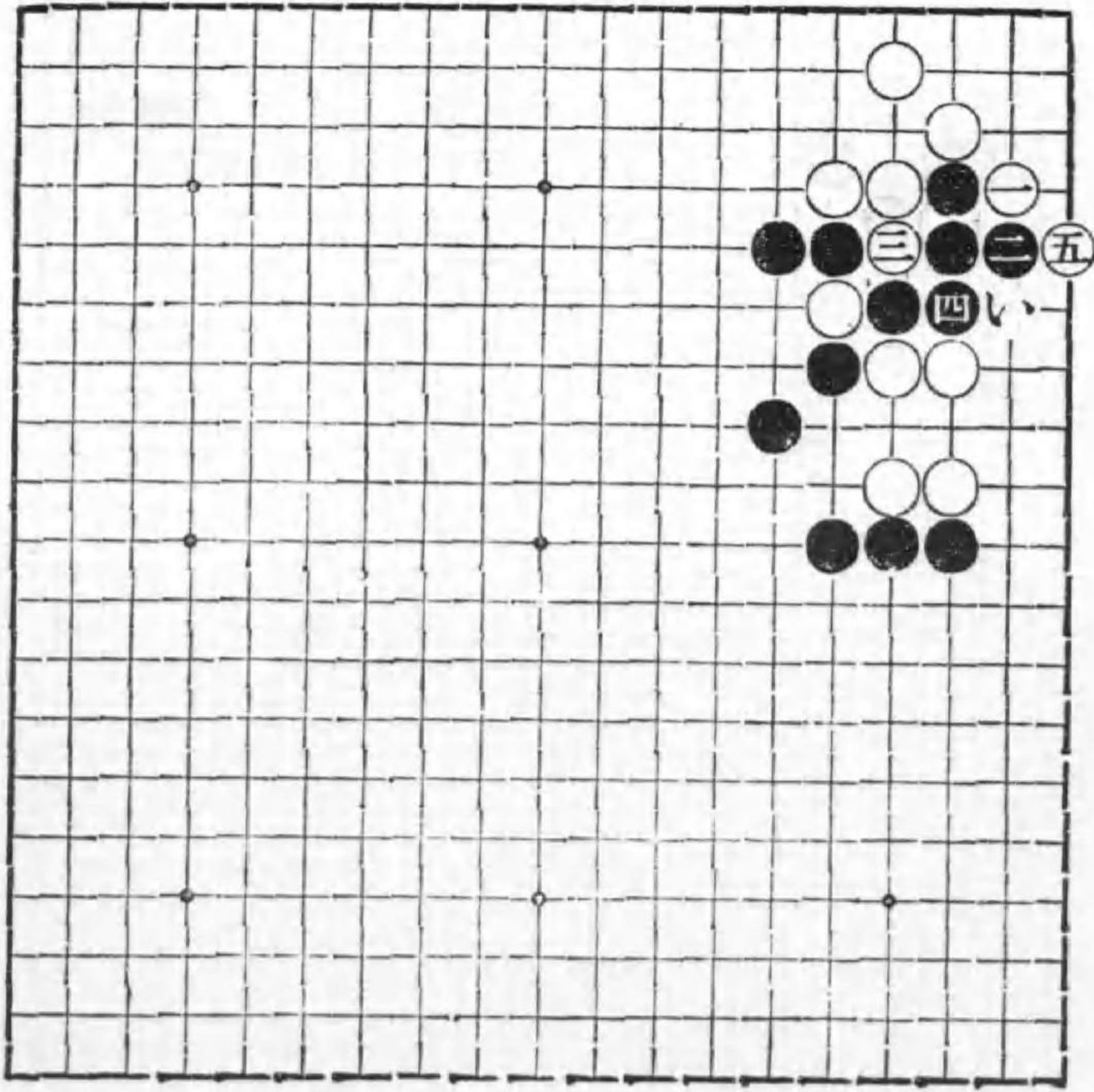


右上隅白先上下の白を連絡。には白一より五までの他はない。

それが直感でき上達顯著である。

白一を三黒四そして白一だと、黒(い)と白は合體できなす。

白一が妙。といふのは白一を三黒四白一、の時黒二と受させたと同様。黒二を四なら白(五)。



二一六

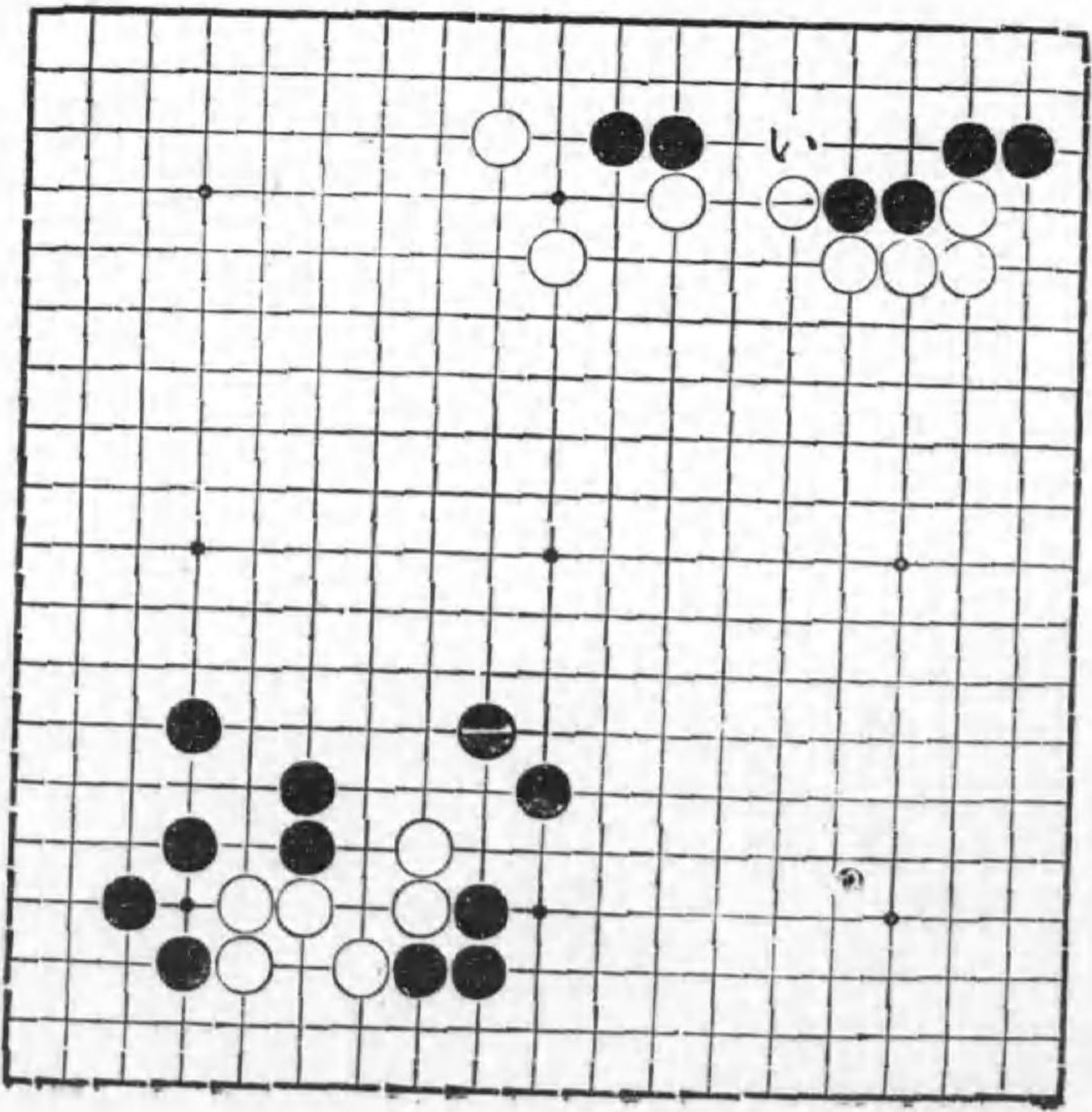
上圖、白一に黒は何と應手、黒(い)だと悪す。

と直感できやう、即ち左の黒二子と連絡如何といふ見地からである。

また下圖黒一に白は早く活きたが得策。

といふ建前から、即ち黒一に白の活點如何――

それは次圖に分るが本譜で先づ究められよ。



二一七

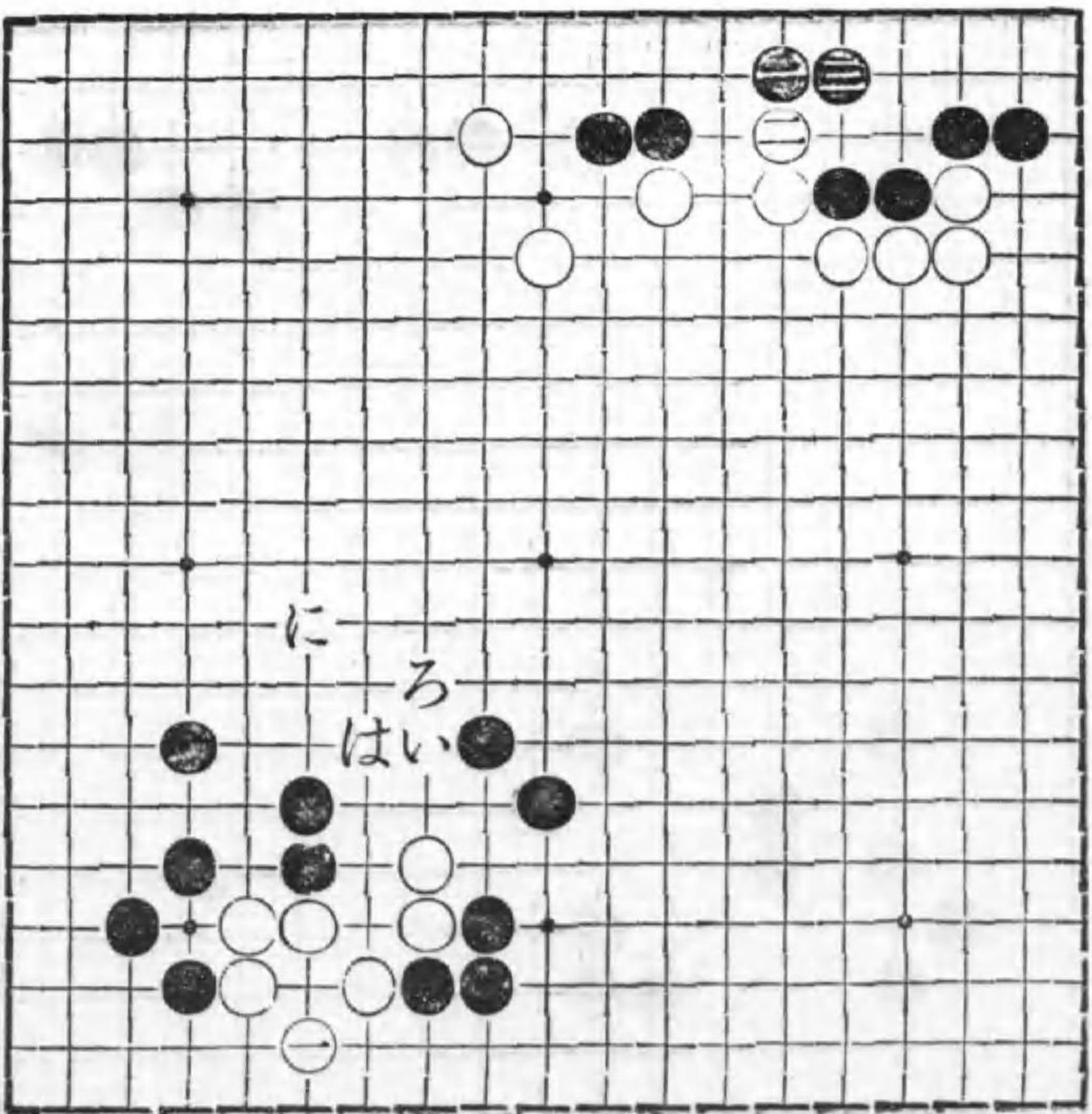
上圖、黒一が輕妙の應手である。

次に白二に黒三。黒に些の危険も無いのである。

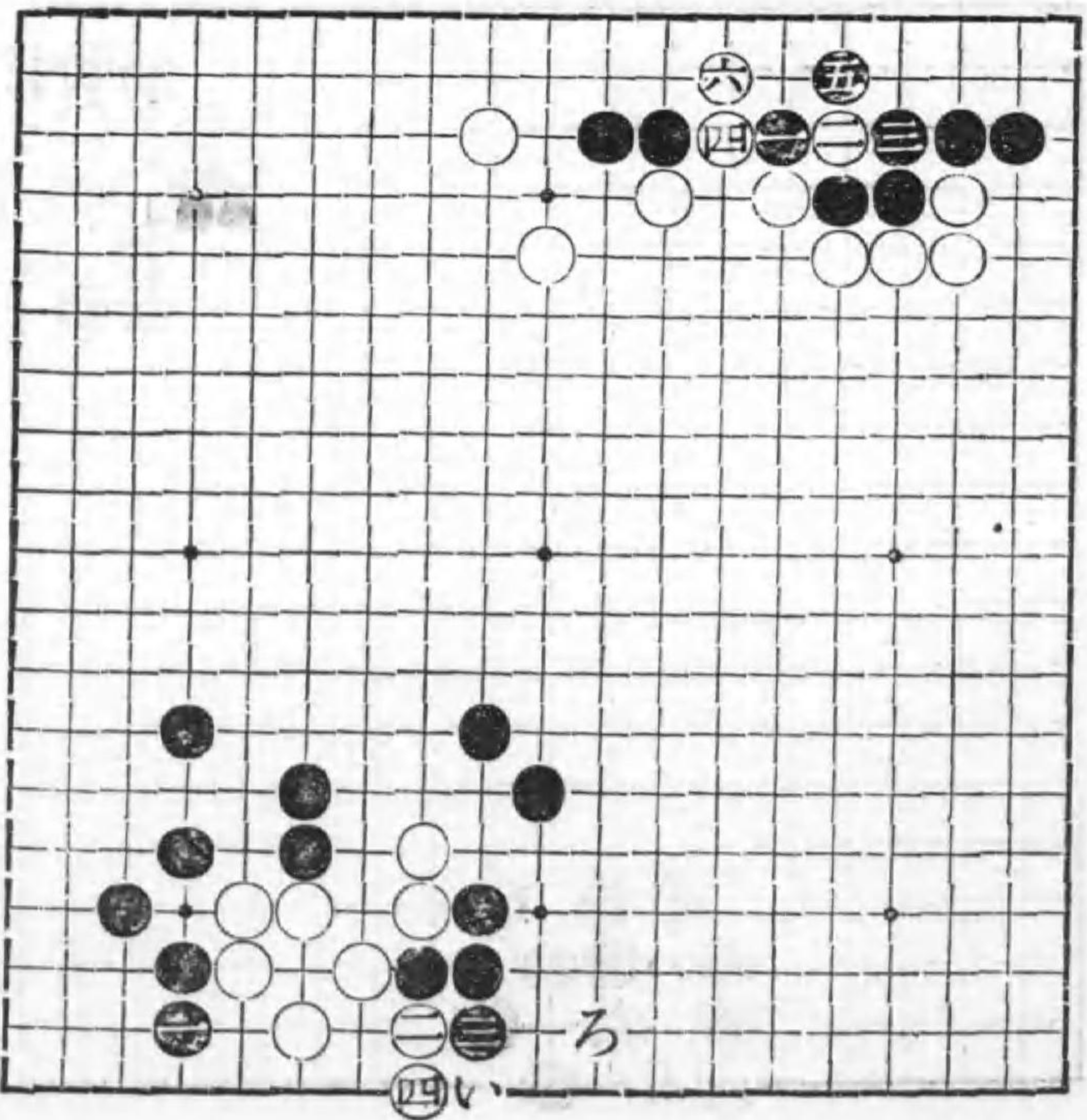
白二を三なら黒二。等から推しても明瞭のこと。

下圖は白の活點一である。

白一で(い)は、黒(ろ)白(は)黒(に)。と白出られな
いからである。



上圖、黒一は以下白六と成つて黒が大損である。
黒一は手拍子または輕勿ともいふのである。
下圖、黒一より白四までは左様白を活かすが可。
白四を(い)なら黒(ろ)。
此れが白後手黒可である。
等も参考に言つておかう。



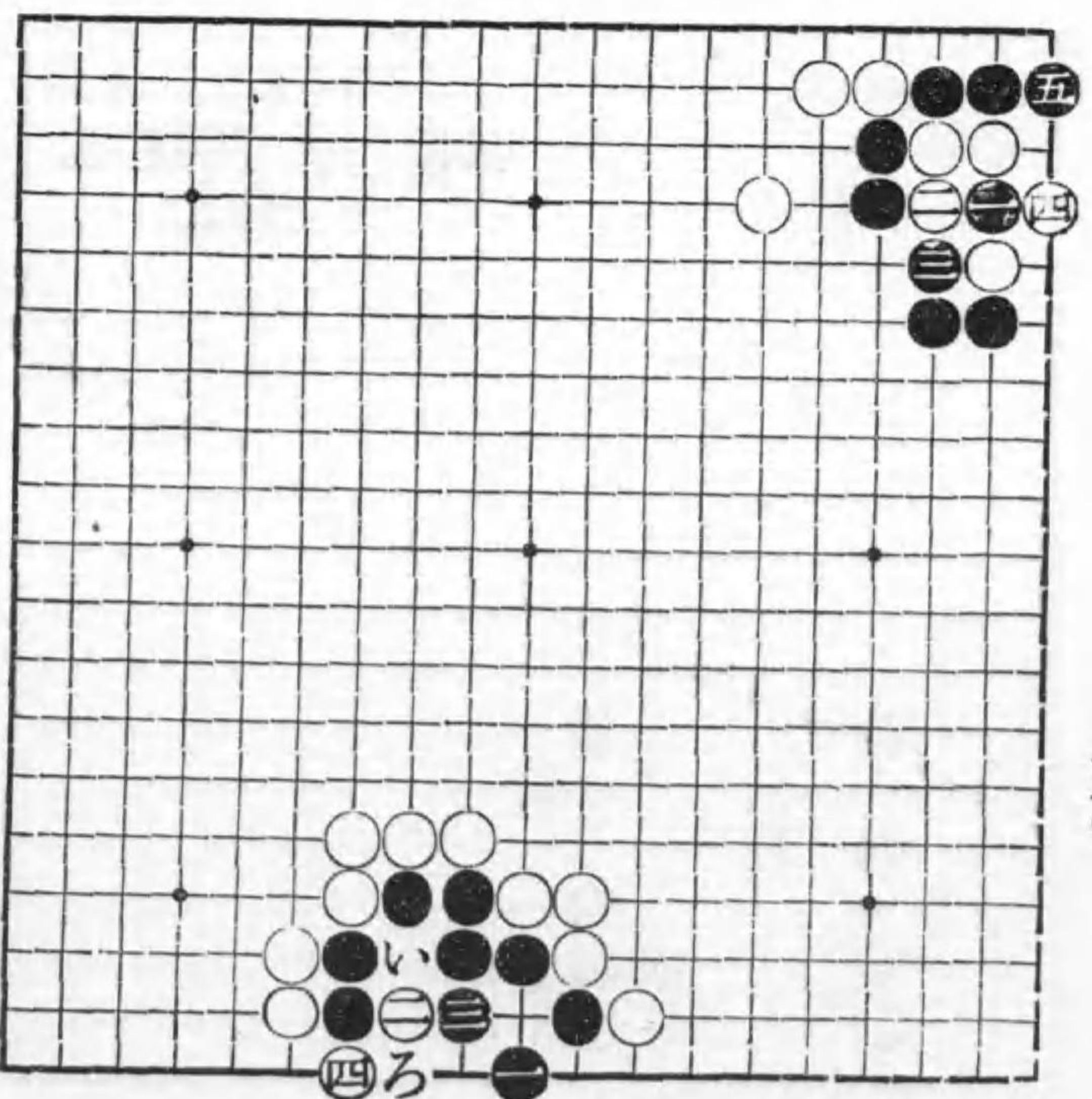
右上隅黒一を手扱は白五
で黒は取られる。

それで黒一より五までが
可。即ち早取の法である。
斯様の要領等は一局の中
々出る手所である。

下圖、黒一は以下白四、
黒無條件――

次に黒(い)白(ろ)。と黒
は取られて。

されば黒一に工夫があら
うといふもの。

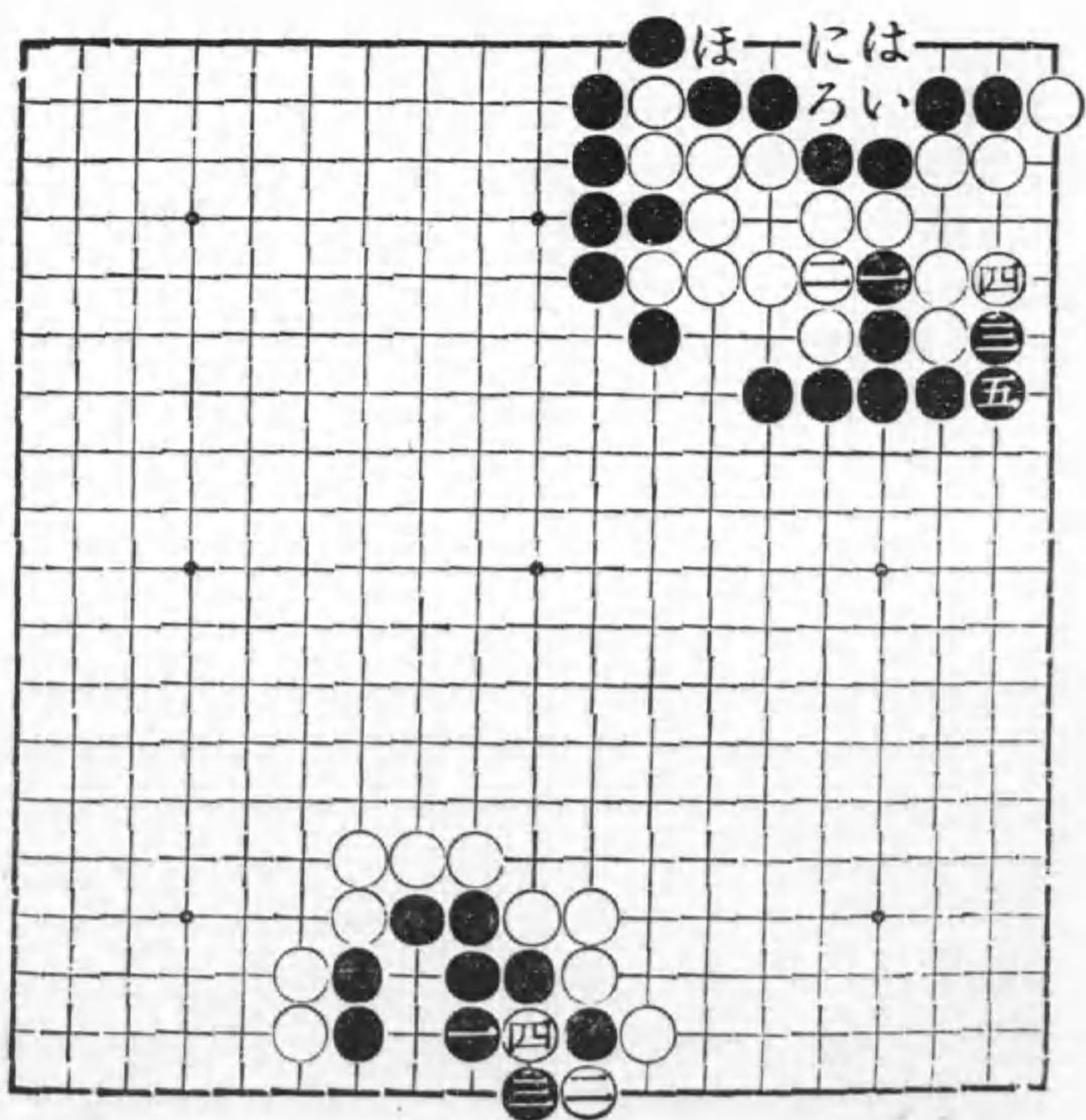


右上隅黒一より五までは
向見ずの其白奪取である。
即ち次に白(い)黒(ろ)白
(は)。

に黒(に)だと大變――
といふのは白直下(ほ)。

白(い)と切られる事が
注意肝要の次第である。

下圖、黒一と三が白四で
劫争、此れが黒工夫の所。
即ち黒一を三は無條件。



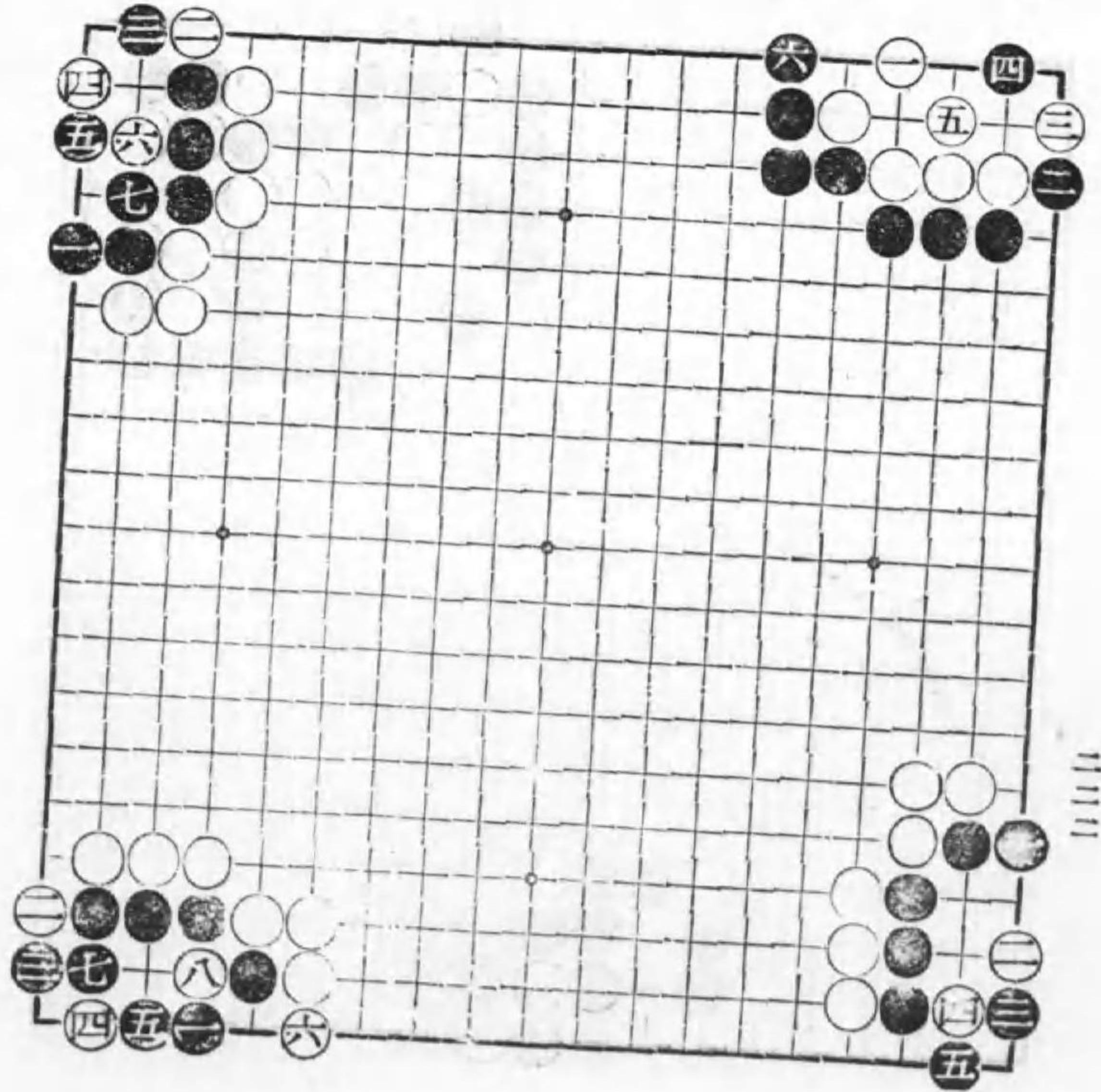
右上隅白一は黒六と成つて白は取られる。

左下隅黒一は白八と成つて黒は取られる。取られる事に白黒同然である。

左上隅黒一は七まで成つて劫争。

また右下隅黒五までも劫争。

即ち此二者は前二者のやう、無條件に取られない。



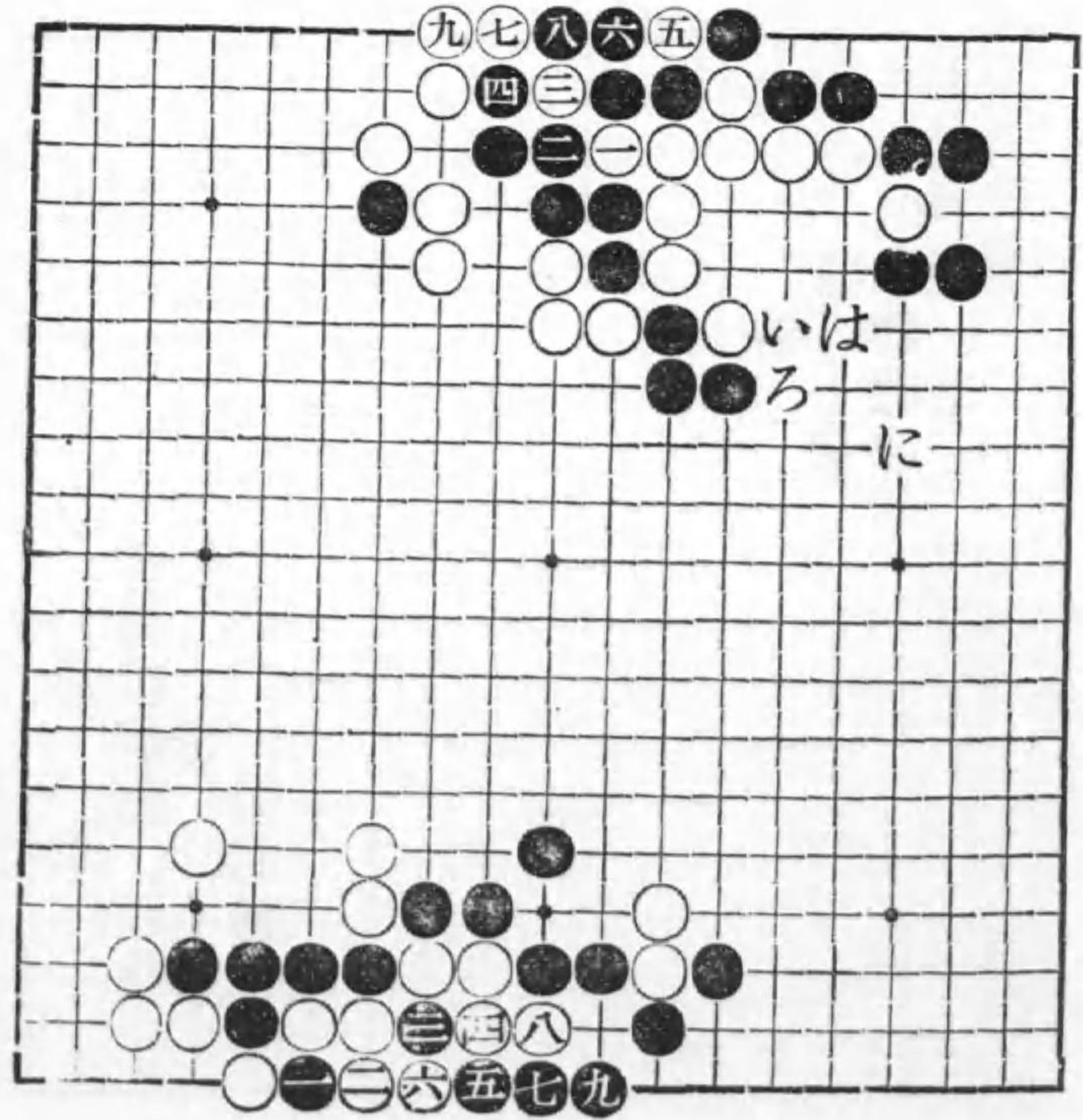
白先白(い)と出ても、黒(ろ)白(は)黒(に)。

と白の出も止つて此方は絶望である。黒(に)の止め等も大いに参考にならう。

さて白一より九までが、三の所、五の所、と黒の欠目、黒四以下六子は助からない。即ち——

黒は追落され、白は追落し。といふ名稱もある。

下圖は黒追落しである。



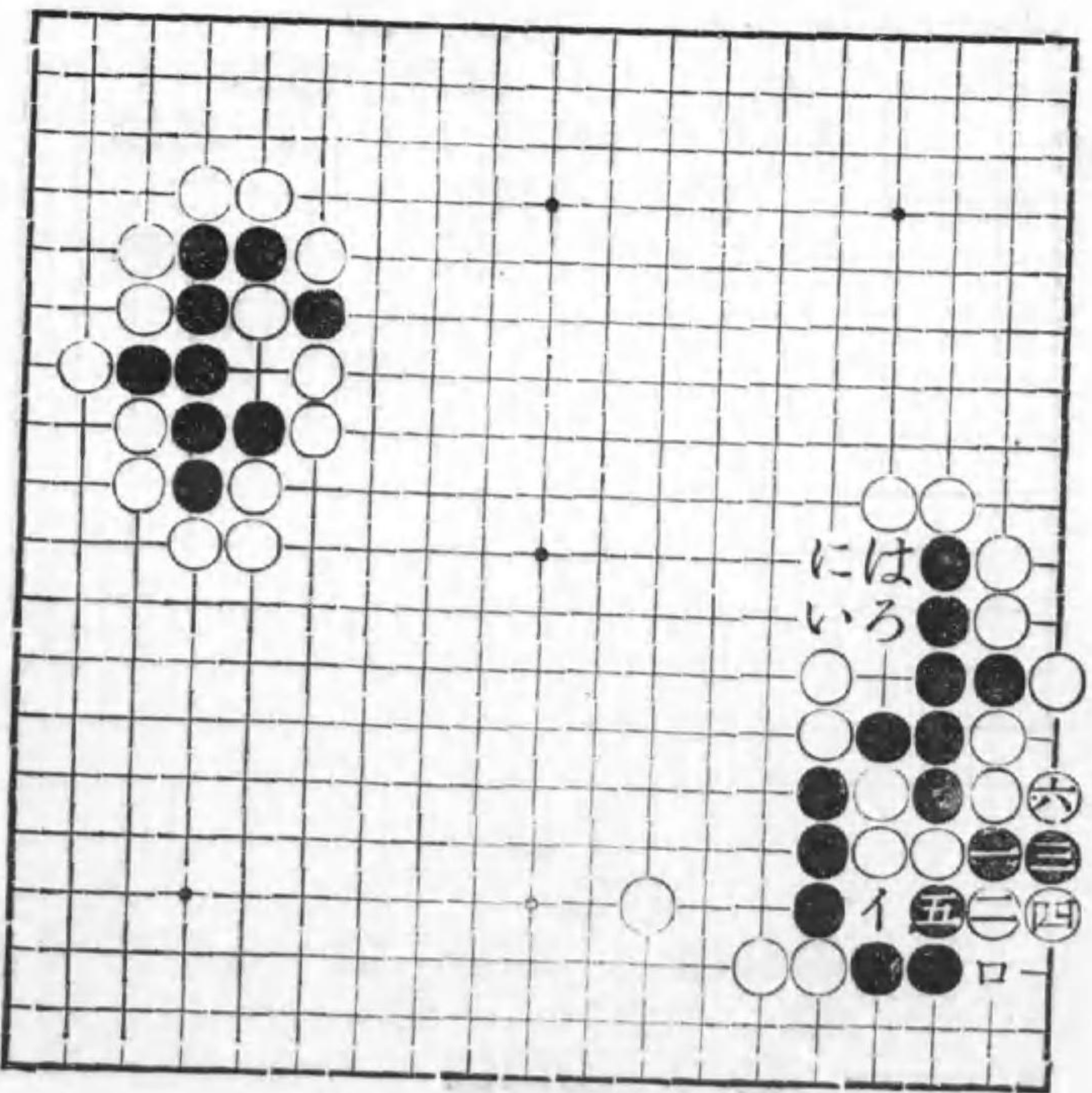
右下隅、黒(い)白(ろ)黒(は)白(に)。

それ等は左上隅に見られる黒悪化で、名稱は鶴の巢ごもり。

戻つて右下隅黒一より白六まで、そして黒に打込み白三にそれを取り――

次いで黒(イ)。

に白一に粘ぎだと大變である、次の黒(ロ)と追落し。最端は危険が多い。



二二四

右下隅は前譜黒(ロ)までの白追落されたもの。

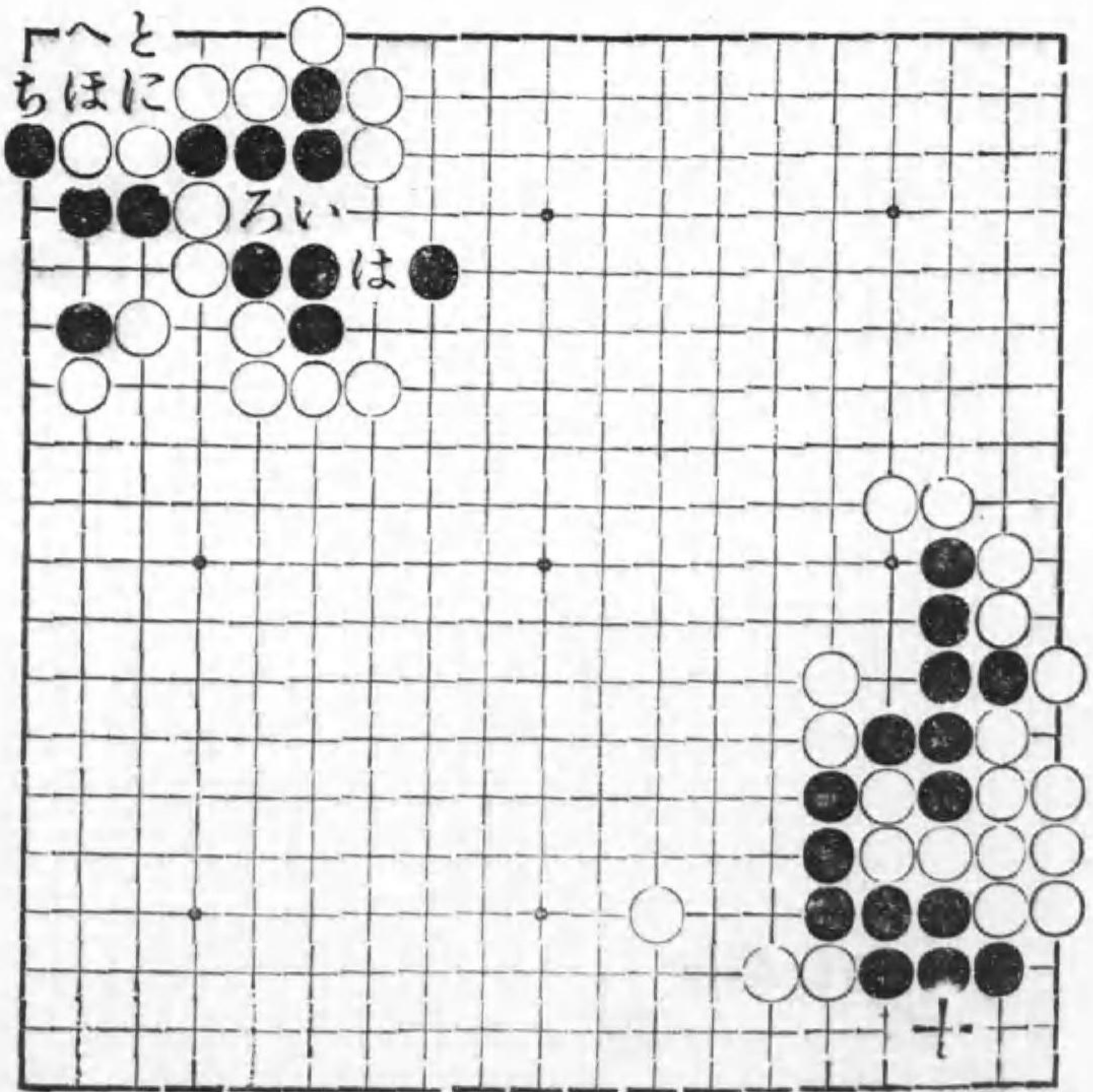
左上隅白先なら白(い)。

に黒(ろ)は白(は)。と此れも白に追落され黒注意肝要の所である。

また黒先なら黒(に)。

そして白(ほ)黒(へ)、即ち次に白(と)黒(ち)で劫争である。

と解る筈。



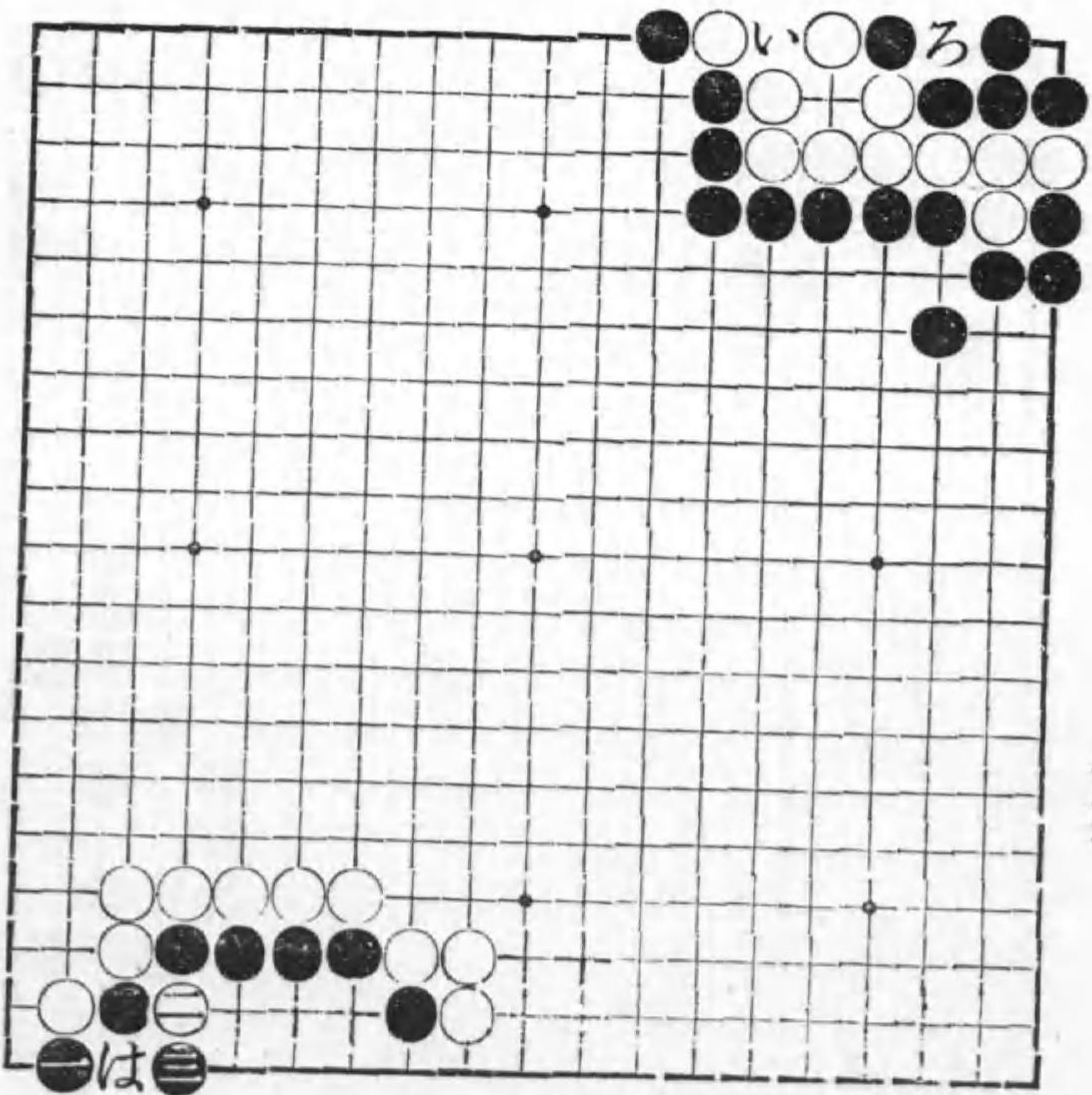
二二五

右上隅黒(い)だと(ろ)と
白劫取、そして黒他に劫立
て、白それに應じ——

次に黒(ろ)の左の劫取は
白も(い)の左の劫取、それ
を兩劫といつて黒不利の關
係にある。

處で其黒不利を利用——
それが左下隅黒三までの
劫である。

黒三に白(は)は黒(五)。
と以下次譜——



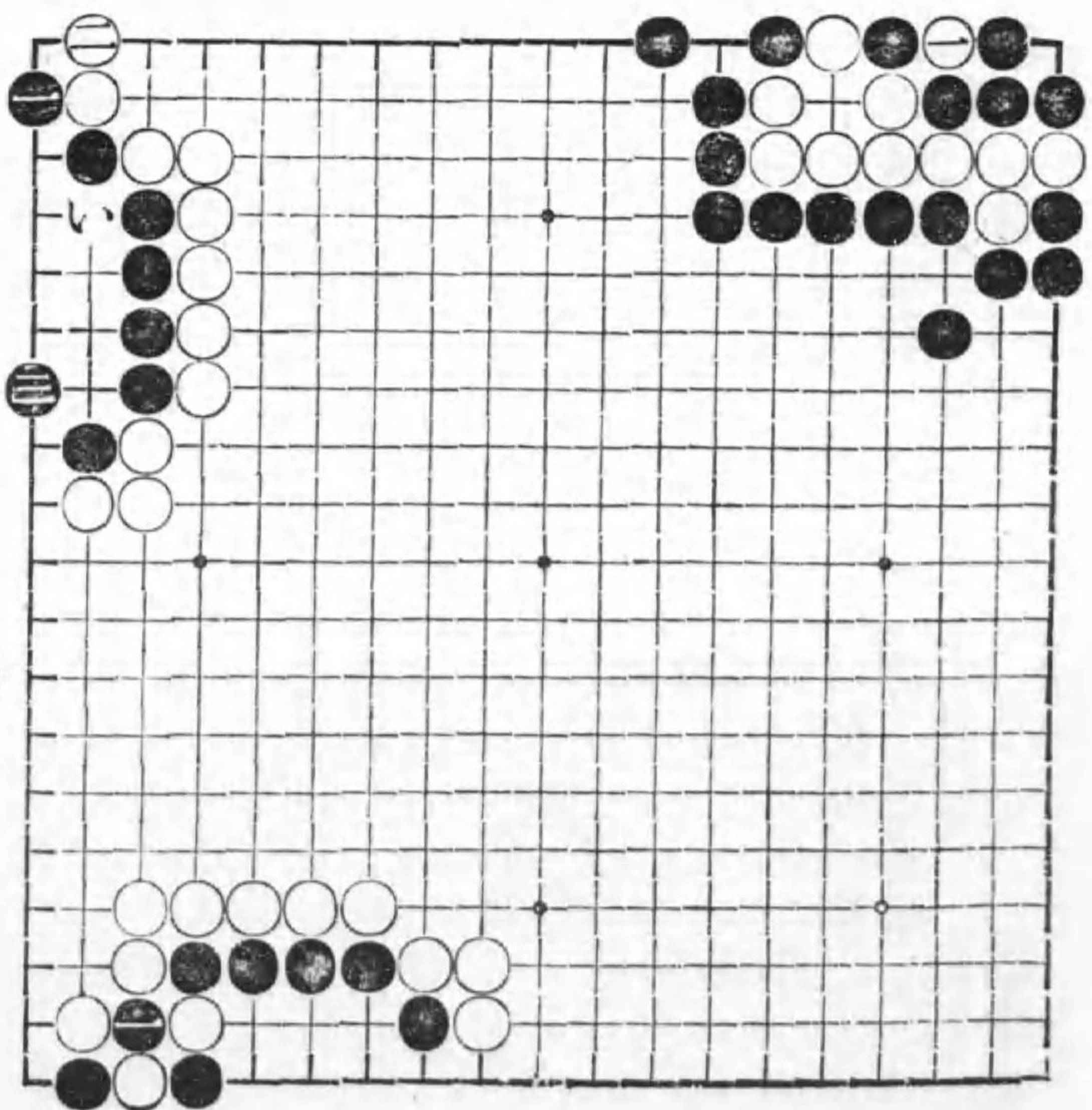
右上隅白一に黒も左下隅
黒一。

と左下隅の劫には白勝て
ない事にある。

左上隅に移つて、黒一に
白二なら黒三。

で黒右上隅を利用の黒活
きである。

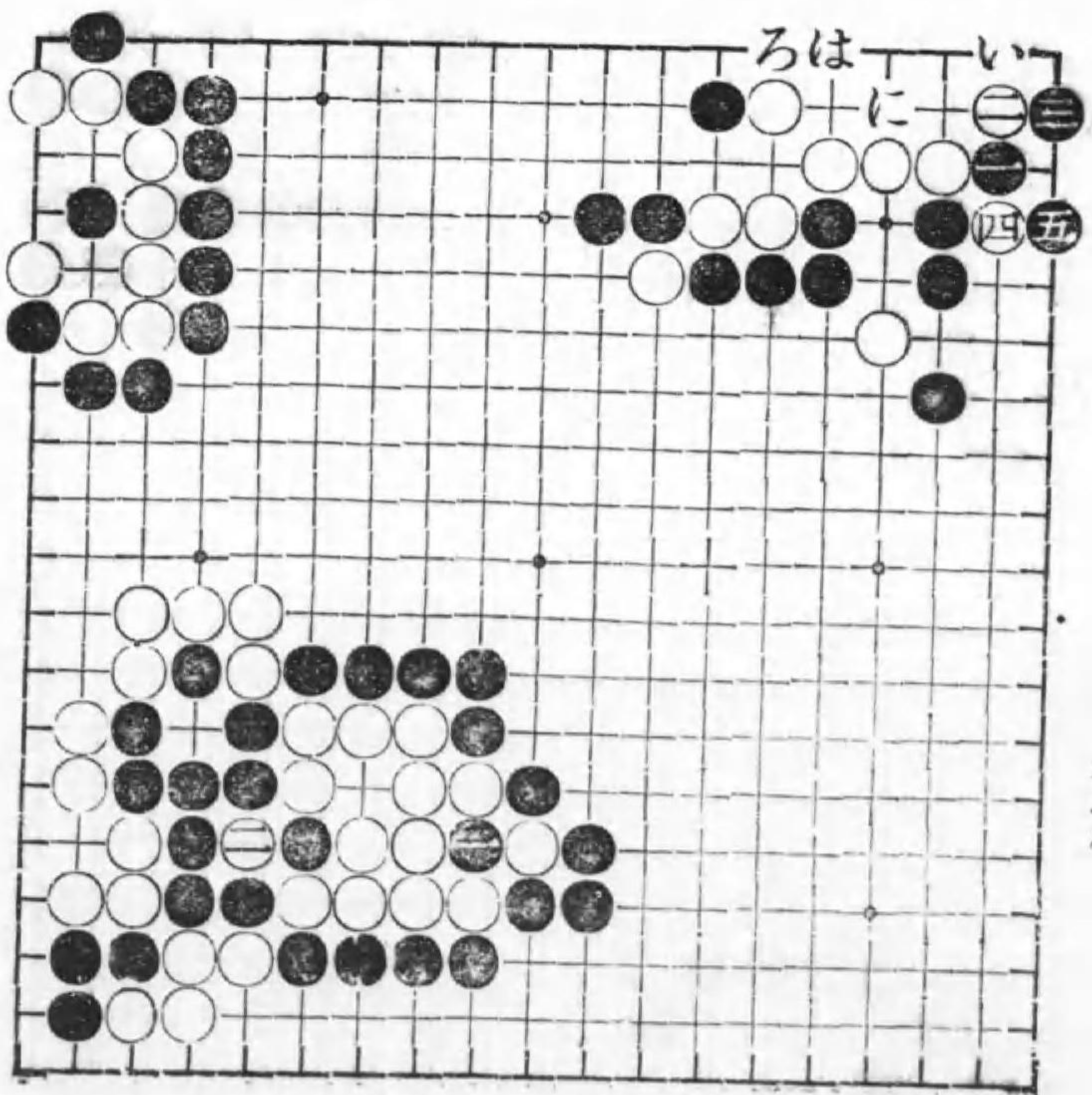
黒一を三の方だと白(い)
と黒取られるからである。
以上は廢物利用にも見られ
やう。



左下隅の方、黒一だと白二で此れも兩劫である。それを黒は利用、右上隅黒一より五まで——に白(い)だと黒(ろ)白(は)黒(に)。

其縮圖は左上隅白に活き無し。

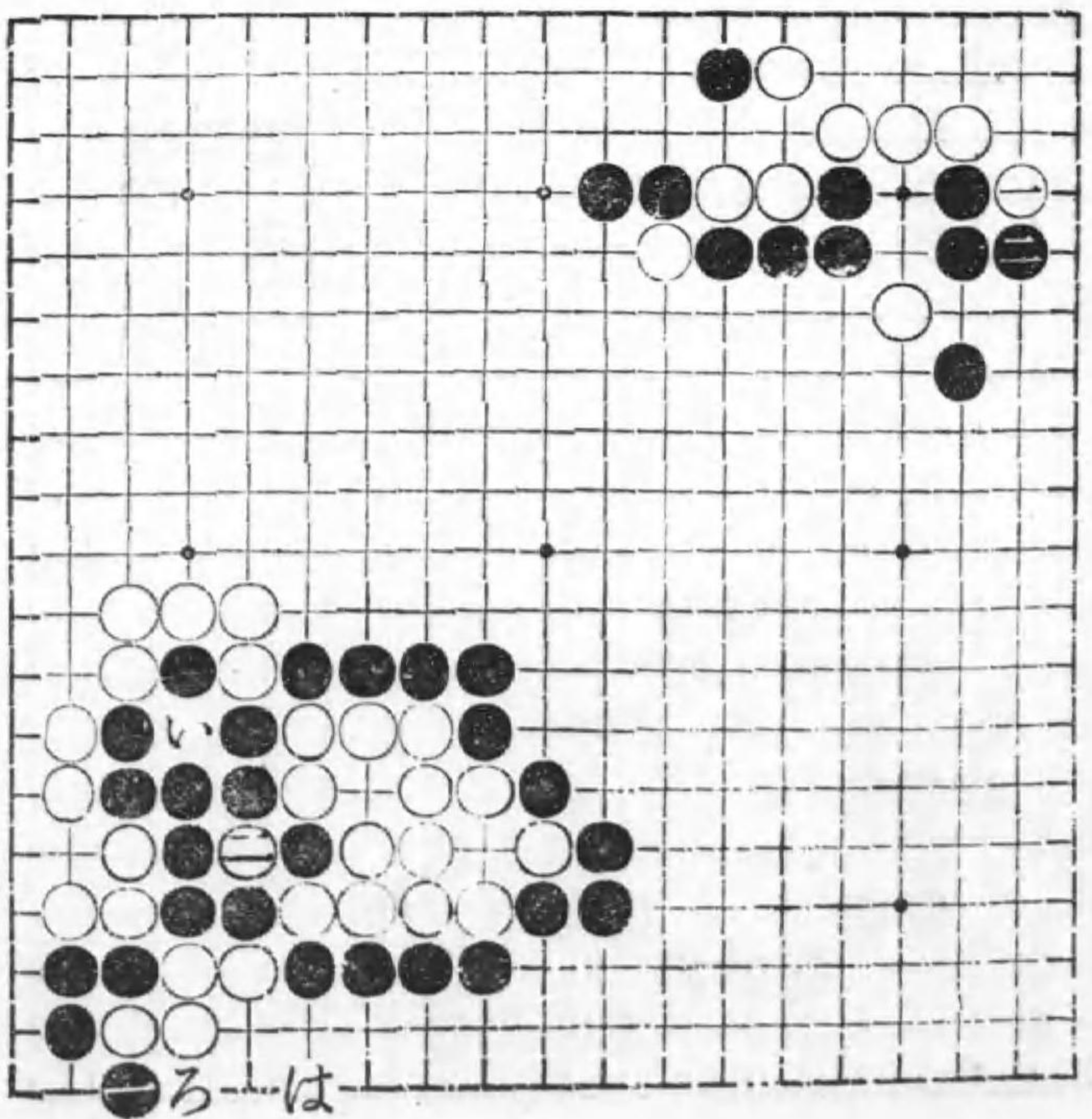
されば右上隅黒一より五までイヤ、黒三の時、白悪いのである。其處に用意周到——といふ……



字も生まれ、本圖右上隅白一黒二の交換である。無論白の手番の時であつて前譜右上隅黒一と三を解消でき。

黒二は白に其處へ來られて大きいからである。

左下隅黒一は白二。また白は其上の劫を取つても、即ち白(い)。で大問題には成らない、黒(ろ)白二に打上げ黒(は)等。



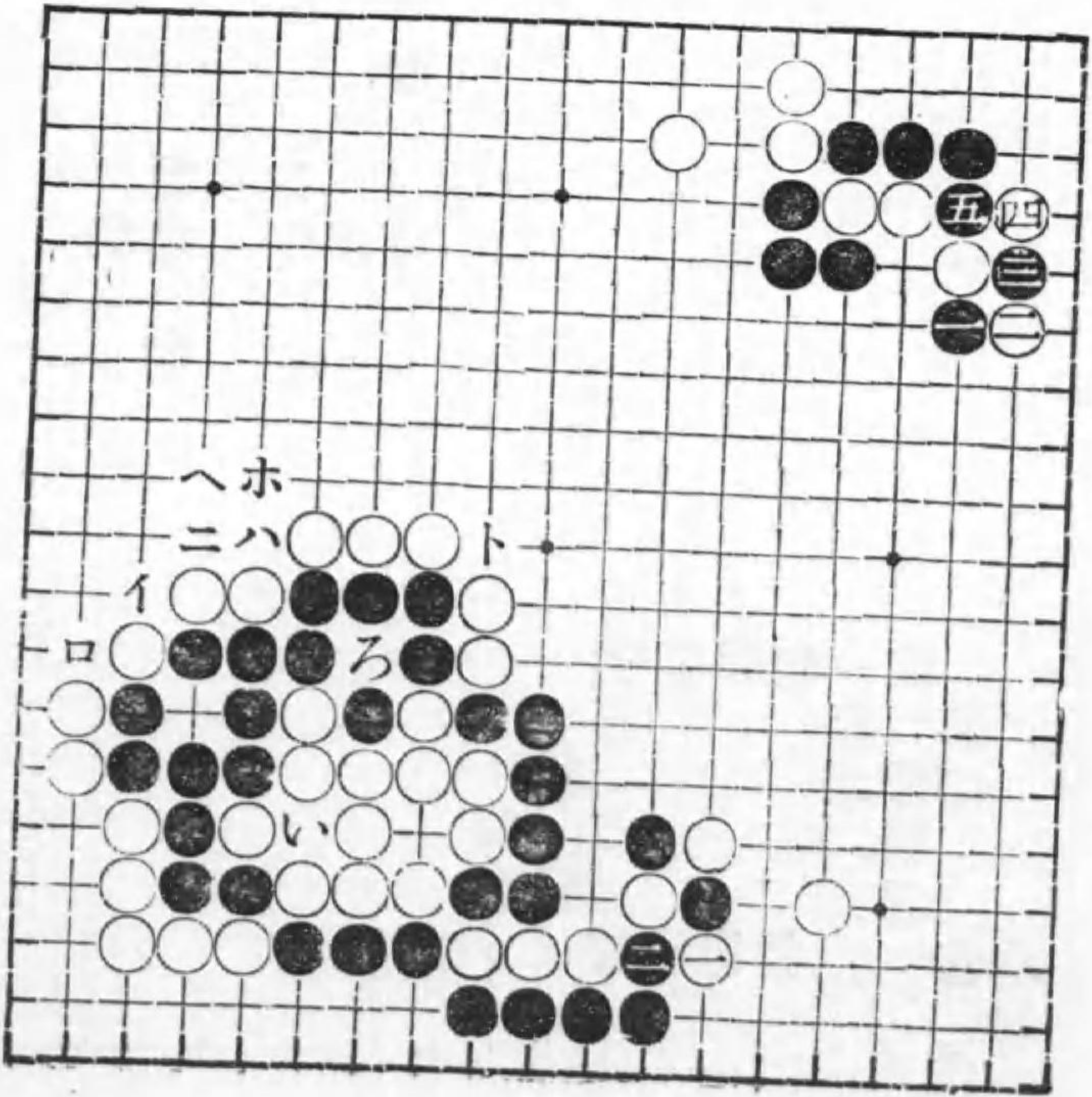
黒(い)なら白(ろ)で此れも兩劫。

だが斯様な兩劫は、白黒何れも取られぬ、セキ、即ち兩立である。

處で周囲の關係、白一に黒二で白三子を取れ。

それは右上隅黒五で白二子を取れ。等と同様である。

黒の方はそれでいいが、黒(イ)白(ロ)と以下黒(ト)迄は白が大變。



1130

白六は四以下三子が征に取られるからである。

白八も左の白二子が要石だからである。

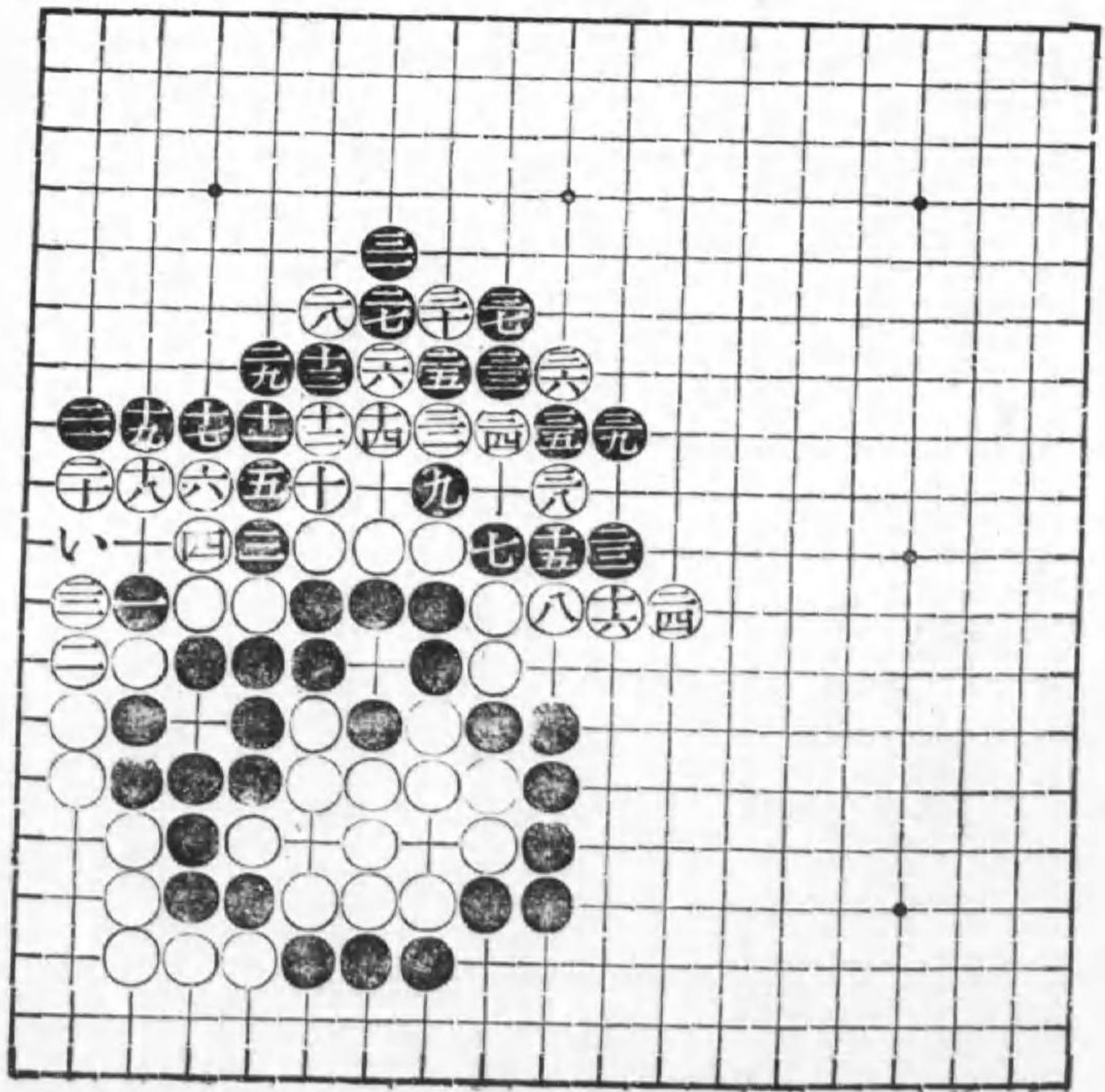
黒二十一は次に(い)で白二十二。

併し本譜最後の黒三十九で白は大破、大敗走である。

本篇初段を目指しも、本譜まで追加し、研究資料に相當充實と思はれ――

それに定石篇、また布石篇、等等も大觀され、本篇はこれ迄。

雜 觀



1131

布石

布石は石立て又は配石、布陣ともいつて、碁を圍むに最も大切な基調である。即ち布石は一般方略、方略なしに戦争はできないからである。方略とは目的をいふのであつて、事業なら事業の目的、建築なら骨組、借金なら前口上である。

白五は其一間右下の黒奪取を含む、右側占領の布石である。

黒二と六は上邊一帶占領の布石である。また黒四と八も八より右卜隅まで占領の配置である。

黒十より十六までは先づ左隅を固め、次に黒(い)。と白七奪取の配置である。黒十八も其上の隅を固め左側占領兼務。といふ二大使命である。

黒十八は次に白(ろ)なら

黒(は)白(に)と白を撃退。

そして黒(ほ)と圍つても

可。

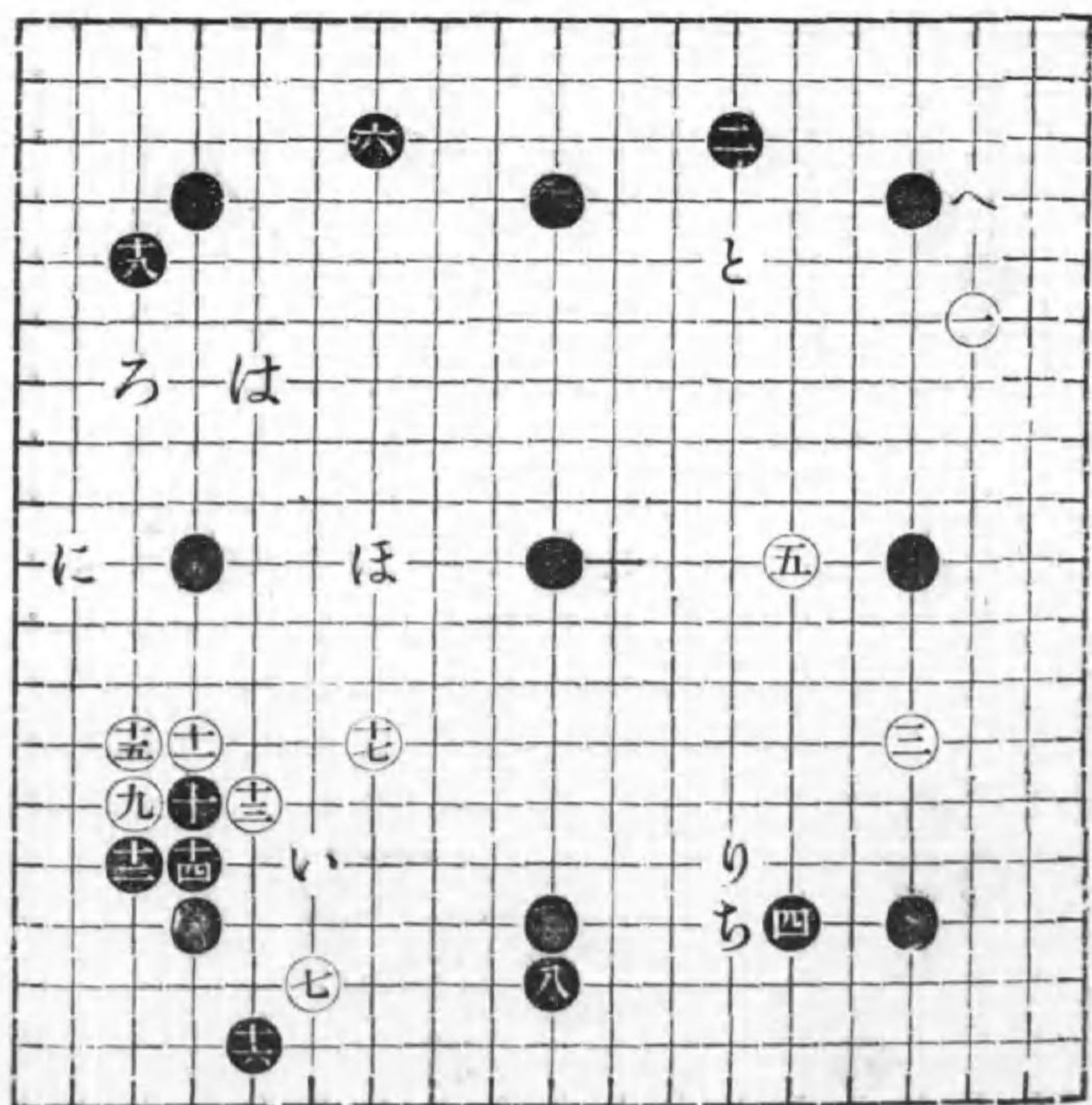
また(ほ)を(へ)、或は(と)

でも、黒地は白地に大優勢

即ち全局通観である。

黒四の方白(ち)なら、黒

(り)と勇戦。



布石

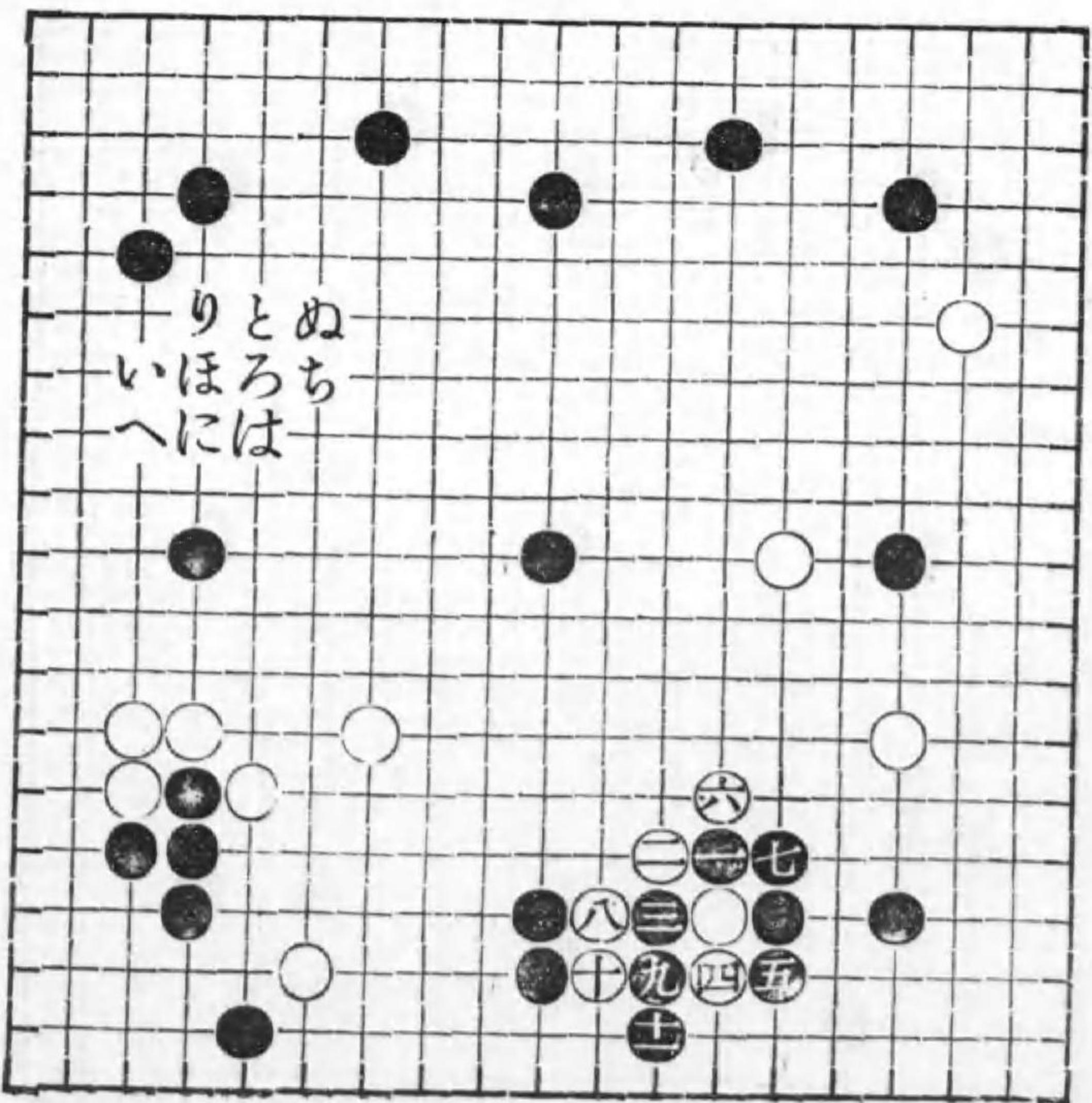
黒一は勇戦、一を四は氣
力に乏しい黒の防戦である
黒十一と成つて黒可。

また左側白(い)黒(ろ)、
そして白(は)なら――

黒(に)白(ほ)黒(へ)と此
處も黒勇戦――

次に白(と)黒(ち)。に白
(り)であらうから、黒(ぬ)
と壓し。

白に好展開、望めないの
である。



黒六を七とも限らないの
である。

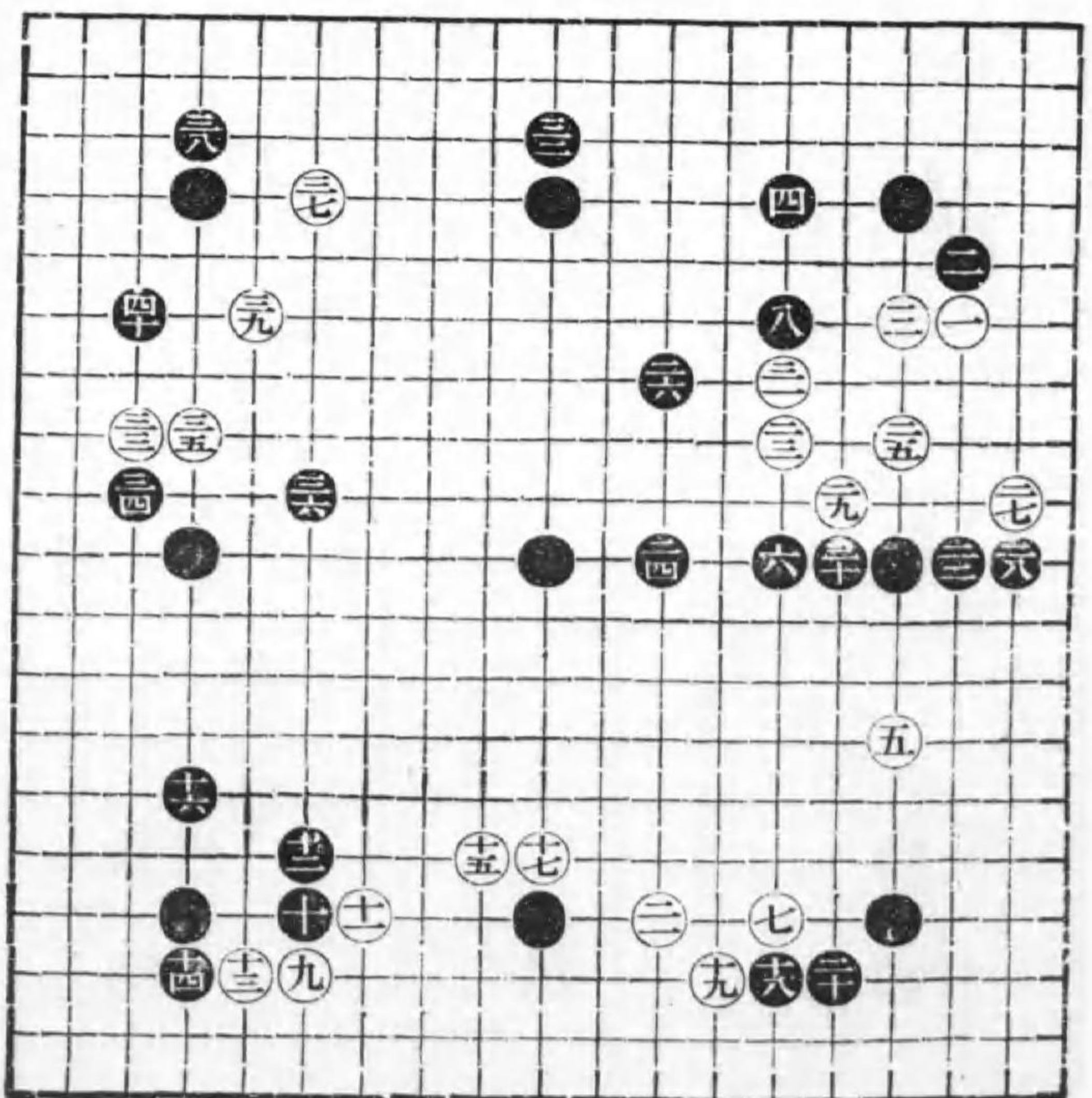
即ち黒六は白七にまた其
方を手抜、次に黒八で白一
と三を包圍の前提。

黒八の手配に白は二十八
と、其處に走路を残して九
と轉じたのである。

黒十六は次に十七と押出
す用意の配陣。

本譜も黒四十と成つて大
優勢の布石である。

布 石



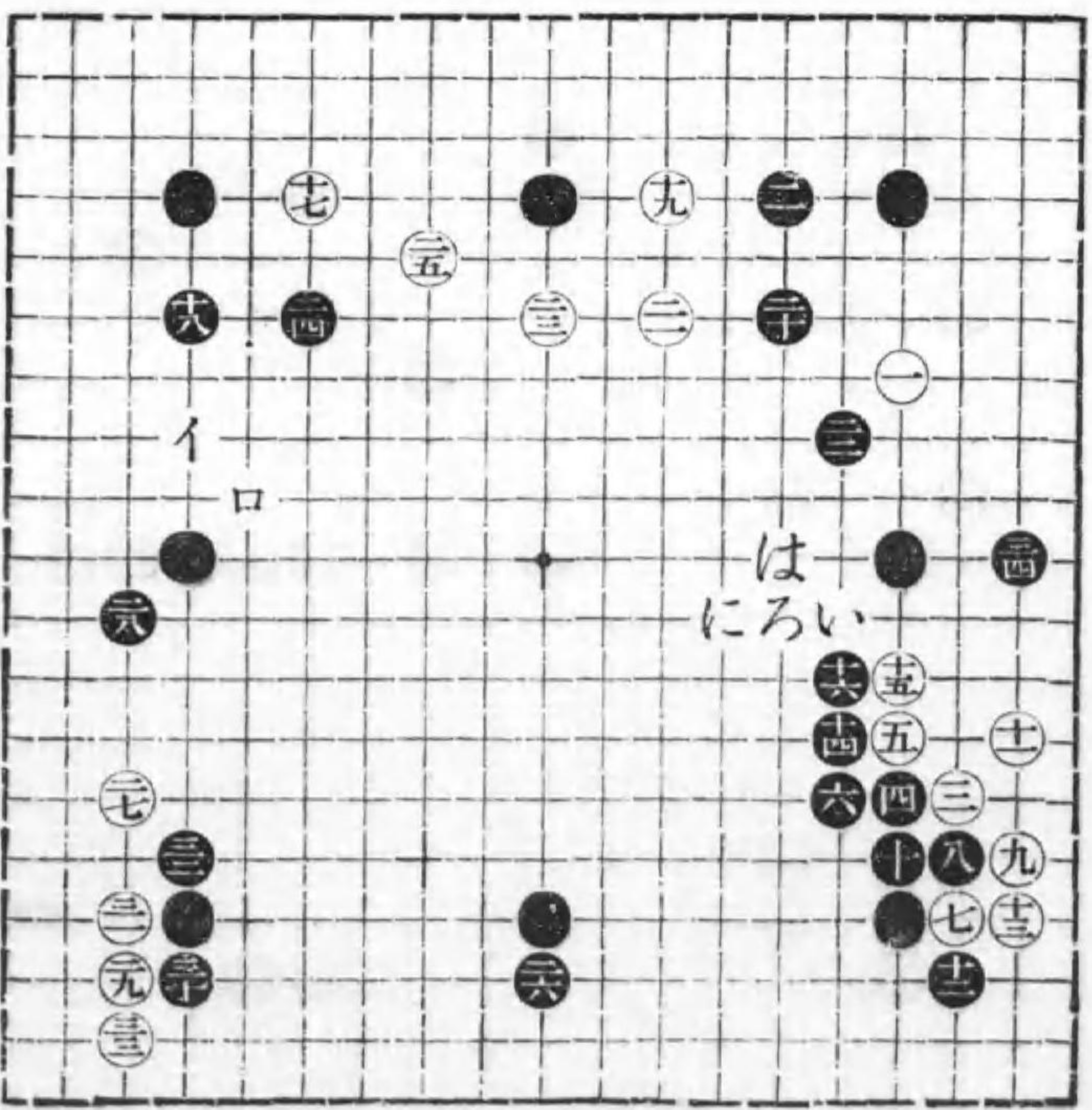
白三より十五までは、此れも白一と協同動作の右側攻略の配備である。

が白十七で(い)黒(ろ)白(は)だと、黒(に)と成つて白が面白くない。

それは黒十六が白の計劃看破。

白三十三を三十四の方だと、それは次譜は。

黒二十八は白(イ)と侵入に黒(ロ)と逆襲の配備。



前譜白十七を(い)から、黒(に)までは、本譜黒四まで。

そして白五は必要の一手だが次の黒六が中央把權確保。また黒六は――

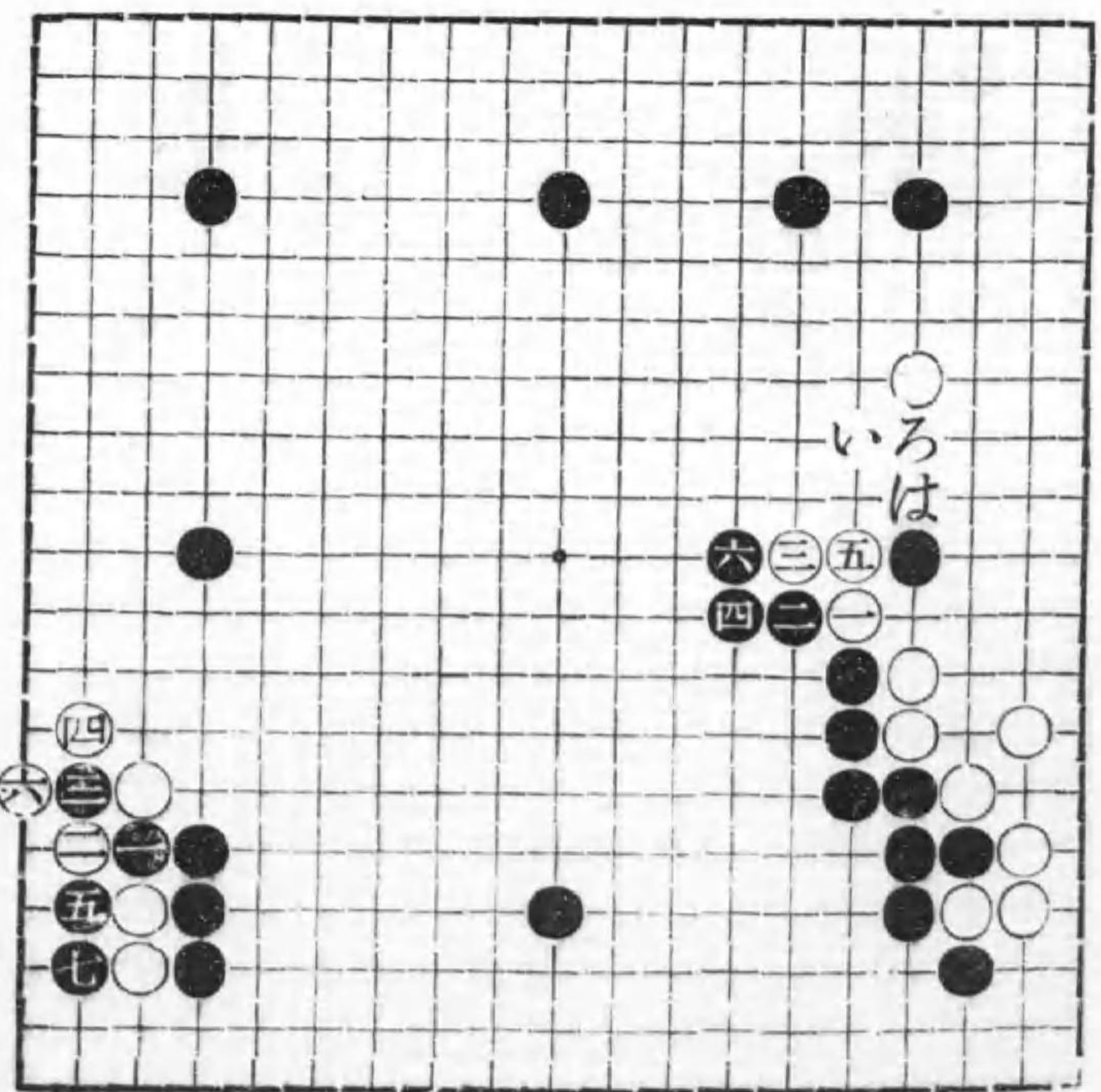
黒(い)と。黒(い)に、白(ろ)は黒(は)。と其黒の手段留保。

等で前譜白十七の事情。

左下隅は白三十三の前譜手抜の現はれである。

布 石

二四七

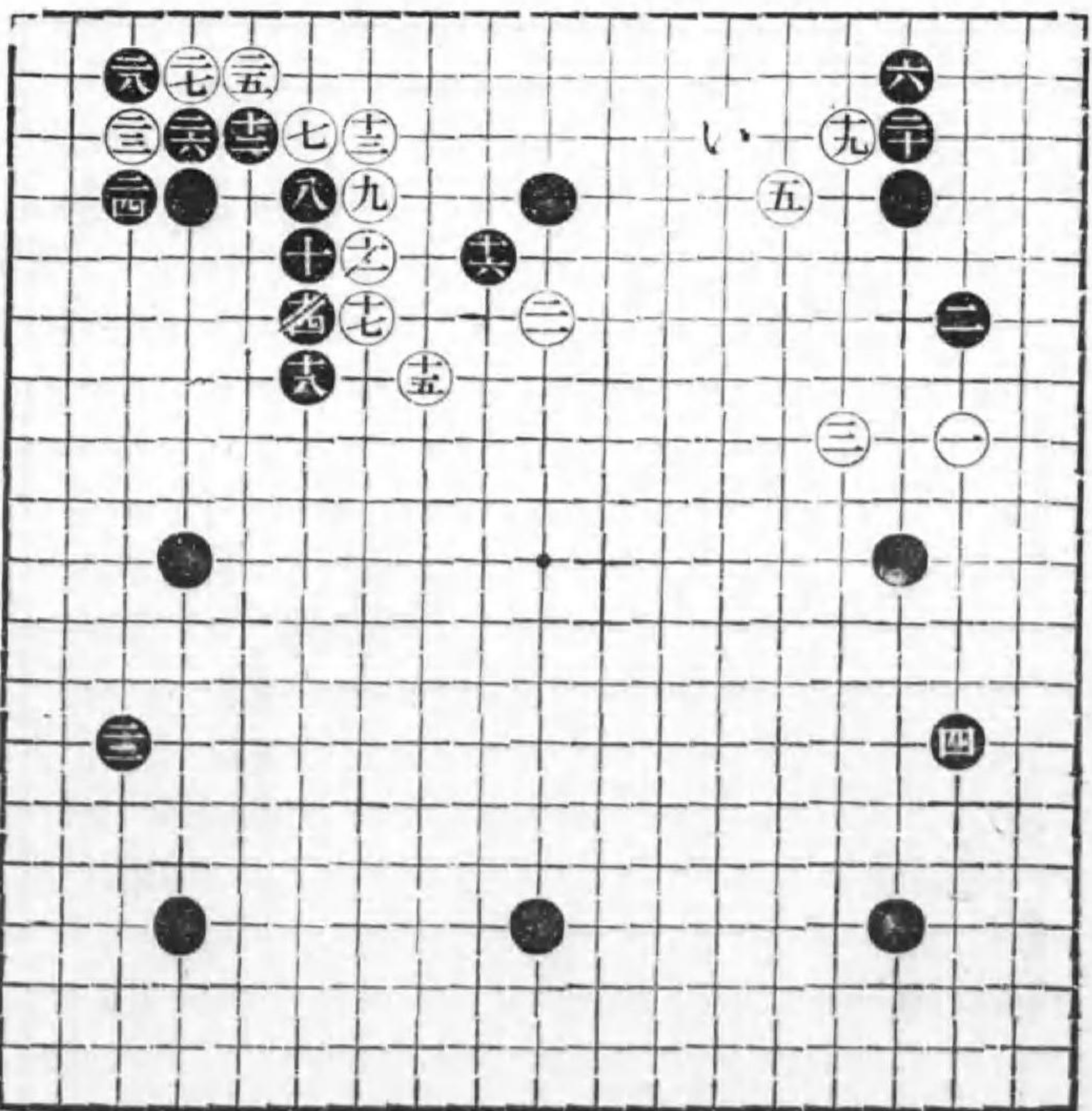


黒十六は白十七と黒十八と替つて、十八は左側を強化、十六は捨石の意味も含むものである。

捨石とは大勢把握、即ち左側に黒大領域、その犠牲である。

分り易くいへば本陣に突入され味方の大將討取られては負けだからである。

併し黒に(い)と活路もあつて十六の方は――



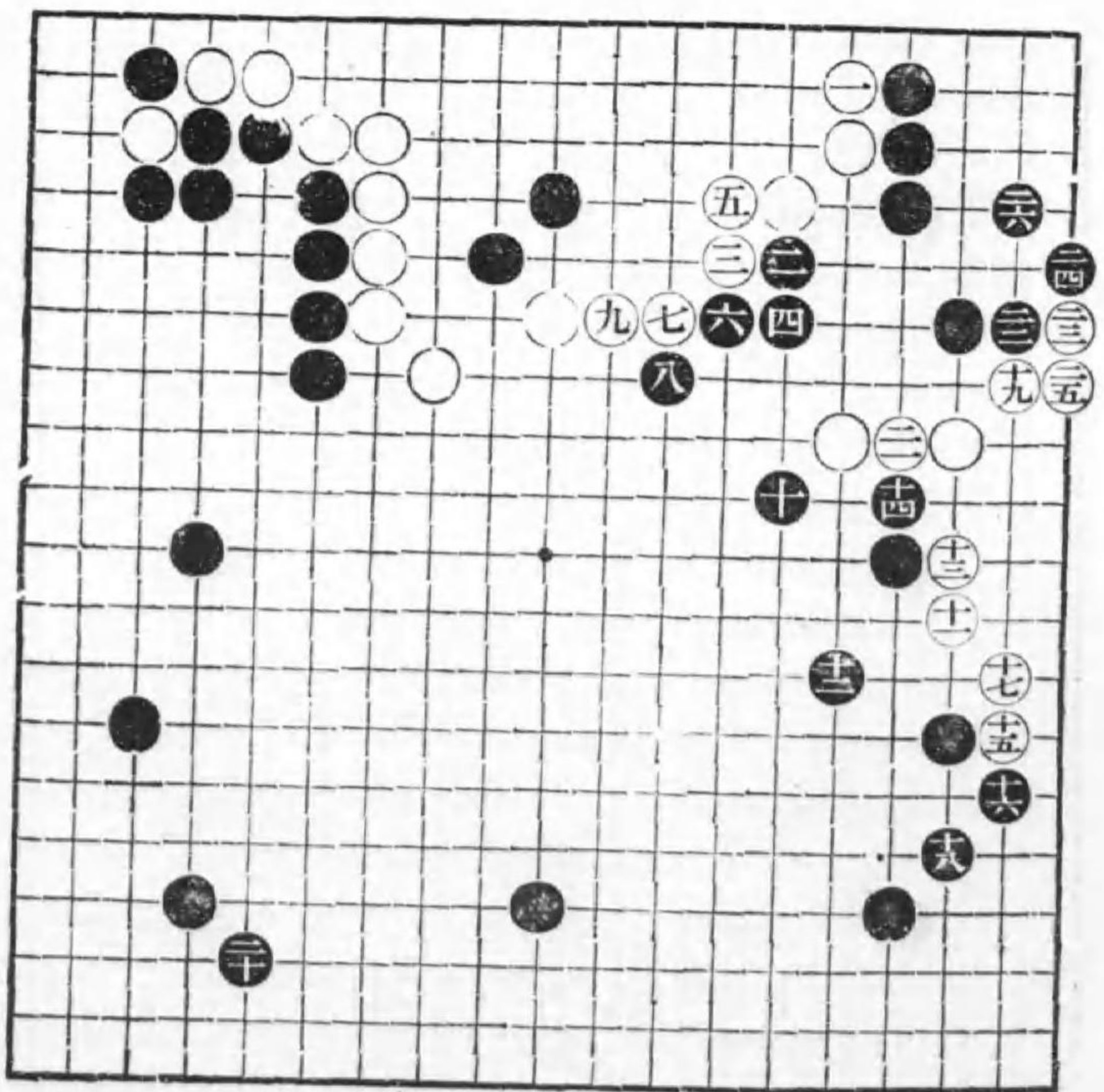
白一は前譜續行であつて以下白九まで、それで確定白地――

だが次に黒十以下二十六まで、は黒十八と其方、また黒二十と此方、と黒の配備は成つて、比較にならない黒の優勢。

観られよ、黒二十までの堂々の布石を。

此れから白奈邊かに戦争開始の他はない。

布石



白七までは七も(い)と白九の如く、戦争の配置である。

黒二より八までも八は時機を見、(ろ)と一舉左右整備である。

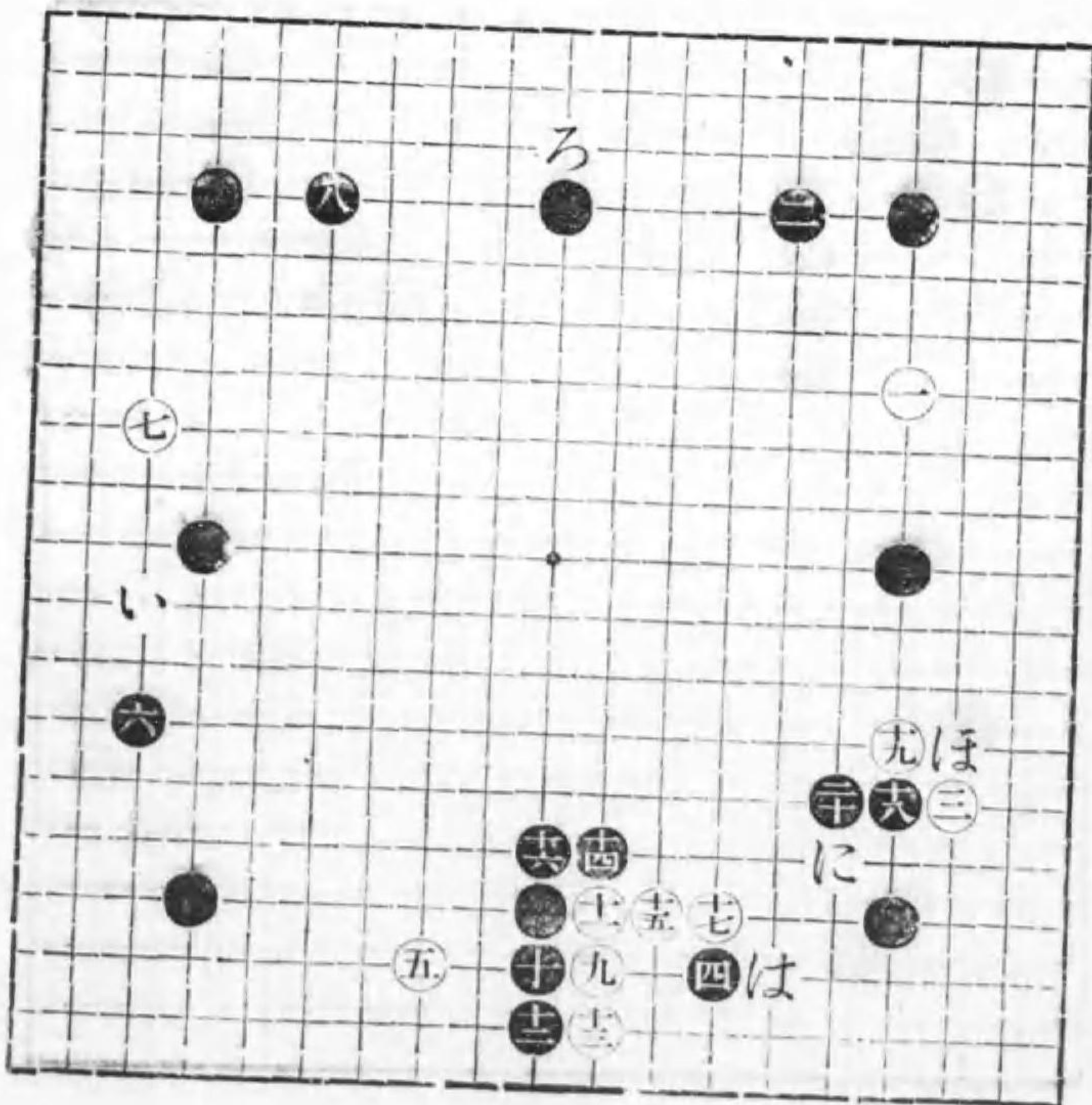
白九より戦争である。

黒十を十一は次に白十、

黒は弱い應戦である。

黒十八を(は)だと一次に白(に)、と白に出を止められ黒面白くない。

黒二十は次に(ほ)

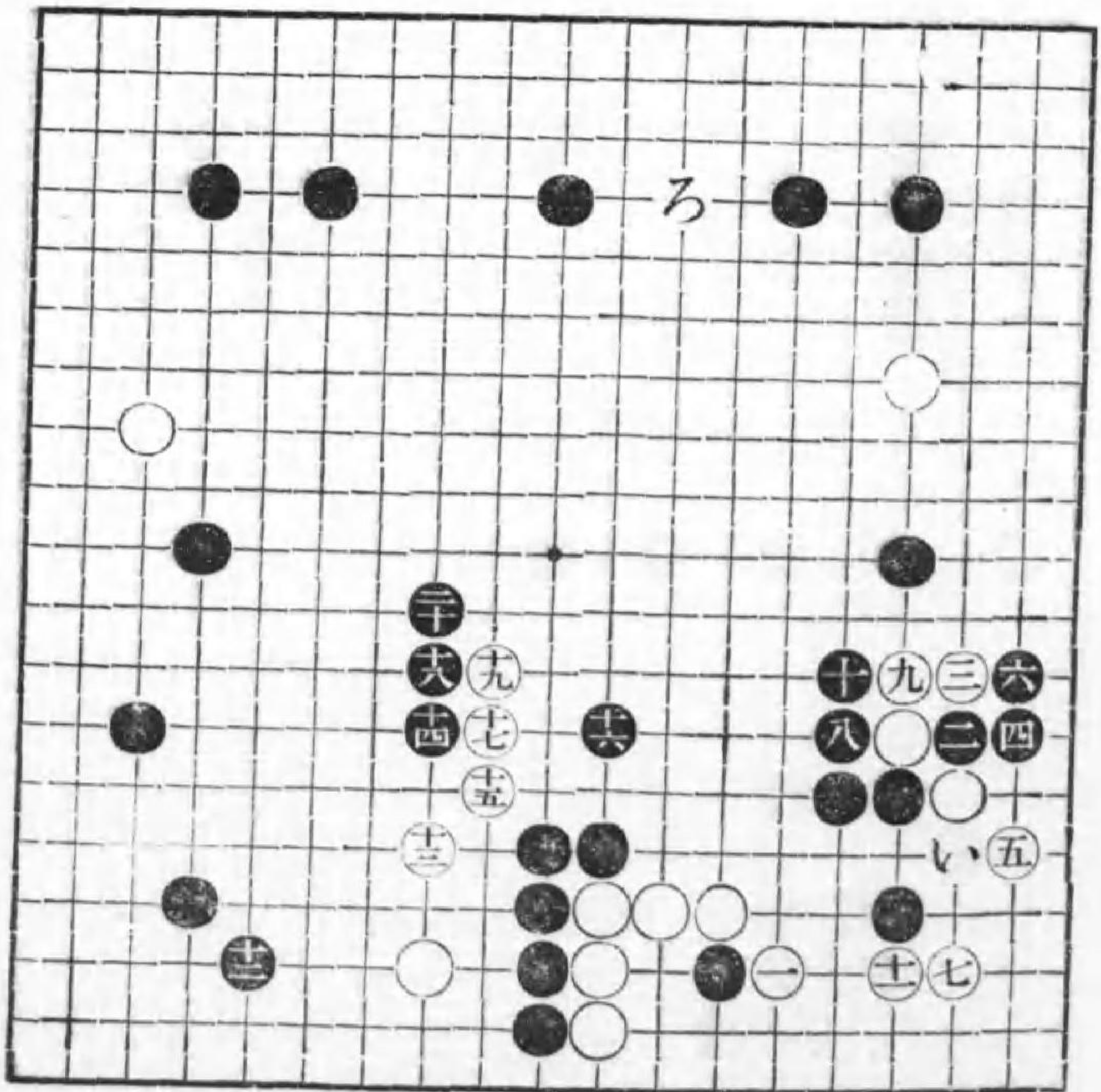


白一を(い)だと黒一と成つて、其方の白は前途困難である。

併し以下白十一まで、其處に白地二十目位。

では左下隅の黒地と同様大勢依然黒の優勢。同様とは黒十二の時。

白十三は假りに白(ろ)だと、次に黒十三。で其方の黒地は四十目。黒十六の方は危険なし。

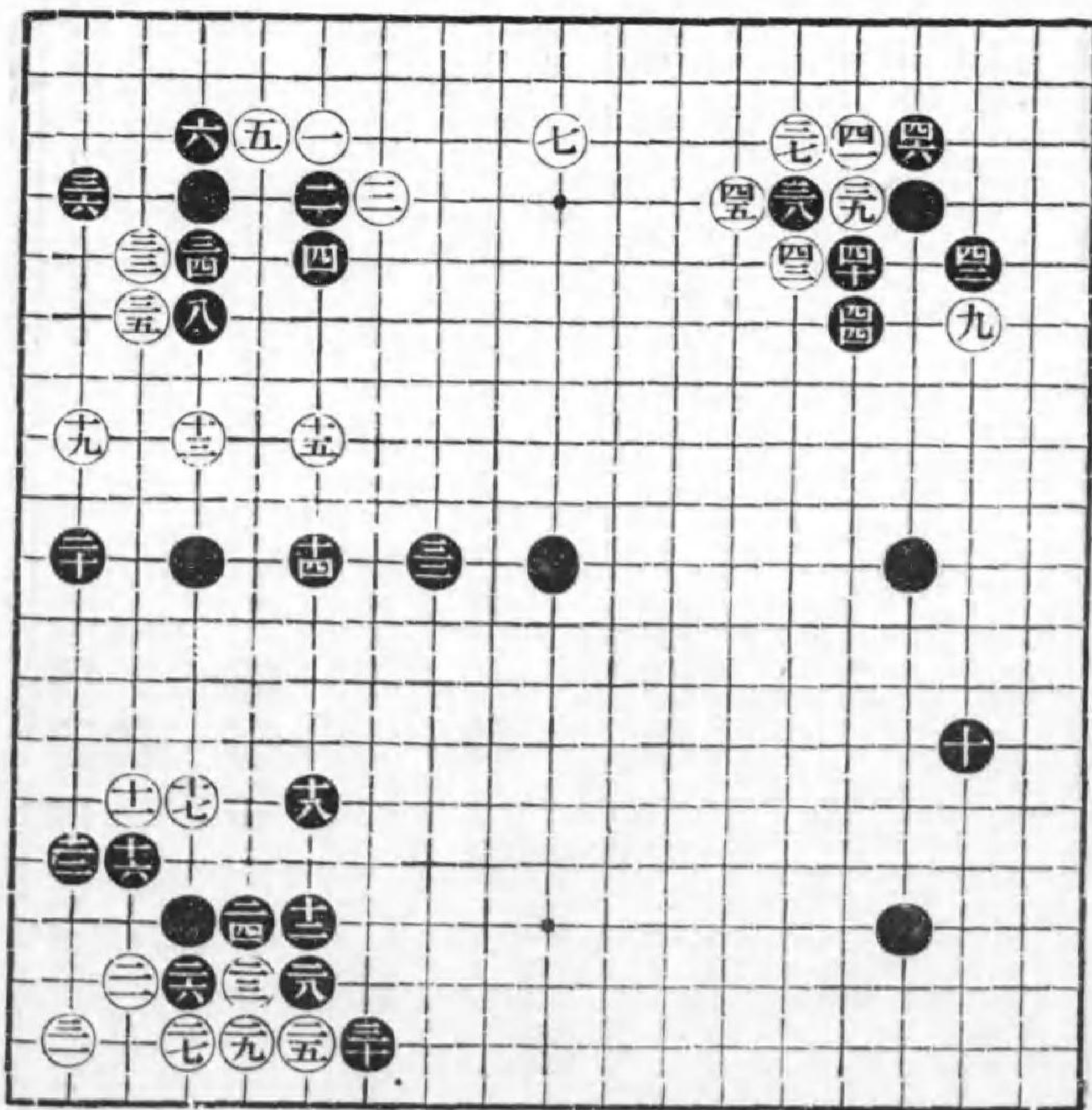


七子となると一寸局面も
廣い、右側でも左側でも、
黒の置石は白にとつて邪魔
である。

即ち白は右側占領の計劃
でも置石が黒に打込まれて
ゐる、状態だからである。

黒四十六と成つて大觀せ
られよ、白三十五以下はな
ほ治まらない。また――

白十七の方は黒に取られ
白敗勢。と。



白七を八に配備では、次
に黒(5)。

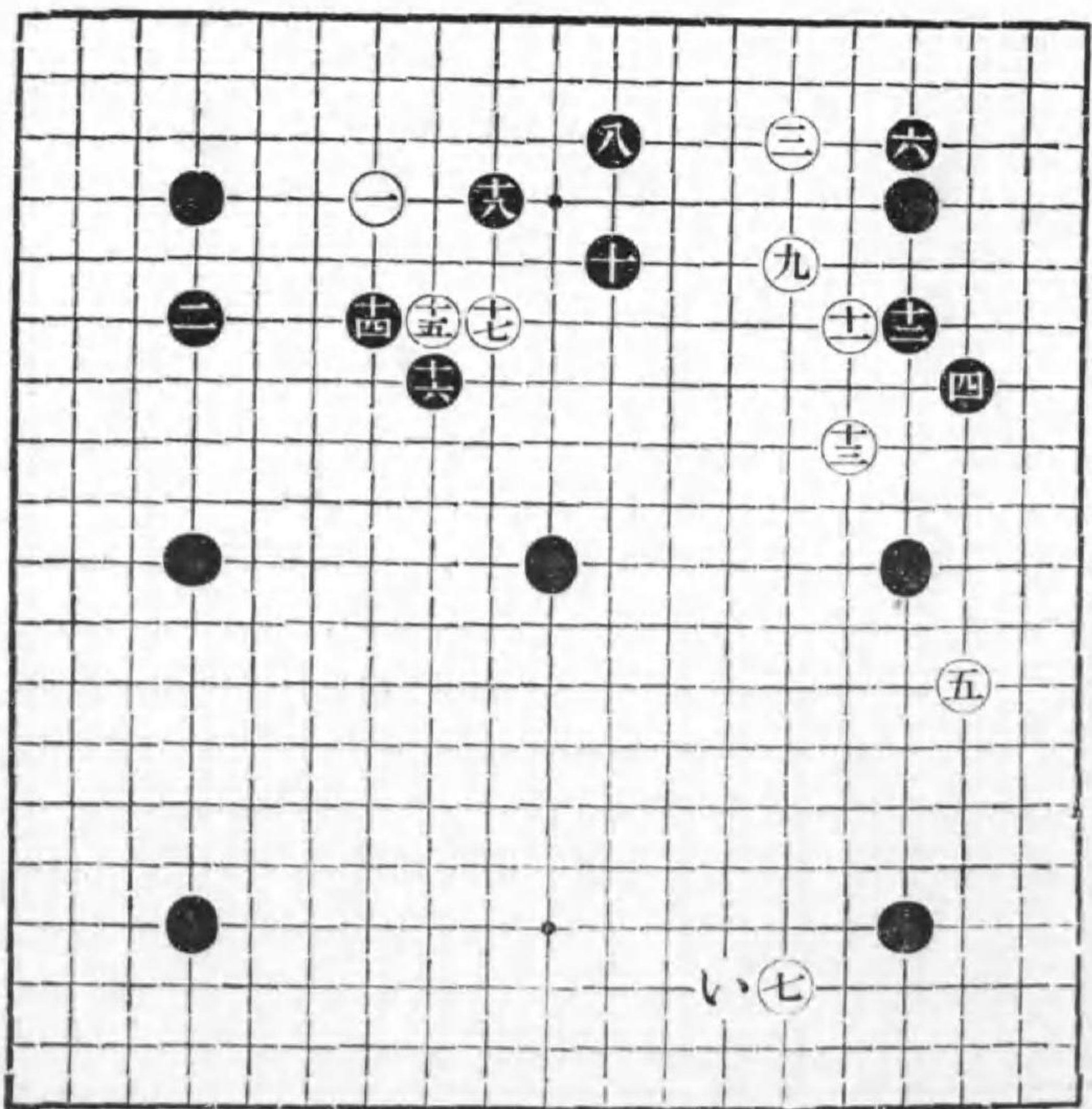
斯くては黒無事の進行。
と白七は黒八の打込みを待
つて以下白十七まで。

即ち黒に戦争を始めさせ
る謀計である。

戦争は始める方が先づ損
害を受け、待つ方が得策。
といふ原理に基づき。

黒十八は白の急所を突き
以下次譜に――

布 石



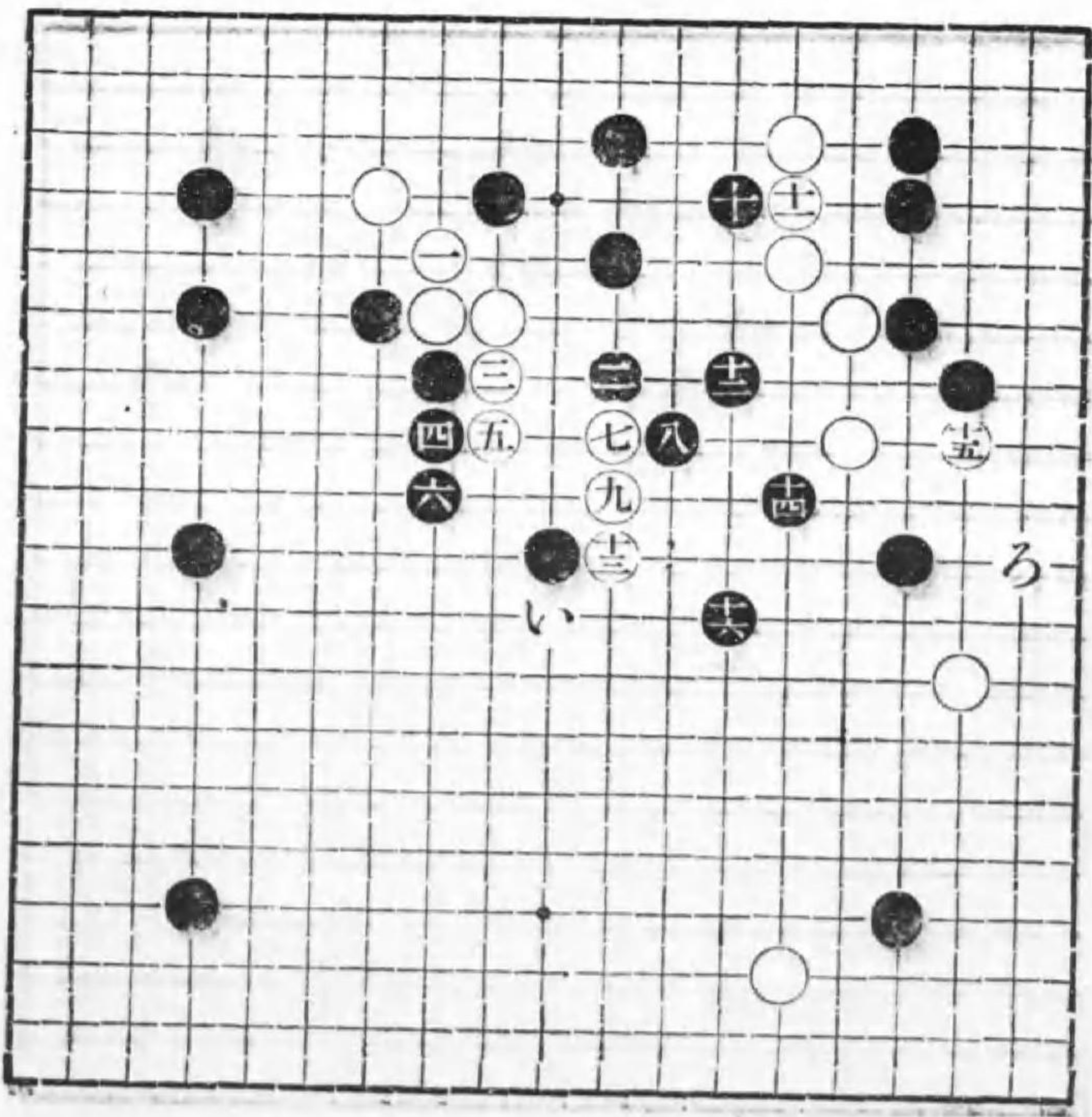
白一は苦いが止むを得ない
應手である。

黒二は以下十六まで成つて、
六の方は左側強化の好形勢。
また――

十六の方は右側の星の黒一子も合體、なほ黒次に待望黒(い)と(ろ)。

の兩睨み、白大苦戦である。
と見られる筈。

等も黒前譜布石の好調に因るもの。

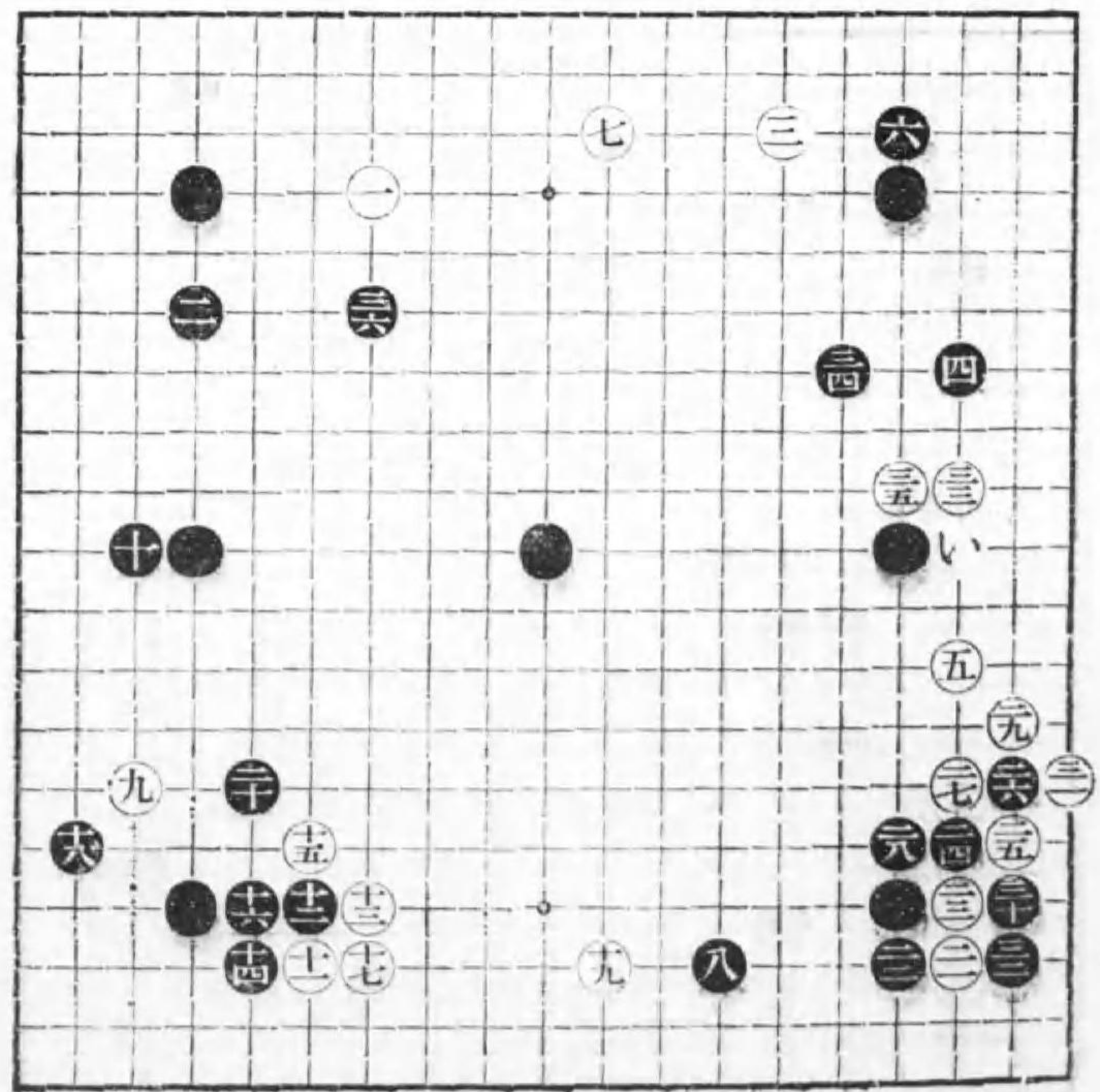


黒三十六までの本譜黒の布石も、
確固不拔の黒大優勢である。

黒三十四は白二十九の方が堅固無比、
で白三十三に黒三十四を(い)と戦はない
其處が黒の好態度である臨機應變といふもの。

白でも黒でも敵の金城湯池で戦ふのは原則上不利。

黒二十四、二十六は二段跳ねといふ其處で適法。

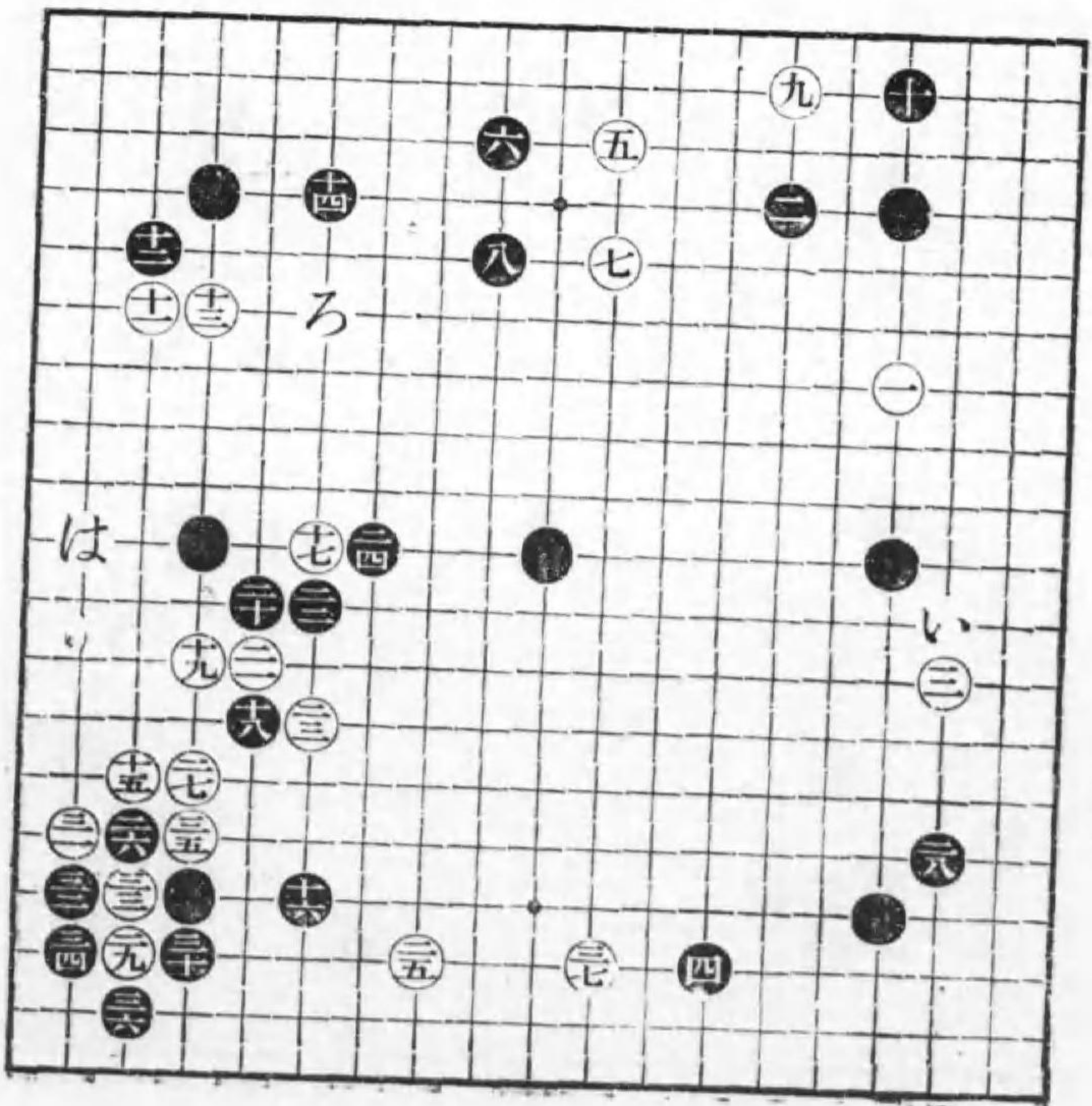


布石といつても井目より六目まで等は、それが既に布石であつて、白に大した計劃も出来ない。

白三十七までが先づ双方の布陣である。

されば今度は黒の手番、黒(い)と戦争開始も悪くないのである。

また黒(い)を(ろ)と其白二子攻撃でも可。其黒の目的は(は)と白を撃退。



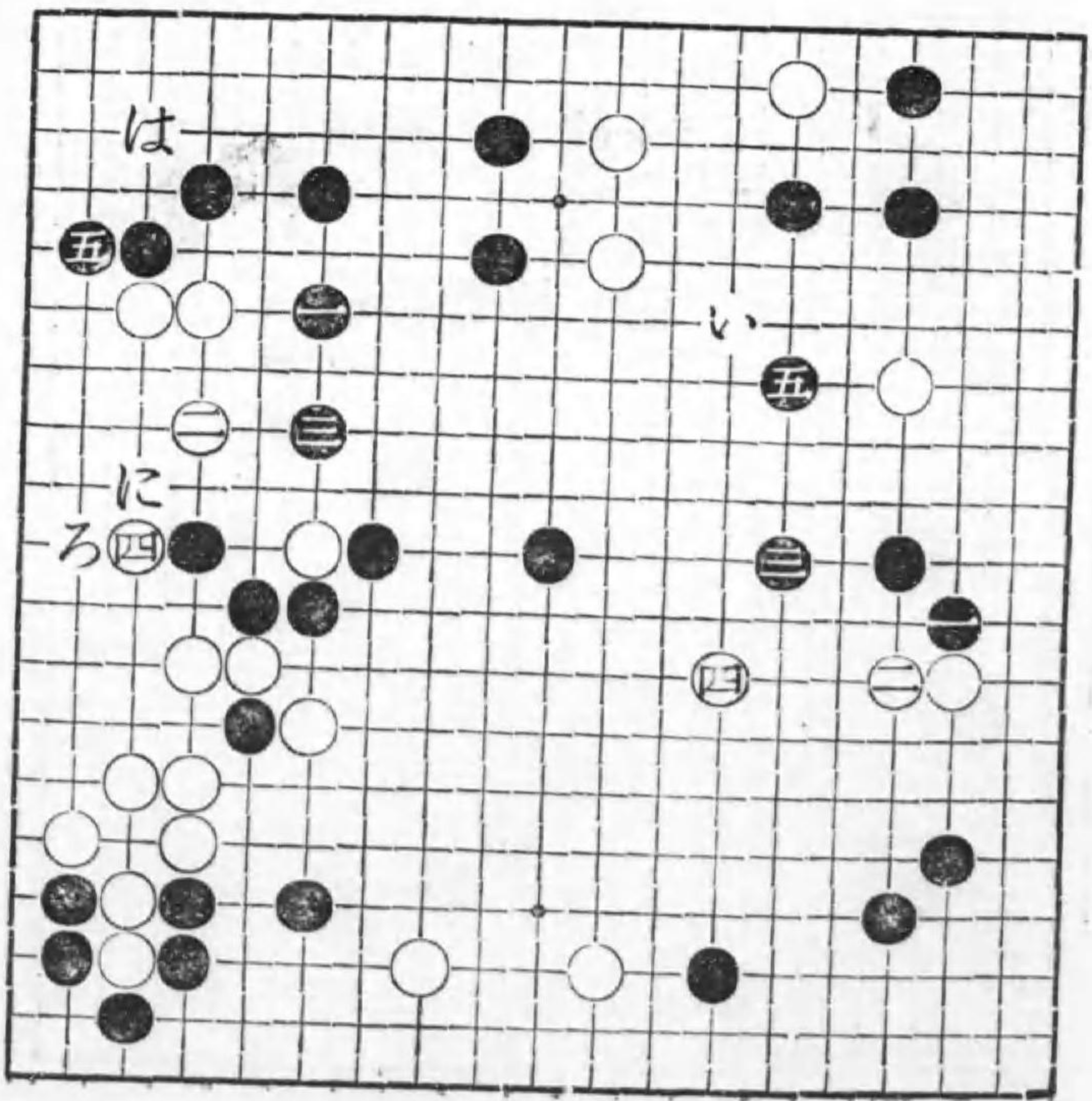
右側は黒一より五まで。白二で(い)なら黒二で白の能動を奪ふ。

また白四を(い)なら次に黒四。と白二以下二子を攻め白は容易に治まらない。

左側黒一に白(ろ)では甚だ低位。と白四まで——

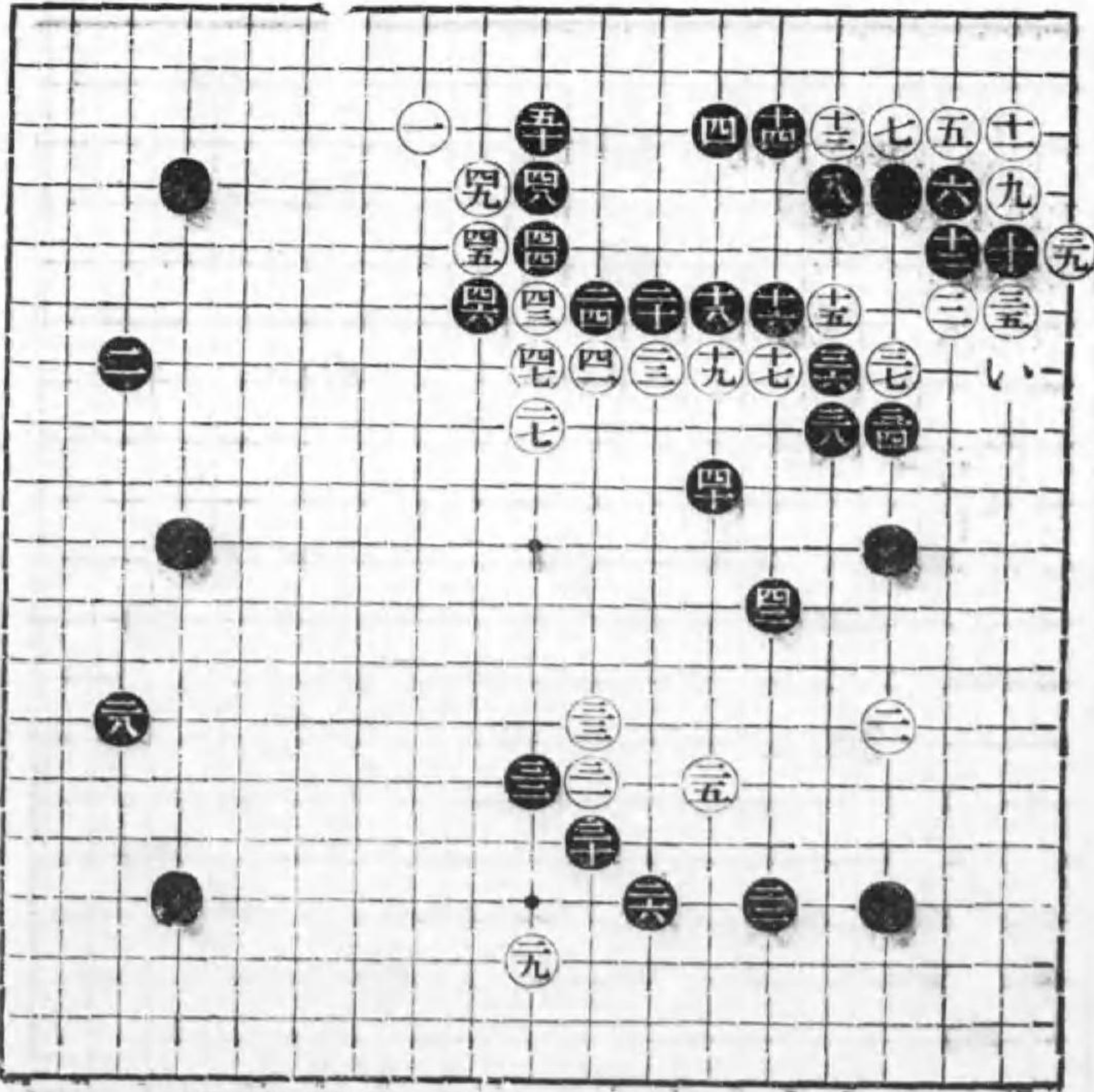
だが黒五で先づ白(は)の白の打込みを解消、なほ黒(に)と黒に手段留保され、黒好形勢である。

布石



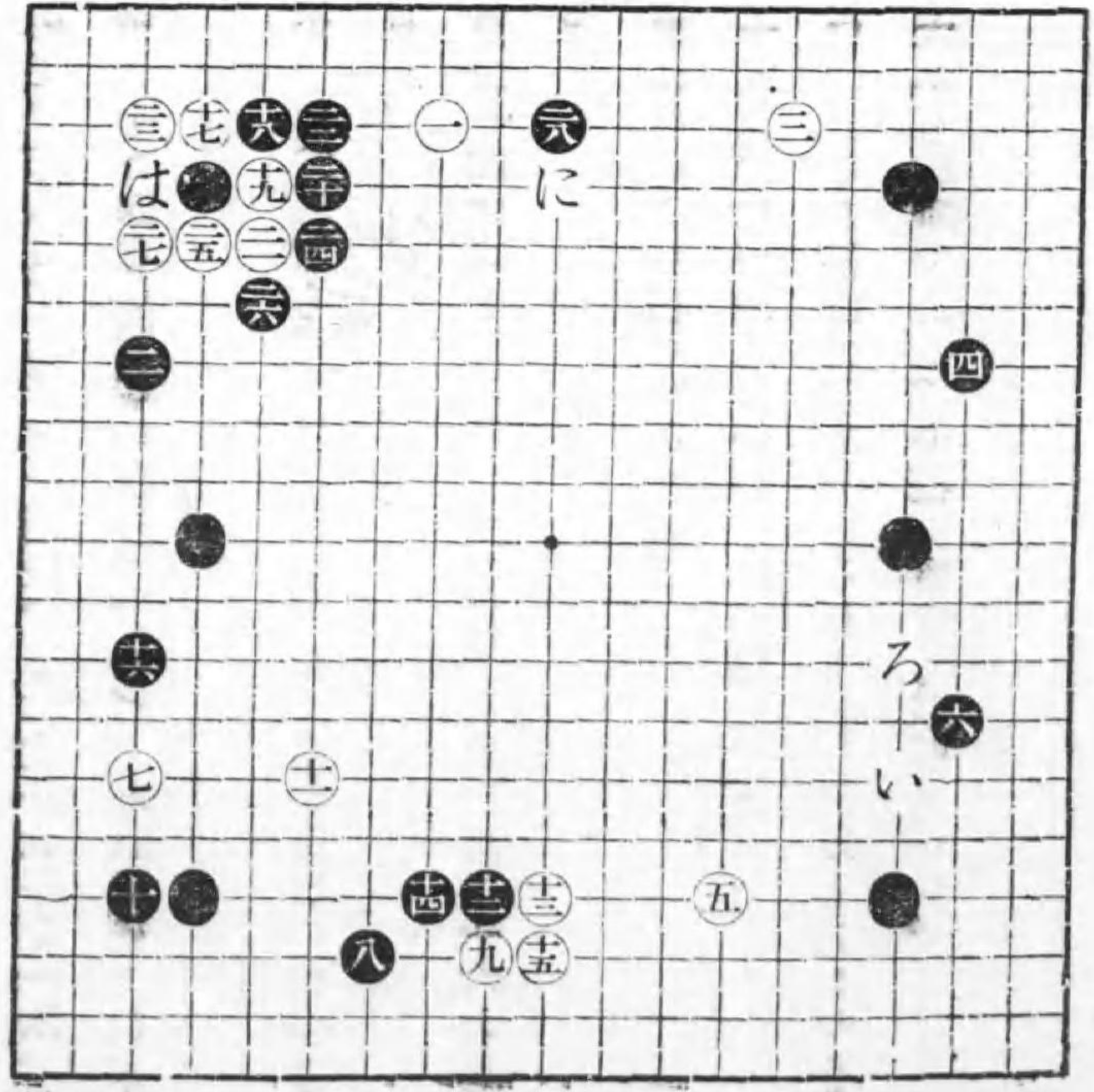
黒は、白二十五などの右側の大規模には驚かない。また次の白二十七にもである。即ち黒(い)と黒に侵入あつて。

白三十三と成つて、黒は全局を見渡し――白の大模様を解消、これは一舉黒の勝勢。と。それが黒四十二まで、黒に些の危険はない好整調である。



黒六を(い)だと(ろ)に打込みが残る。それで黒四とある斯様な場合、白五に黒六も悪くないのである。

白十九を二十三なら黒次に(は)。それで白十九と切つたもの――だが以下黒二十八と成つて白は此方に悪影響である。白二十七を(に)だと、黒二十七で白が悪い。



五子に成ると四子に近いもので、即ち九子八子を一階段、また七子六子を一階、真中の黒一子は黒の方があまり重きをおかない、等の理合で、自づと布石計劃も白に廣いのである。

黒八は八を二十六でもいいが、白(い)なら黒(ろ)と防戦、悪くない堅實の配備である。先づ二十目近い黒地とも見え。

黒十は白十一を(は)なら、黒二十四白二十五として此白二子を攻め黒二十六の所。といふ即ち黒十の氣合である。

白十五を(に)だと、(ほ)と黒に打込まれ白悪化の配備。

黒十六、十八はそれで黒地十五位、先づ地域の優勢を保つ堅實である。

また黒十八の時には、次に白(へ)なら黒直に(と)。とそれも含む氣鋭も見えやう。

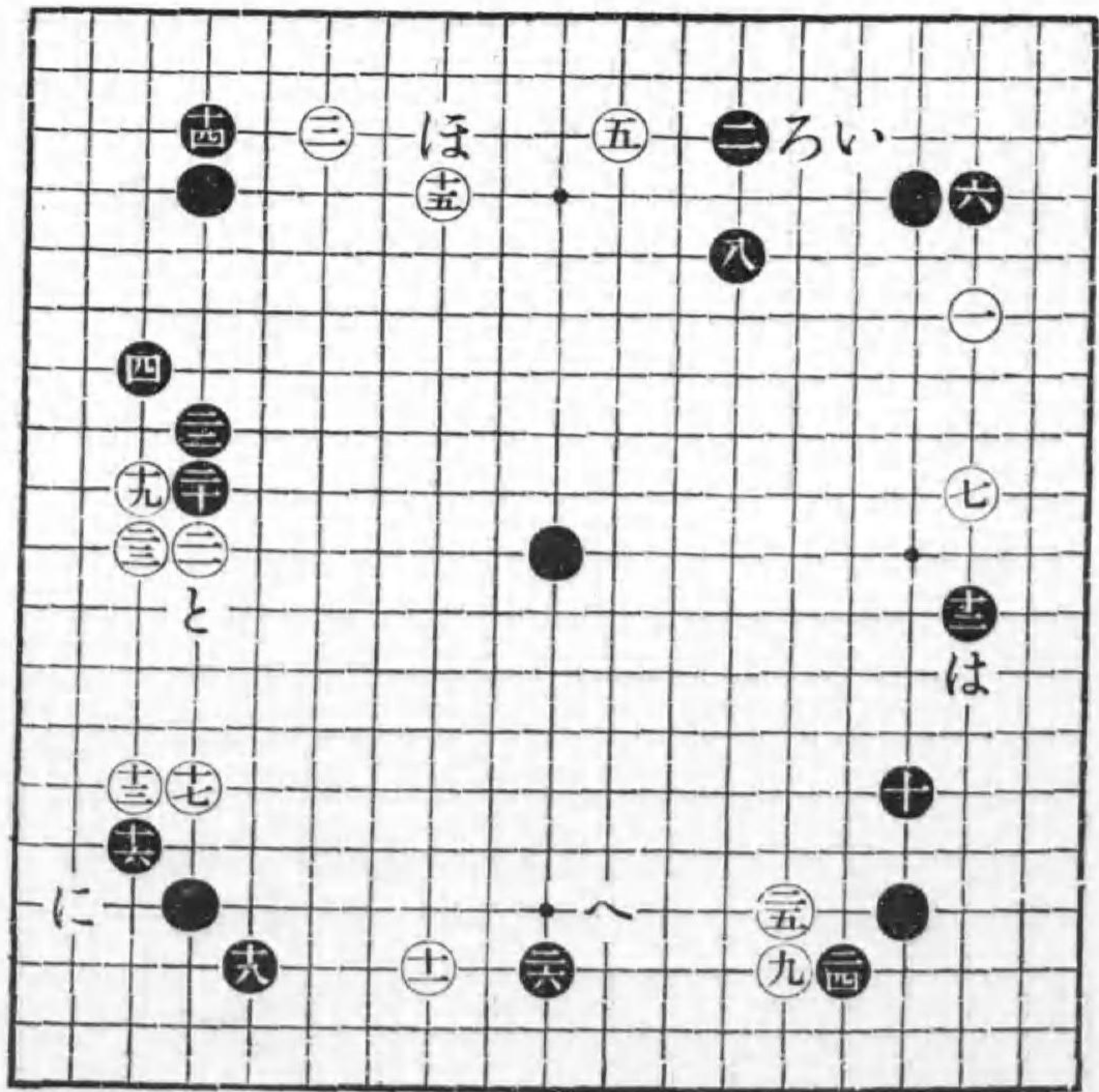
白二十三迄が布石、黒二十六から戦争である。準備充實なら戦争もいい。

五子は井目などの様に、目立つて黒に優勢を現はせないものである。

従つて黒は大勢看取も出来難い、それで迷ひも生じつまらぬ所で戦争、それが敗路を辿る原因ともなるのである。

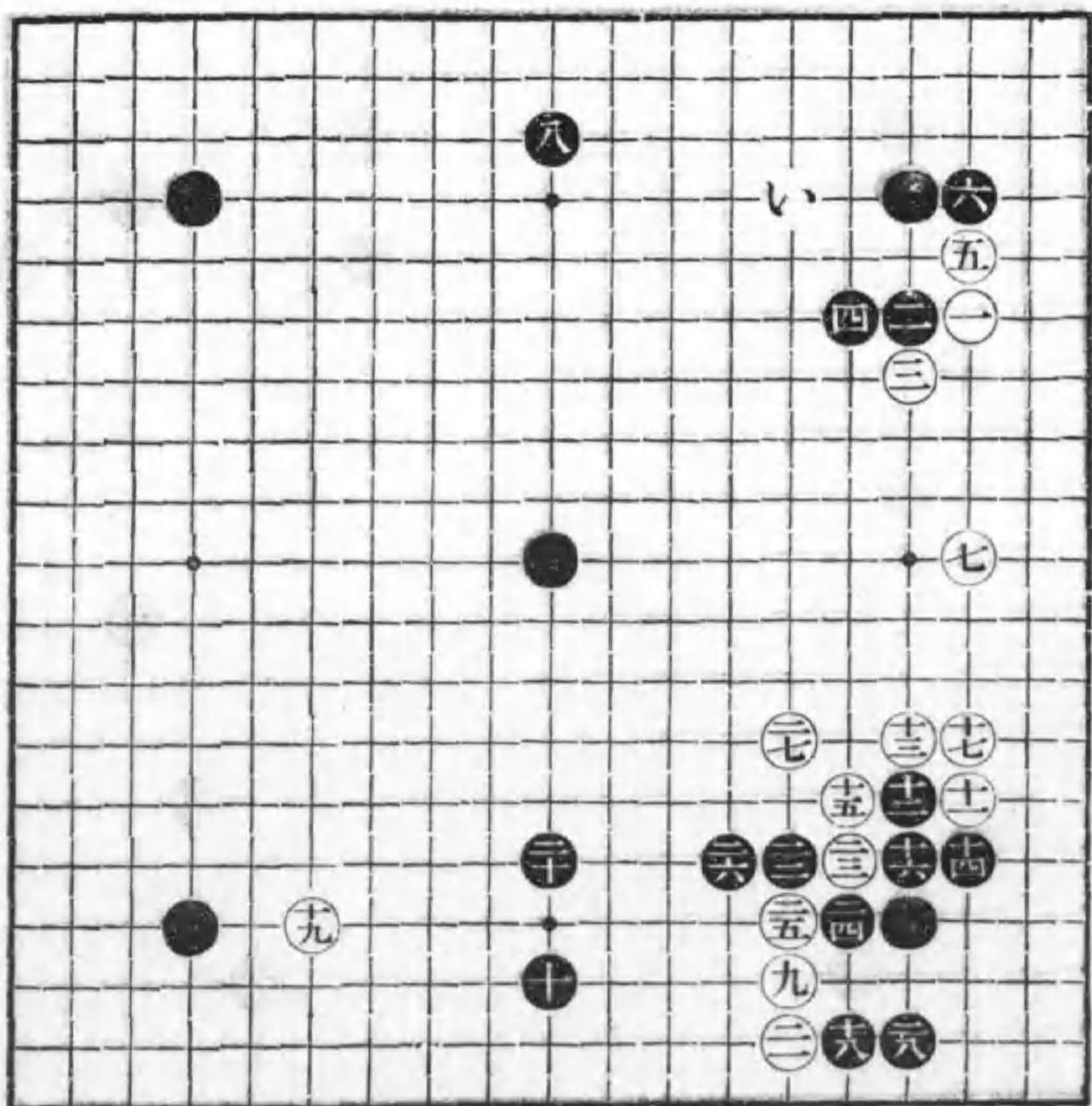
五子置いた勢子の勢力潜在は、二三の緩手で消失はない。されば黒は堅實の態度が容易に勝ちを失はない

布石



黒八を(い)は井目より六目などの實力のない時代で五目なら五目相當の實力具備、左様八でいいのである。白二十一は無理である。即ち以下黒二十八と成つて、白の三子は大困難。と見られ、黒二十二の良手を示した迄である。

黒二十二を二十八だと、白次に二十二。此れは白の注文通りの布石である。



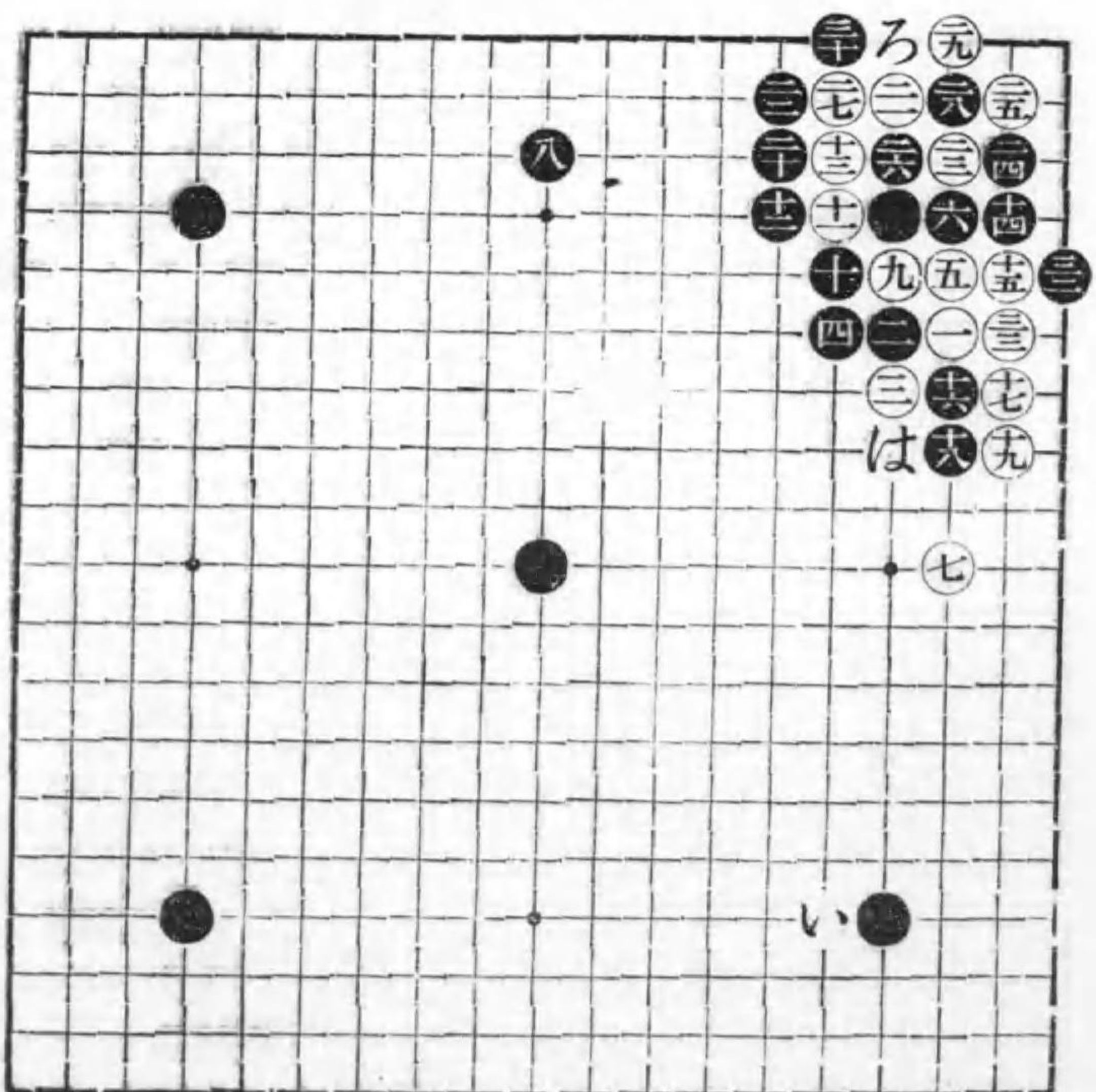
黒八で差支えないのは、若し白九なら以下黒三十、そして白——

二十三に劫取、黒三十二は劫立て——

今度は黒の手番、黒二十八に劫取。

と成つて白劫立て、假りに(い)でも黒(ろ)と白の四子打上げ。

(は)と白に取られる等は小事である。

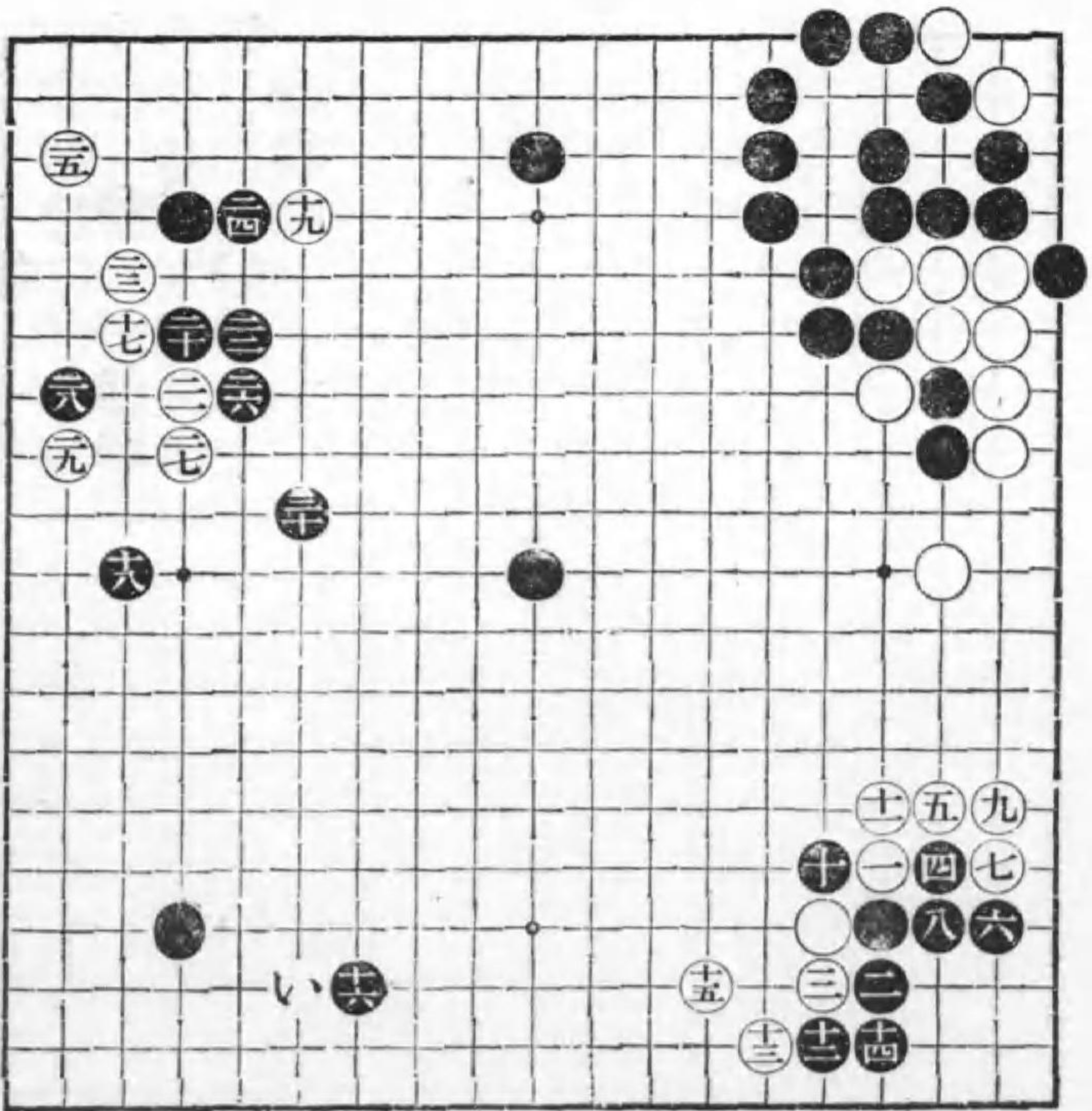


なほ前譜黒劫勝ち迄を本譜に示し、以下どう成るか
も好参考であらう。

今度は白の手番、右下隅
白一がそれである。

白一には黒二より白十五
まで位なもの。

黒十六は(い)と白を來させぬ
一手千金の大場である
即ち白(い)は十五の間が六
路、白大規模といふ次第。
黒三十で黒必勝の形勢。

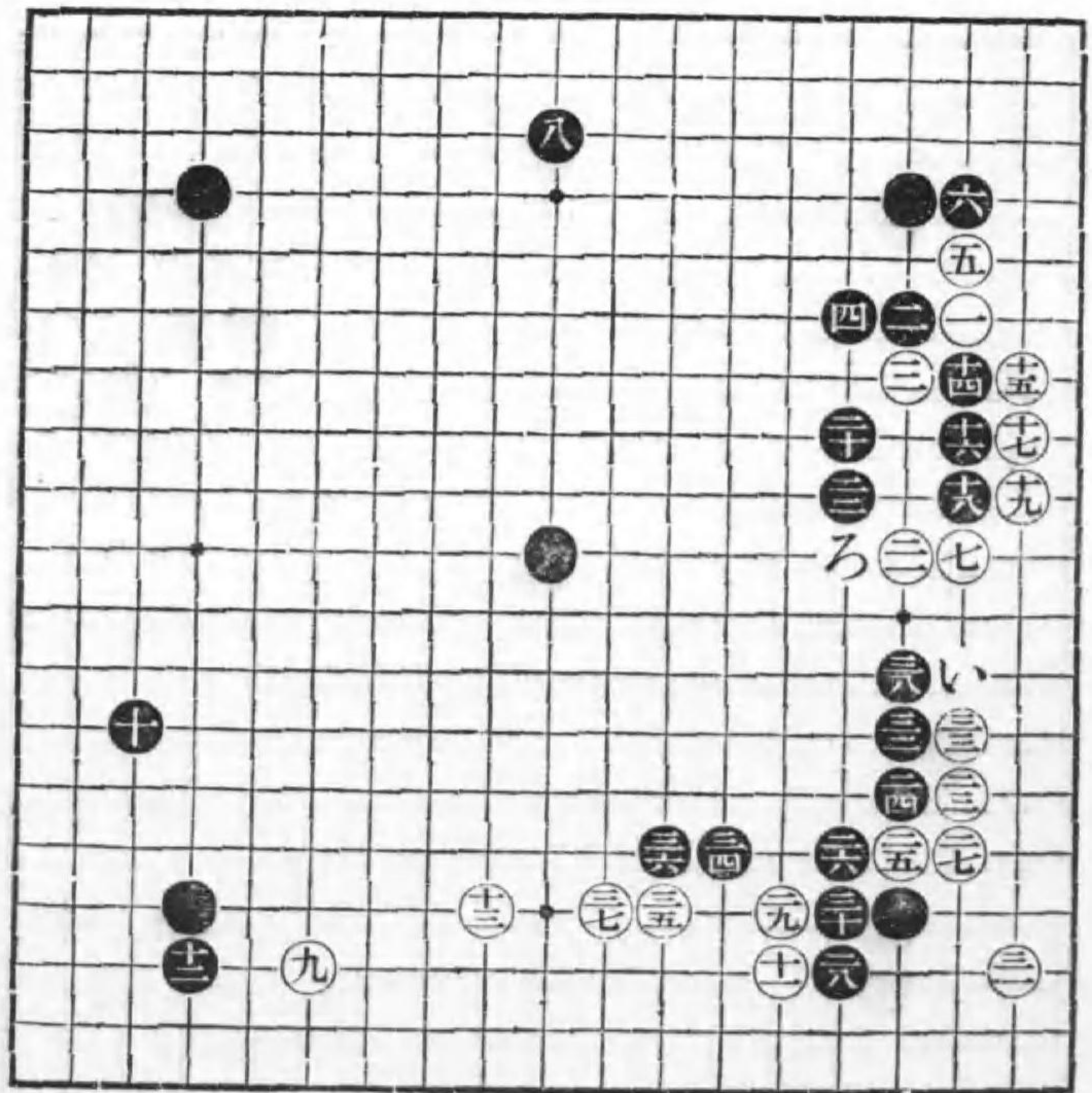


黒十四より二十二までは
白地を薄くし、黒は中央星
の一手が任つて、中央の方
に厚層である。

白十五を十六の方より黒
十四を取れぬは次圖に。

黒三十八まで成つて、次
に白(い)なら黒(ろ)で、中
央星の黒は明常の如くに輝
き。

白(い)までは白地全部で
四十目の劣勢である。

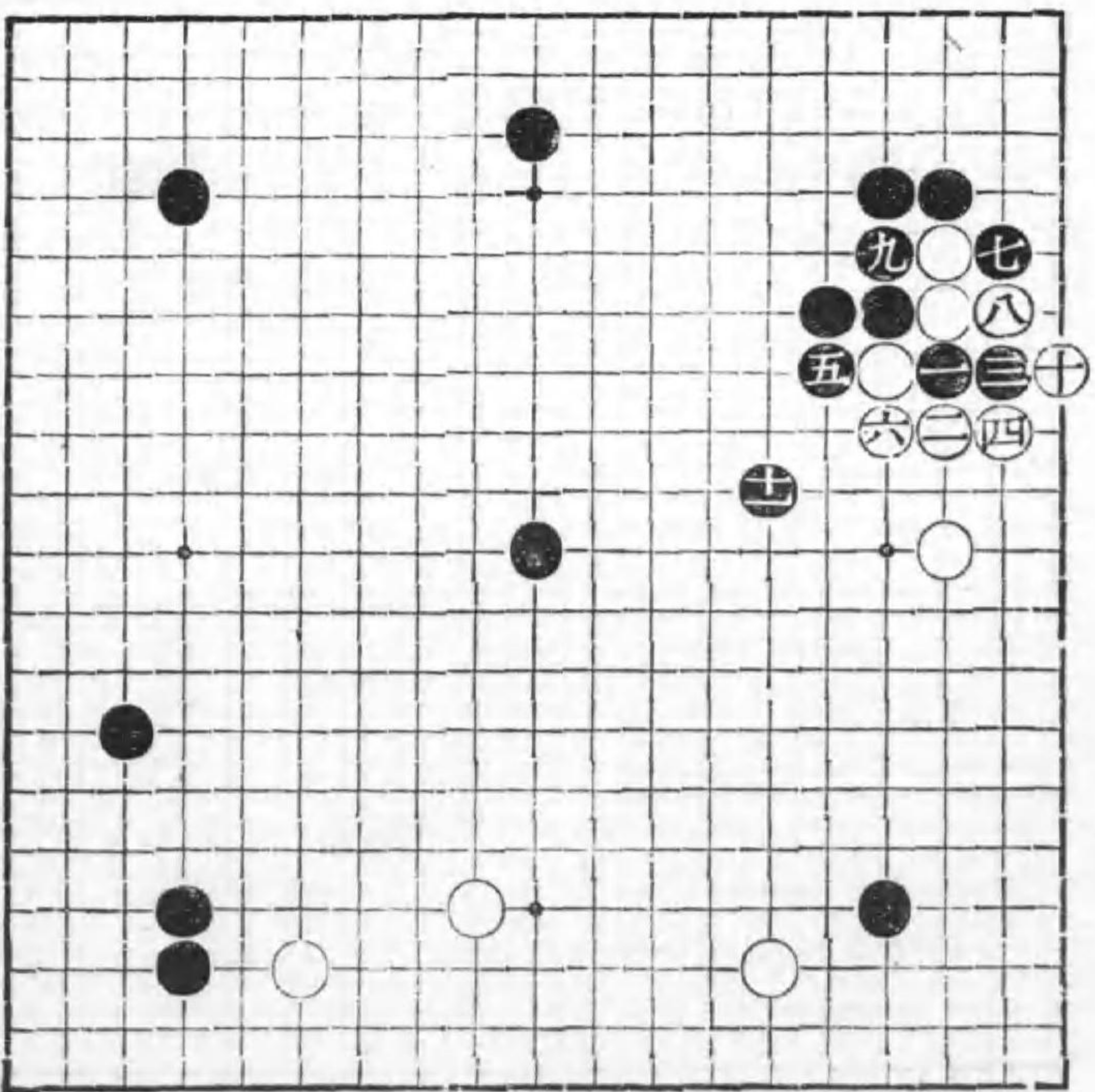


本圖は前譜黒十四を一とした参考である。

黒一に白二は以下白十まで成つて黒二子取つても、黒九で黒の周圍が強化。

白十までも強化だが、規模が違つて白悪いのであると解る筈。

それに黒十一、此黒一手が中央へも黒模様擴大に加えて右下隅黒一子にも聲援である。

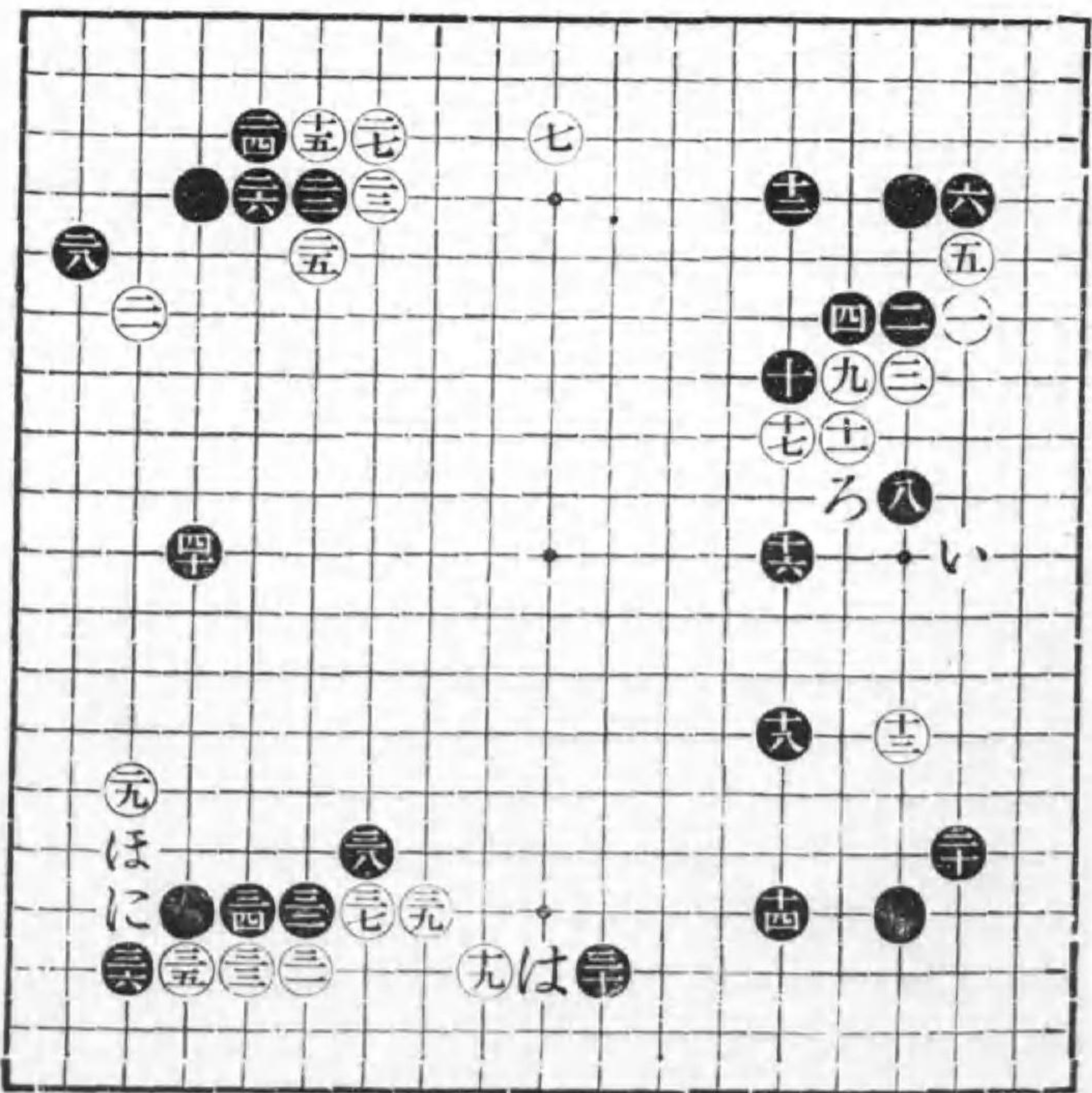


白七を(い)だと黒次に七の所、では上邊が黒好形勢と白七は其調節である。が以下黒十二で此方に白面白くない。

白十五を(ろ)なら、黒次に(は)で八の一子は捨。即ち八は黒十二と成つて、最早使命を果し、捨石の意味もある。

白(に)は黒(ほ)で三十六も捨石。

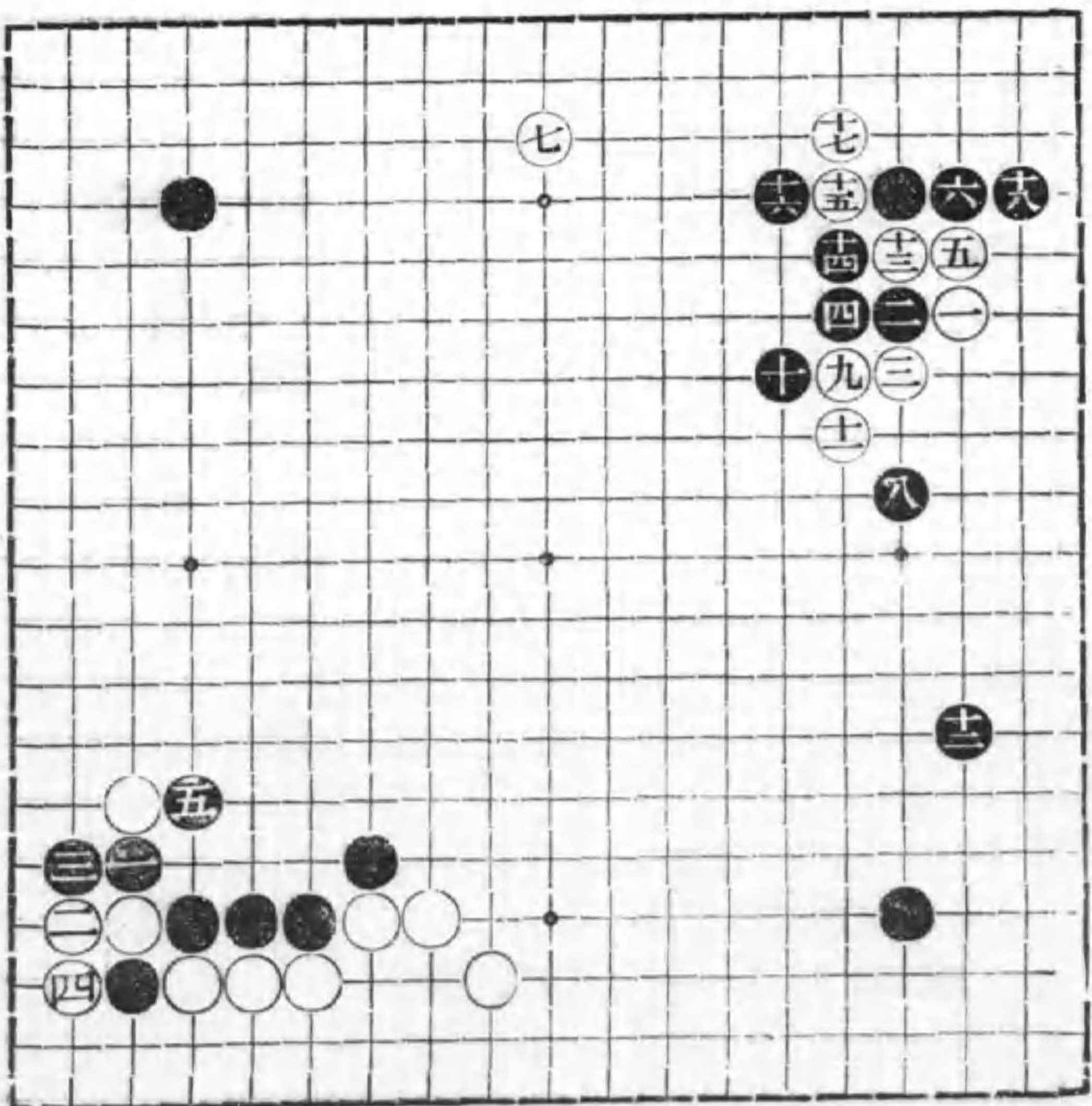
布石



前譜黒十二は本譜十六の
所。それを本譜十二でも黒
可。といふのは——
白十三と出、以下黒十八
まで。

が白悪いからである。要
するに配石も一定ではない
其意味を言ふのである。

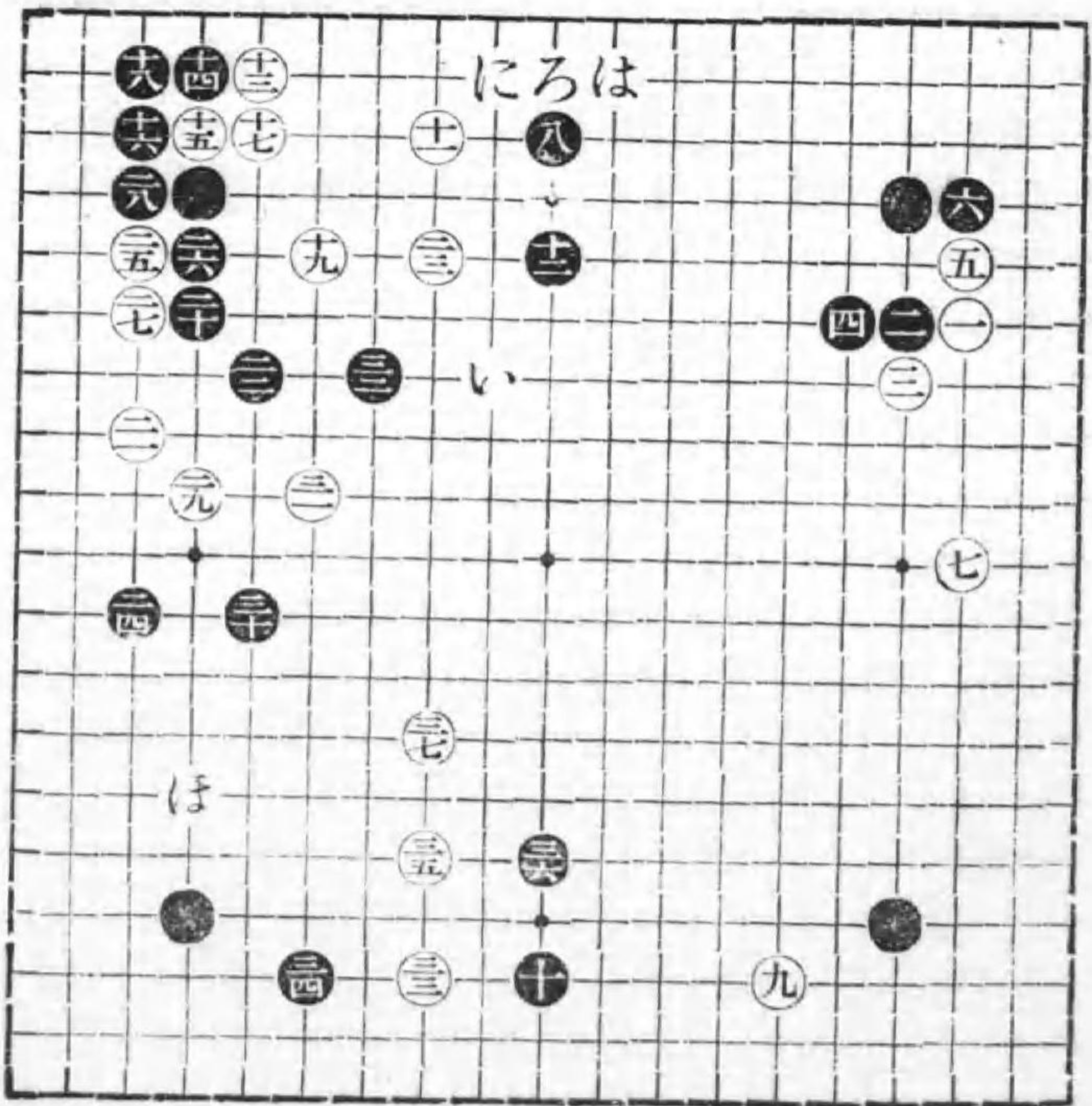
左下隅黒一より五まで、
が黒好果。此れも前譜の参
考圖である。



如何に白の立場が戦争本
位といつて、無理では佳観
でない破局も招き、第一高
尙でもない。

先づ本譜などのやう白三
十七までも、白は容易に敗
けない布石である。

黒次に(い)は、白(ろ)黒
(は)白(に)で白は取られぬ
また白(ほ)等も白にあつ
て、局面は廣い。

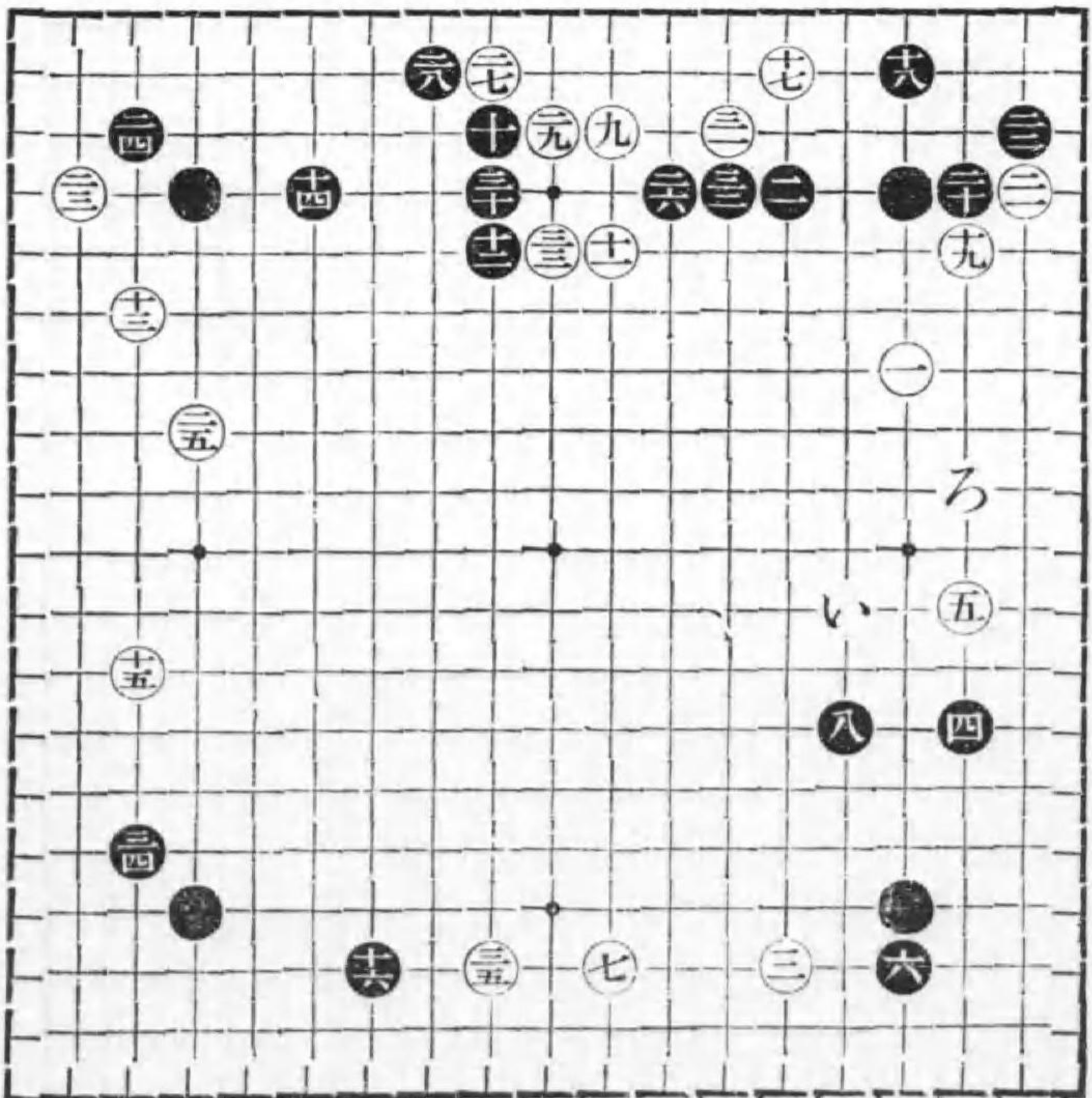


本譜も最後の白三十五で
白の布石は堅實である。
無論黒地に白地は劣勢で
ある。

が終局までには多少の戦
ひもあつて其巧拙。

また侵分の巧拙、等で勝
敗を微細に争ふ本格の態度
である。

また白三十五で(い)に飛
びも本格の態度、即ち(ろ)
の打込まれを補ふもの。



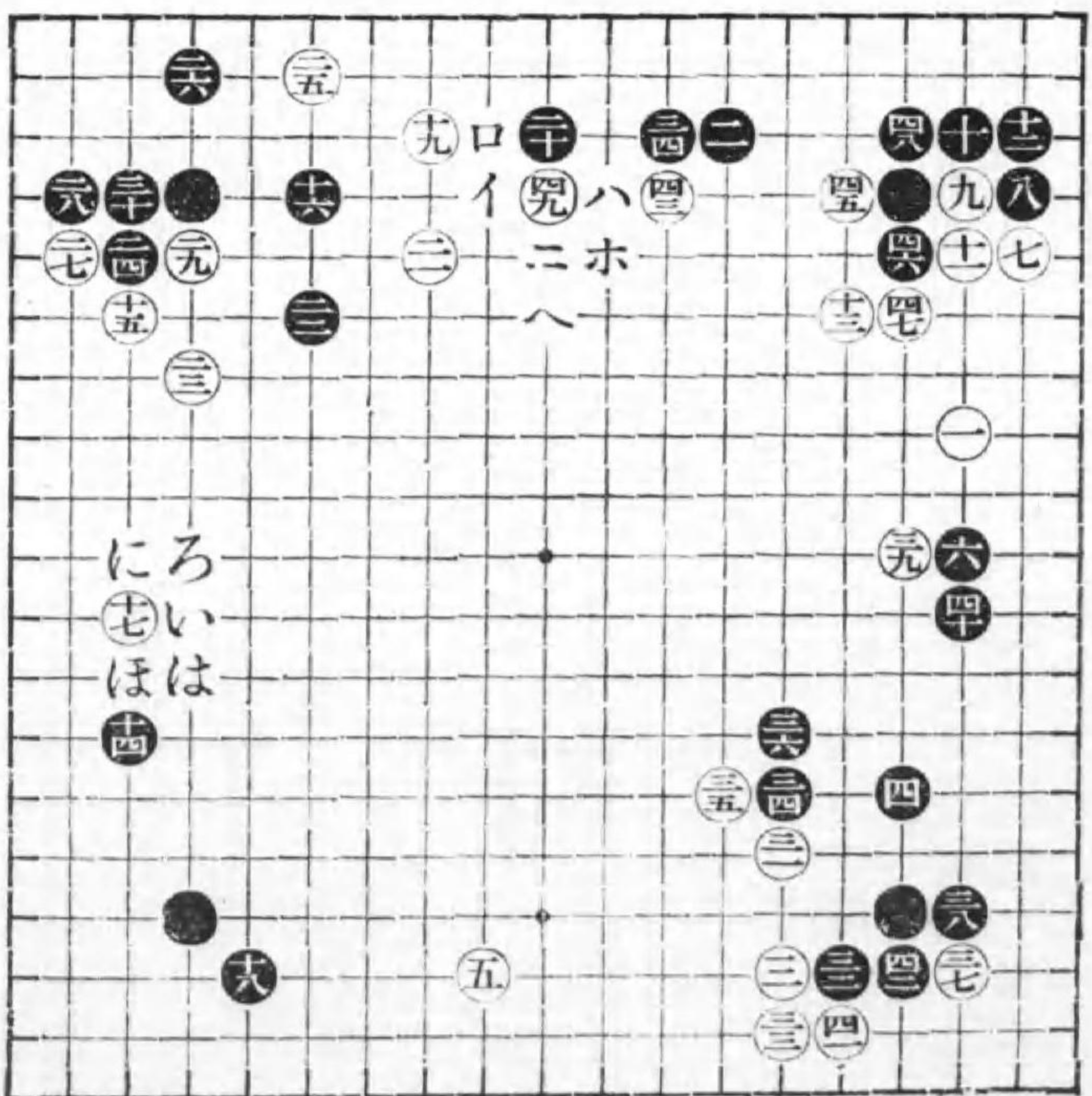
白四十九までも徐々進行
の布石である。

白四十九の次に黒(い)白
(ろ)黒(は)。と此れが黒可
である。

白(ろ)を(に)に引きなら
黒(は)。と其黒突當りが黒
堅實である。

四十九の方、黒(イ)なら
白(ロ)黒(ハ)――

次いで、白(ニ)黒(ホ)白
(ヘ)。で白可である。



三子は右下隅が明いて相先の手段が必要、今までとは別天地である。學校なら大學へ。といふところである。が程度を低く説けば小學生でも覺えられるもの。

黒二は二とは限らないが必ず其方面へ行くものと心得られよ。即ち黒(い)と假りに其點なら、白(ろ)と替つて一手で白地、黒損だからである。黒二と行く時惧れ等、抱いてはいけな

見られよ白三に黒八と成つて、それで黒二は安定。と認識できやう。

黒二十四より三十四までは、二十の方と併觀し一寸堅實すぎ。だが確實黒地三十目位、黒悪くない布石である。

なほ黒(は)と黒地擴大待望もあつて。

白三十五を三十八なら、黒三十五の所。と黒替つて悪くは無い。

黒四十は次に白(に)なら黒(ほ)。また白(に)を(ほ)なら黒(へ)と黒危険でない姿勢である。

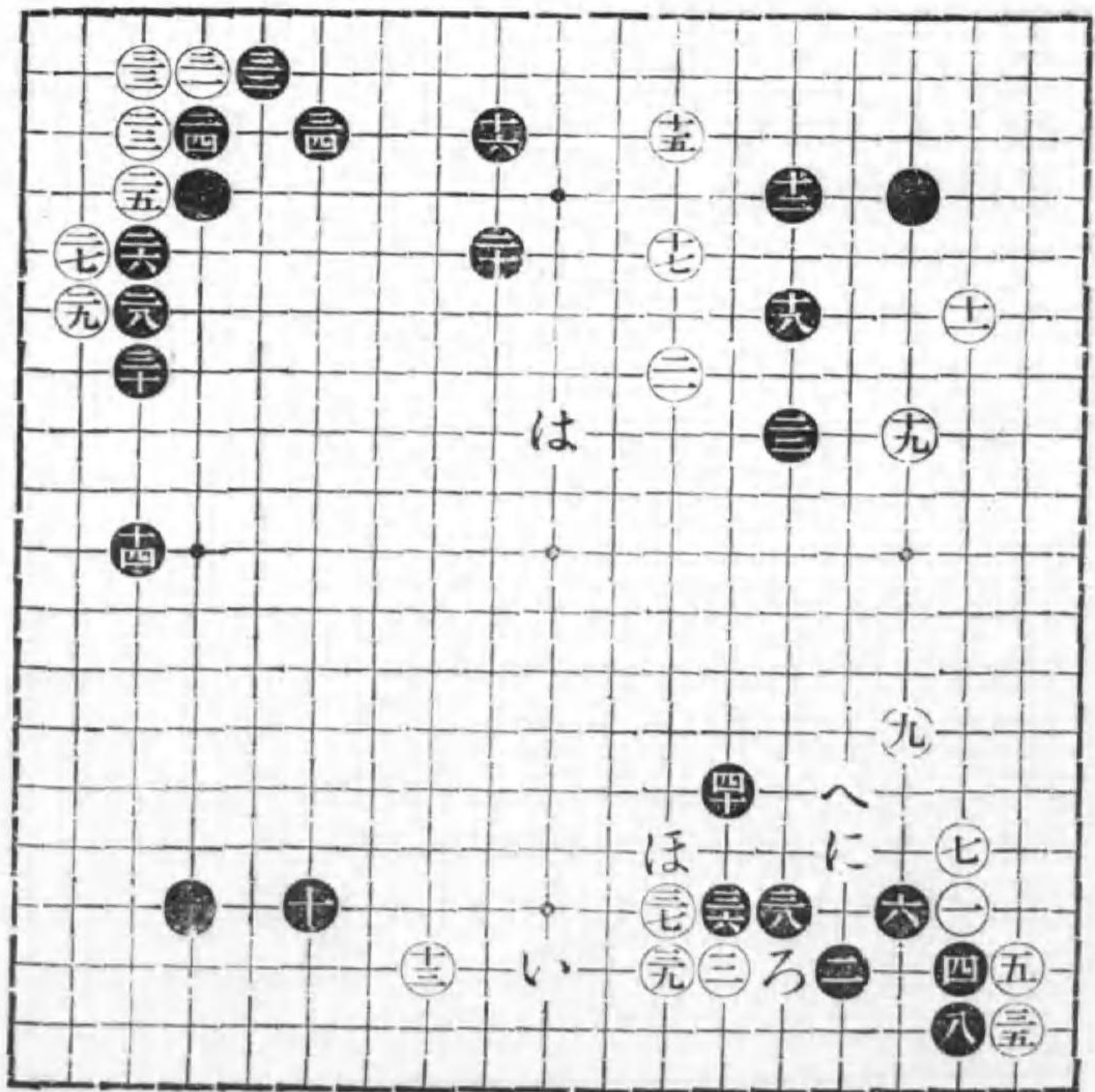
白七を八なら黒七と心得られよ。

黒十で三十五も立派な一手。二子または先の碁では黒大勢に――

後れの觀だが三子なら黒悪くない布石である。

黒二十八で二十九の二段跳ねも可である。

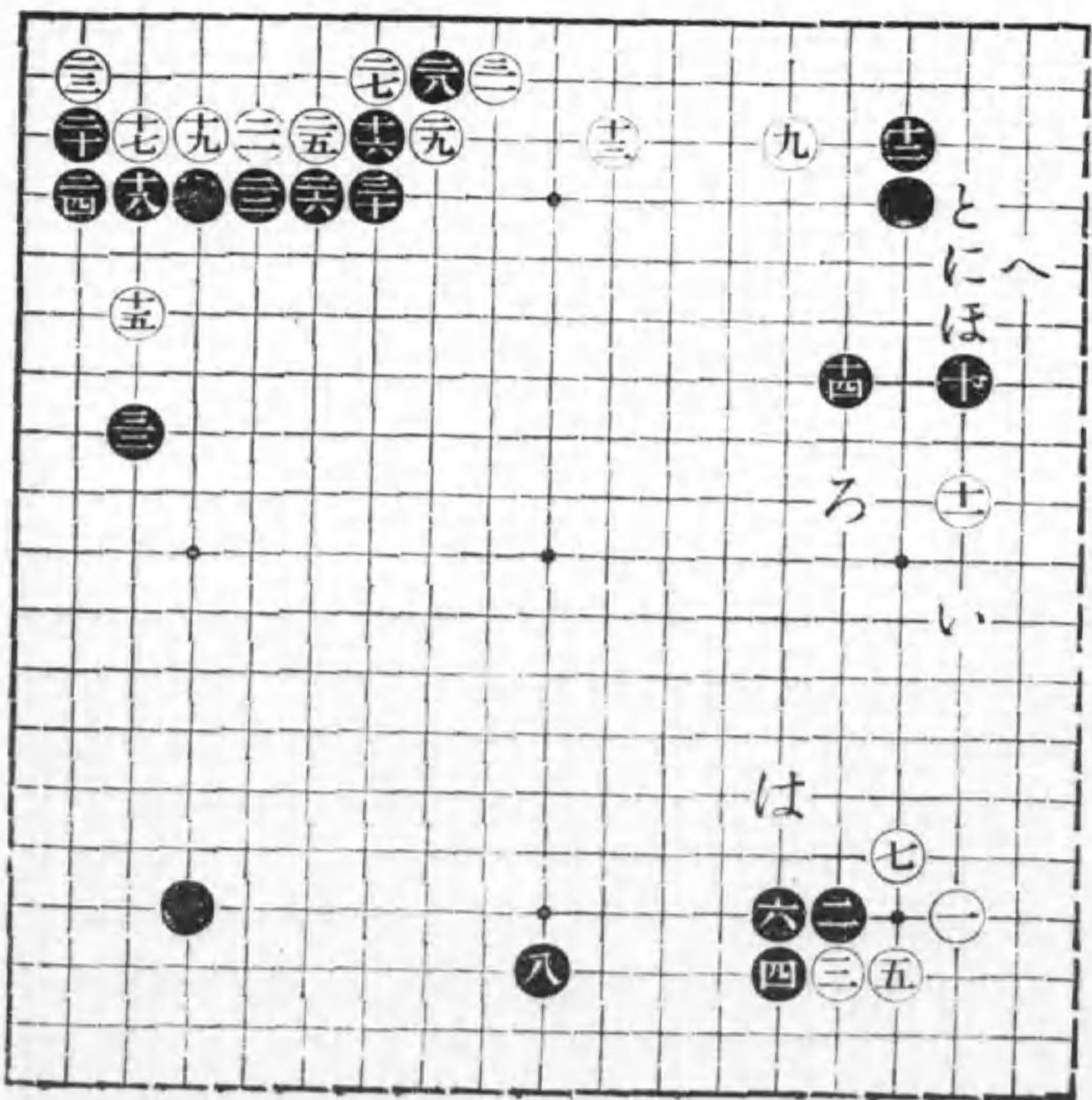
其以下は前にも出て參考圖の要もあるまい。



黒十四は第一白己の配備
また次に(い)と打込みも含
み。

それで白十五を(ろ)なら
黒(は)と替つて、八の方が
厚層、黒不利ではない。と
知られよ。

黒十四の方、白(に)には
黒(ほ)。白手になしな所
次に白(へ)は——
黒(と)で。と知られよ。



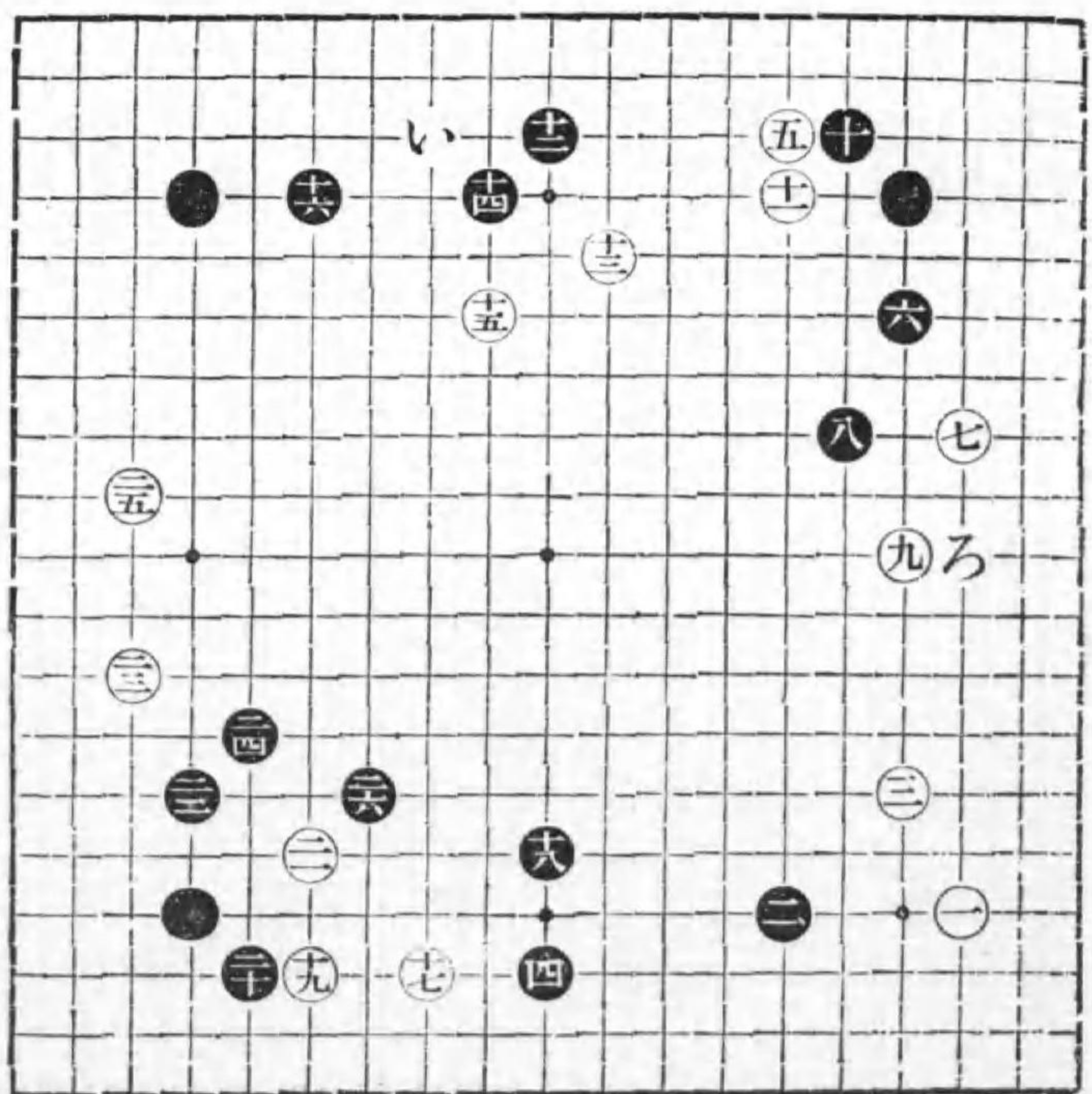
黒二も白三と白に應じさ
せ、黒四で二に伴ふ布石で
ある。

白七を(い)なら黒(ろ)。
それが黒六の氣合である。

白(い)の時、黒(ろ)を考え
ゐて——

それを黒は調子が悪いと
云はれるのである。

黒二十六は其白三子を活
かし外部を厚くする意味で
ある。



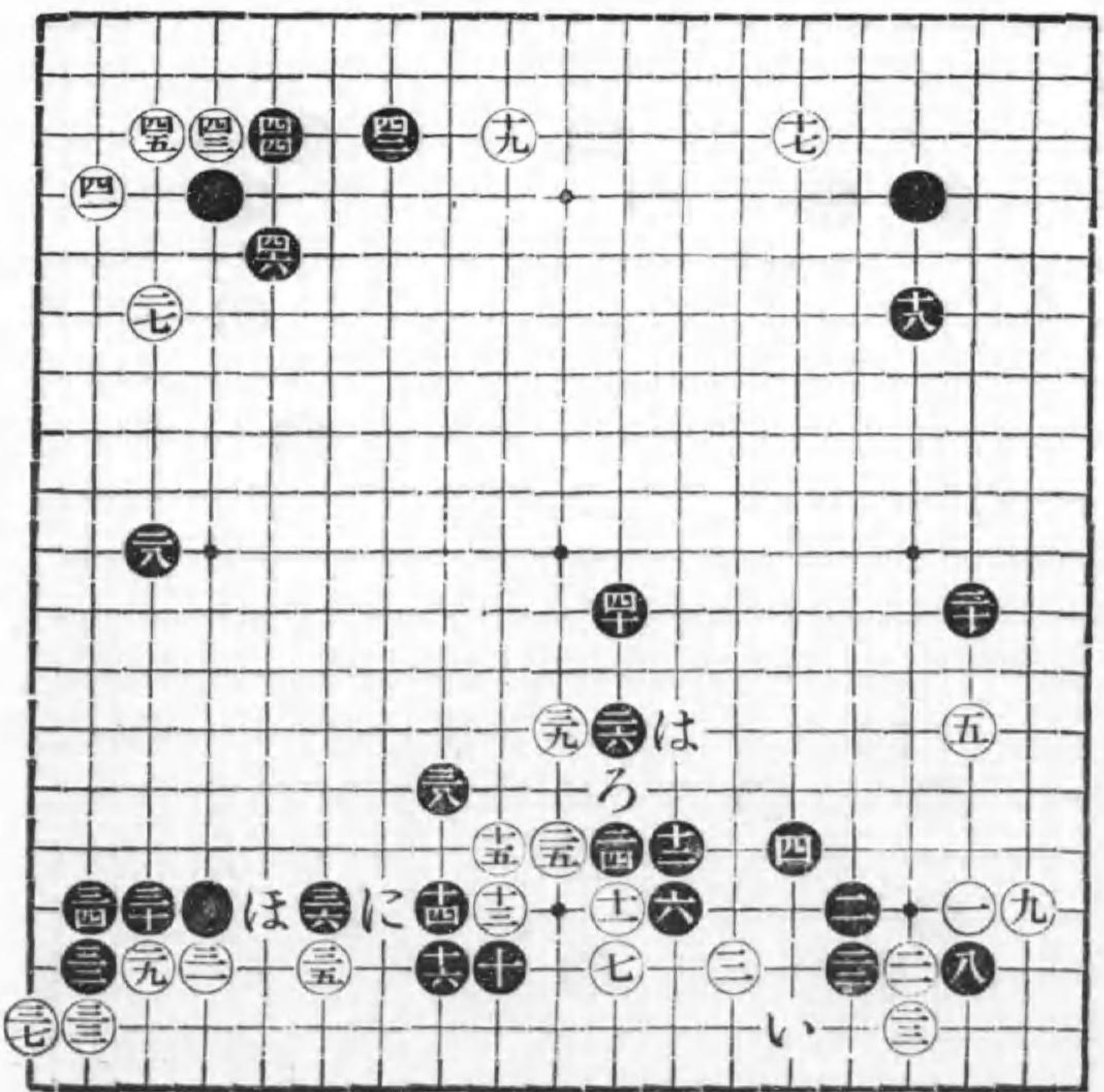
黒四十六までは先づ双方
順調の布石である。

黒四十は白(い)と白を其
方へ退却させる意味である
黒四十は――

輕快な飛び、即ち白(ろ)
なら黒(は)と見るからであ
る。

戻つて黒三十八の方、白
より(に)は黒(ほ)。

それが黒三十六の防禦線
である。

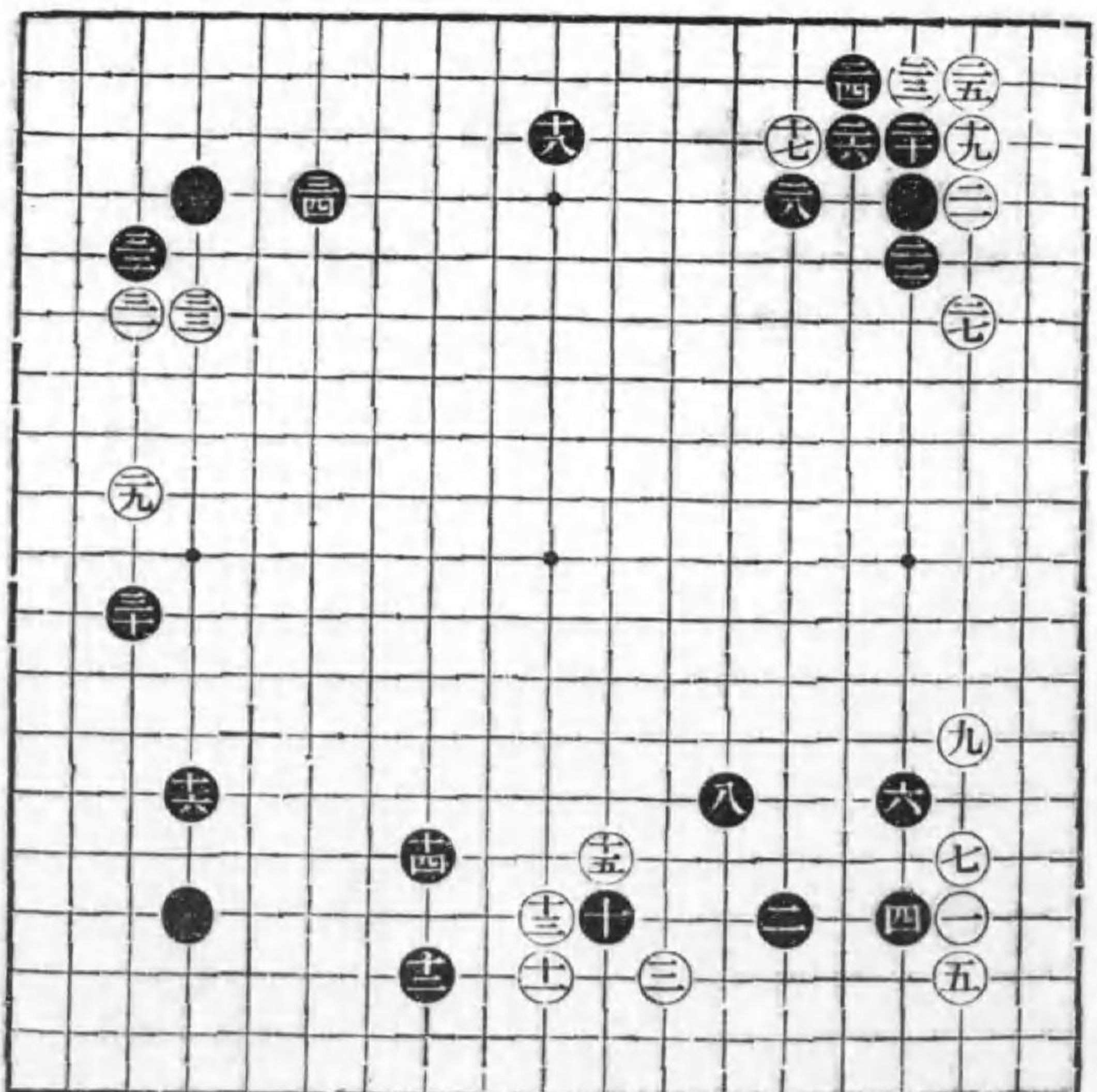


本譜も双方無事の布石で
ある。が右邊上下の白地は
細い、それに――

反して上邊より左下隅ま
で、また左下隅全體の黒模
様は、地屑豊富。と見られ
やう。

此れは黒三子効顯ではあ
るが。

黒八以下四子の方は、白
に容易に攻められない、姿
勢である。



黒十六を(い)は白(ろ)で
黒が悪い。

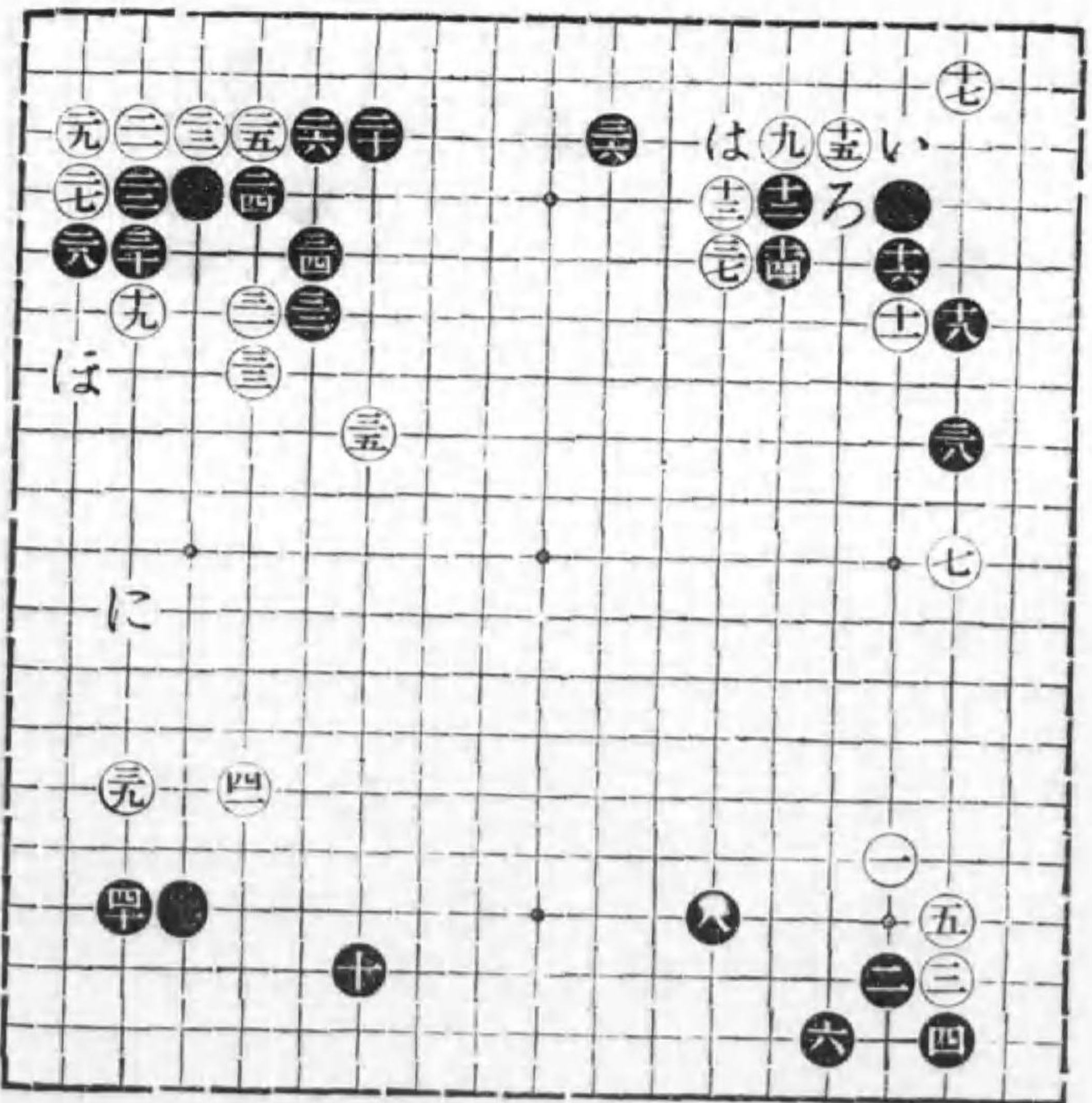
黒三十二を手抜も、白三
十四で黒が悪い。

白三十七は(は)と黒に切
られて白悪いからである。

白四十一を(に)だと、黒
(ほ)と、黒に飛込みもあつ

て、其處は俗に裾明きとい
つて

白地といへない。等で白
四十一。



前譜四十一より續行、黒
一がそれである。

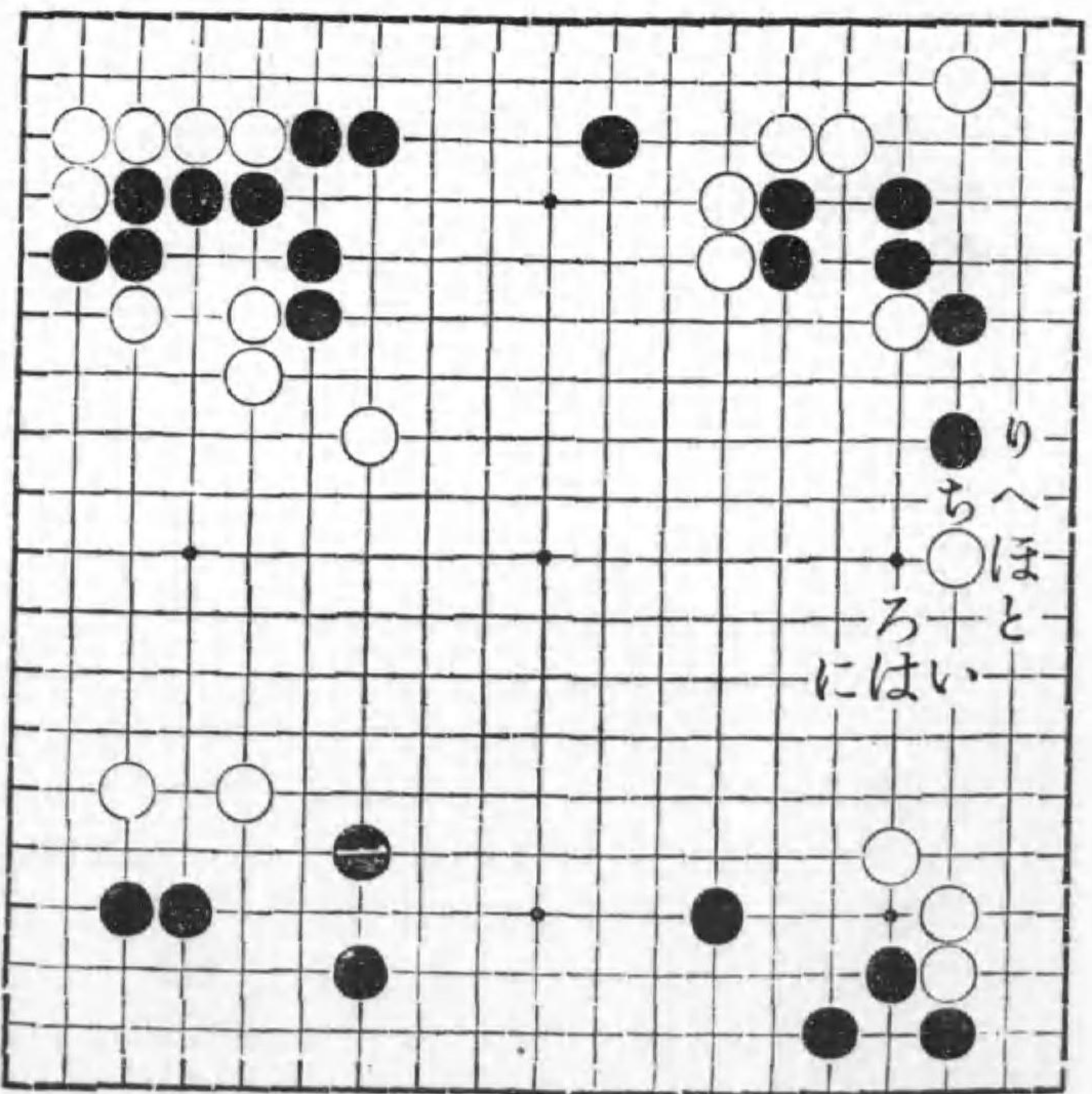
黒一は下邊一帯、黒地の
配石である。

が黒一で(い)と打込み、
黒より開戦も可である。

次に白(ろ)黒(は)、そし
て白(に)なら、黒(ほ)。黒

(ほ)に——
白(へ)黒(と)白(ち)なら

黒(り)。で黒悪果は招かな
す。

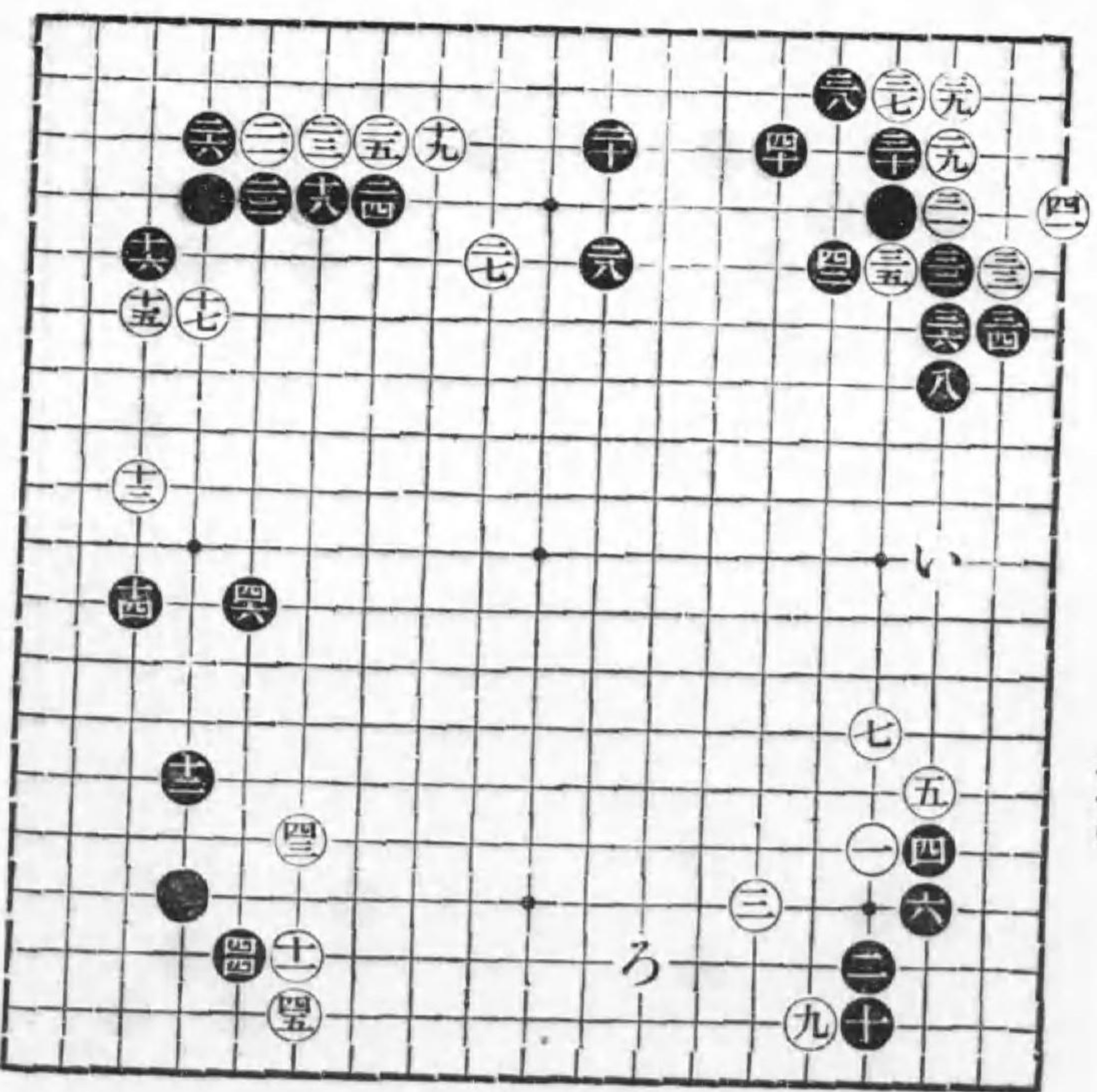


黒四十二で(い)も悪くはない。

が四十二は其一手で黒は厚層無比、地量も三十目近い。と見られやう。

また黒四十六は下邊の白大規模には驚き慌てない、堅實の布石である。

即ち白十七以下、また白二十七以下、の白を攻撃配備、無論自己の方にも備へまた一方(ろ)と打込み。



1170

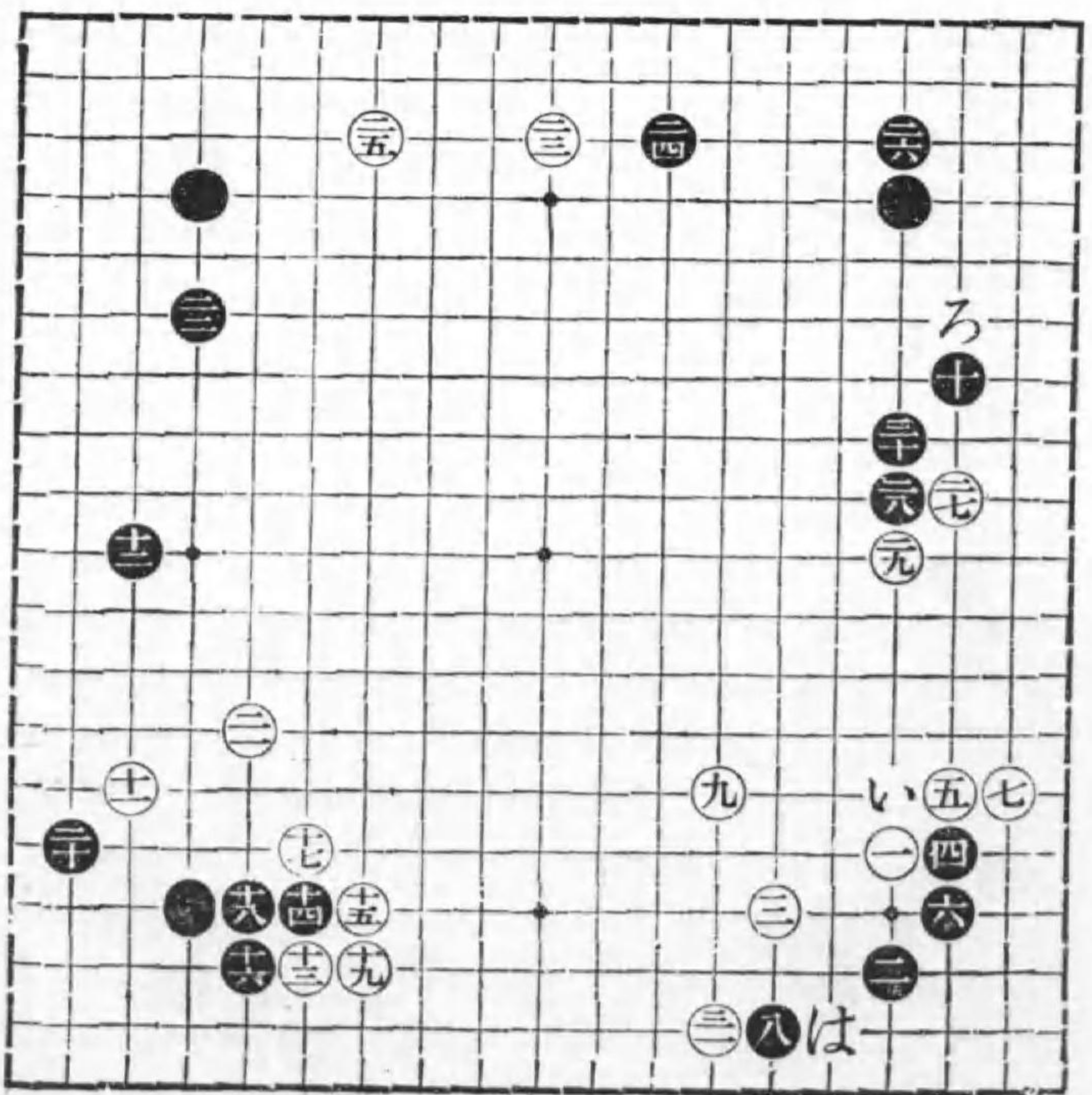
黒八は次に(い)と切りの準備である。

それで白九、白九は中央攻略の第一歩である。

黒十は前譜八にも見られる白(ろ)と白を來させぬ、絶好の布石である。

白二十三はその點黒に與えぬ調節の布石。

白三十一に黒は何と應接。黒(は)なら問題は無い。



1171

布石

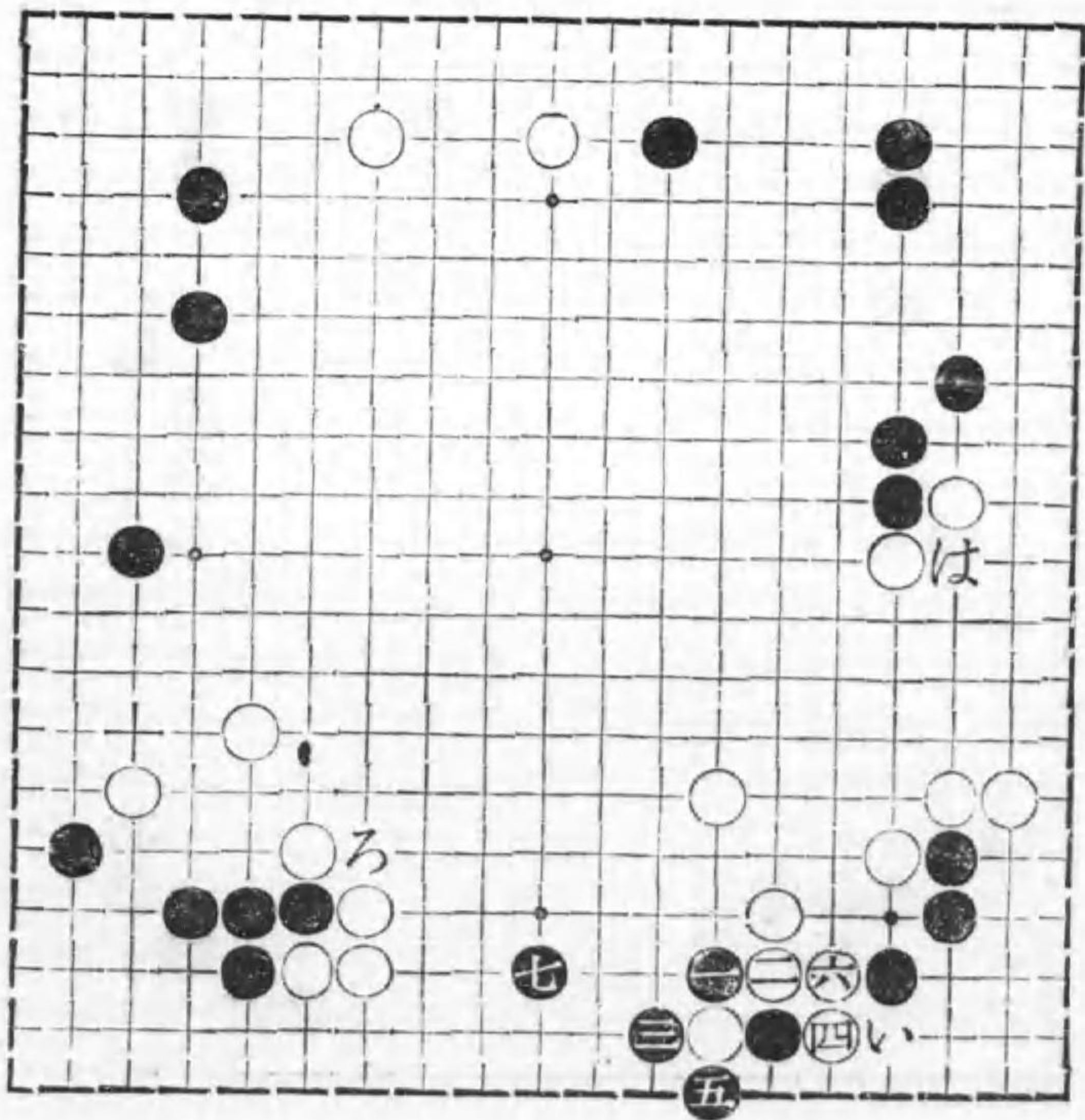
前譜白三十一は本譜黒一
の下の白丸。

黒一を四なら、白一と替
つて白地は雄大。

それで黒一より七まで、
黒より變化である。

次に白(い)で其隅取切り
なら、黒(ろ)と切つても、
また――

黒(は)でも黒損ではない
白(い)を(は)は、黒(い)
で黒活。

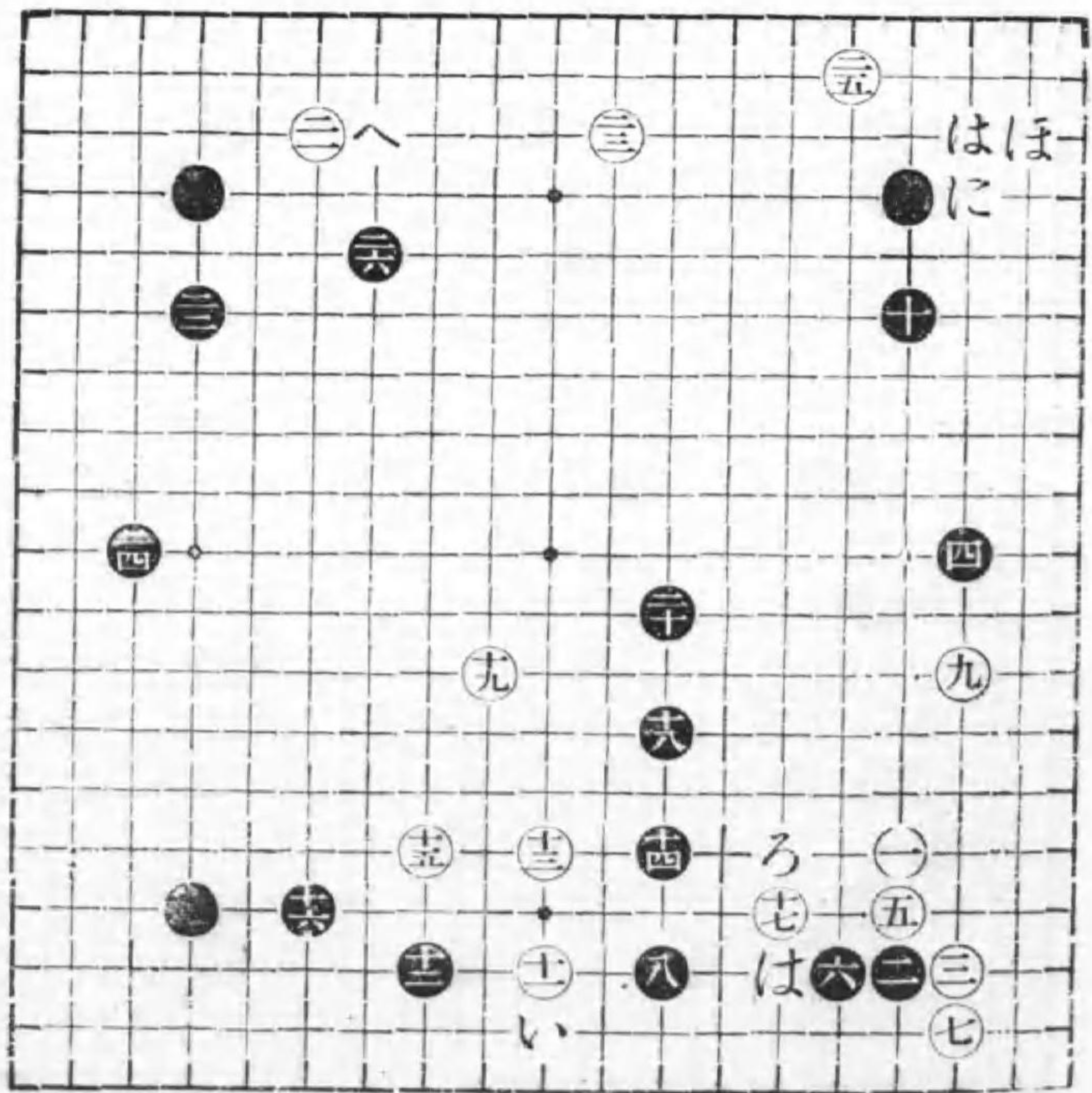


黒四より八までの黒布石
もいのである。

黒十二は(い)と渡りを含
む配置である。

白十七は黒(ろ)と黒に活
形を與えぬ、十四以下奪取
の方略である。

黒十八は(は)と白に黒二
子取られて仕舞ふ。と認識
できやう。また黒二十六は
白(は)黒(に)白(は)なら
黒(へ)。



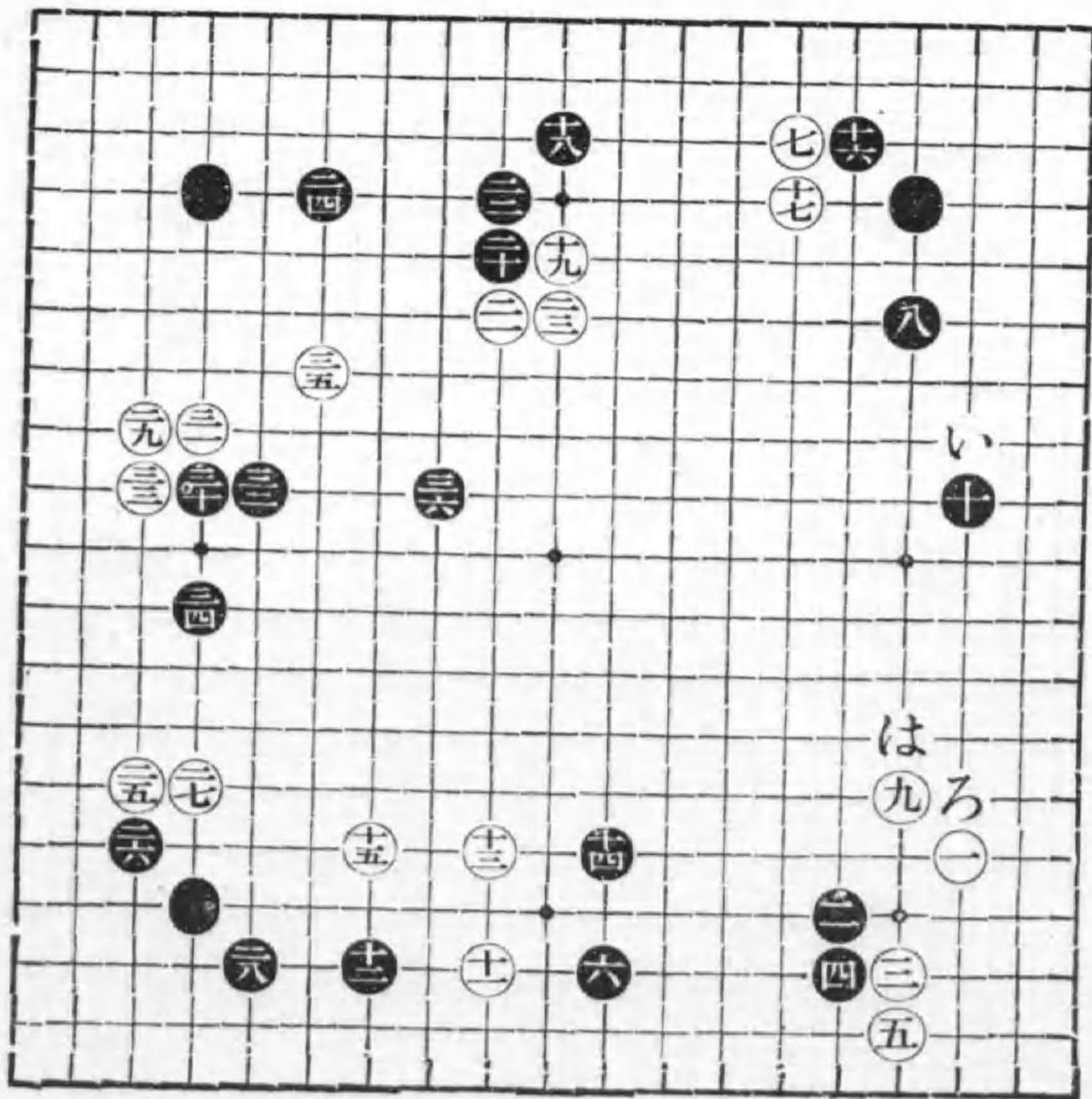
黒二より六までは下邊地
取りの布石である。

白九は次に(い)それで黒
十。

白九を(い)だと、黒九。
では結果右側の白地が細く
黒に中央厚層を與え。

即ち白(ろ)黒(は)と成る
其將來の結果である。

黒三十より三十六までは
白に取られまい。と鑑識で
きる筈。



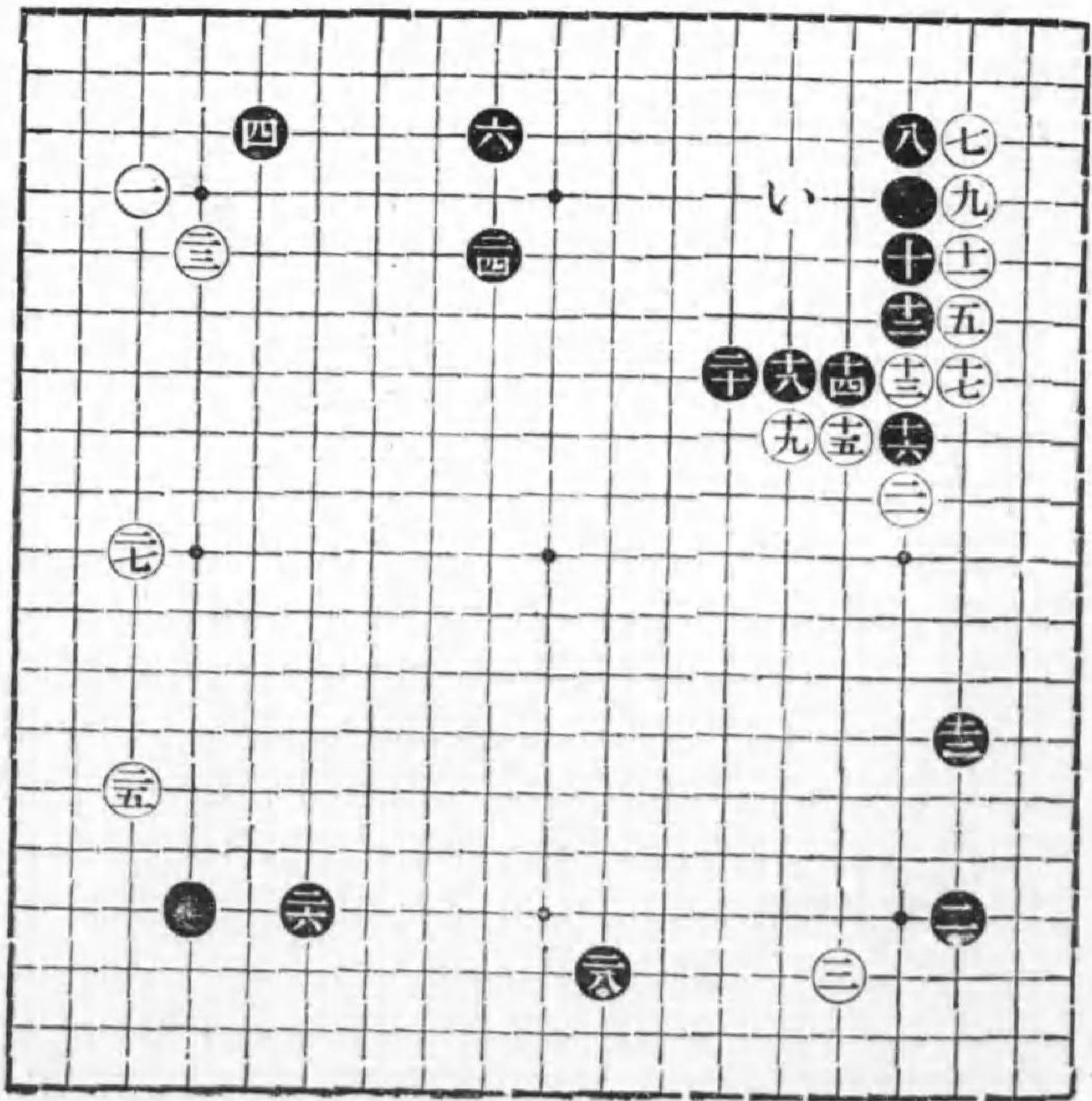
二七四

二子は相先の一重ちがひ
で、三子とは此れも別天地
の感。黒は二三の緩手で形
勢不明である。

白五は黒(い)と黒に受さ
せ、そして白六と調節の布
石である。

其白の注文裏ざるものが
黒六である。

黒十は白を其處へ來させ
ぬ必要の手所。黒二十八と
成つて無事の進行である。



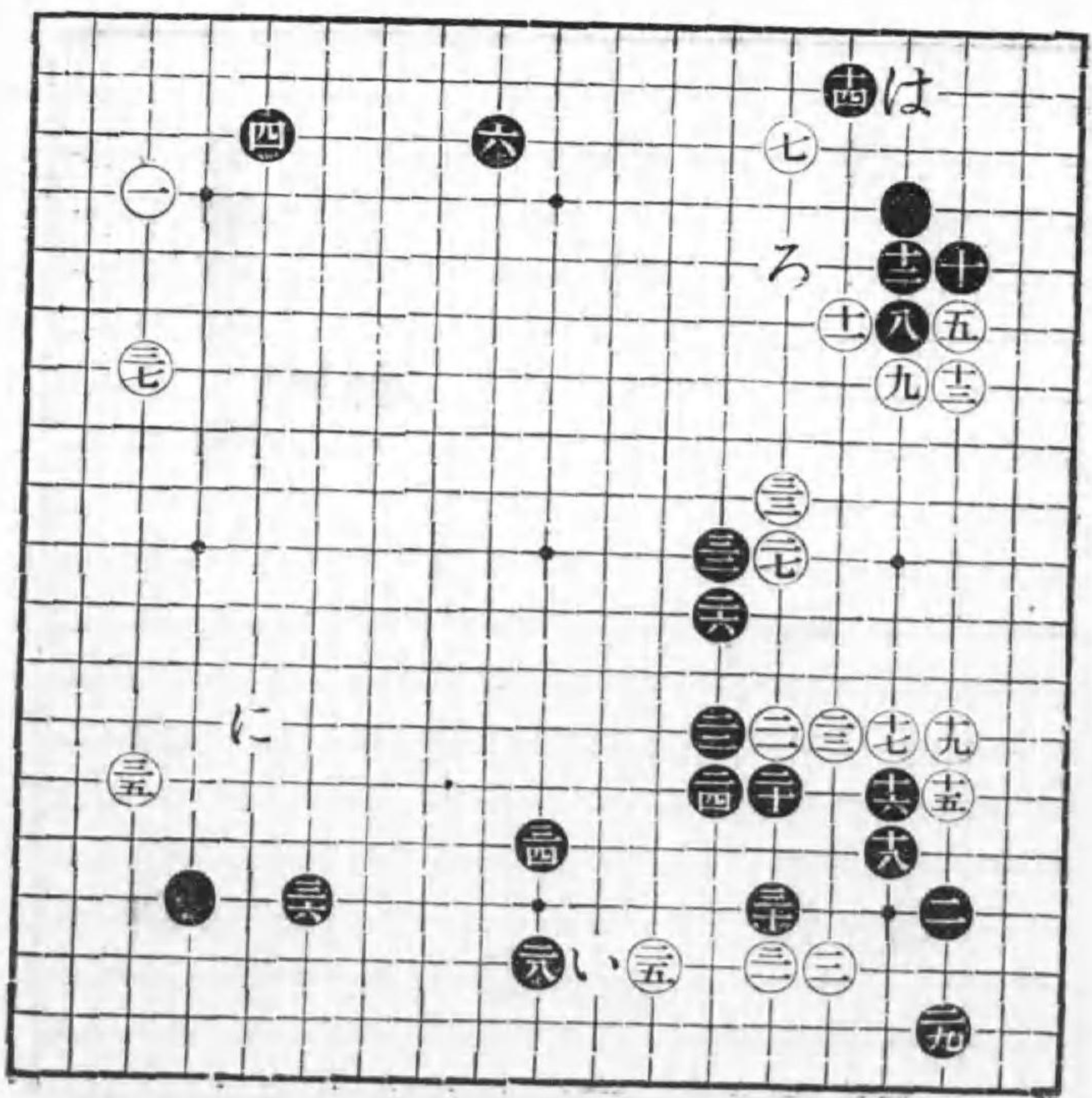
二七五

白三だから黒四の悪い道理はない。

が黒四を、十八の所、また(い)等も、黒悪い布石ではない。

黒十四も機會を見黒(ろ)といふ含みで(は)と白を侵入させぬ配置である。

黒二十六は右側に白地を與え、中央攻略の第一歩である。されば白三十七の次ぎ黒(に)。



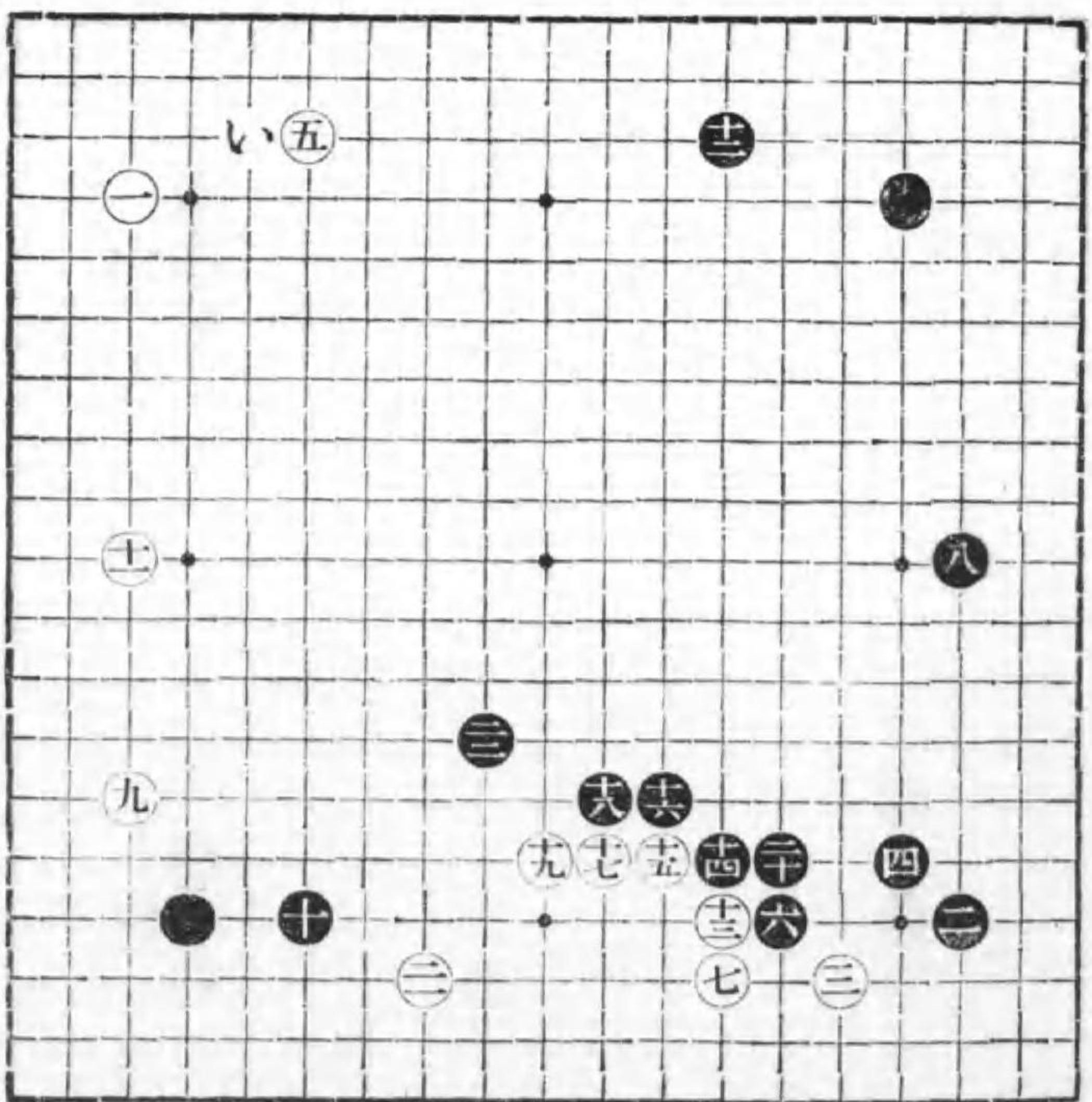
白五を八なら黒(い)で

黒悪くはない。

が白五も一手で築城、白悪くはない布石である。即ち以下黒八まで成つて

即ち白十一と成つて黒八の方と對等にも見られるからである。

黒二十二は中央にもいいまた黒十の方へも聲援である。黒二十二の次から白は戦争である。



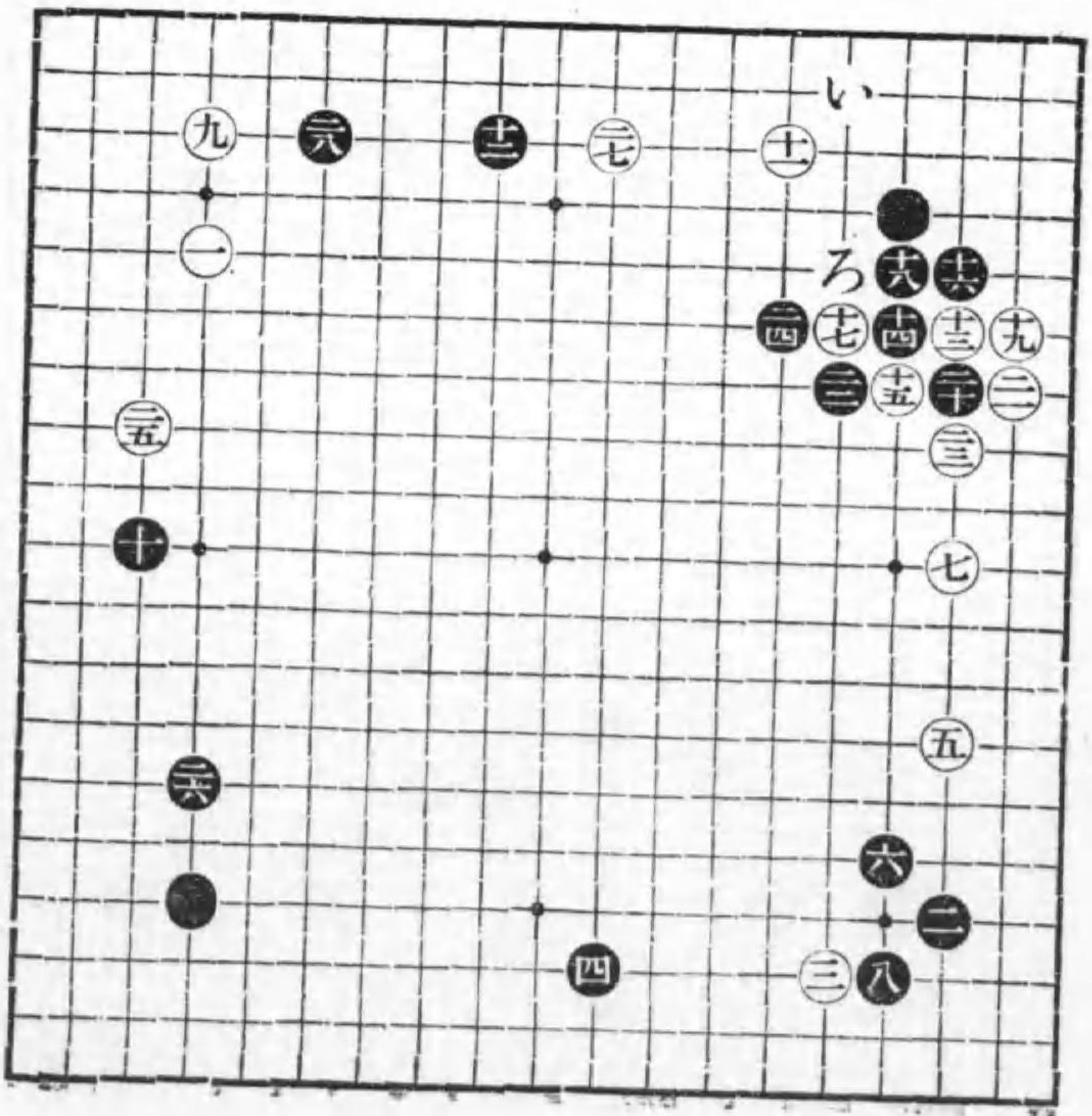
白一と白高目に構えても
黒二と黒は平靜を保ち、二
を六など、黒二子の態度で
はない。

白十九を二十は黒(い)。
とそれは度々示したものを。

斯う白十九には以下黒二
十を捨石にし、二十四まで
が黒可である。

黒二十八までも双方本格
の布石である。

白何時(ろ)でも――

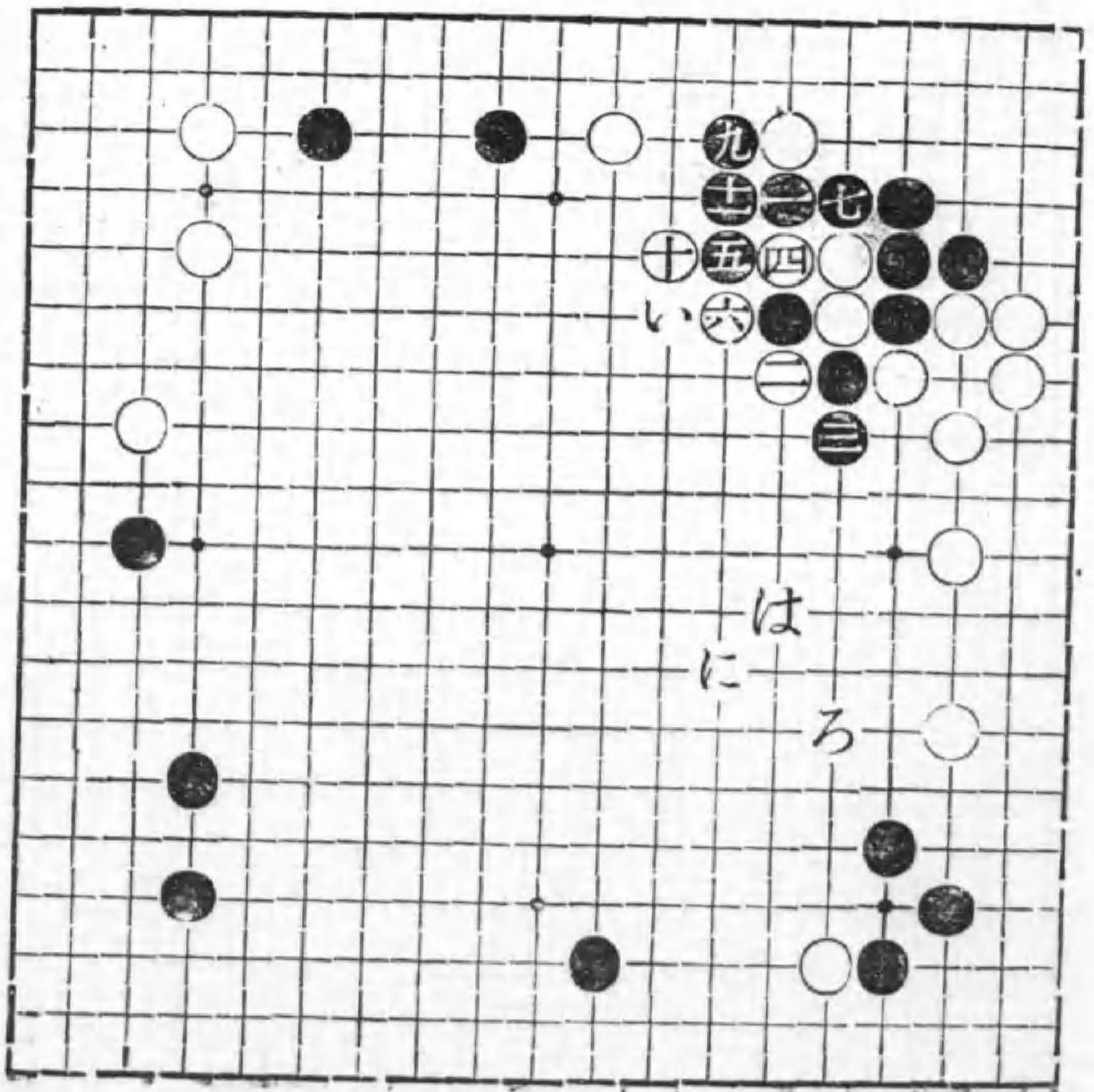


前譜白(ろ)に本譜黒一が
ろ。

即ち白二より六まで、そ
して黒七に白八は四の下を
粘ぎ、に黒九より十一まで
と、前譜白十一の一子抱込
み、なほ黒次に――

(い)。で白(い)なら、黒
(ろ)。

黒(ろ)に白(は)なら、黒
(に)。と黒三以下二子は不
用である。

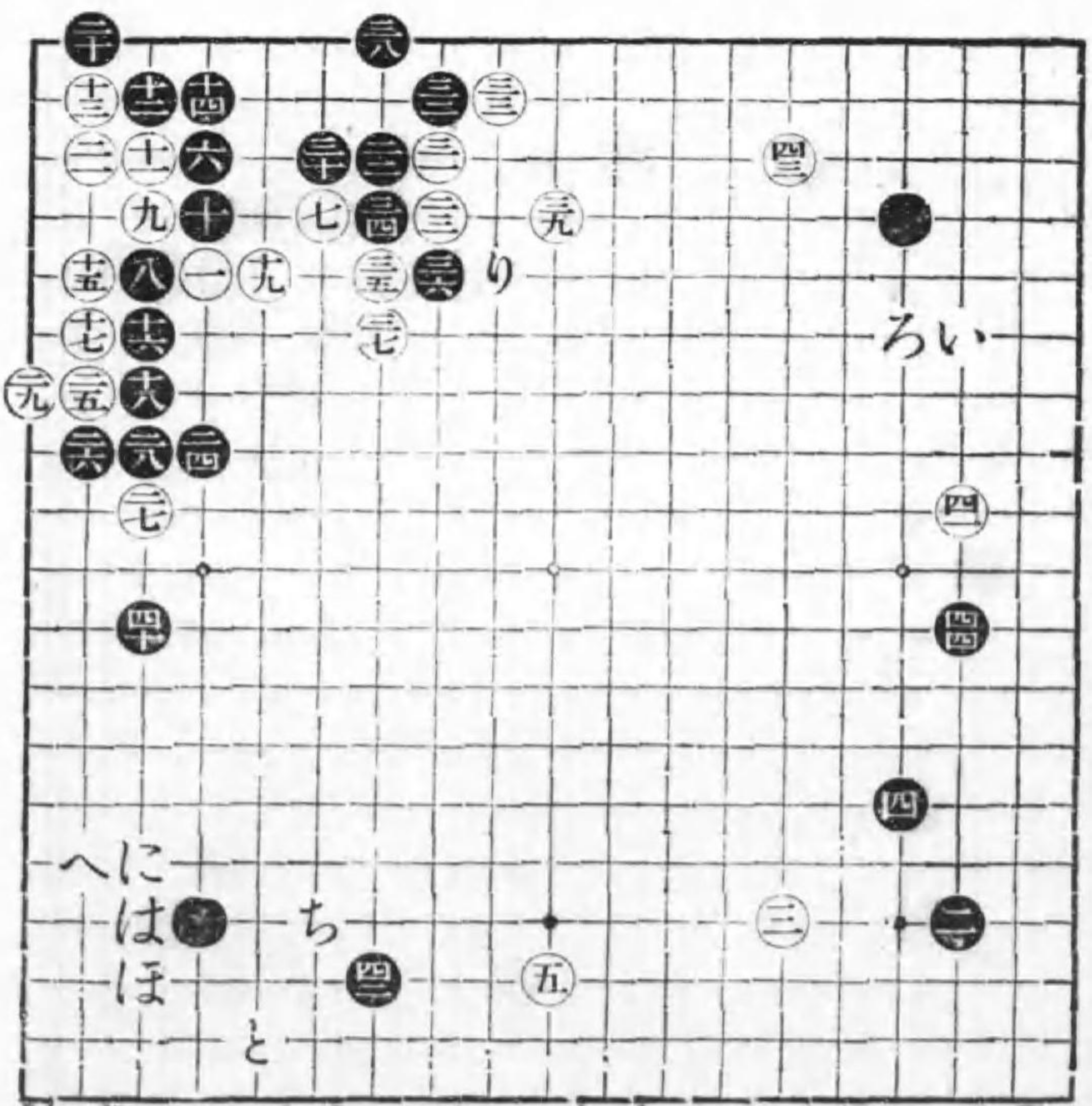


本譜黒四十四までは双方無事の進行振りである。

次に白(い)なら黒お定りの(ろ)。

また白(は)なら黒(に)白(ほ)黒(へ)白(と)黒(ち)等で作碁の布石である。

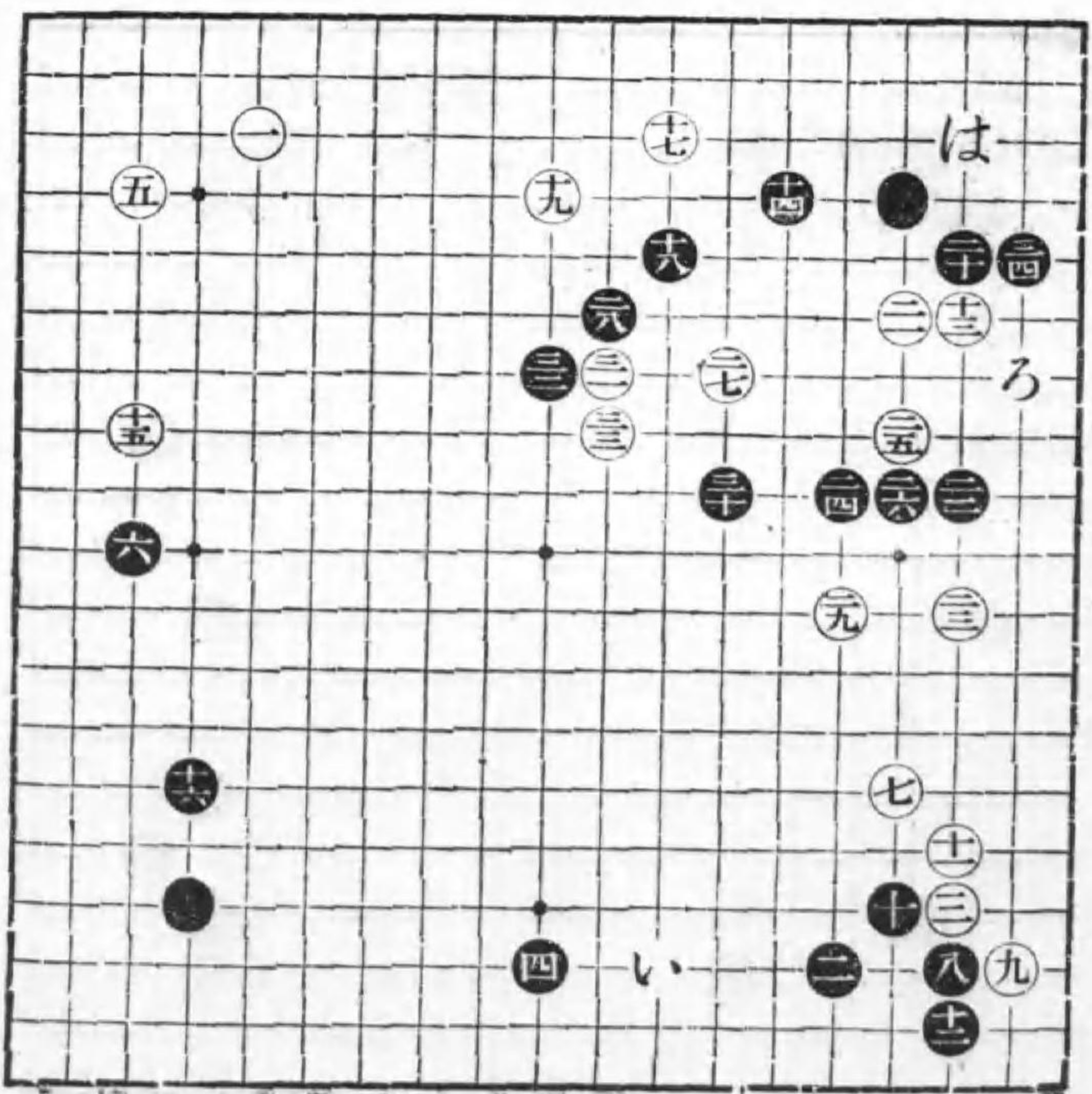
左上隅黒三十六を三十八だと、白三十六。それより黒(り)と待機の黒三十六の在る方が黒働き。



白一に黒同形を採つても悪くないのである。

白七は次に(い)と打込みの布石。それが黒八より十二まで。黒堅實の布石である。

黒三十四は第一(ろ)で三十以下を連絡、また白から白(は)と、其打込みを防ぎなほ(ろ)邊に有る白の眼形を奪ふ。

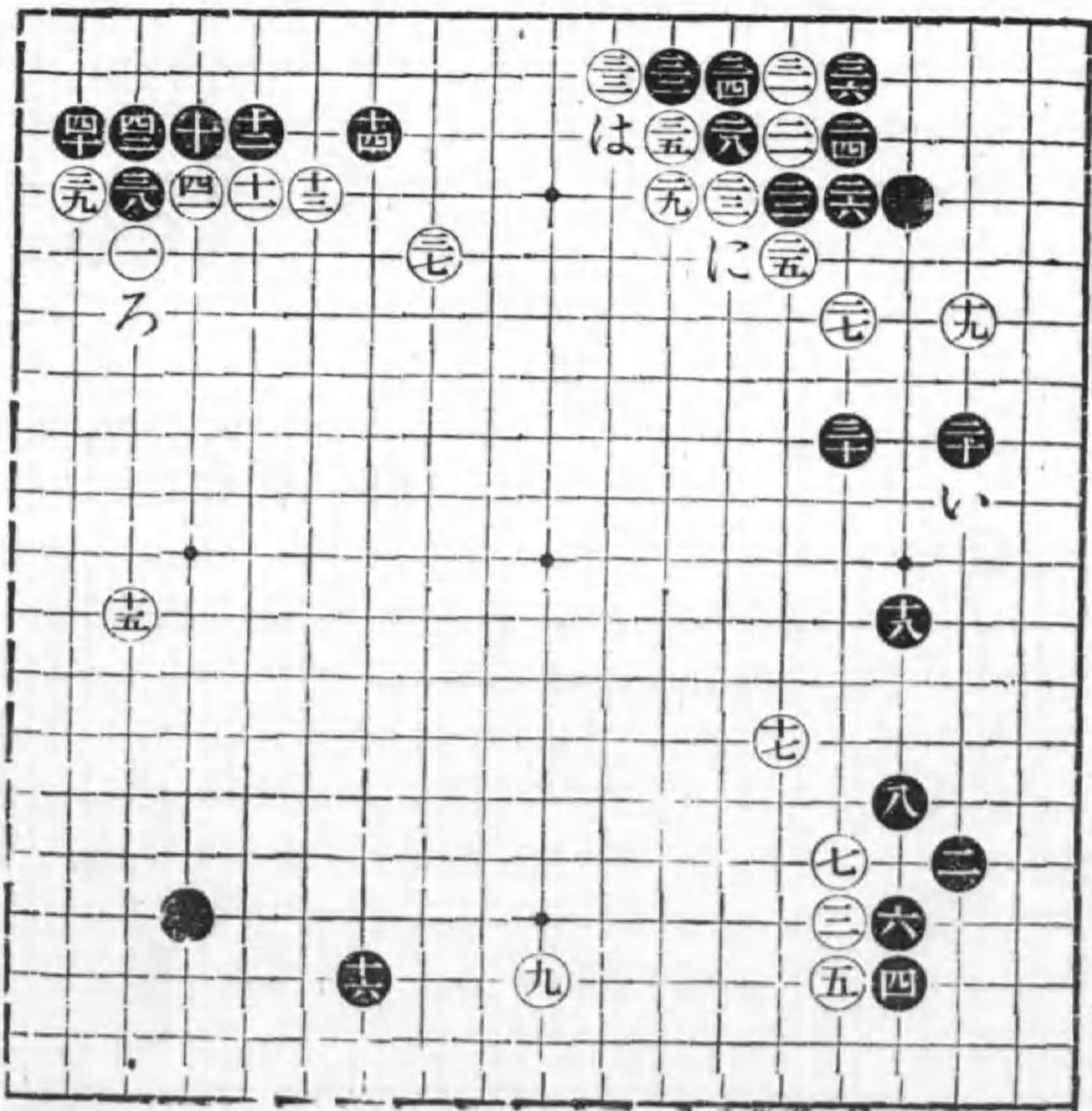


黒四十二までも先づ互角の布石である。但し黒二子の効力は嚴存。

白二十九は次に(い)と侵入。其防禦が黒三十である。黒三十は白模様も消し良手である。

黒三十二を三十四は黒悪い。また黒四十二までは、次に黒――

(ろ)。といふ黒の布石である。

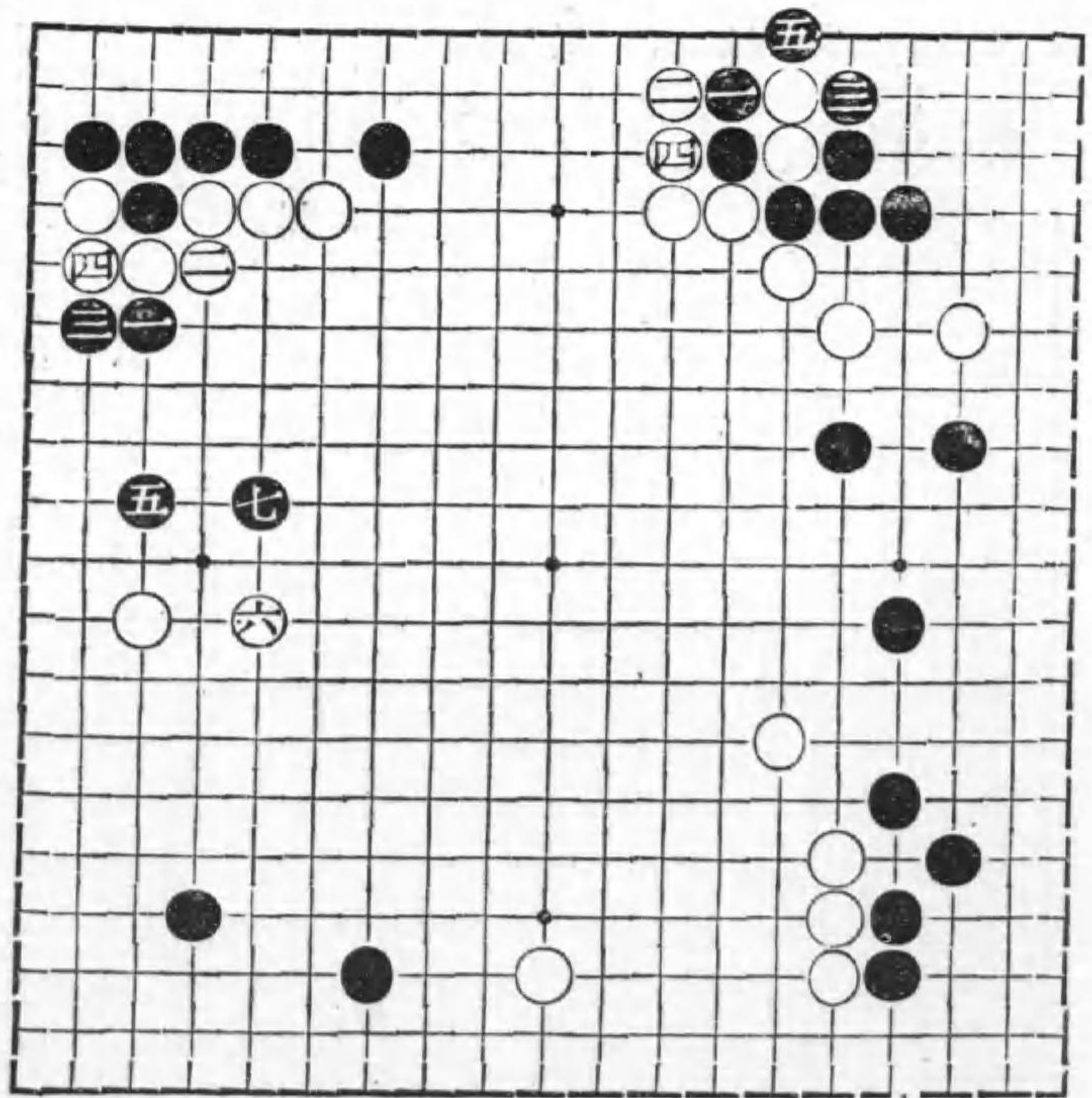


右上隅の方前譜黒三十二を三十四だと、本譜黒一より五までと、白にキチン。前譜を見られよ、(は)の點は白に缺點である。

即ち黒(に)と切つた時本譜とは違ふであらう。

また左上隅の方、前譜黒四十二までは、本譜黒一より七までが目的である。

即ち白模様解消、黒一擧勝勢。



右石

本譜より相先の布石であつて、斯道本來の興味中心、また向上は相先にある。即ち初心者の對局でも相先、それが初段に九子置く人が九子置かせ打つたとしたら、苦し

いから自づと打つ手も邪道、此れが早くも下手固まりの原因である。

本篇には今は下火だが、一時流行の新布石も説いてある。
 黒五は次にまた三の様

に六を待望、即ち二ヶ所縮つて黒が有利、それが以下黒十一まで、白も二ヶ所縮らせ損だからである。

黒十九の時が布石巧拙の分岐點である、黒十九を(い)も俗に大場といつて、黒三とかまた白十二とかの締りに次ぐもの、それで黒十九を(い)だと――

白十九は當然、斯様黒十九は白次に(い)、そして黒(ろ)。

此黒(ろ)が黒(は)と敵陣へ肉迫を含み好點である。といつて黒十九に白(に)だと、黒(い)と大場二點獲得。以上が布石の巧拙の一。

黒十三は以下白十八と成つて黒は先手――

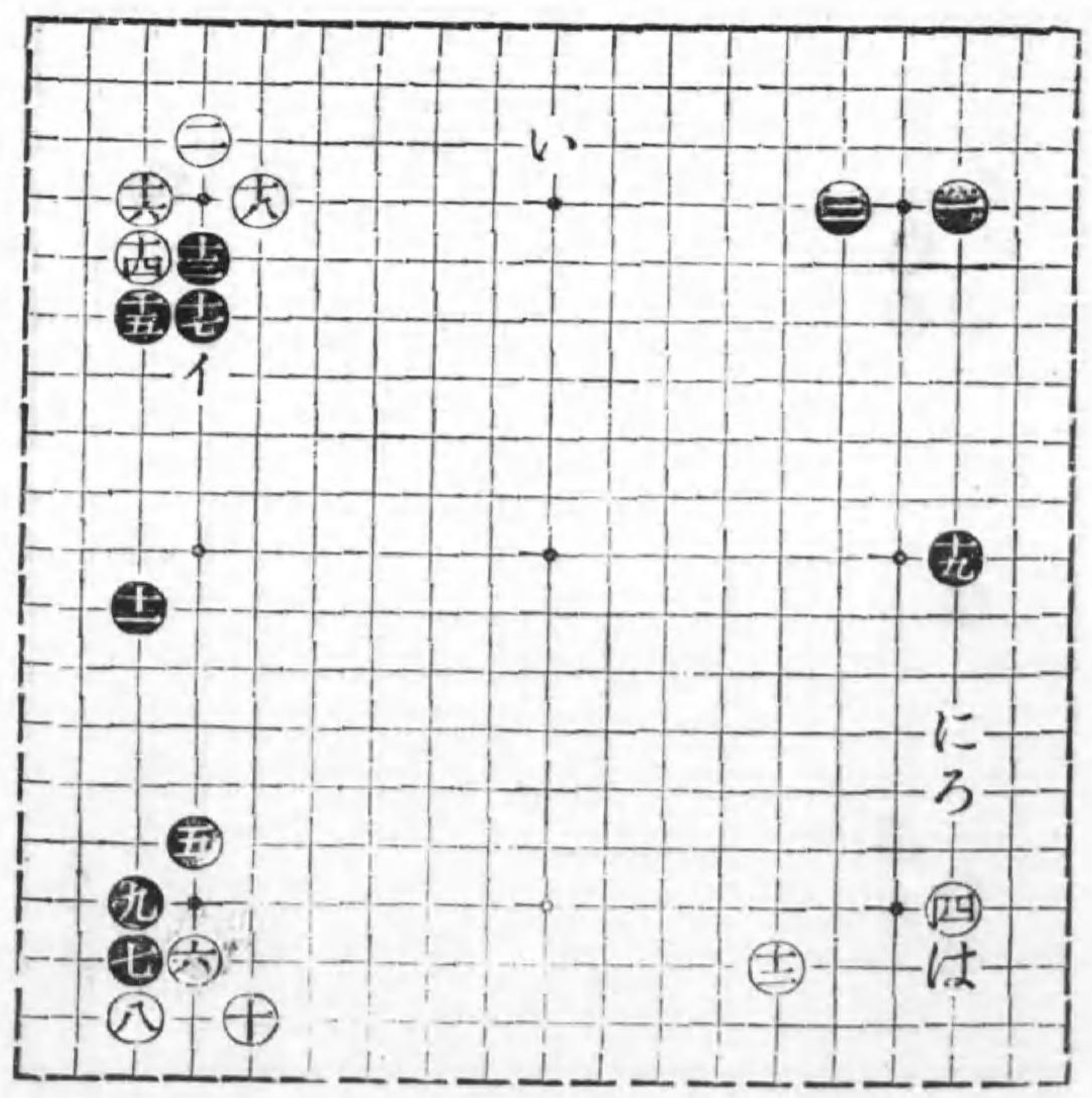
黒十三を十四だと、次に白十八、に黒(イ)と必要、で黒後手の理。

白十四は黒から白二の横腹に黒七と來られて、十の方と同様では白地が薄い。

それで黒十三は黒十一まで、とある此際などに適法である。

但し限つた事ではないが。

相先布石



二八五

前譜黒十九を本譜黒一にして――

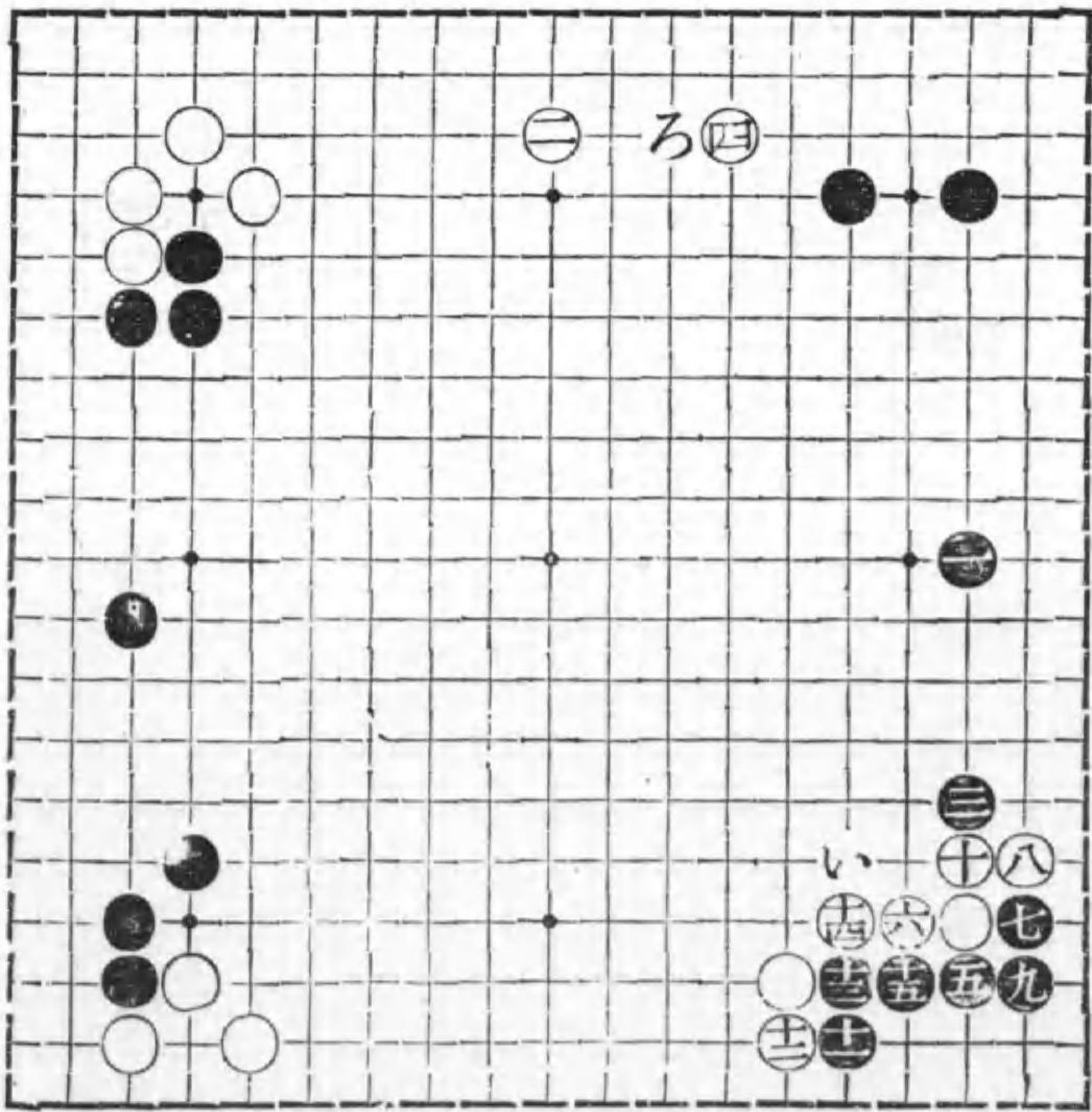
白二黒三、に白(い)なら黒(ろ)。

黒(ろ)も好點である。それで白四なら――

以下黒十五まで。

見られよ白地は變じて黒地、それが黒一の巧い順序である。

黒巧いといつても先着効力の顯はれである。



本譜黒二十一までも本格の双方順序である。

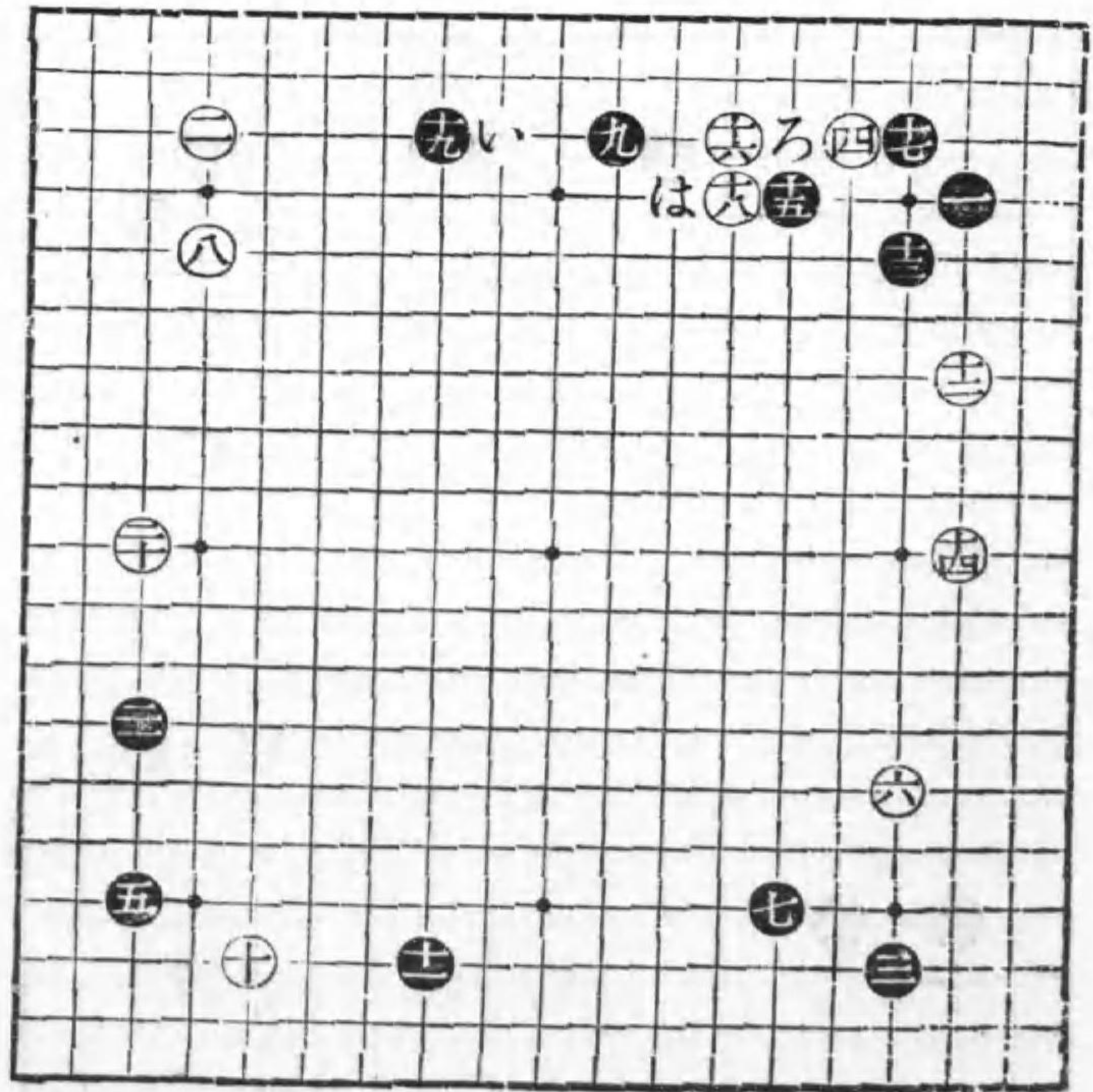
黒十五を十七だとい(い)と白に占められ――

黒別に悪くはないが、黒十九と其布石を好むなら、

黒十五、十七が手順であるといふ事は――

黒十五に白(い)なら、黒(ろ)で白四を取れ。

また黒十七に白(い)でも黒(は)。



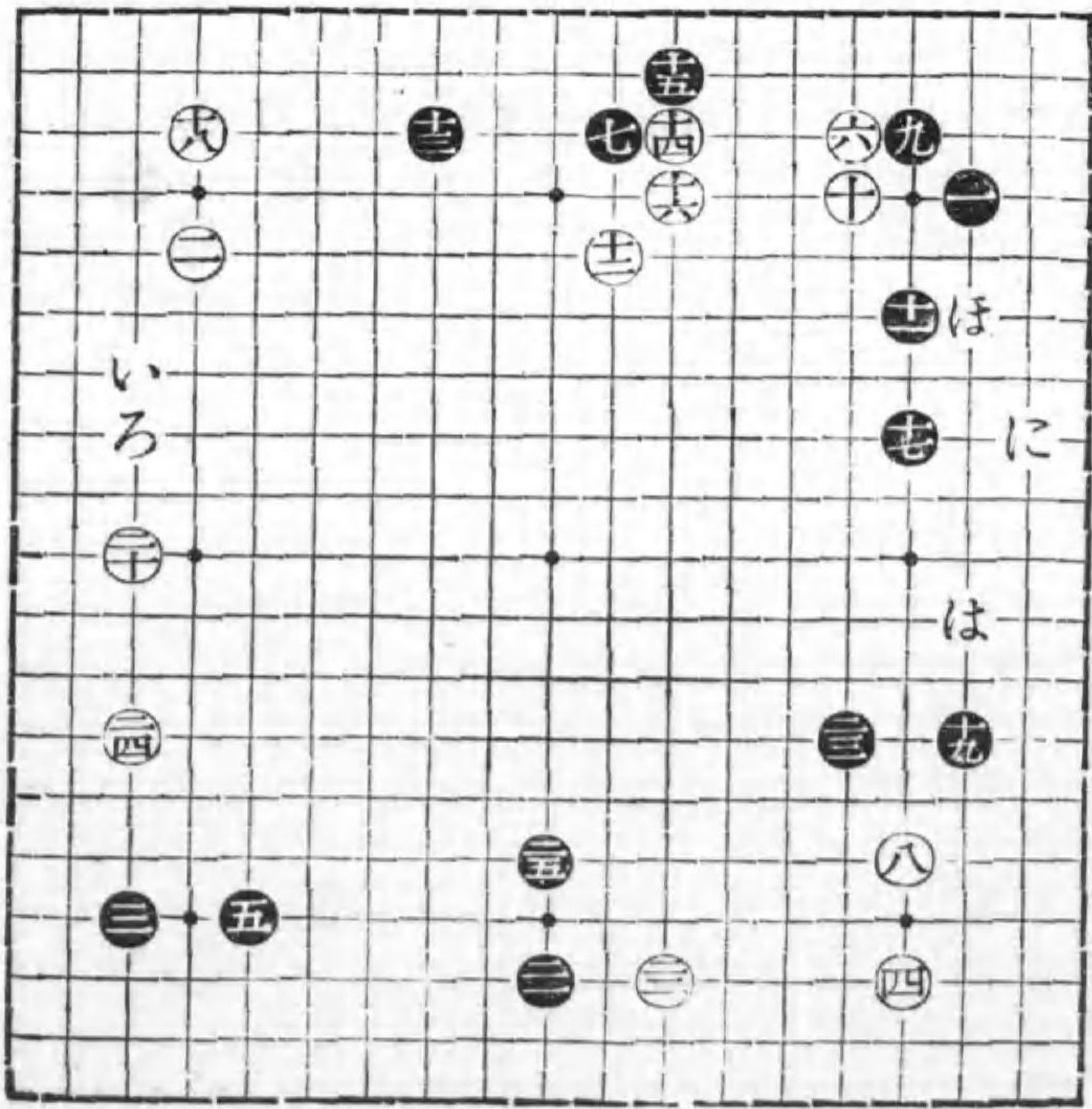
本譜は右側の黒地は先づ確定と見られやう。

左側の白地は黒(い)でも(ろ)でも、黒に打込みあつて――

また其他の比較も實質上黒が優良。と見られやう。

それは白十八を(は)でない白の布石に因る悪果である。即ち白十八を――

(は)は、將來白(に)、黒(ほ)と黒地縮少の好點。



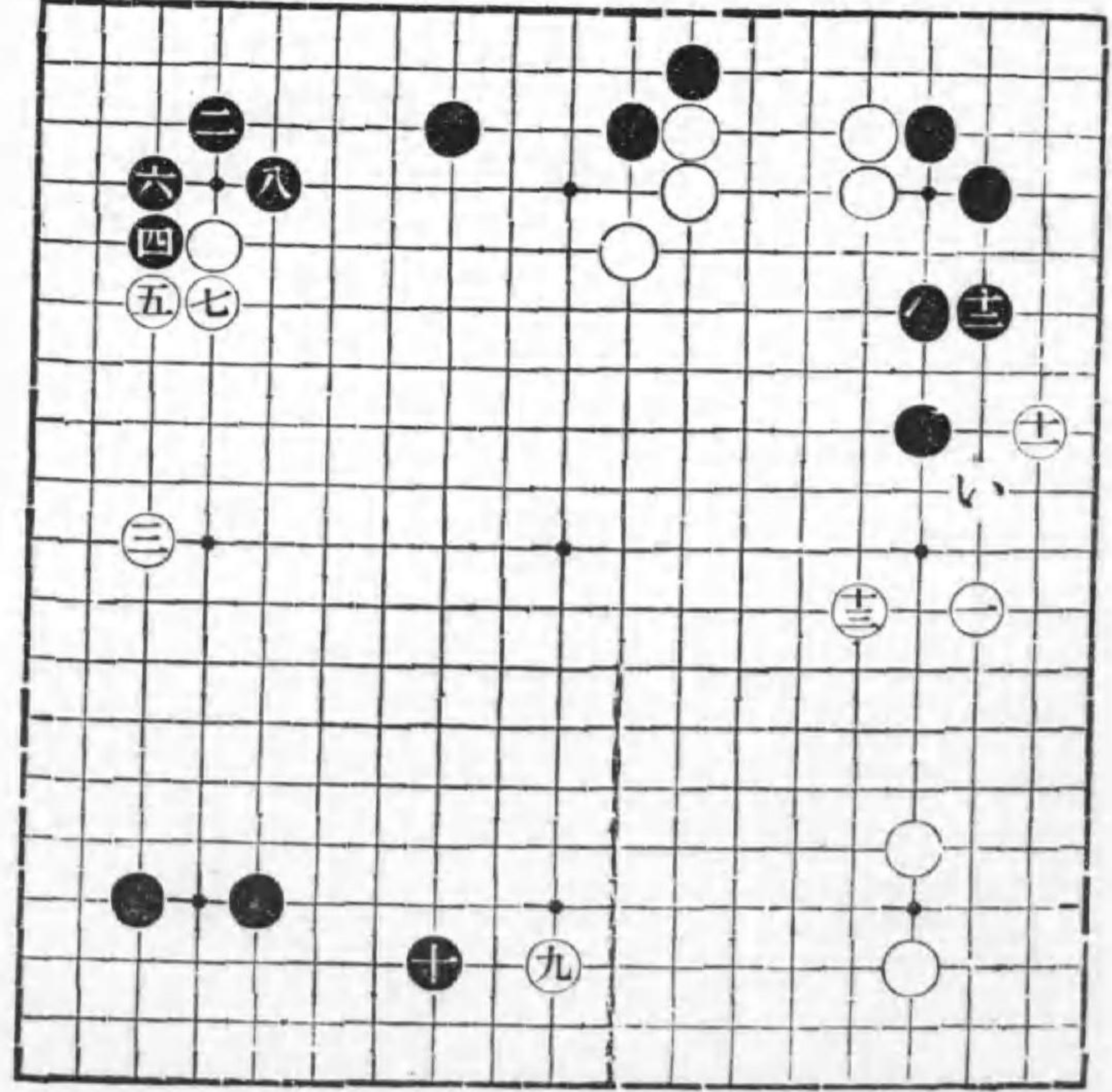
前譜白十八を本譜白一に変更。

如何に締りが大といつても、上邊に黒三子の在る其際、白一を二は前譜の白悪果である。

本譜白十三までは黒地と釣合つてゐやう。

白一に黒(い)では白二と替つて黒は大勢に後れ。

それが白十三と成るものである。



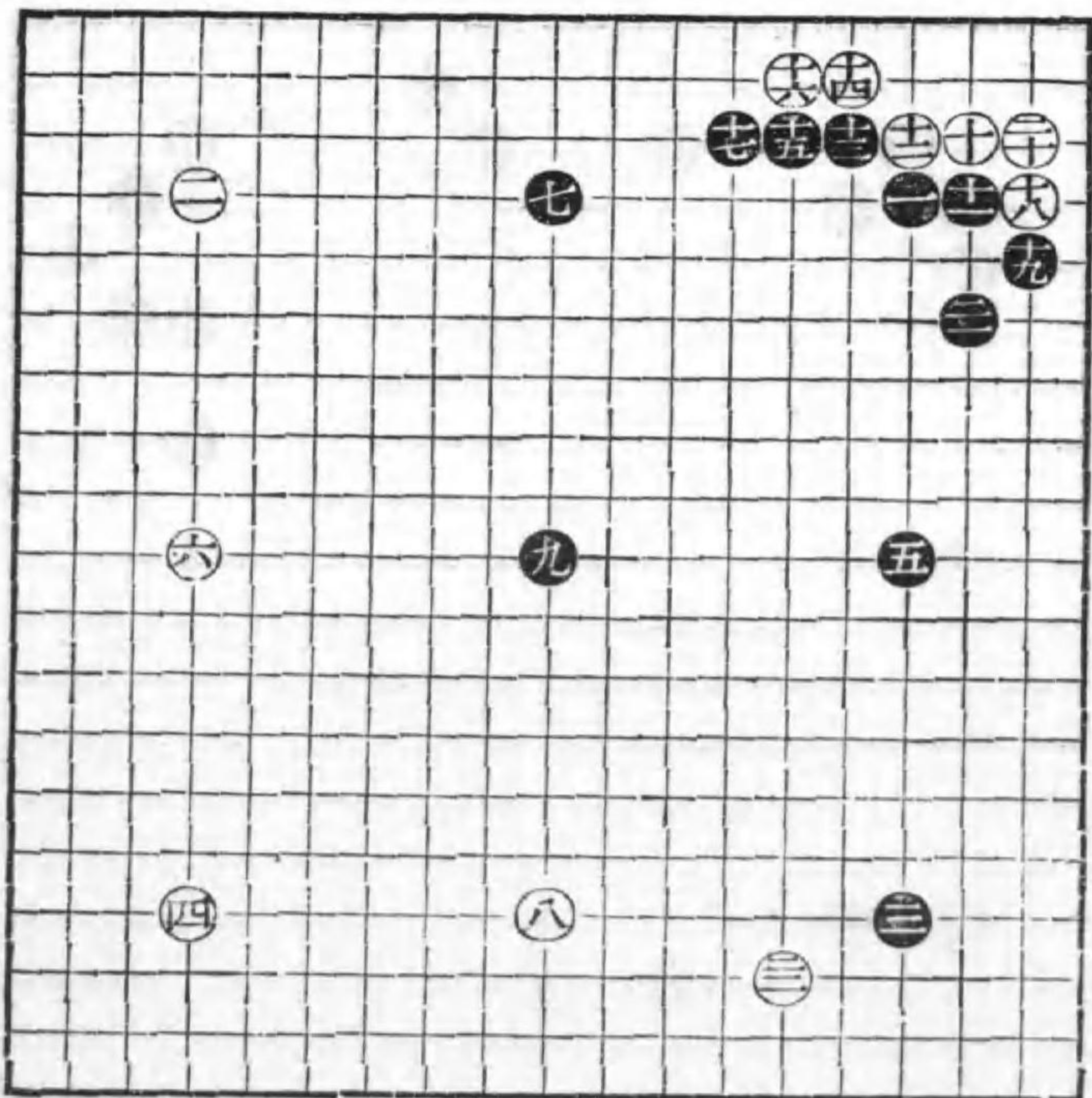
此れが新布石で、白二を三の方なら、黒二で同じ理合。等で――

白八と成つて、黒九の一手で大規模に布陣、黒必勝といふのであらう。

即ち三を除いた黒四手で。

次に白十より黒二十一までなら、外部の黒が厚層も原理に入れ。

併し白二十二で黒必勝など容易の業ではない。

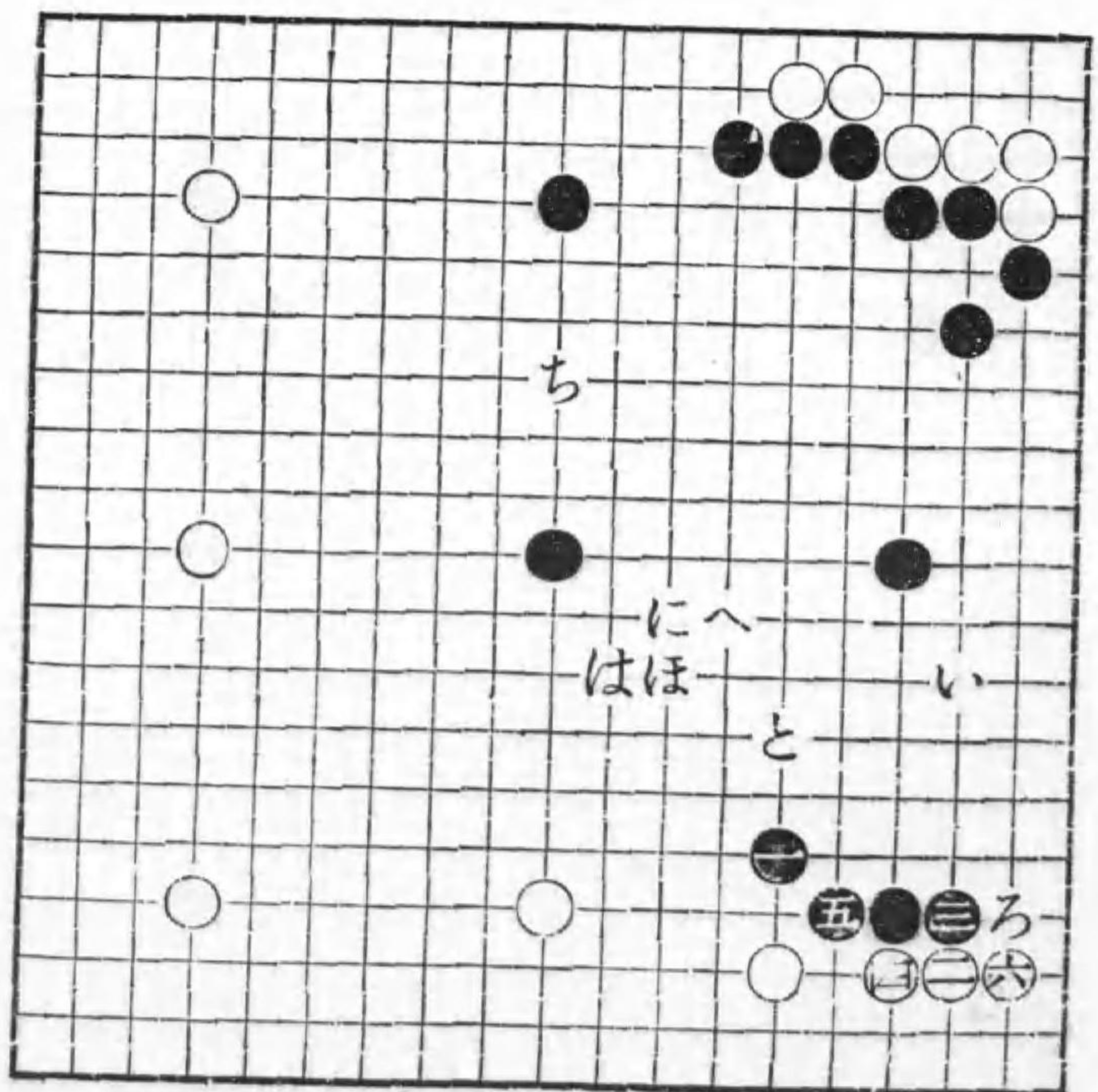


本譜黒一なども前譜白十二に用ひられる一手である。が以下白六と成つて、次に白(い)と――

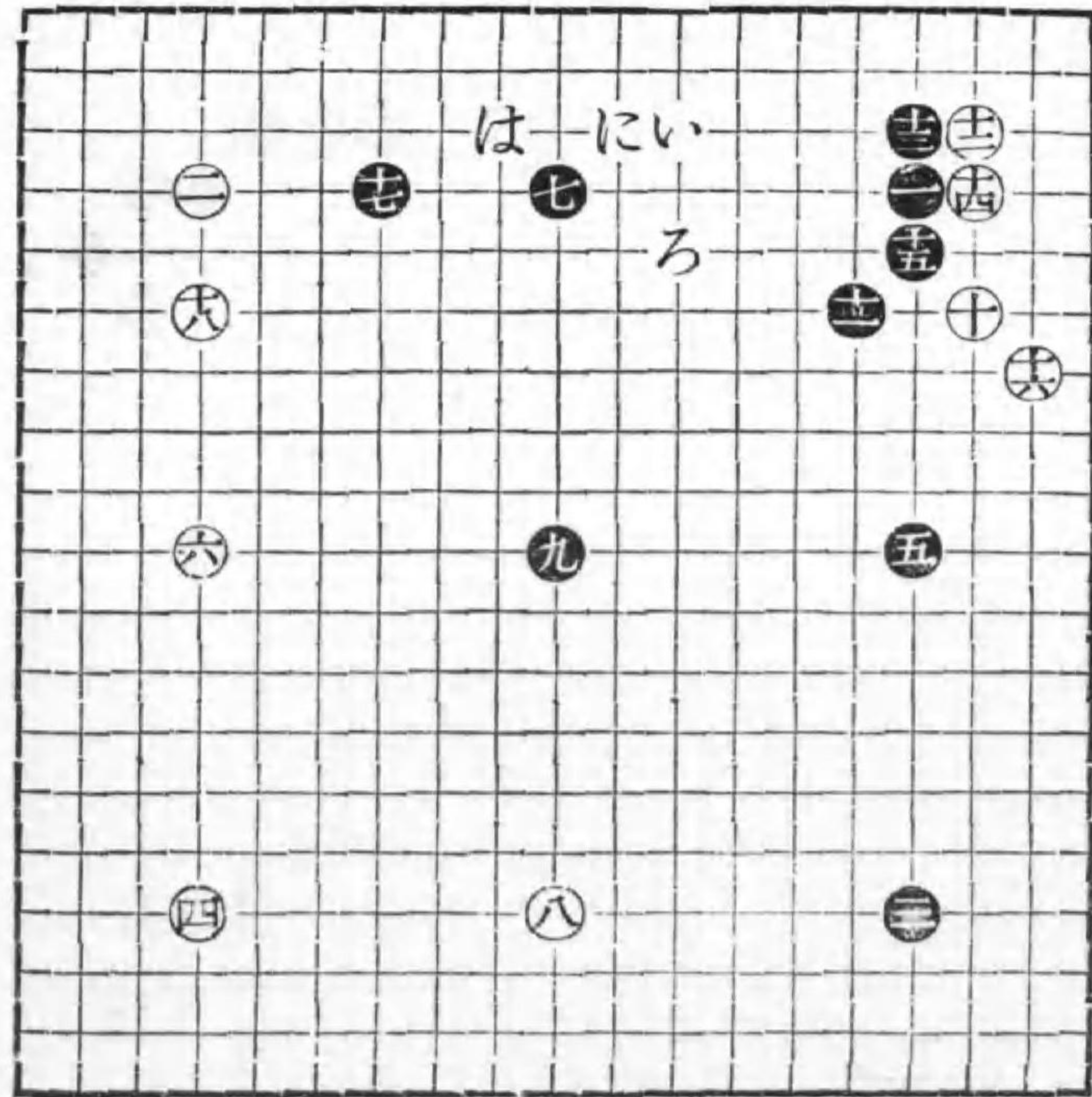
白に打込みもあり、それで次に黒(ろ)なら、白(は)等。に――

黒(に)は、白(ほ)、黒次にも(へ)と防戦、そして白(と)。

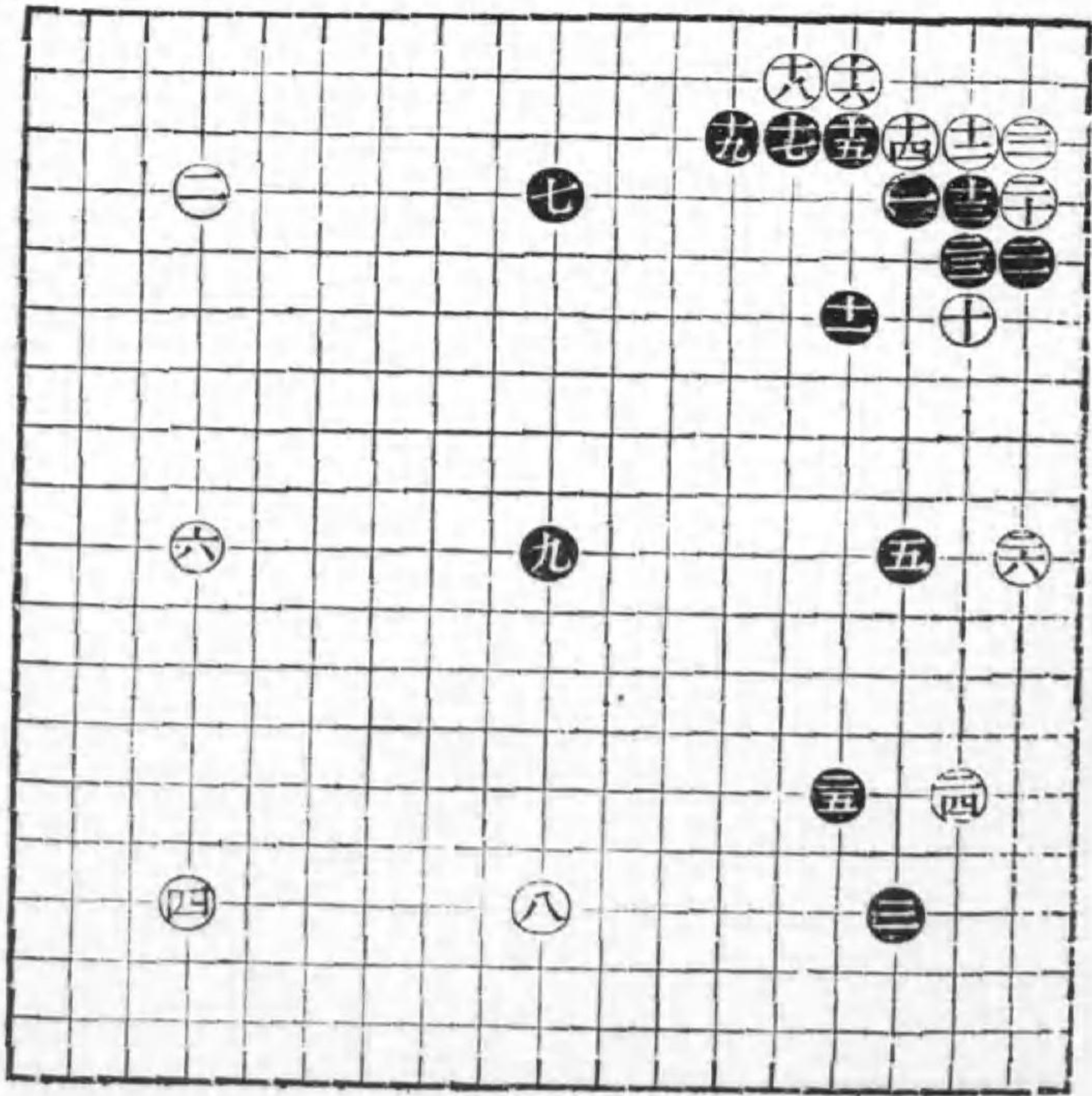
なほ白に(ち)と侵入あつて、等は一例だが。



本譜黒十七までも新布石に現はれる成行である。が白十八と白に受けられ其態では(い)と白に打込みあつて——
 即ち白(い)に黒(ろ)は白(は)と、(い)を捨る手段。また——
 黒(ろ)を(に)なら、白(ろ)と飛び、其白は取れない。白を取れなかつたら一舉黒負け。



黒が白を取れぬ結果、黒負けと前譜で言つたのは、前譜黒十七まで——
 と數手費し白十六の方にまた白十八の方に、と白地があつて、黒模様解消されては、といふ理合である。
 本譜も白二十六と成つて二十六は黒の地層に侵入、黒はどう地を纏めるか、といふ黒危局に直面である。

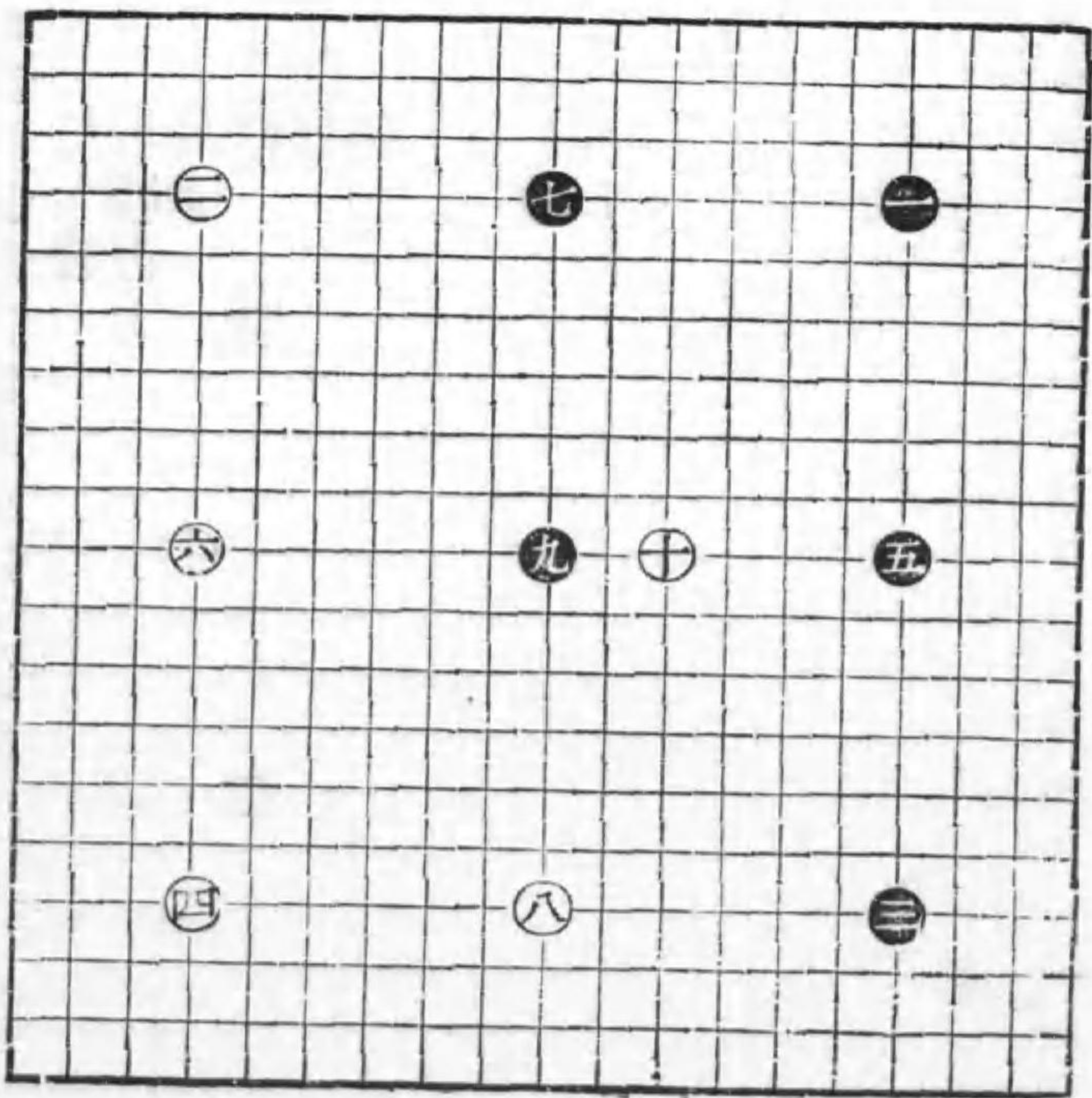


白八までは、白が八まで
實行、といふ約束で成立ち
第一白二から變更なら如何
といふ理合である。

黒九に白十などだと、黒
に乗じられるのである。

それに高雅の現はれもな
い殺風景であらう。

同じ勝つなら高尚で勝つ
のを上乘とするものでうる
次譜に某高段の官戦を説
かう。

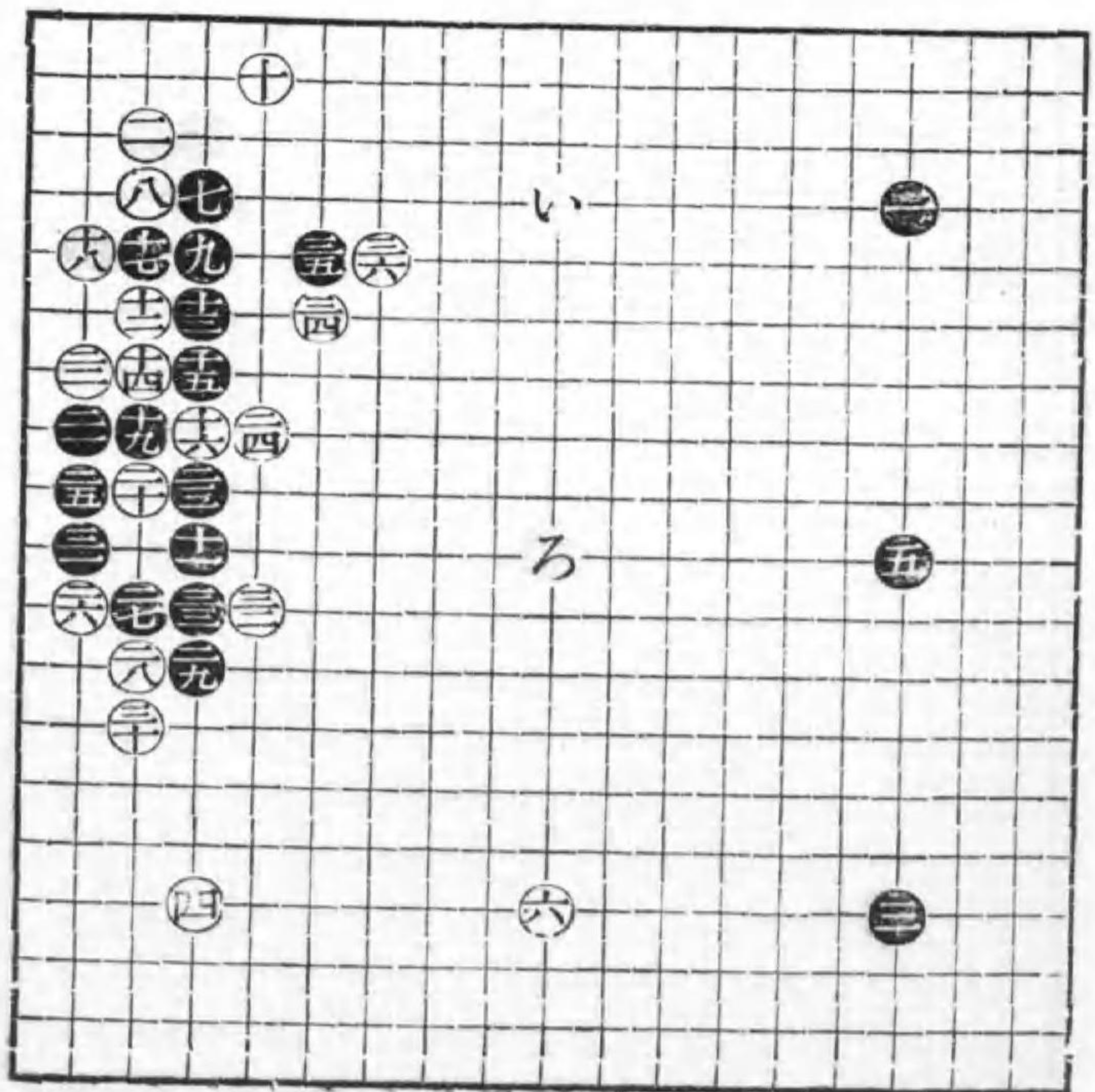


白二は黒七を(い)なら、
白(ろ)と中央先占。

黒(い)を(ろ)なら白(い)
で、黒その(ろ)が、黒(い)
と無いから黒に拙い布石。
といふ白二の配石である。

が白二は低位、奇行の部
類である。されば黒七は早
尙、此れは後に説かう。

さて白三十六までは早く
も形勢混沌。



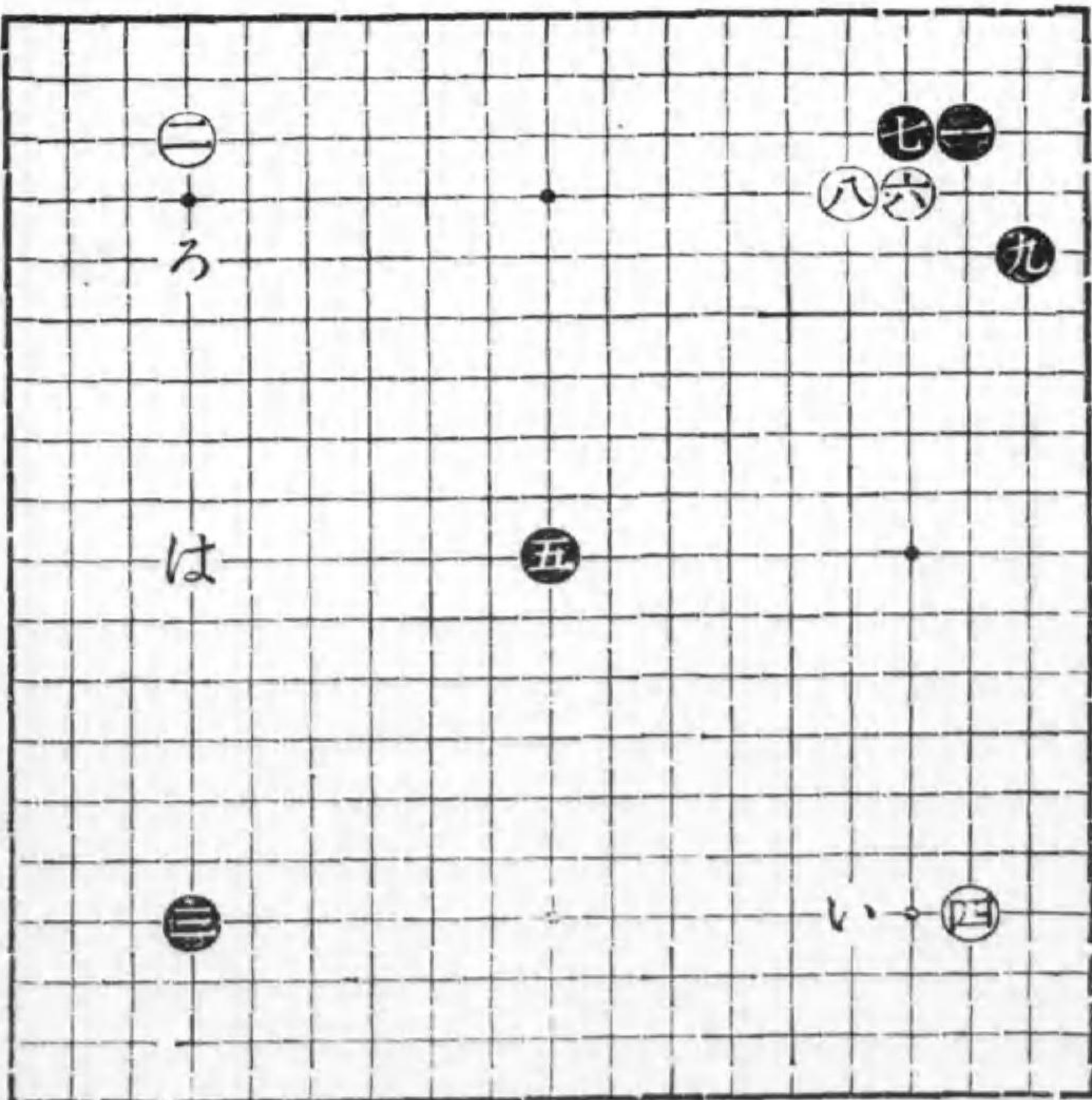
斯様な布石も某高段の實戰譜にあるが――

白六と八は拙い布石の部類である。

白拙いといふのは、黒九までは固定地、白六と八は浮石無い方が可。

無論白六で(い)、または(ろ)の方、と其布石で次に黒は――

何處、黒五の布石は(は)等であらう。



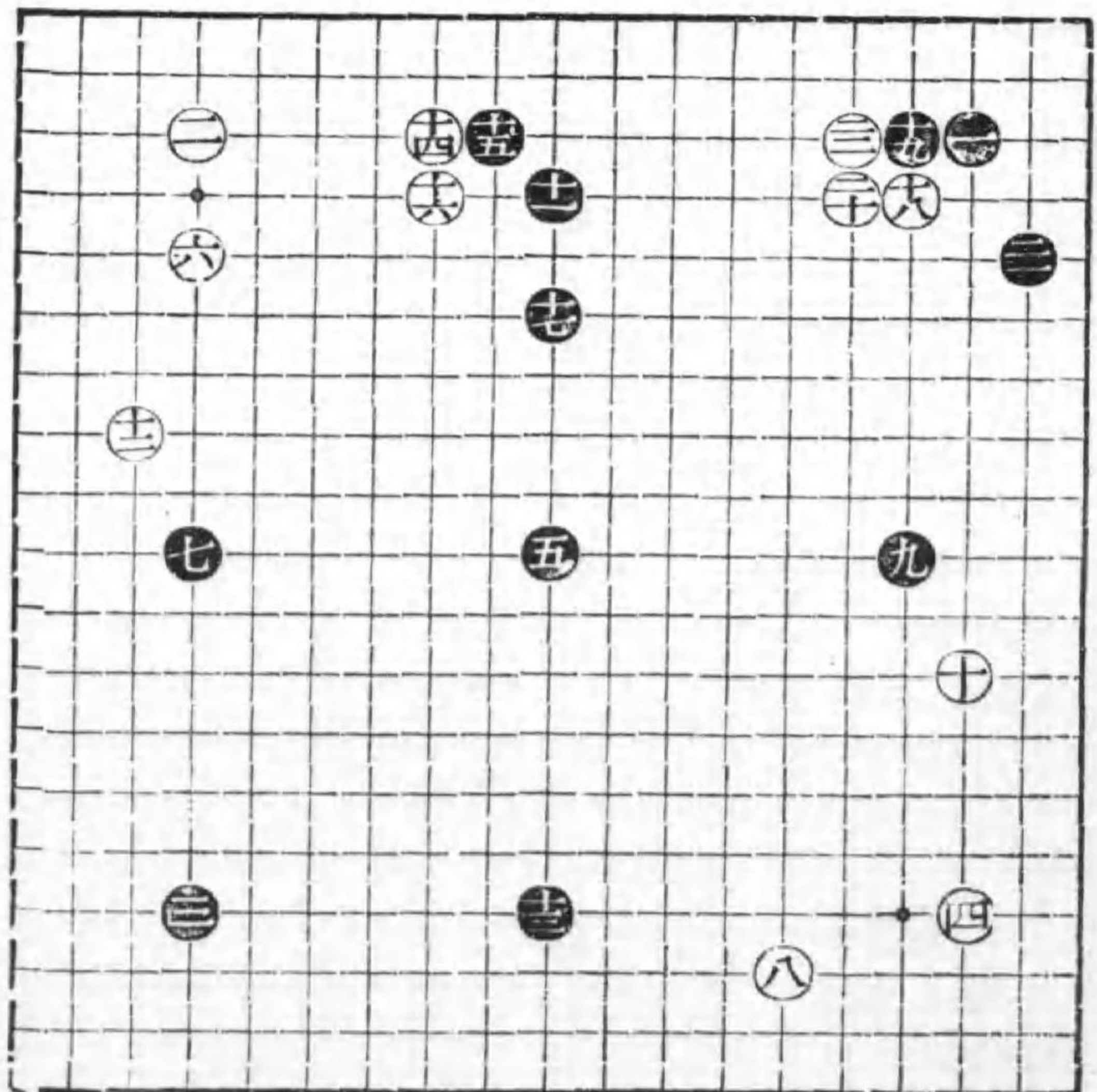
落ついで十六まで先づ左上隅、また右下隅に白地。そして――

黒十五、十七と圍はせ、白十八が好機到来である。

即ち白二十二以下白三子は黒に取られまい――

假令ば白が初段、黒が名人としても二十二以下は取られないのである。

白地の全體、五十目は越すだらう。黒地は――



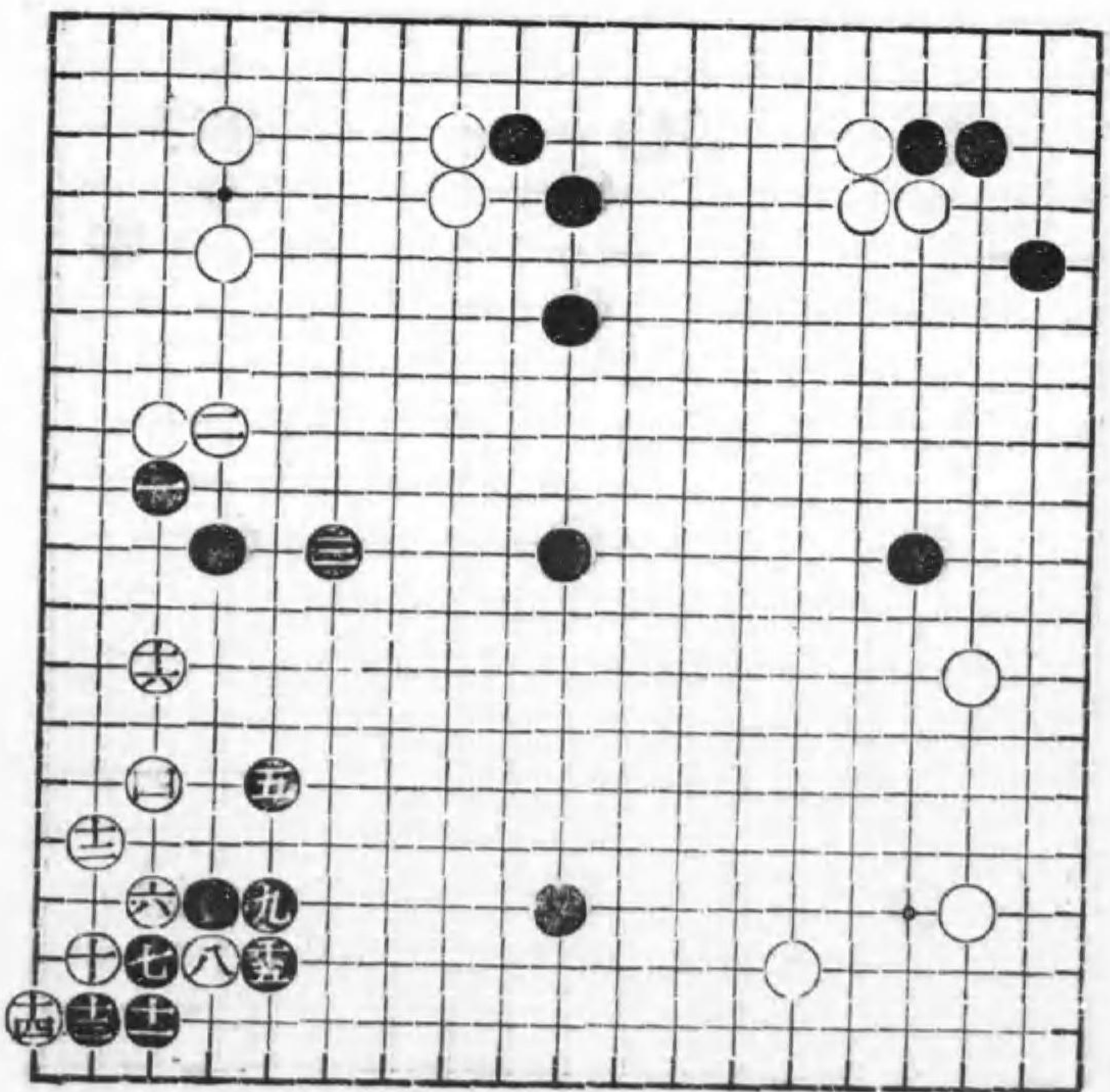
右上隅の白三子を黒が取れぬとしたら――

黒はまた一より三と其方大圍であらう。

が白四より十六まで、一例ではあるが、其白は堅固に活居である。

黒五を六で白四の一子奪取。等は白次に五と飛び、黒無理計劃である。

此れも三子位の手合ちがひでも取られぬ。



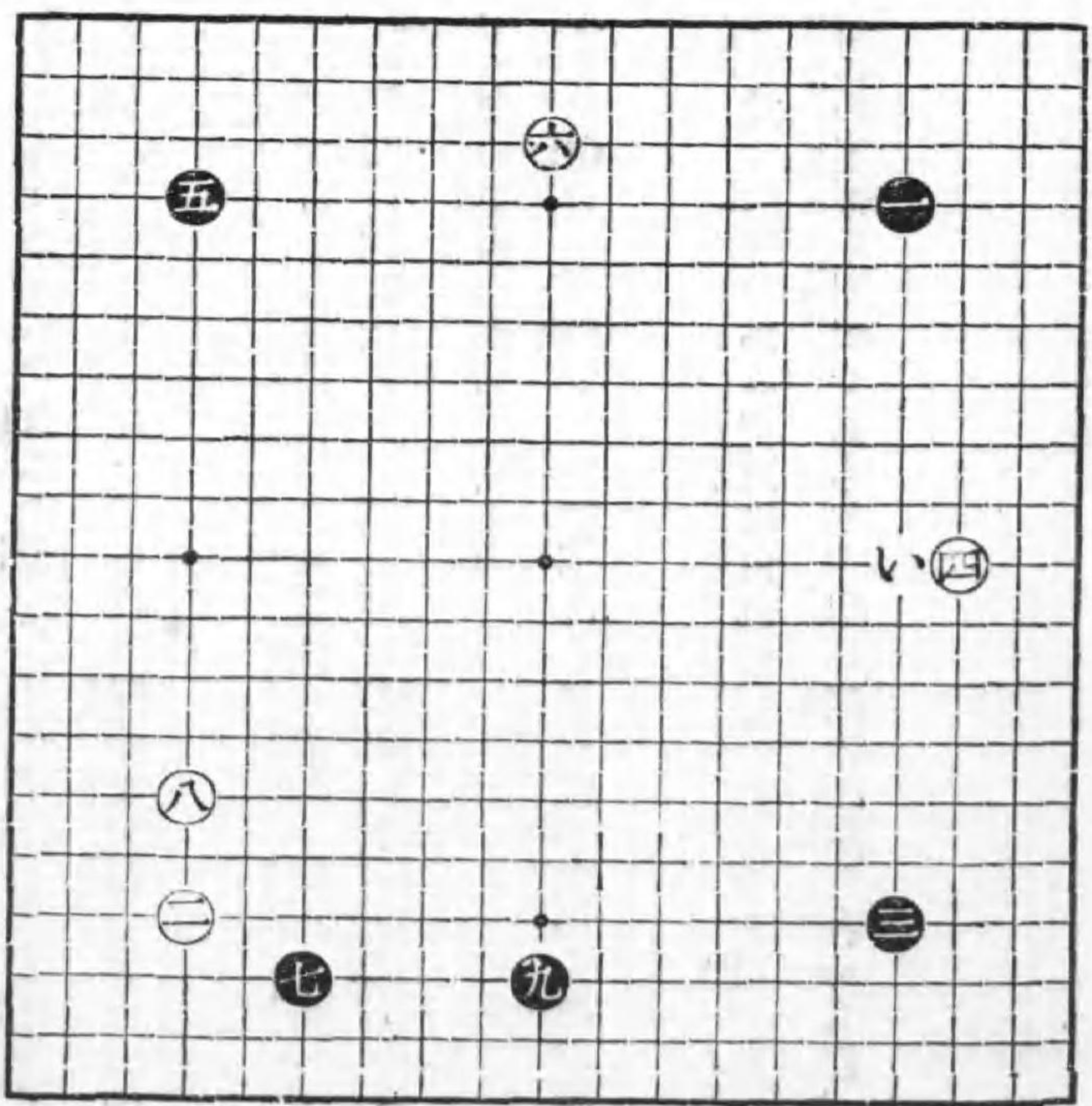
本譜も某高段二人の實戦である。

白四などが白四を五だと黒(い)、其妨げであらう、が――

黒一、三、五、白四、六と黒三手は隅。

白二手は其處を邊といつて邊。隅の方が得である。

邊の方が得なら、即ち黒一を六など。と黒は打たな



黒一なども古代の打碁に見るところであるが、白二に黒(い)だと、白(ろ)と替つて同じ二手でも一見分る如く白地は多い、黒地は少ない。それで隅の方が得くといふのである。

また白四に黒(は)だと、白(に)。すると白四白(に)と在る所へ黒三と後から行つた道理。黒三とは行かないのである。即ち白四白(に)は其二手で地量も含み安定である其處へ黒三は何の目的——といふ黒の悪着だからである。

なほ白六に黒(ほ)は、白(へ)また白(と)。白(と)白(へ)にも黒五は不急の一手。黒(ほ)を(へ)は白(ほ)。

黒七にも白八。白八は(ち)の方でも白可である。更に白八を(り)と黒でも可。といふ以上の見地より、前譜白の布石の不可も明瞭であらう、即ち黒に三隅を占められ、早くも白不利の形勢。

明治時代に五段と六段の

某棋士が五段に打込まれ、

六段の方が——

黒番の時、六段は考えた

先番などは馬鹿らしい、何

か變つた——

手を打つてやらう、と一

の所から。

催主某侯爵も來客も驚い

た、某五段はチラと六段の

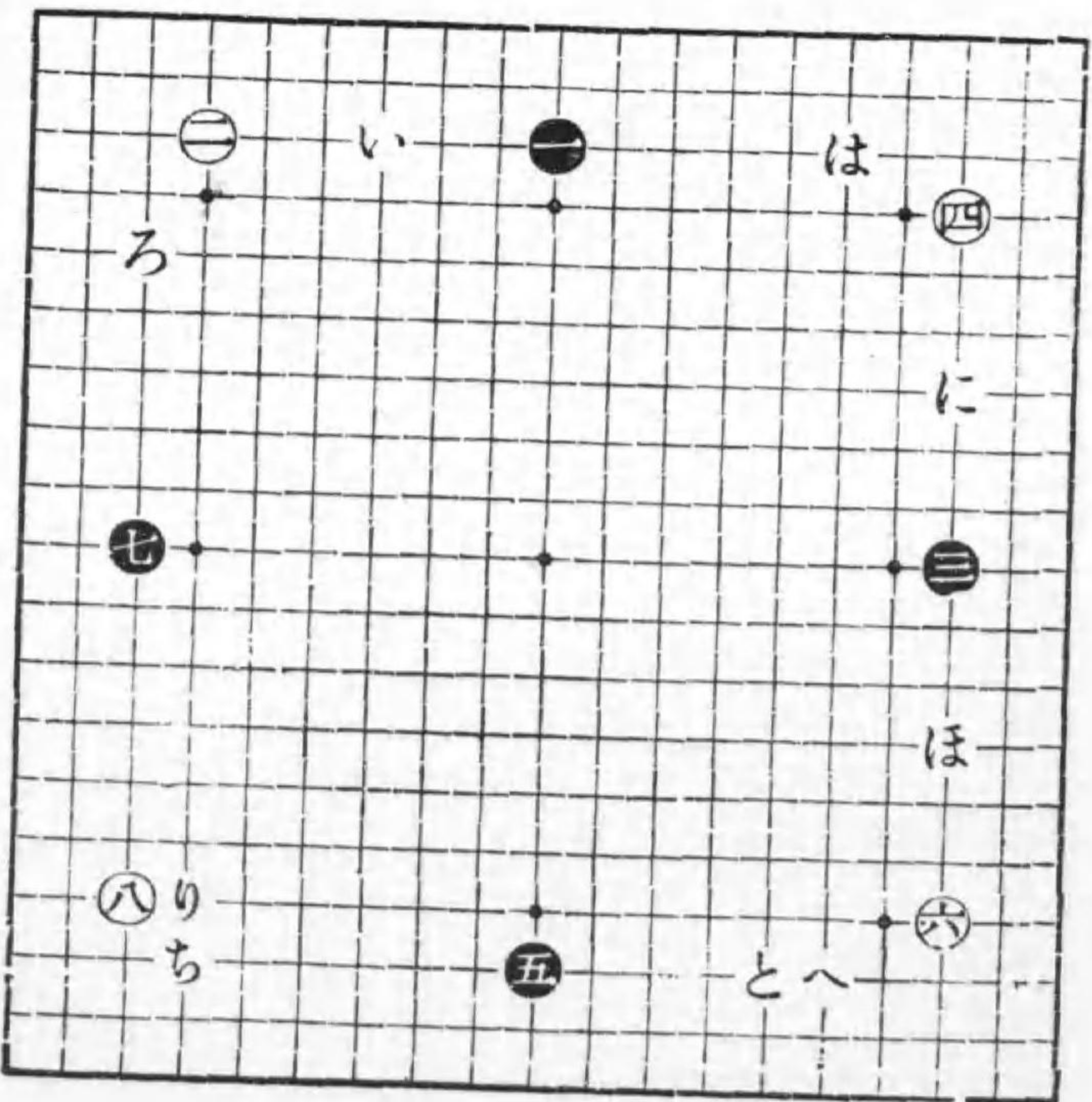
顔を見——

其意を悟つて懸命、六段

は遂々六目負け。六段は後

に師から叱られた。

相先

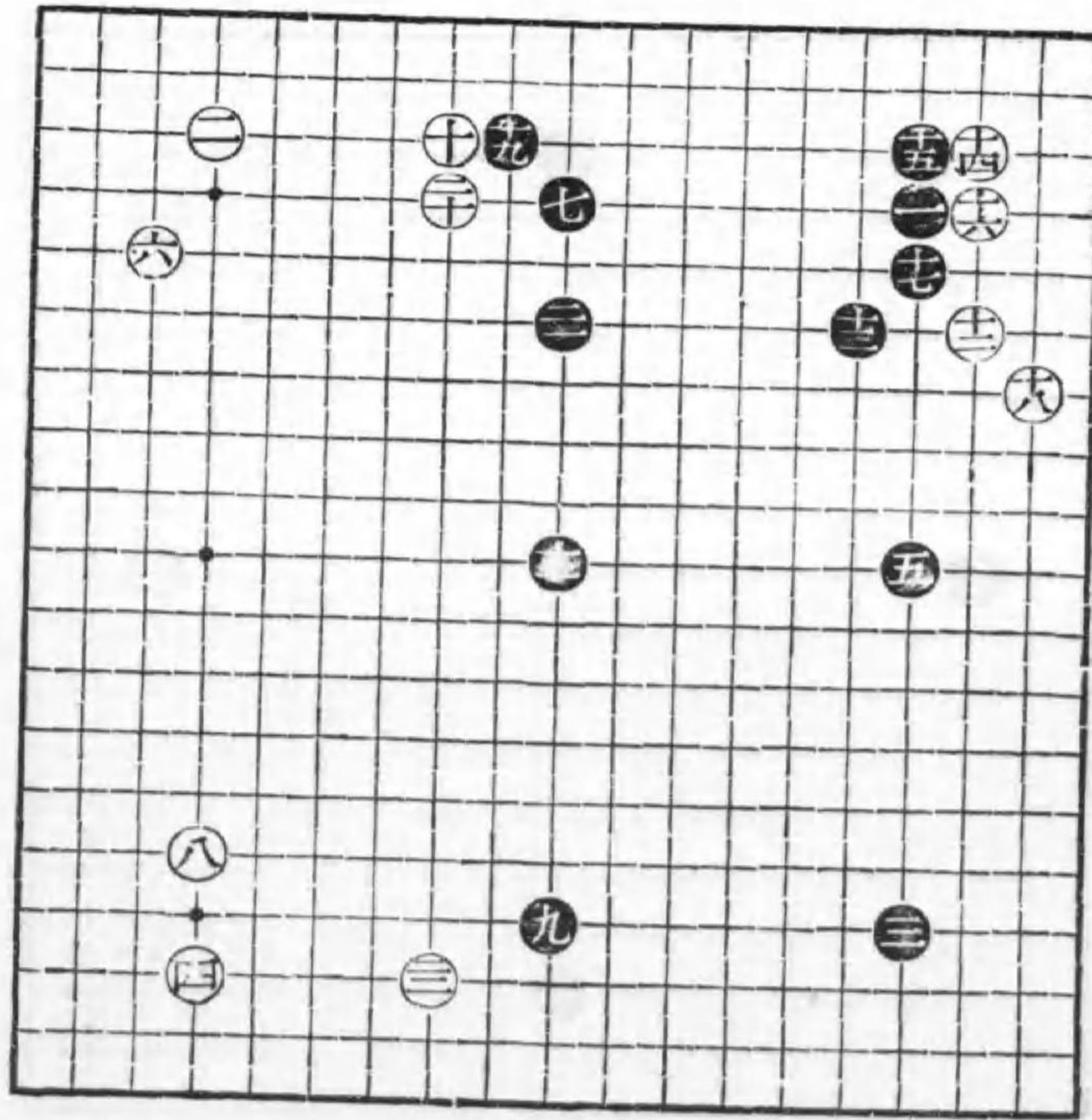


本譜は某々黒は四段白は三段、即ち先相先の四段先番の實戰譜である。

黒の方を新派、白の方を舊派、など言はれても説者は白二十二までの白の態度に禮讚である。

觀られよ、黒十七、十三などは形ちが悪い。

黒十三を(い)なら本形ちだが、左様は成らない、嫌な形體である。



黒十一より十三までは、

白に眼形を與えぬ、奪取の強行である。

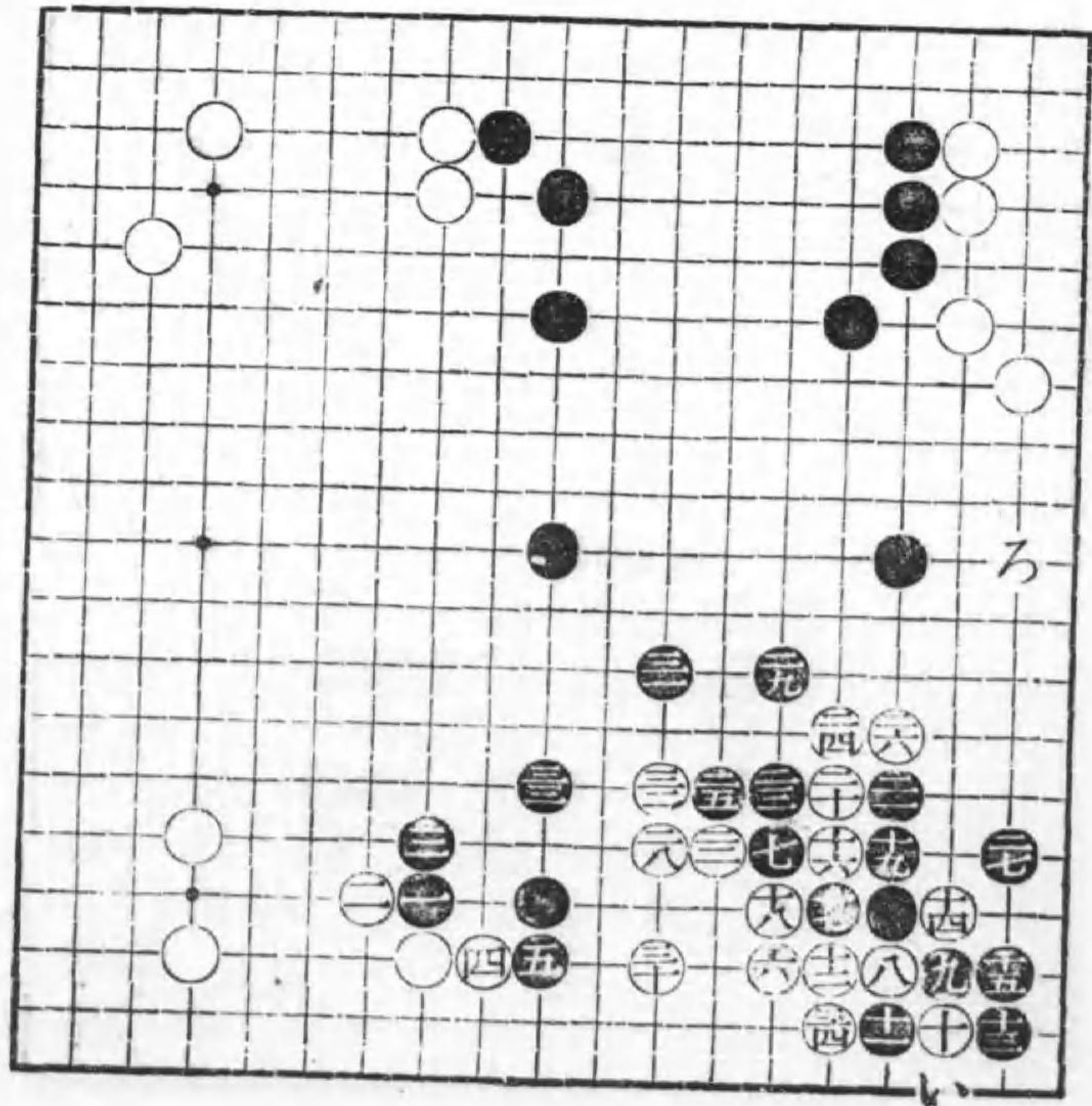
が白三十四と成つて、白に相當地もあり、取れないのである。

次に黒(い)と白十を打抜だと――

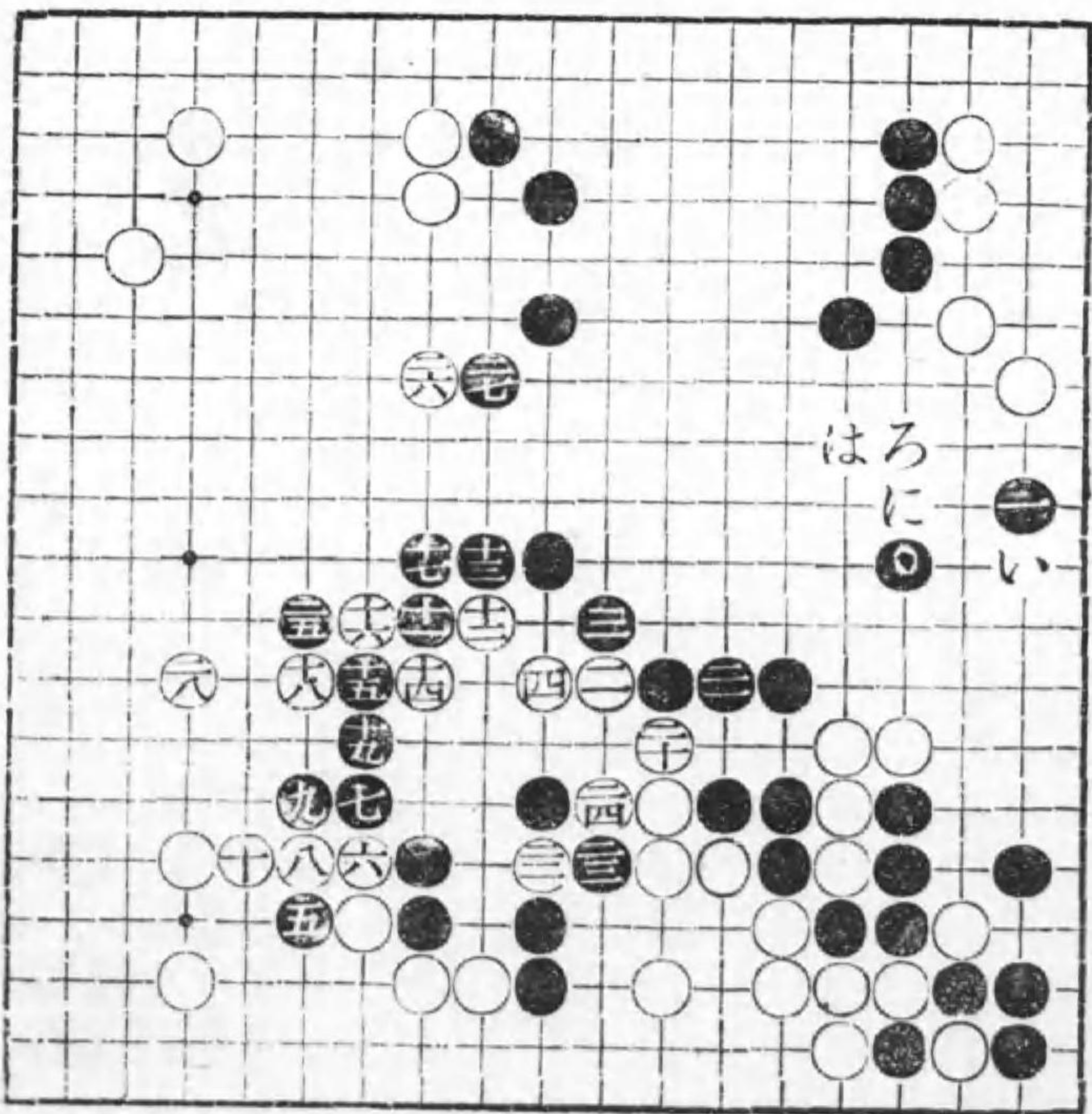
白(ろ)。

では黒は到底、勝てぬと考え、彼我の地域、それでも念を入れ打算中。といふ情景に見えやう。

布 石

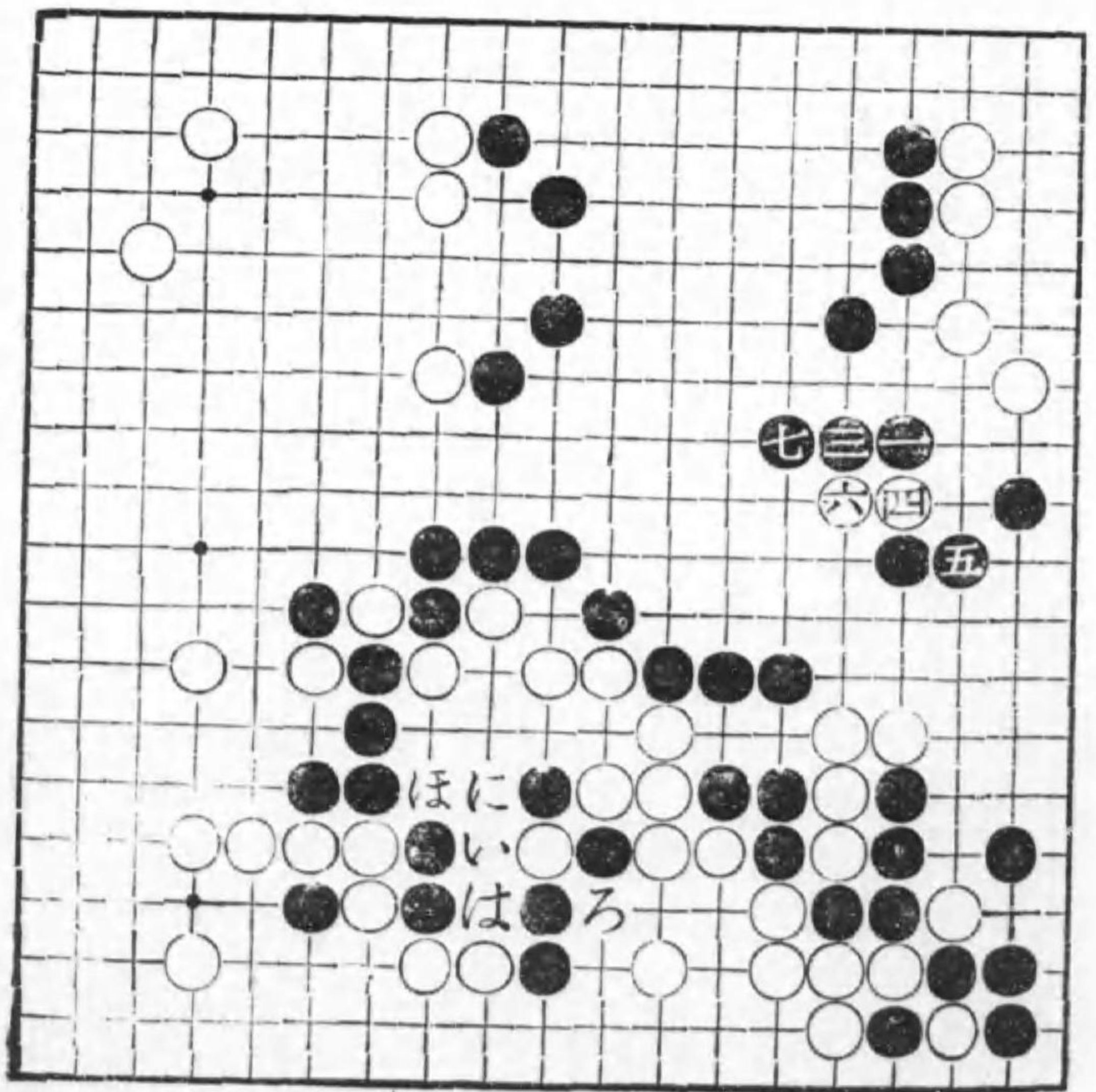


黒一は一を四だと白(5)と黒地は白地に及ばぬ、それを確實に見定め——
 だが白(ろ)と白に手段を残し、即ち白(ろ)に中央を圍ひ黒(は)は白(に)。それは後廻しとし。
 以下白二十八と成つて、本局は黒大敗であつた。
 黒大敗は、黒五六目敗を遂に無理手段の爲、それが原因であつた。



三〇三

黒(い)と取つてゐる時代は先づ無いもの。即ちそれより大きな所があるからである。従つて——
 白(ろ)黒(は)白(に)黒(ほ)と成る所である。
 また一方白一より黒七まで、白六と出させ。
 黒五を六だと、白五で、黒七までより、より黒損である。



三〇四

碁道には千數百年の歴史がある、殊に織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三公は棋士に縁を興えて、就中徳川氏泰平の頃は、力戦専らでは基調に成らない、それが布石に基調を採つて發達顯著であつた。

無論黒十一まででも研究の題目、ではあつたが其散漫は基調に成らない、等で實際に用ひられなく遺譜には無いのである。

が何かの自信で實際に用ひた勇氣は多とする。それで説者も注視は怠らなかつた、が現はれた所は相手の失策で多く僥倖の危勝であつた。

黒一を(い)と基調を採つた夫れは織田信長時代の碁譜にも遺され、恰も米の食事の如く今日も變りはない。

黒一を(い)は盤面と見競べ、それ等の中庸、又は格好、等と云はれるのである。黒一を(ろ)は好んで寒村に生活とも見えやう。要するに萬物の凡てに格好、不格好では笑はれ、碁も萬物の中、勝敗もさる事ながら、格好よくやつてもらひ度い。

斯道明治中興の偉人と云

はれる本因坊秀榮先生は

説者に語つて――

坊家の長持の三さをに、

打碁の遺譜が一パイ有つた

其譜を全部――

見たら斯道發達の蹟が明

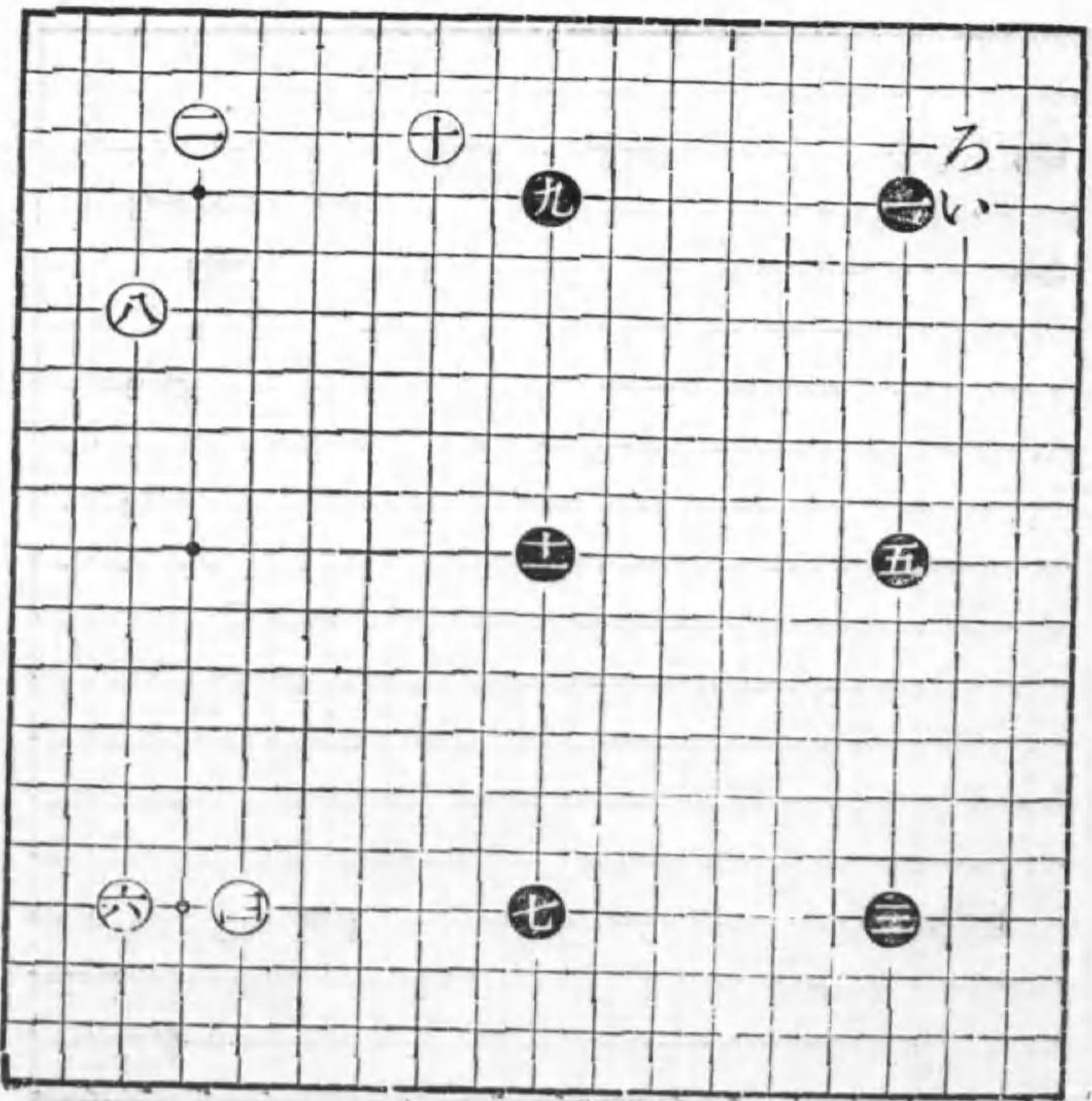
瞭であつた。

實に先哲といふものは難

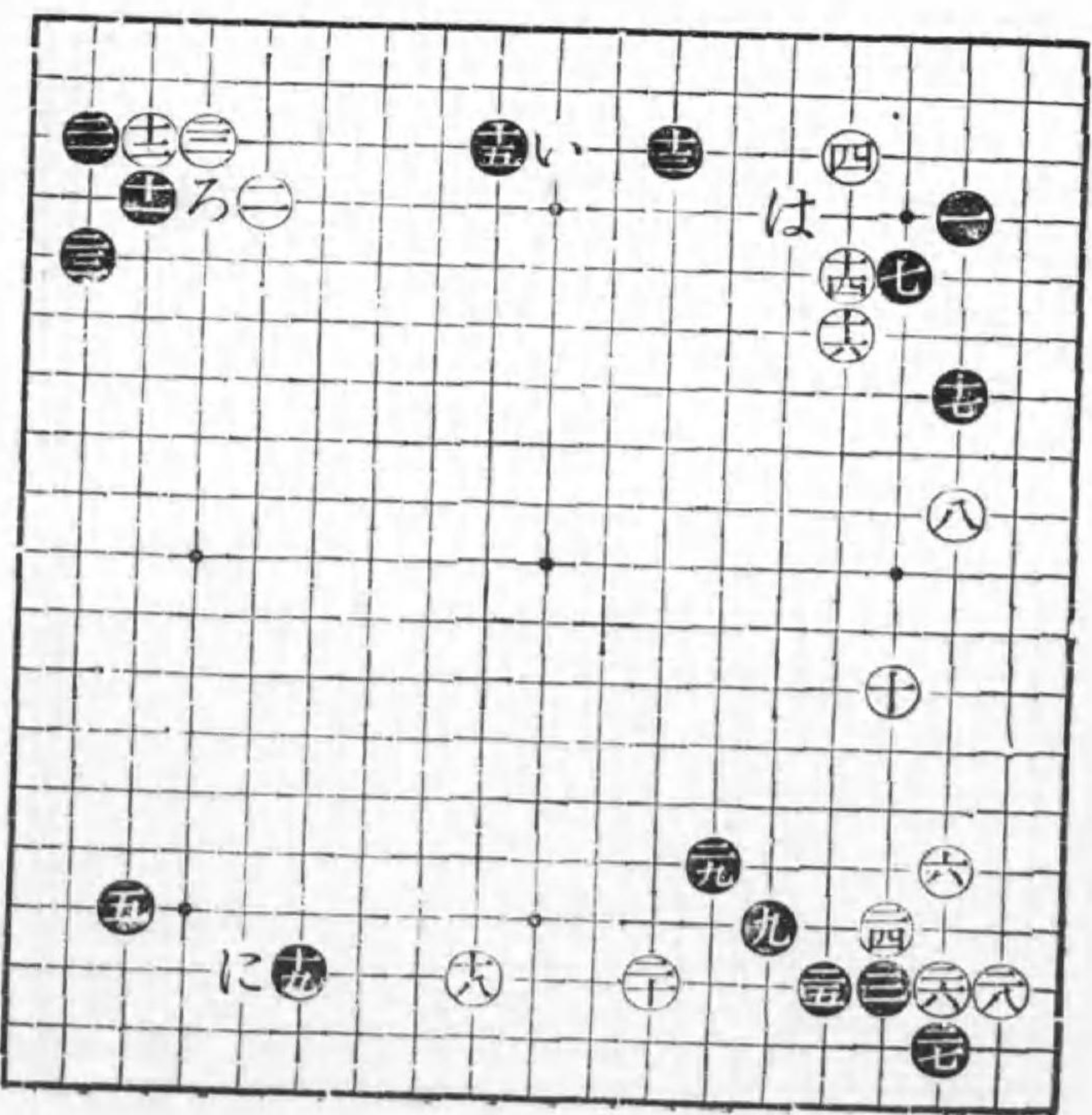
有い、よくもあんなに究め

られたと感泣する。と。

が惜い哉火災で焼失した。

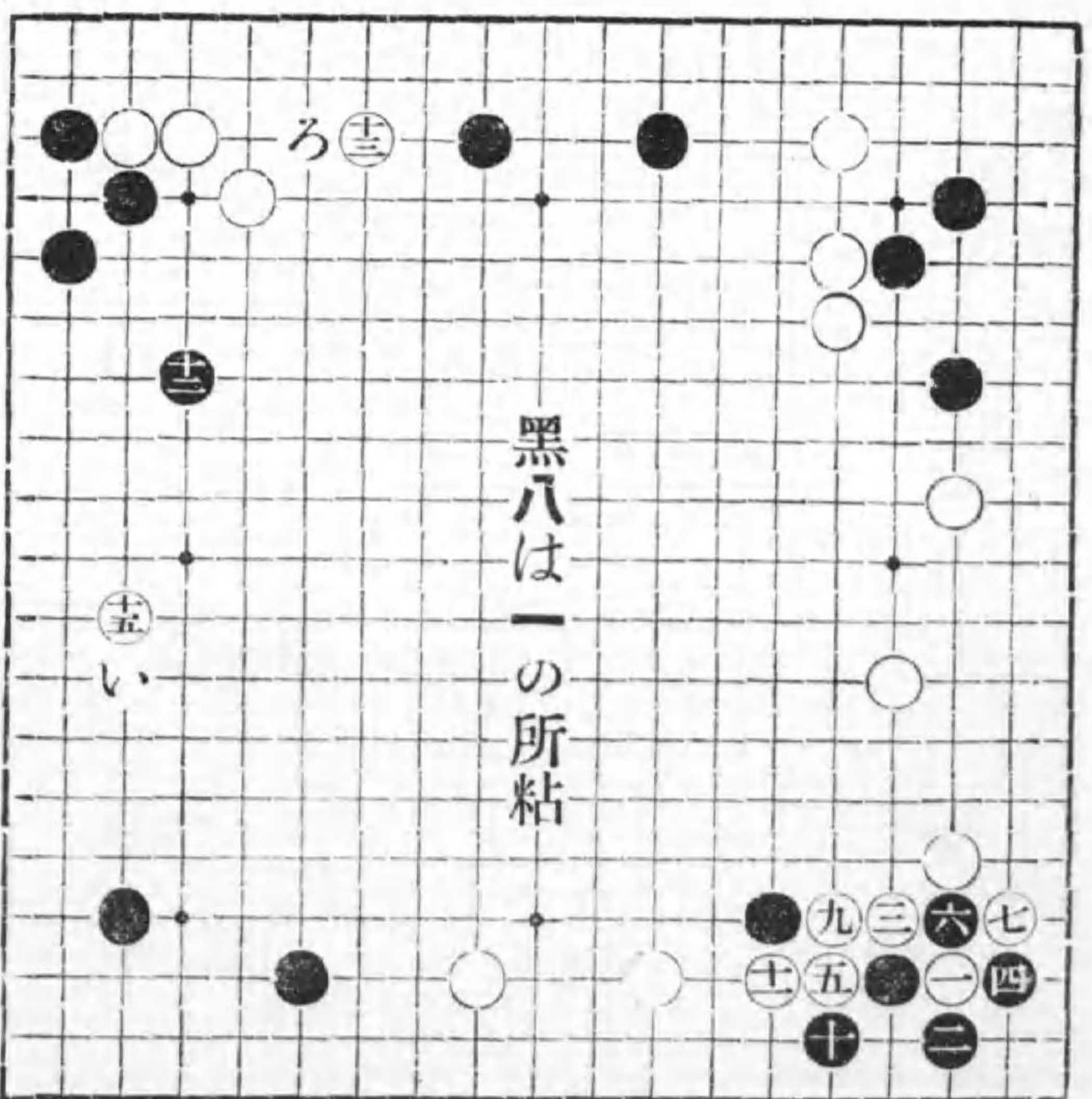


黒十三を二十一、白二十
 二黒二十三だと、白(五)。
 と黒十三は其布石を白に
 與えない一手である。
 白十四を(ろ)なら、次に
 黒(は)。(と替つて黒可。
 白十八を(に)は、黒十八
 と黒待望である。
 黒二十九と成つて黒先着
 の効、顯在である。
 白二十四は用意周到、二
 十四を二十六だと――



前譜白二十六を本譜白一
 だと――

以下白十一まで、と黒に
 變化され、しかも黒は先手
 として黒――
 轉じて十五まで。白惡果
 の布石である。
 白十三を(い)は黒(ろ)。
 では其白三子が前途容易に
 治まらなす。
 前譜黒二十五を二十六は
 白二十五。で白可。

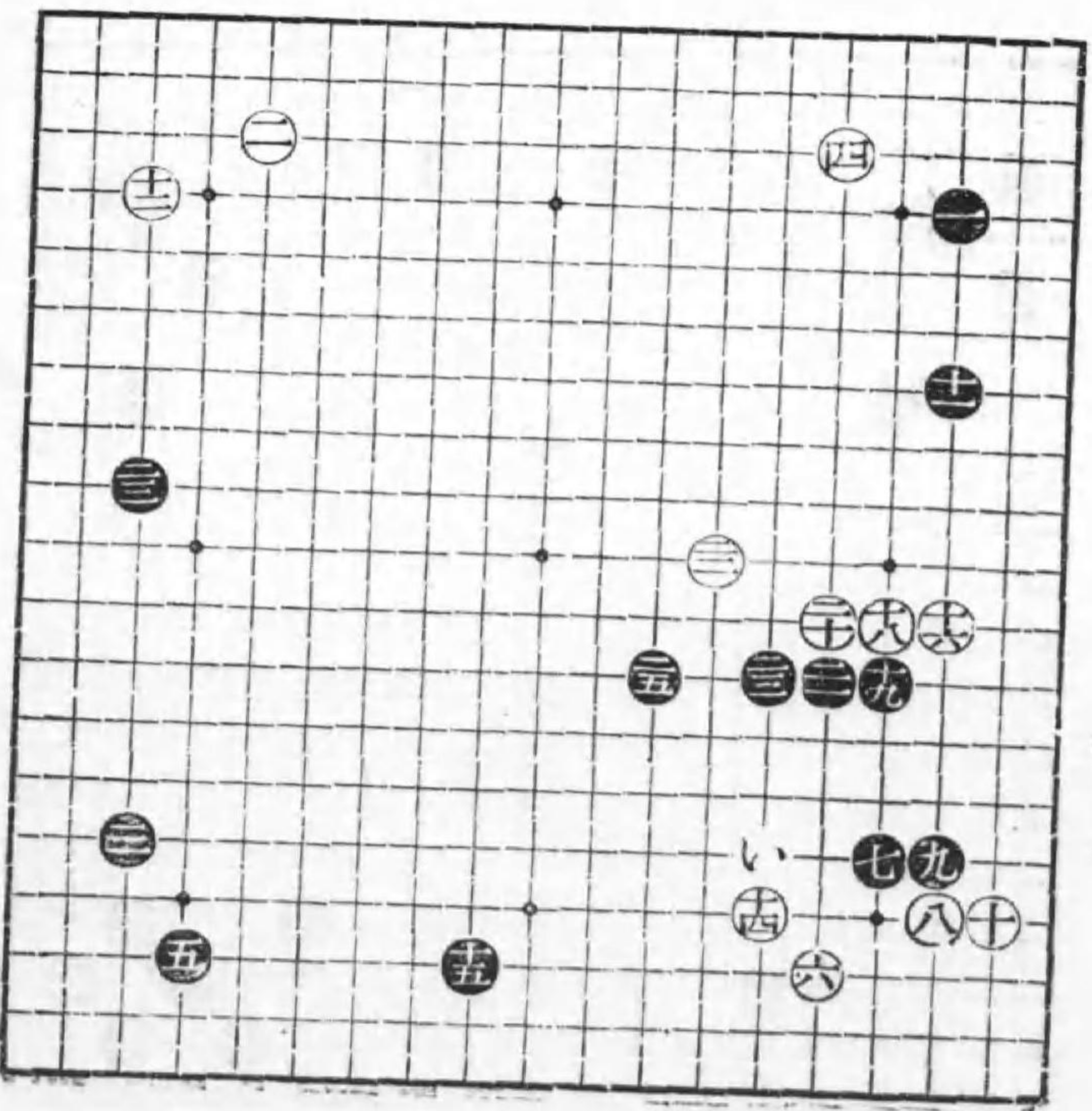


白二に黒三は、三の方向の理を説くのは容易でない先づ白二に黒三、それが黒可である對抗姿勢。ぐらゐに覚えられ度い。

白十四を十五なら黒(い)と飛び右側大規模に拓地。

黒十九より二十五までは黒十一が既に在つて、十一が安定、即ち黒一を。

等の場合を十九で考えられ度い。

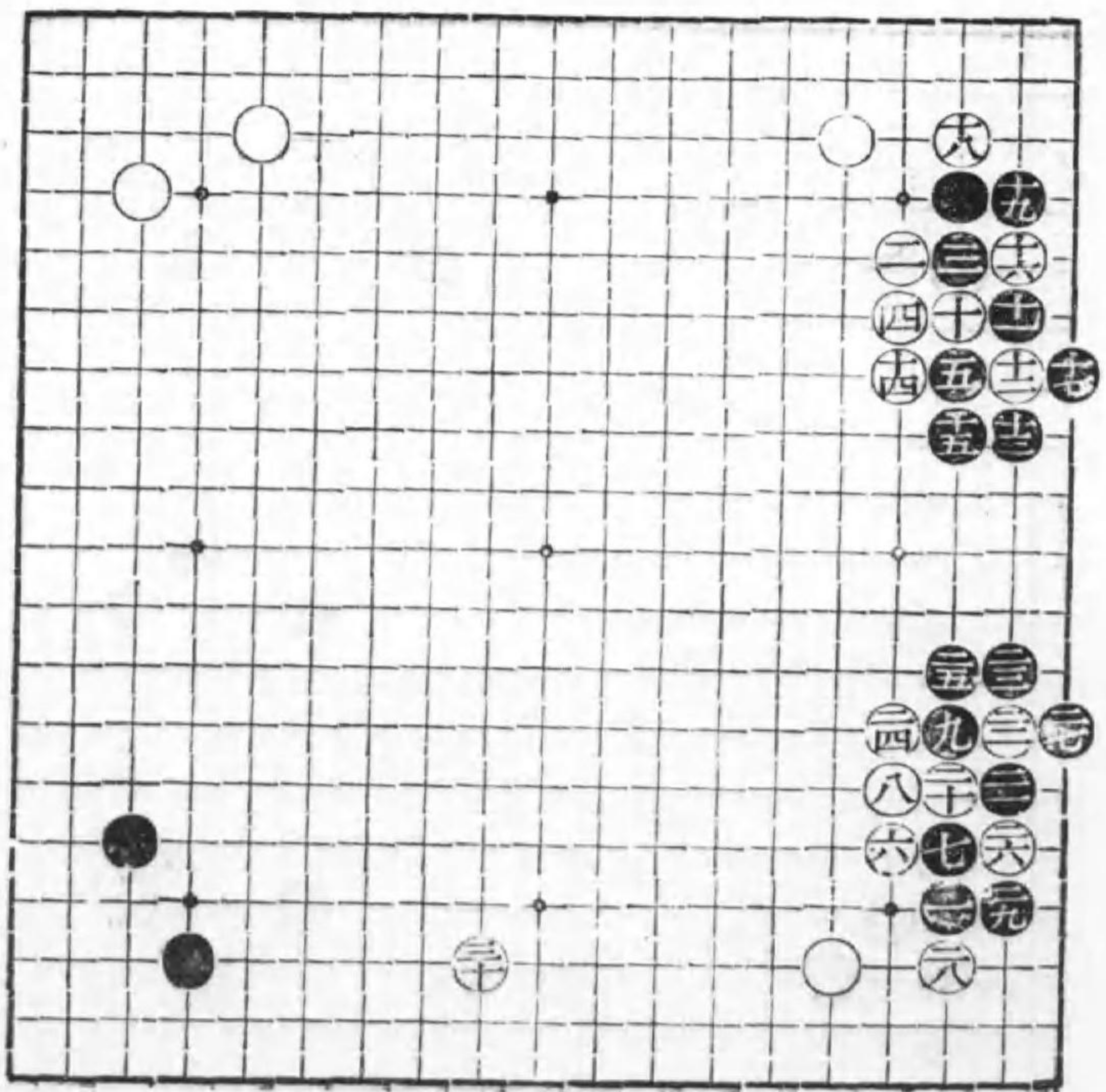


前譜黒七を八だと――

即ち本譜白三十まで成つて、黒悪果の布石である。

といふ事は假令ば一方黒十五まで成つたとして――

十三と十五の面は、字の如くの堅固無比、で其方へ敵を引寄せ、即ち敵を自己の砲臺に向はせ、それが兵術の原理、碁も同理――それをまた一方に砲臺、も眼と鼻の間に。



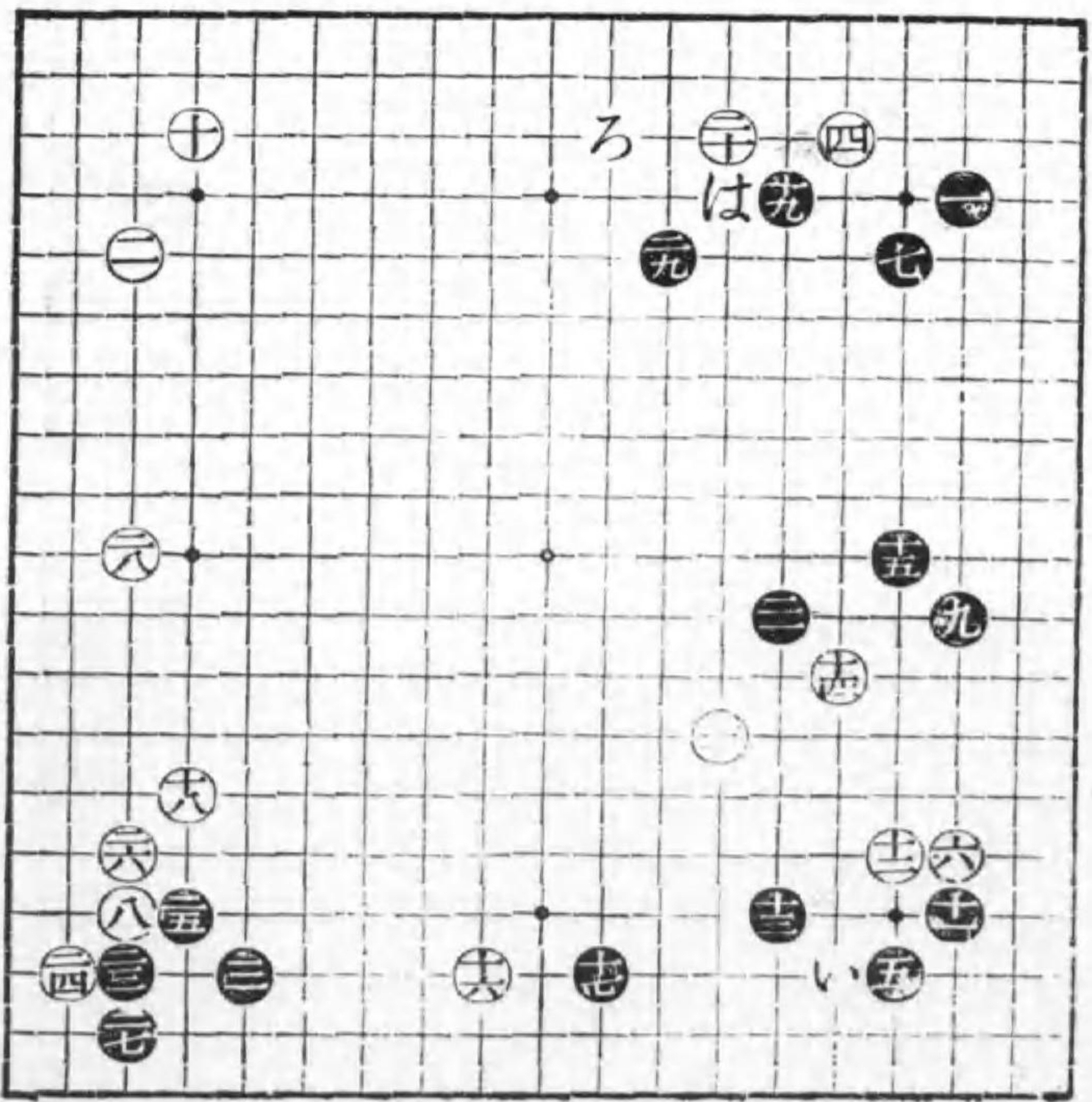
黒二十九までも黒堅實の布石である。

黒十七は(い)と白に來られる配備である。即ち白十六が在つて。

黒二十九を(ろ)は、次に白(は)で自然右側の黒地に悪影響。

白二十八を(は)なら、黒二十八。で黒可。

白二十六を二十七なら、言ふまでもない——



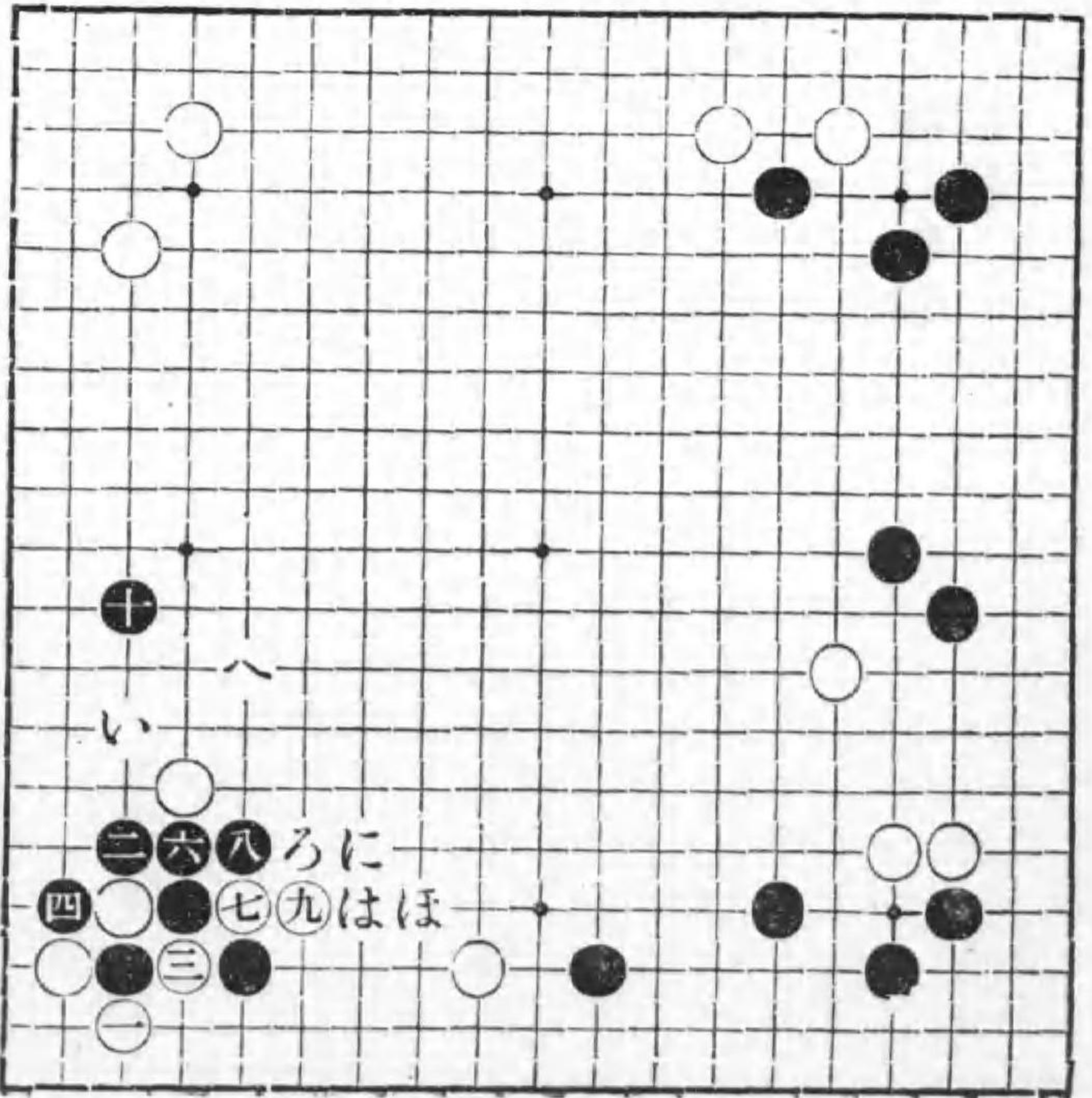
白一に黒二を三は、俗に其形ちを陣笠といつて、無上の悪應手である。

されば白一に黒二白三黒四白五を一の上に粘ぎ、そして黒十まで——

と譜面の如く黒は變化當然である。

黒十に次いで白(い)なら黒(ろ)白(は)——

續いて黒(に)白(ほ)、の時黒(へ)。で黒可。

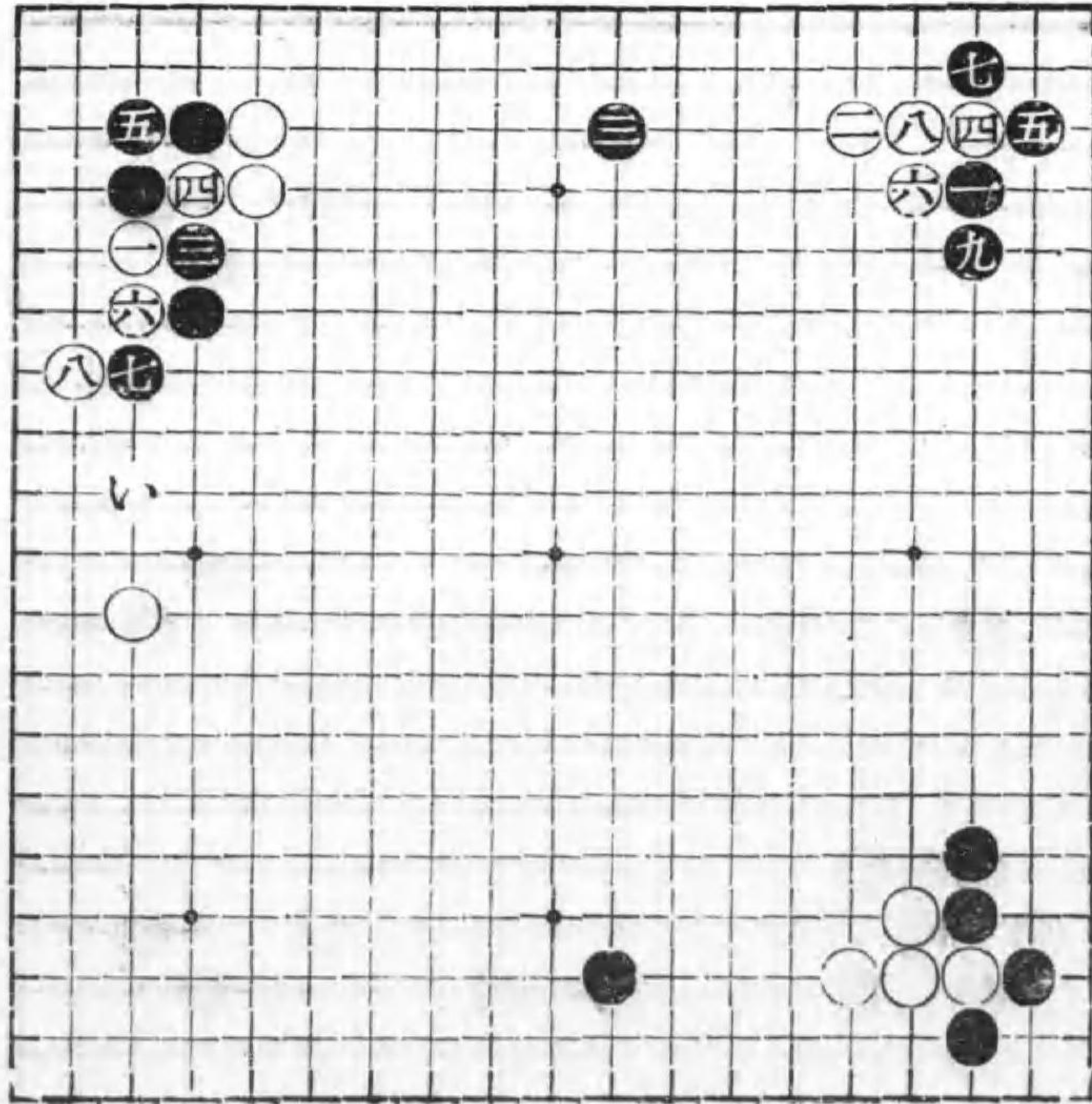


本譜は参考圖である。

右上隅白八は、黒の立場でも同じやう、右下隅の如く成つて――

白四手が固まりすぎ、白に働さがないから、それで無上の悪形、と言ふのである。と分る筈。

左上隅は白二より八まで成つて、黒悪果である。黒に(い)が在れば黒可。



三一四

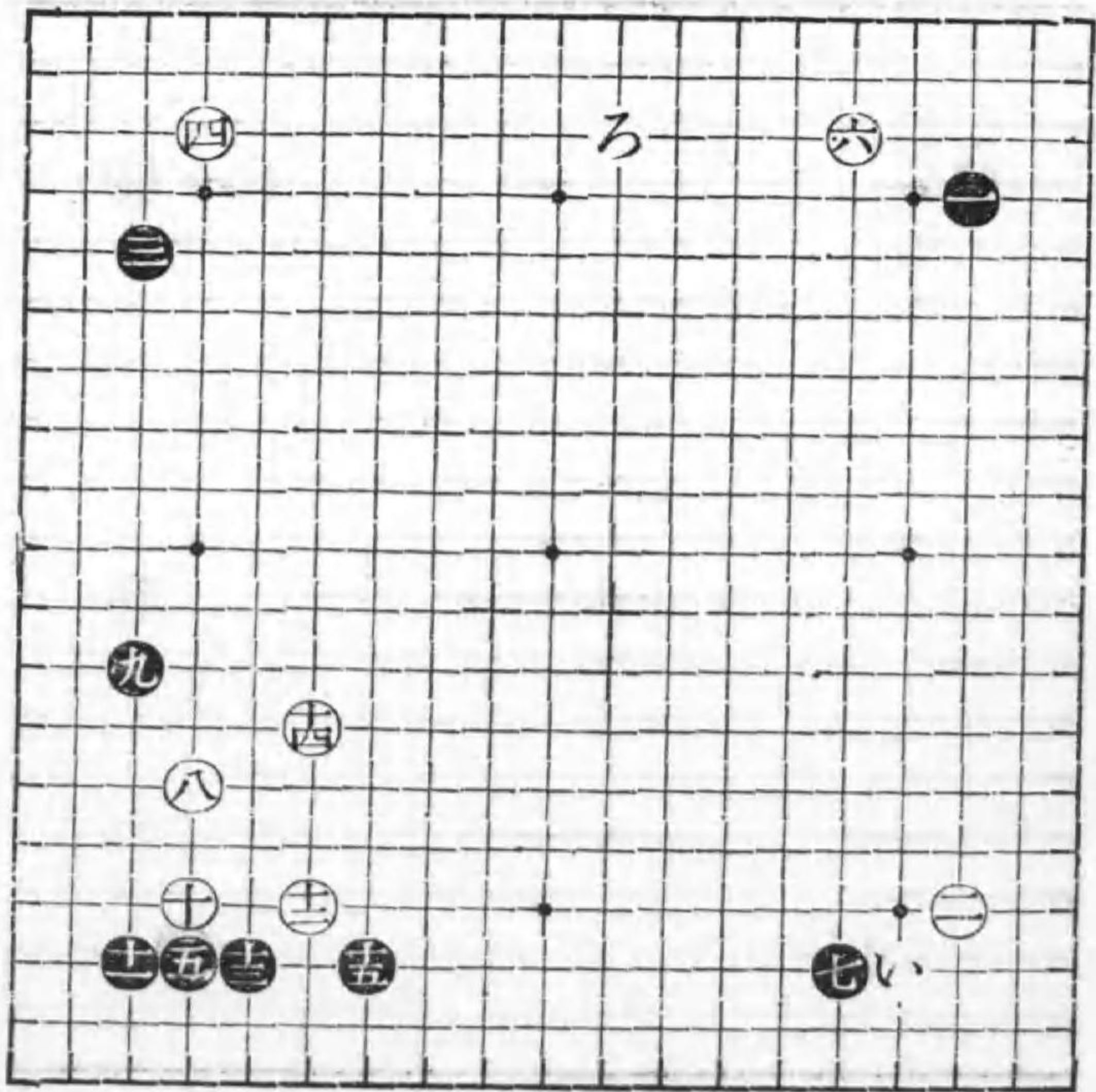
白の趣向は萬とある、それが白二の一例で――

白二を四の方だと黒(い)と調子を執つて來る、其調子を變調にしやうといふのである。

處で黒三、黒三は白五の方なら、黒四。

に白六は黒(ろ)。

即ち黒三は一の基調に相近じ。また黒五にも協調である。



三一五

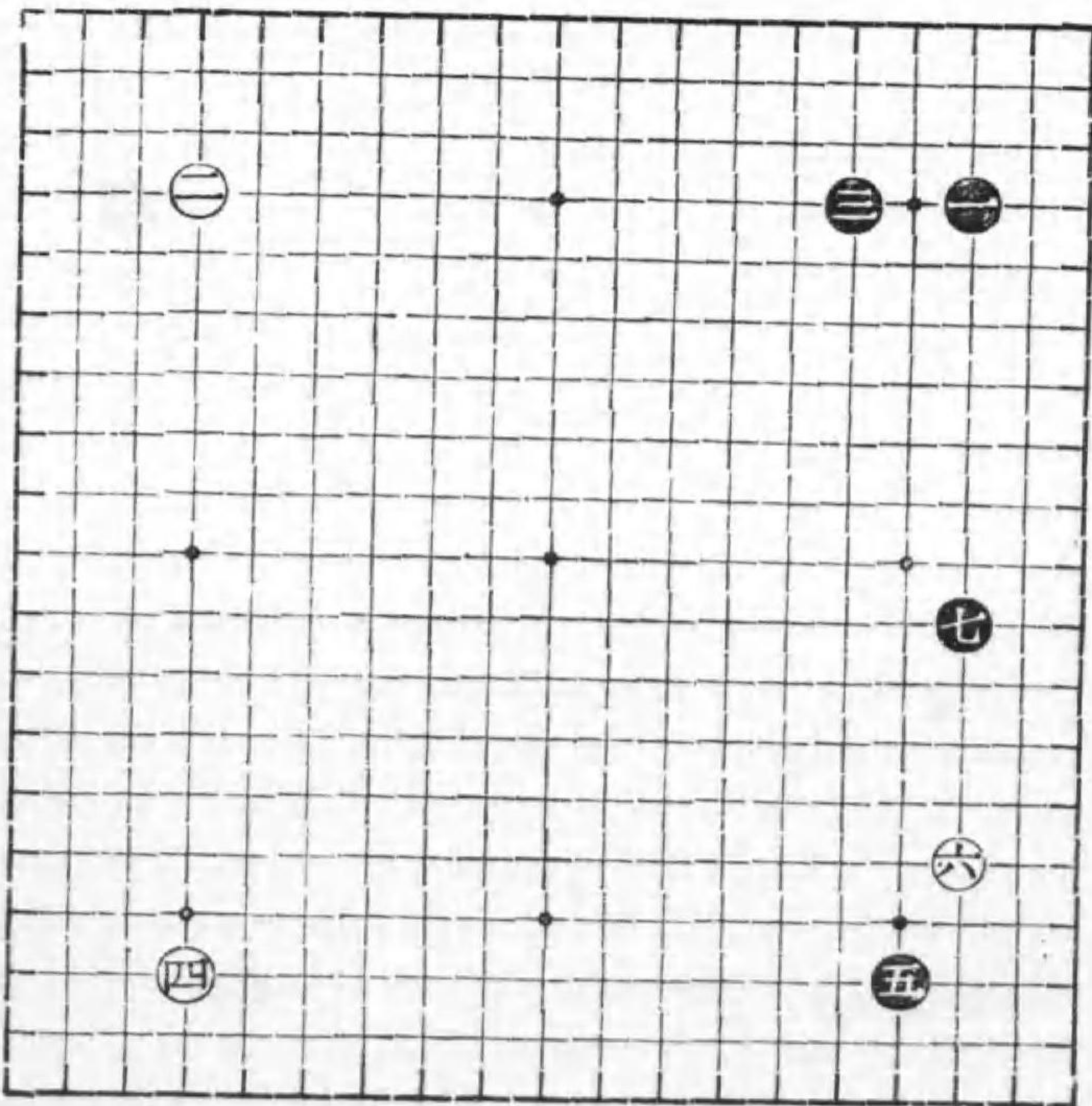
布石原理の一例は本譜に見られるのである。

即ち黒三に白四なら、黒七まで――

黒七は第一黒五と協力、白六を攻め、また上方、一との間が六路あつて、黒は拓地に豊富。

それで白四は多く六の方先據である。

白二の星は黒に分り易くない、局勢變化の一手。



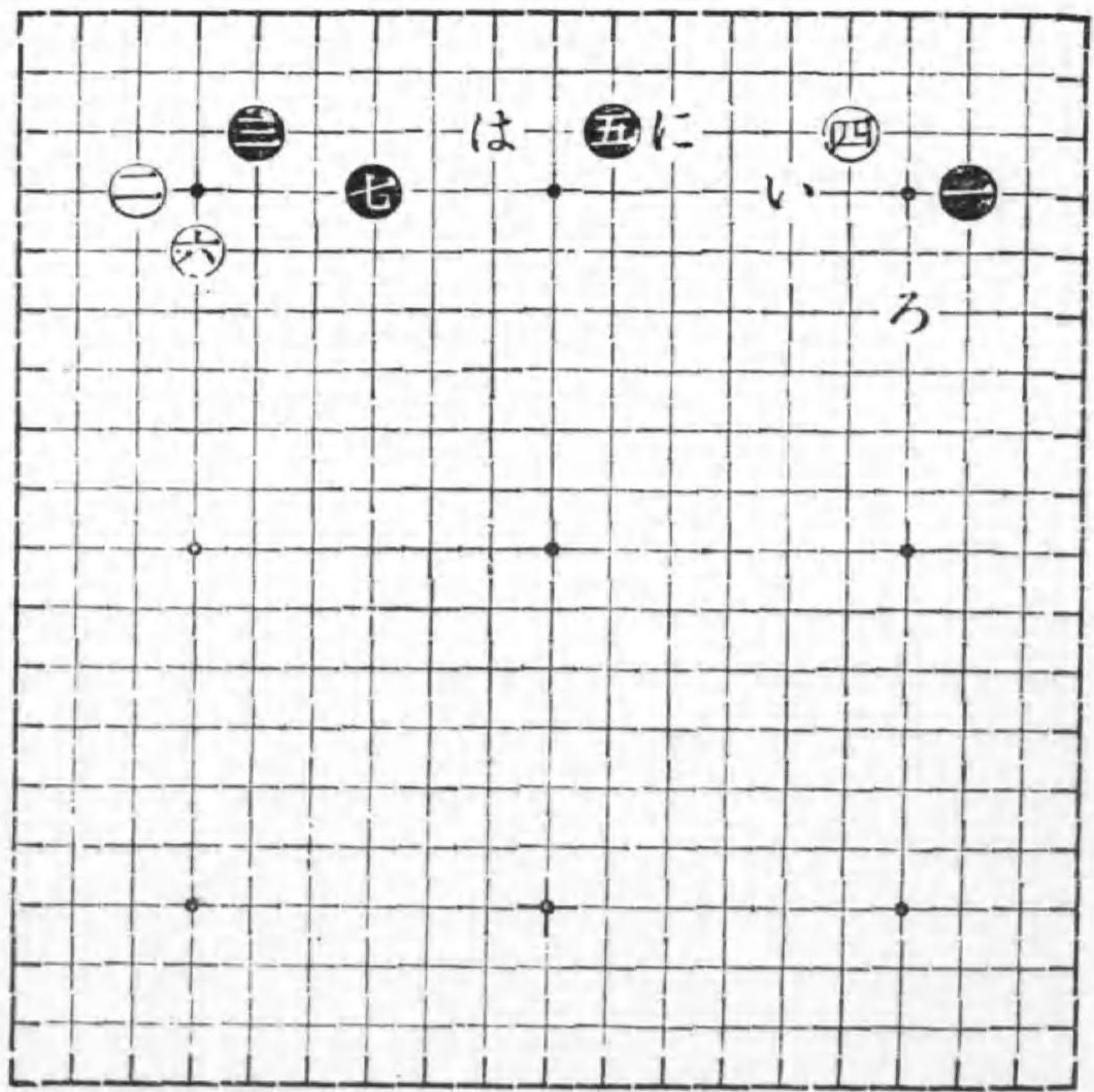
本譜白二に黒三も、以下黒七と成つて――

前譜同様、白不利の布石である。

即ち白四は攻められ、また黒七と其處は黒地。

等で白四を(い)黒(ろ)白(は)と白は工夫である。が黒(ろ)を――(に)。

即ち黒(に)は白(い)の作戦看破である。

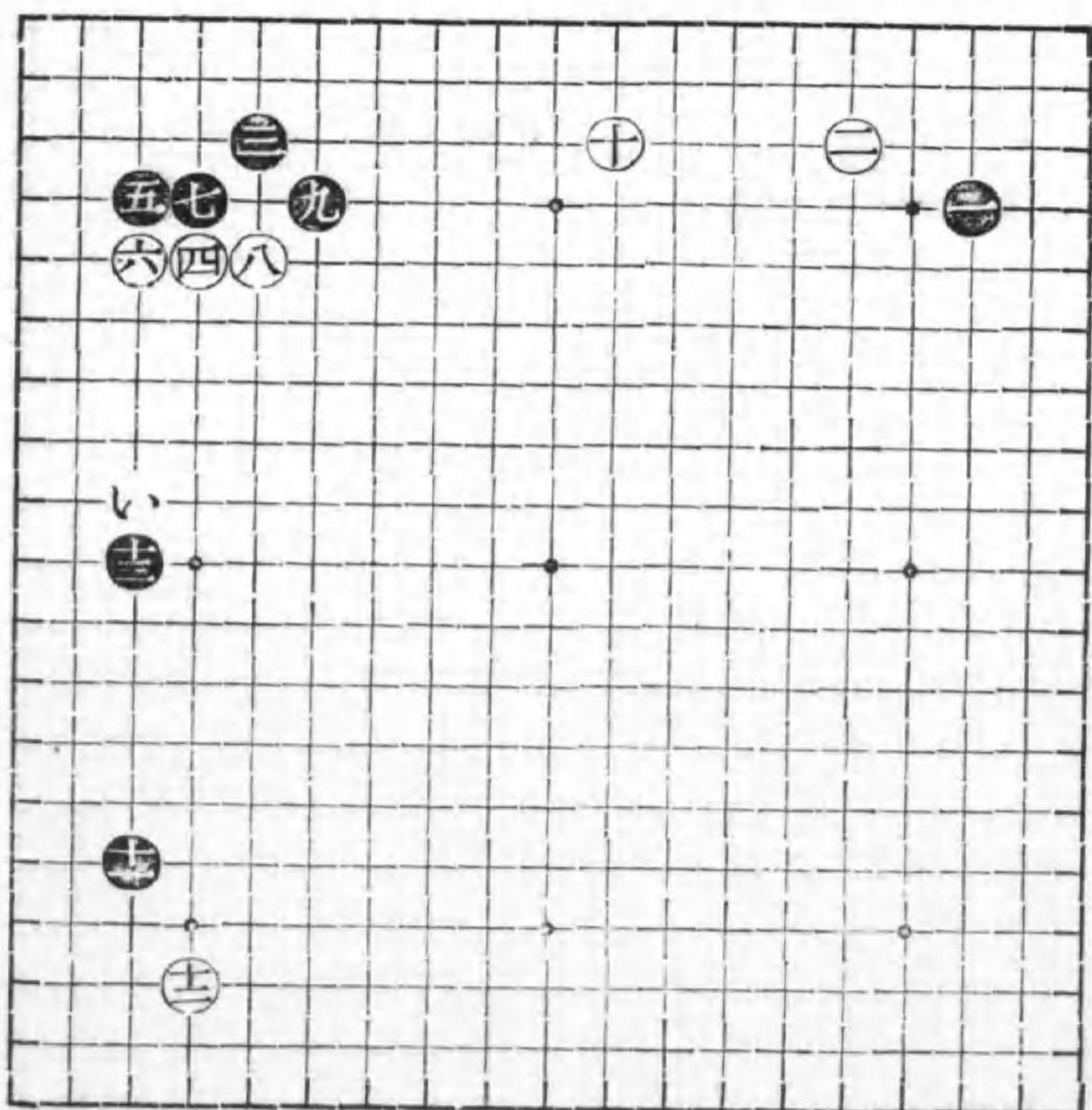


白二と黒一に直に白肉迫の布石もある。次に黒の動向如何。といふ白の氣鋭である。

が黒の對策は黒三と其方向、白四を五なら、黒十。また白四を十なら黒五。

黒十一も三と同様の意味即ち白十二を十三なら黒十二。黒十三は――

(五)と一路、白三子に追つても黒可である。



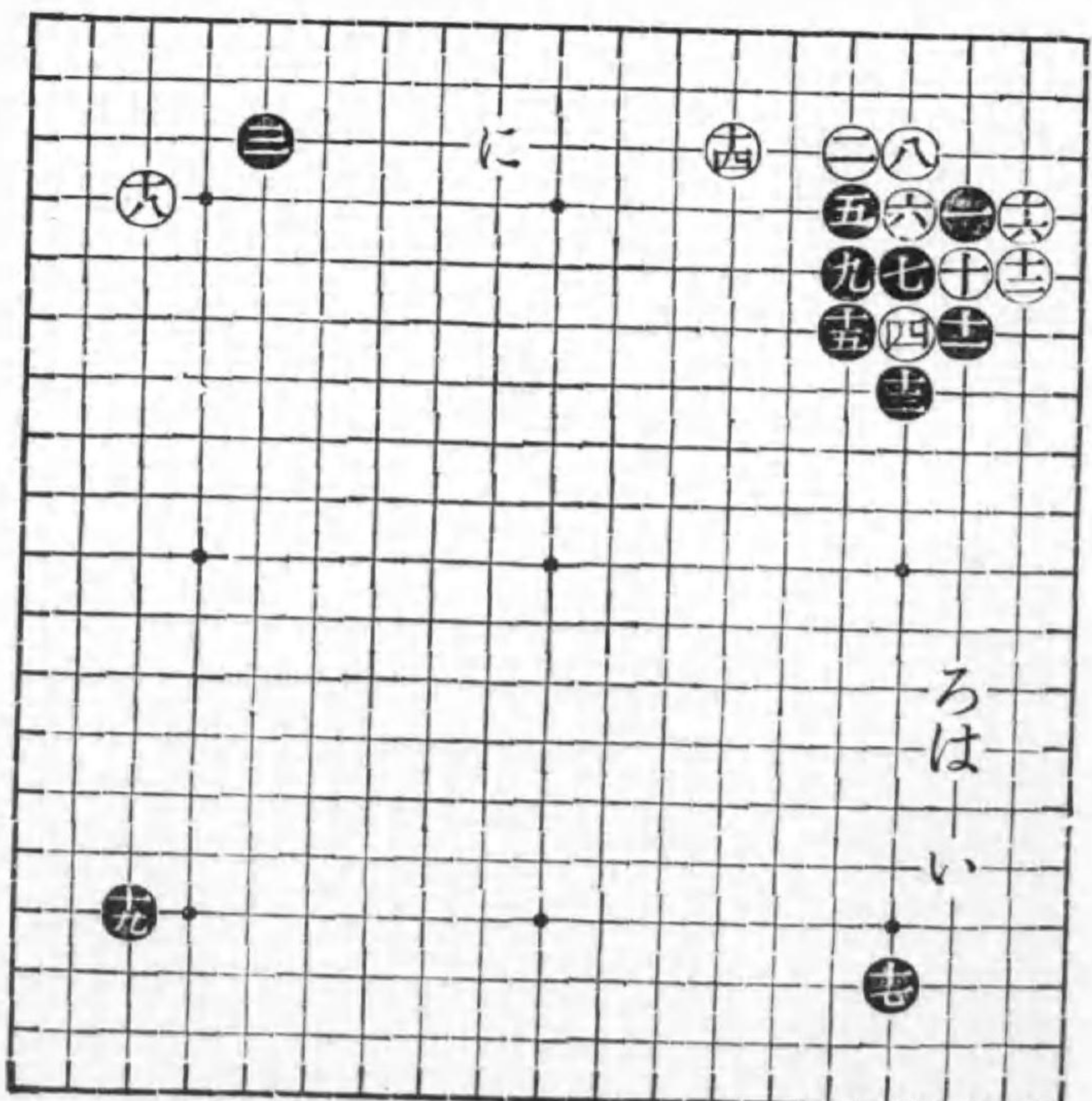
白四より十六までは、先づ固定白地が出来、實質本位の布石である。

黒十三は白四を征に取れ黒先手十七が――

次に白(い)なら黒(ろ)、又は黒(は)と待望、の應接である。

白十八に黒(に)と必要ではない。

早く明隅占領、黒十九とは限らぬが要は其方。



白四には黒五——

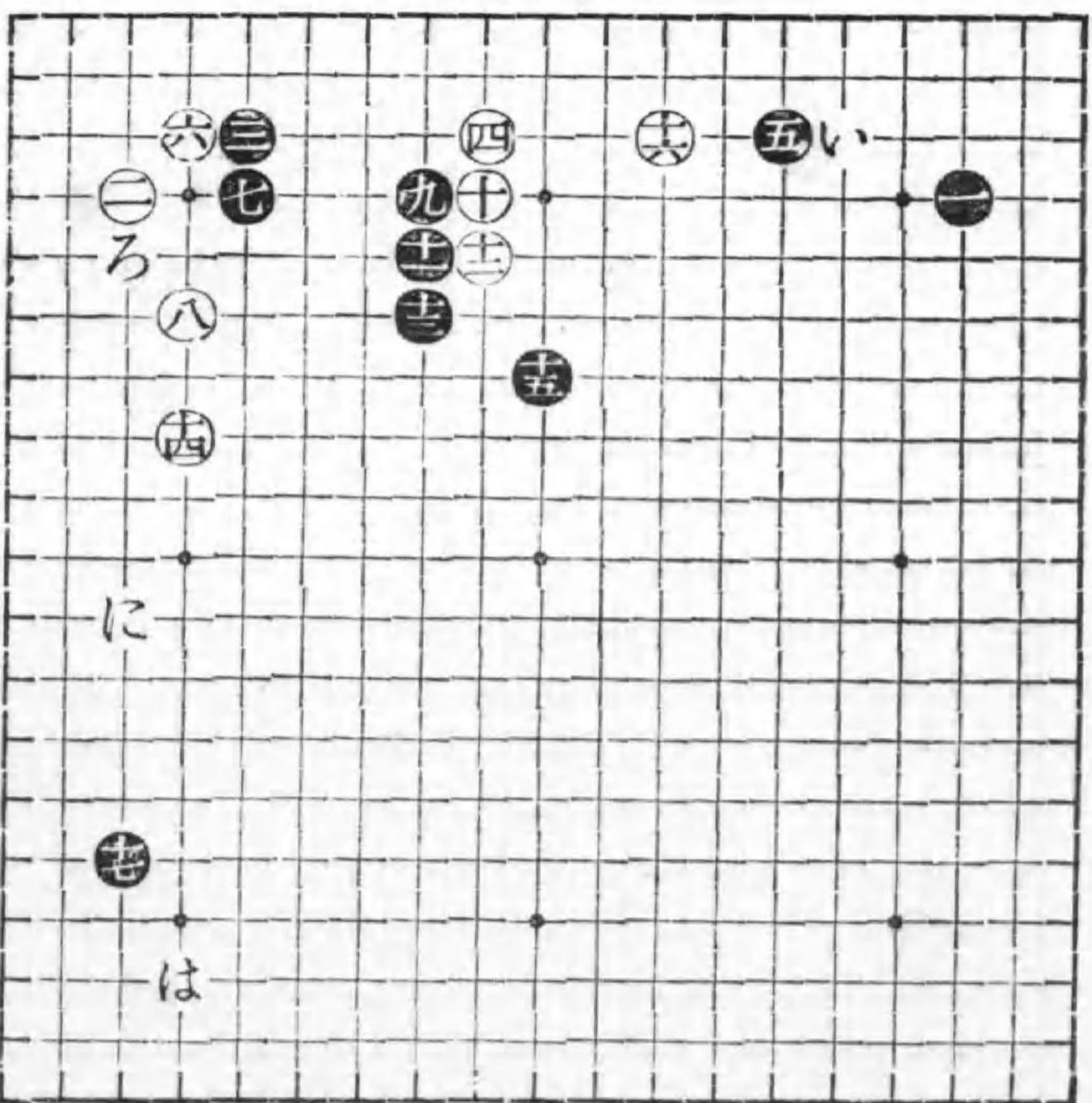
即ち黒五を他だと白(い)では黒三の先着は無効である。と分る筈。

黒九より十三までは、見られる如く黒七の方に備へ次に黒(ろ)。

それが白十四と用心。

黒十五は先づ中央把權の第一歩。に加えて白十二以下三子の攻め。

黒十七は——



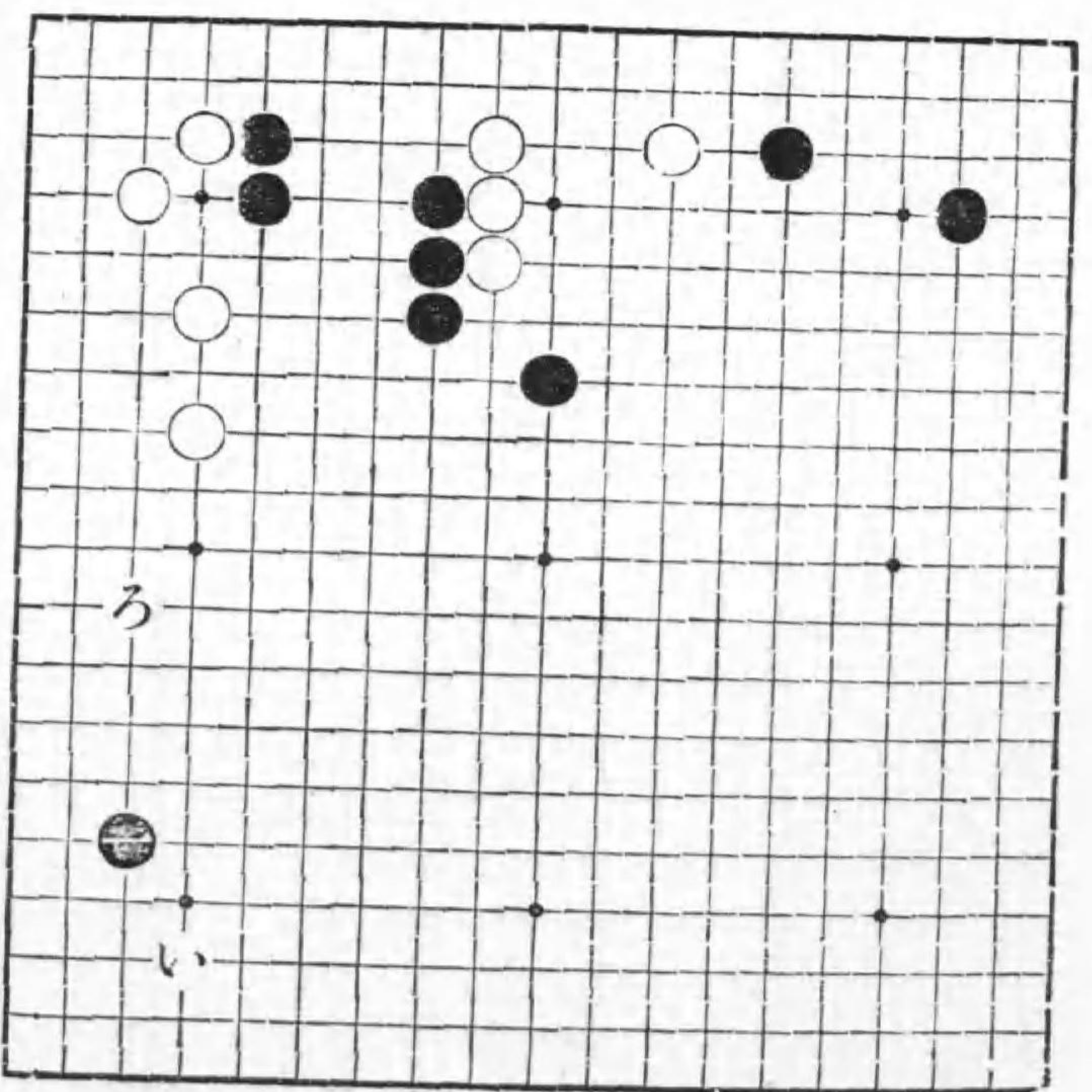
前譜黒九も白十六と成つて白四手、即ち白割合悪い布石である。
が白十六は手拔も出来ない備へである。

前譜黒十七を本譜黒一に

變へ——

次に白(い)は黒(ろ)。白(い)を(ろ)は——

黒(い)。何れでも黒(い)からである。即ち黒一の據點である。



布石も萬と幾種、限りはない。それで原理布石二三種に止め、後は讀者の工夫に任せやう。原理一でも相當に應用できるのである。

黒一に白二を四なら、黒(い)。と黒一は其意向である。また黒五より九までも右側に好布陣である。此れで黒一の基調も明瞭であらう。

白十は、十を(ろ)だと黒(は)。また假りに白(は)だと黒(ろ)。と其他も其如く黒に來られて白面白くない。といふ際の據點と思はれ度い。また白十二を例えれば十三なら白十が星に在つて、黒次に十二の所。即ち何れからでも中央の十線、それが大場といふので、なほ例えれば黒十三を(に)は、二線、黒劣つて。と觀られやう。等も布石原理である。

黒十五は次に白(ほ)と突入なら、黒(へ)と躍進——戦つて有利、それが黒十三、十五の配陣裡の方略である。

黒一は一の上の基調で、

同一人の相手に負け込み、

何とか氣を——

轉換、などに用ひられ、

始めての相手に左様黒一は

別に差支えはないが——

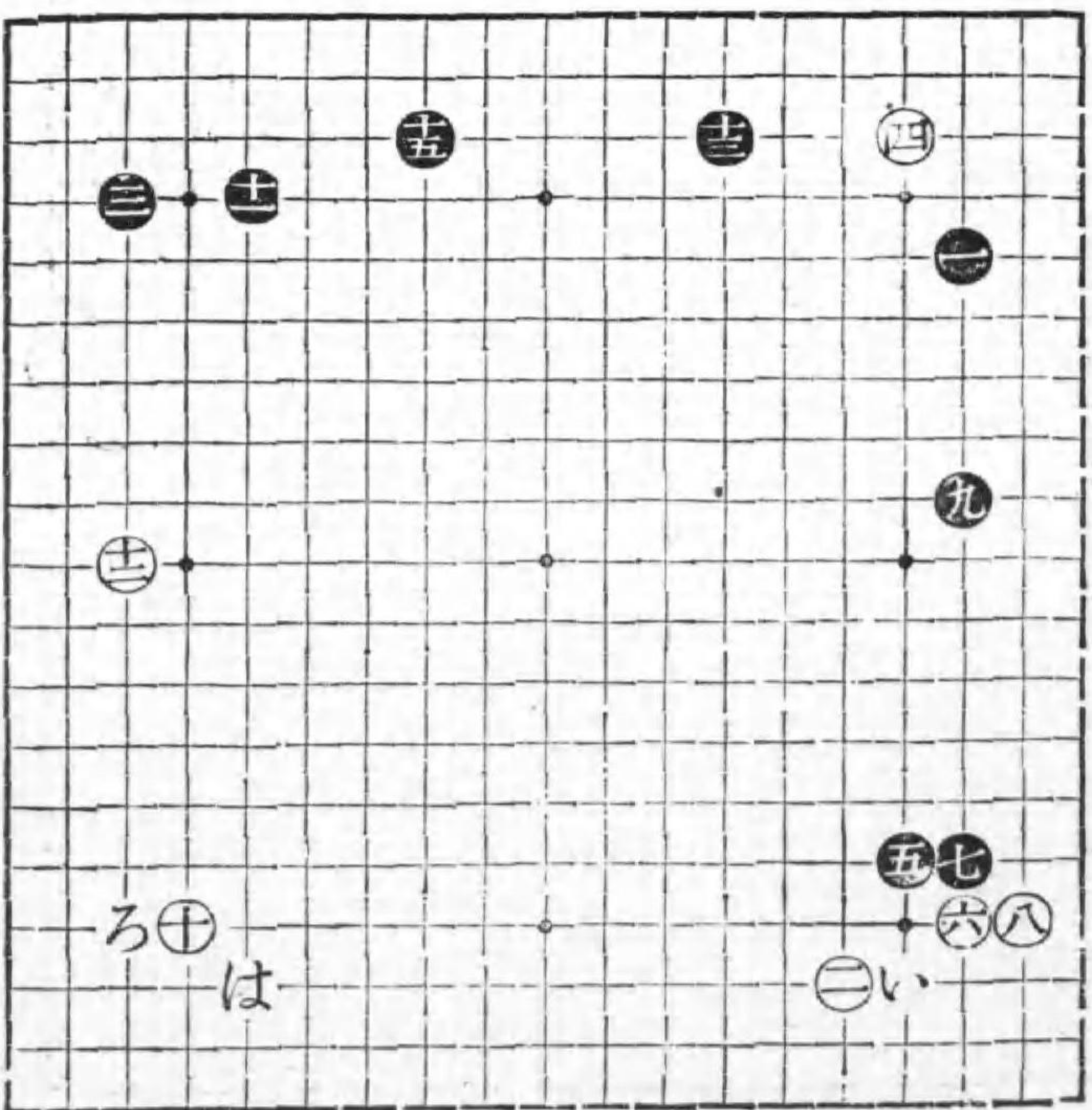
一寸不真面目にも見られるのである。

なほ同一人と對局黒一を

一の上は、白の方で何か工

夫してゐやう。其工夫を無

駄にし。等の際にも。



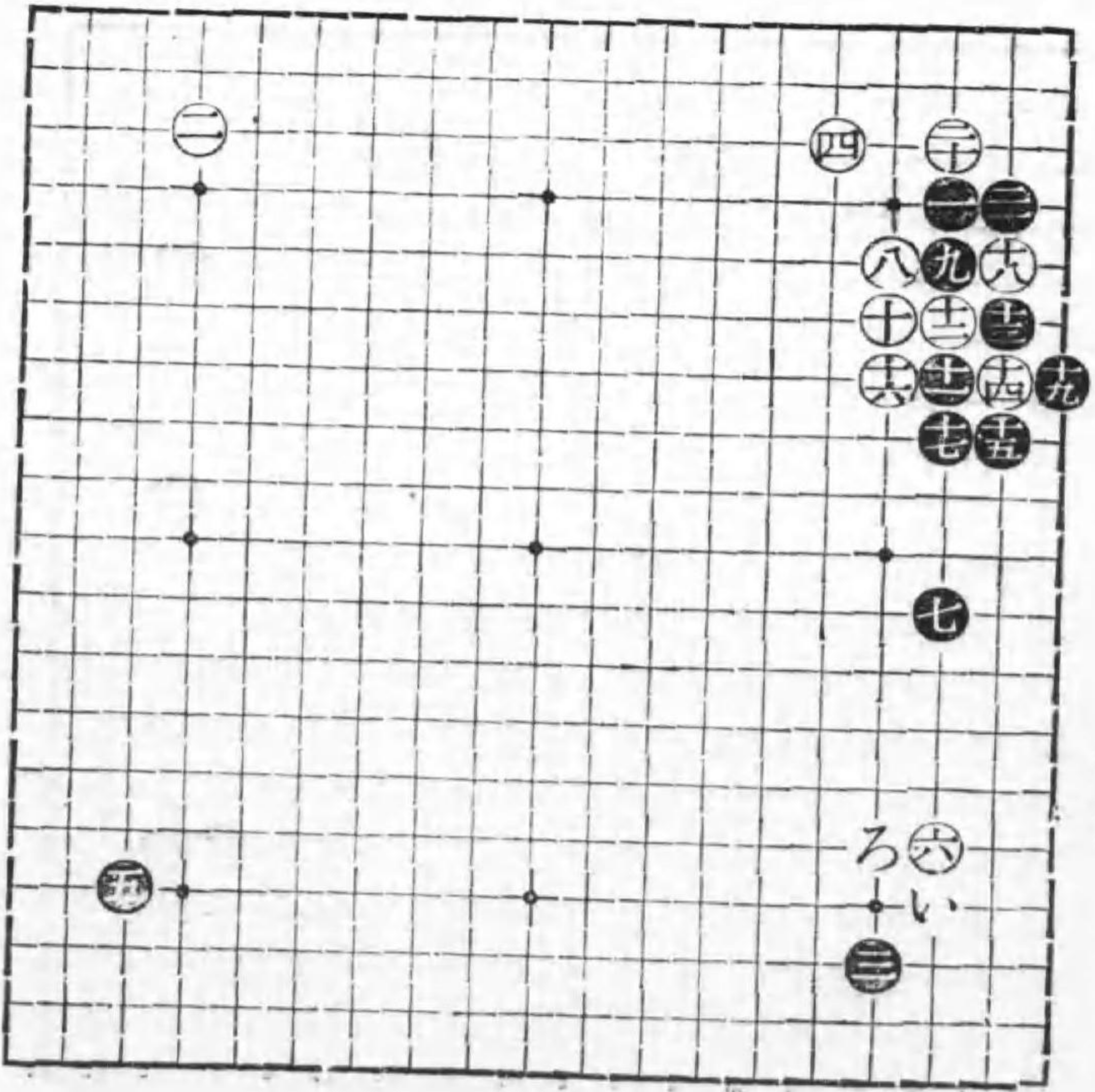
本譜黒七が悪い、布石原理である。

即ち黒十五と十七の面は前にも堅固無比と言つた、その面を――

味方黒七で威力發揮を妨げ。味方は討てないからである。

黒七を除いて――

白六黒三の在る時、(い)と黒は白六に當て、白(ろ)以下次譜。



三一四

本譜白丸黒丸は前譜黒七を除いた假想圖である。

されば黒の手番、黒一がそれである。

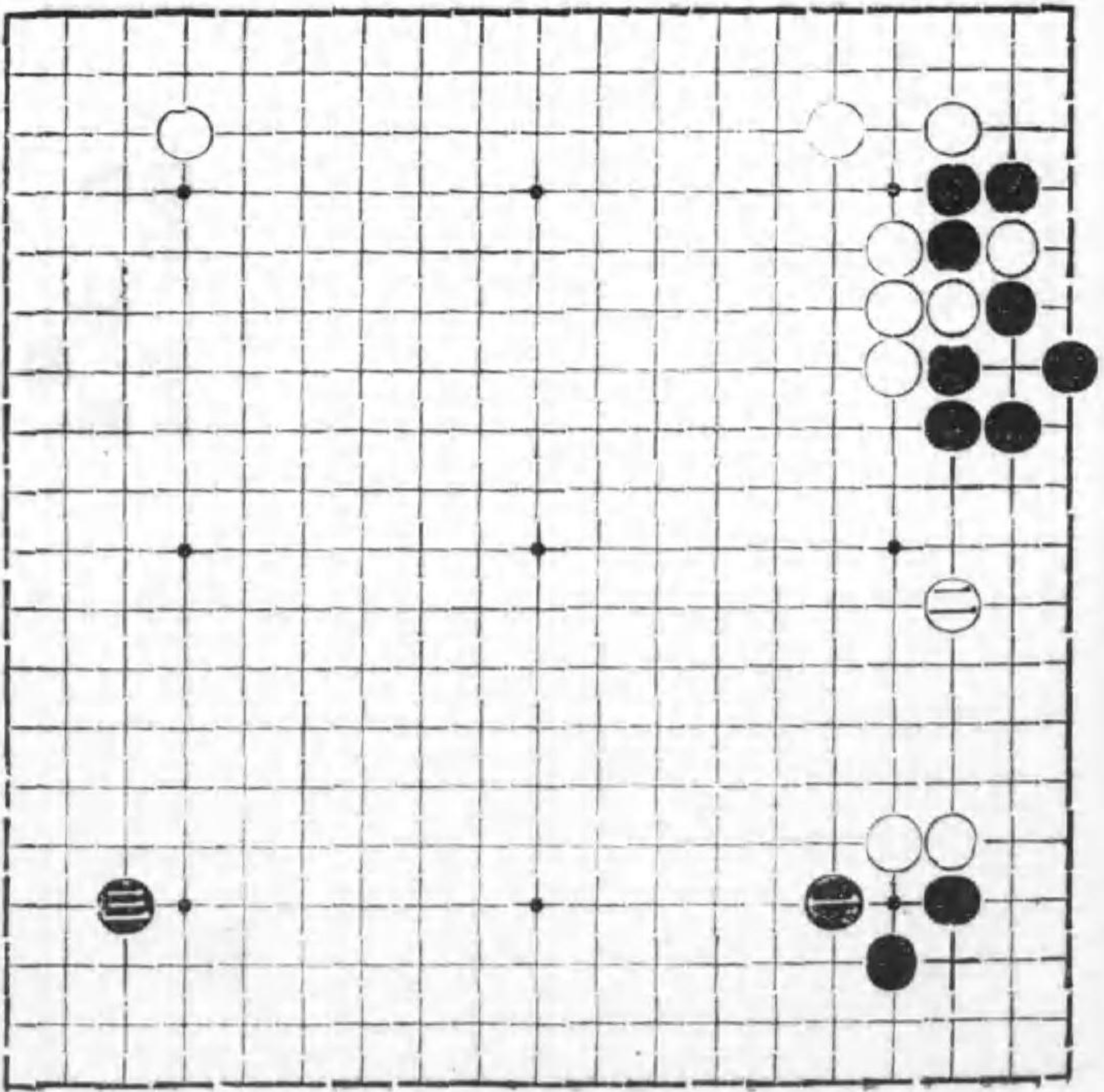
黒一は白二と替つて可。

即ち白二は單に自己の備へであつて、將來に目的も無い。

それに反し黒一は次の黒三と協同動作、甚だ有利の布石期待である。

それで前譜黒七は一手の價値、大半消失。

相先

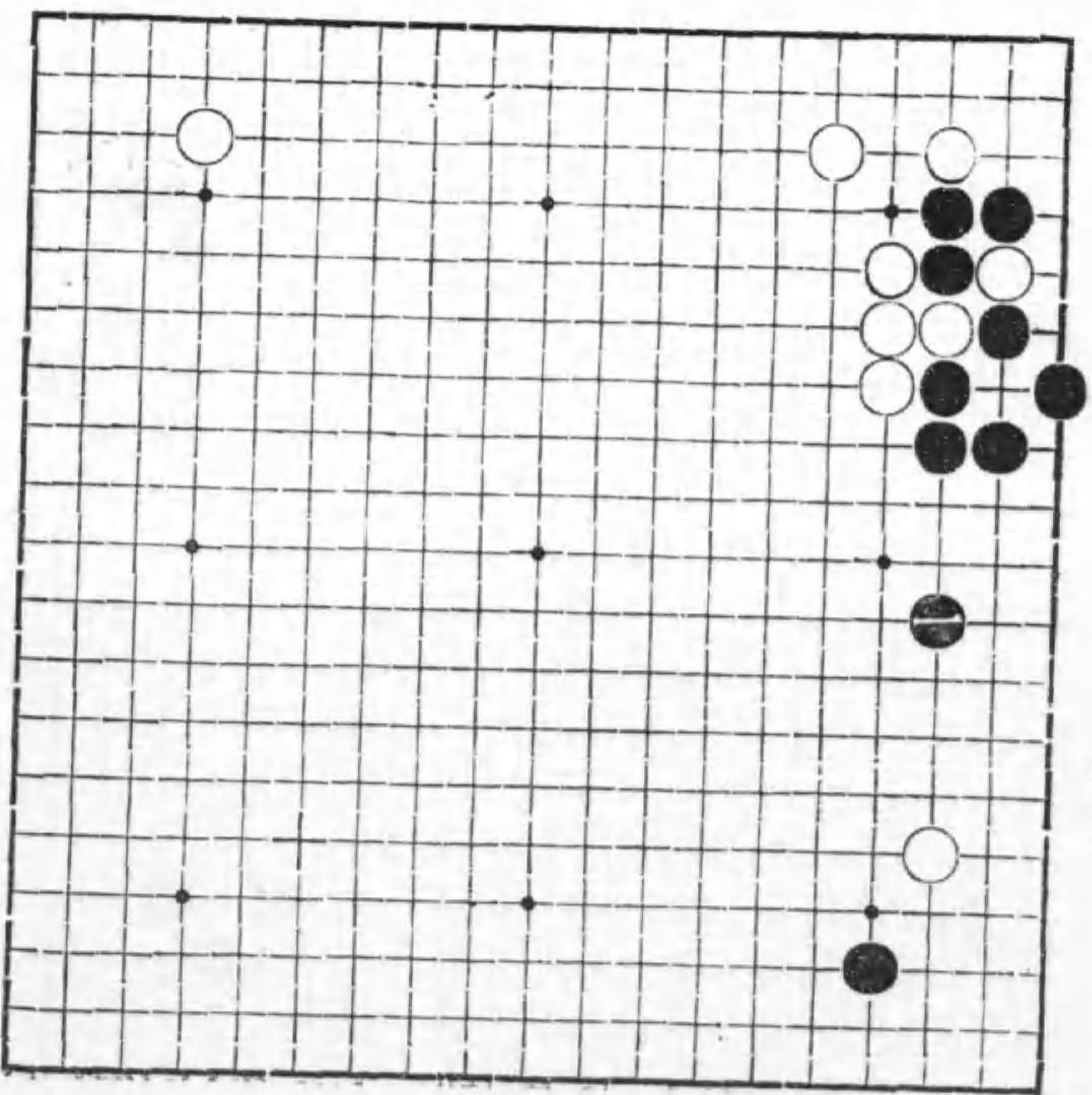


三一五

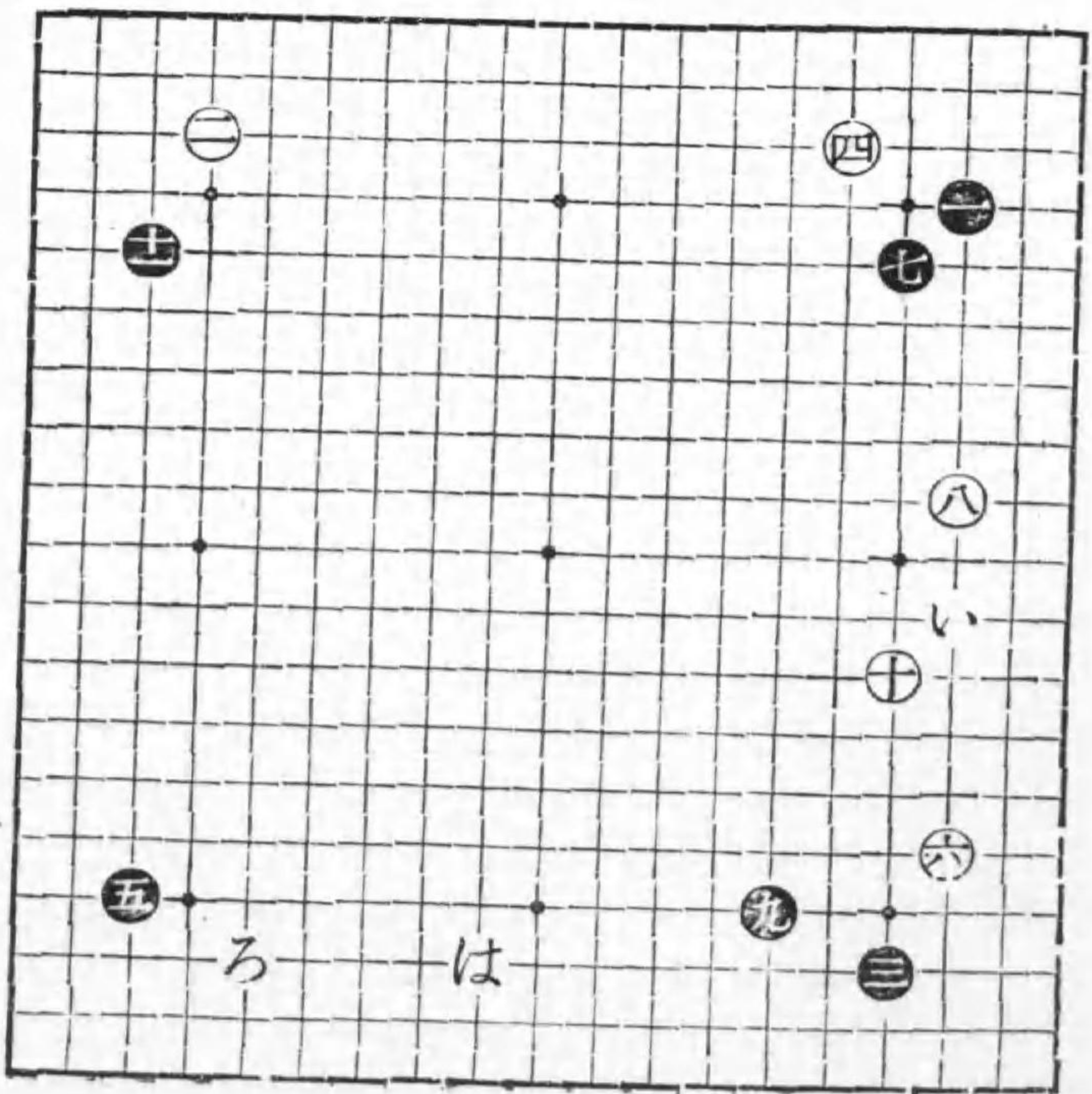
一手の大半消失は殆んど先着の効を解消、自己から解消もおかしいが。

等で敗因、それで布石の大切なる事が判り、布石で大體、前途の勝敗豫見さるもの。

黒一を一手の價値と思ふ哉。思はれないであらう。思ふ人は上達の行止り、だから、念を入れて觀られよ。



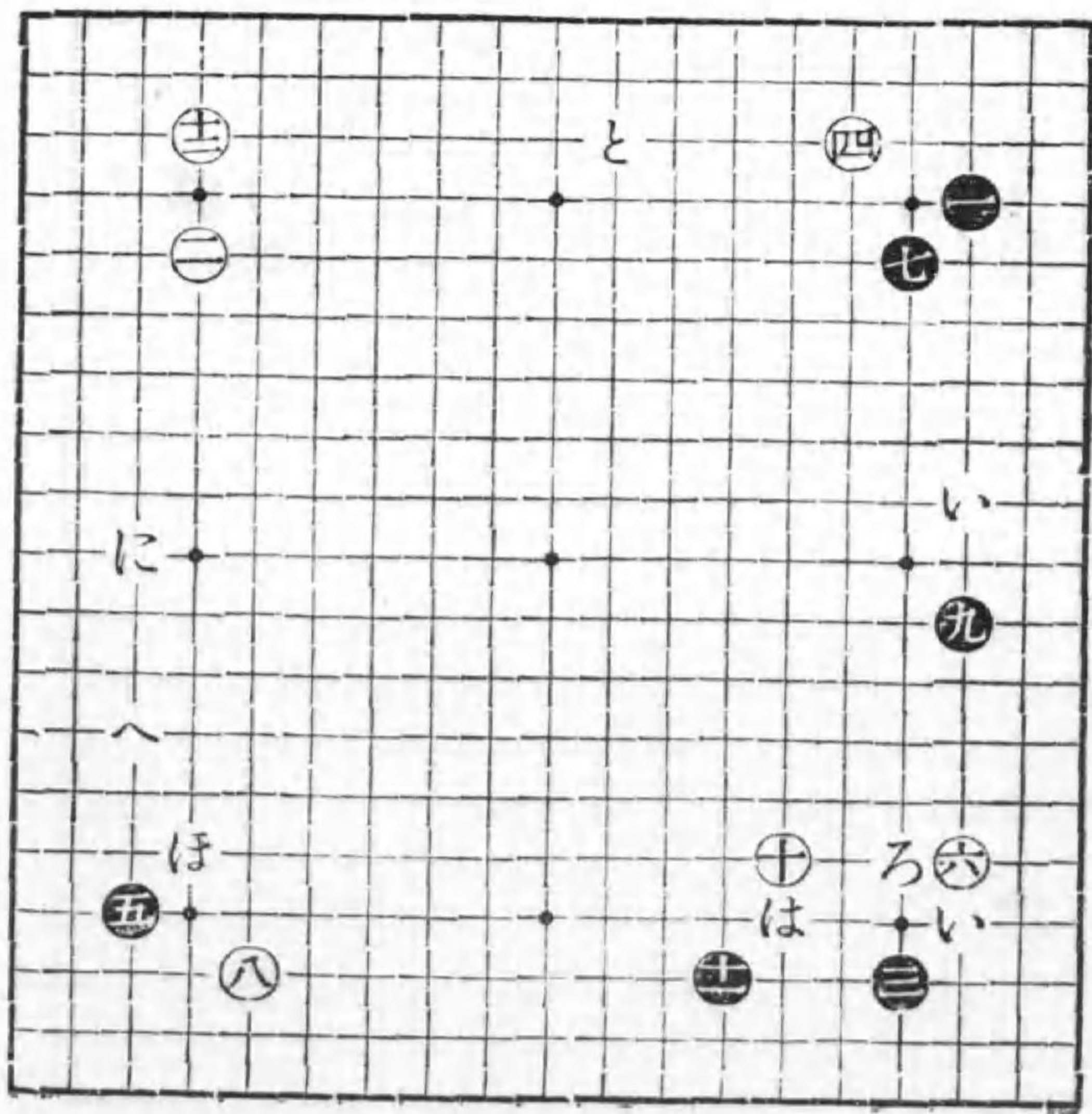
黒一で(う)の悪い事は解つた筈。
さすれば黒七の順も分る筈。七は次に(い)。
で白八。
黒九は次に(い)と打込みで白十と防備。
で黒十一。
黒十一は次に白(ろ)なら黒(は)。
と黒の順序堂々である。
と此れも解る筈。



白八を(い)とは限らない
十二と成つても白悪くはない
布石である。

白十は十を十二だと、次に
黒(い)白(ろ)黒(は)と
其れを避ける白十である。
白十二の次に黒(に)だと
白直に(ほ)。

で黒悪果を重ねて言ふ。
黒五の方なら(へ)。
また上面なら黒(と)等。
先づ通常の布石である。



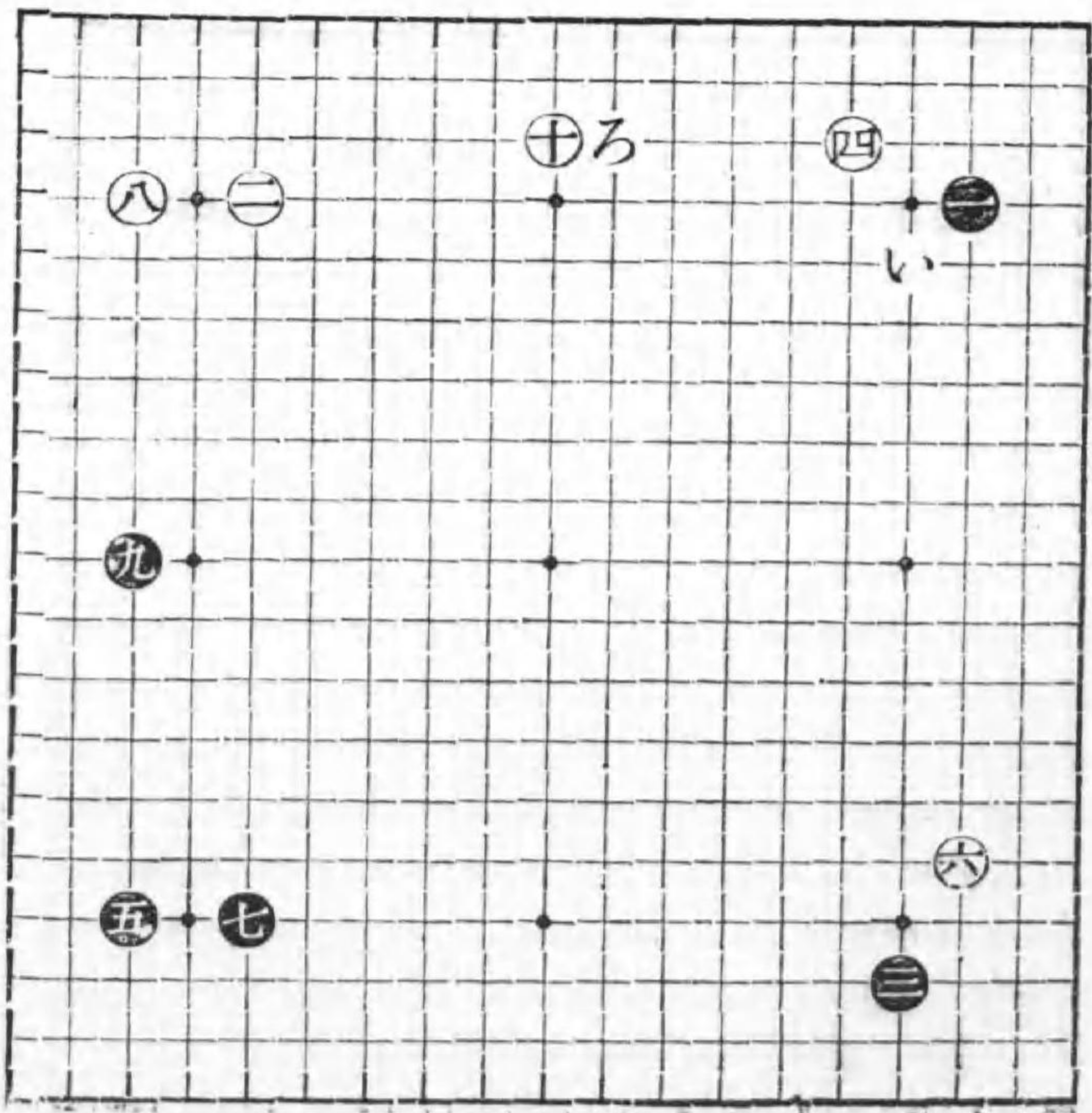
黒七を(い)とも限らない
左様黒七も通常の布石であ
る。

天下は広いもので、限る
事は少ない、それが碁も廣
い面白いもの。

白十は黒一白四の方向が
此れで其點——

實際は黒九を(ろ)。即ち
黒九は單に大場。

黒九を(ろ)は同じ大場で
も白四を攻め。だけ優る。

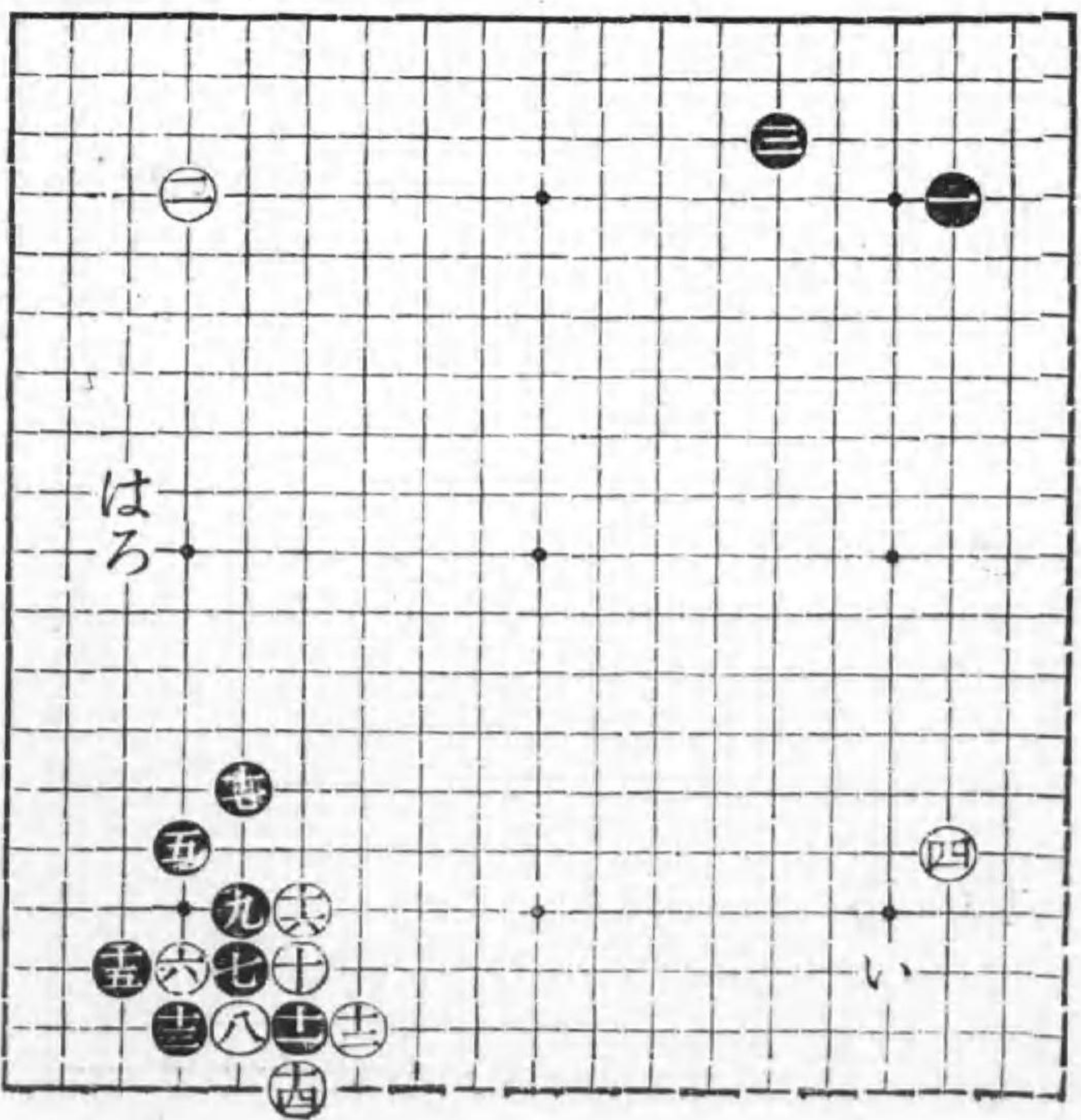


黒十七までにも布石の原理が窺はれる。

黒五は次に六と待望。それは右上隅と二ヶ所築城。先づ前途分り易い布石だからである。

それで白六を必ずと見て十七まで運ばれ。

それが原理の窺はれる所。黒十七の次に白(い)は、黒(ろ)でも(は)でも、十七の方の堅固に任せ。



三三〇

はろ

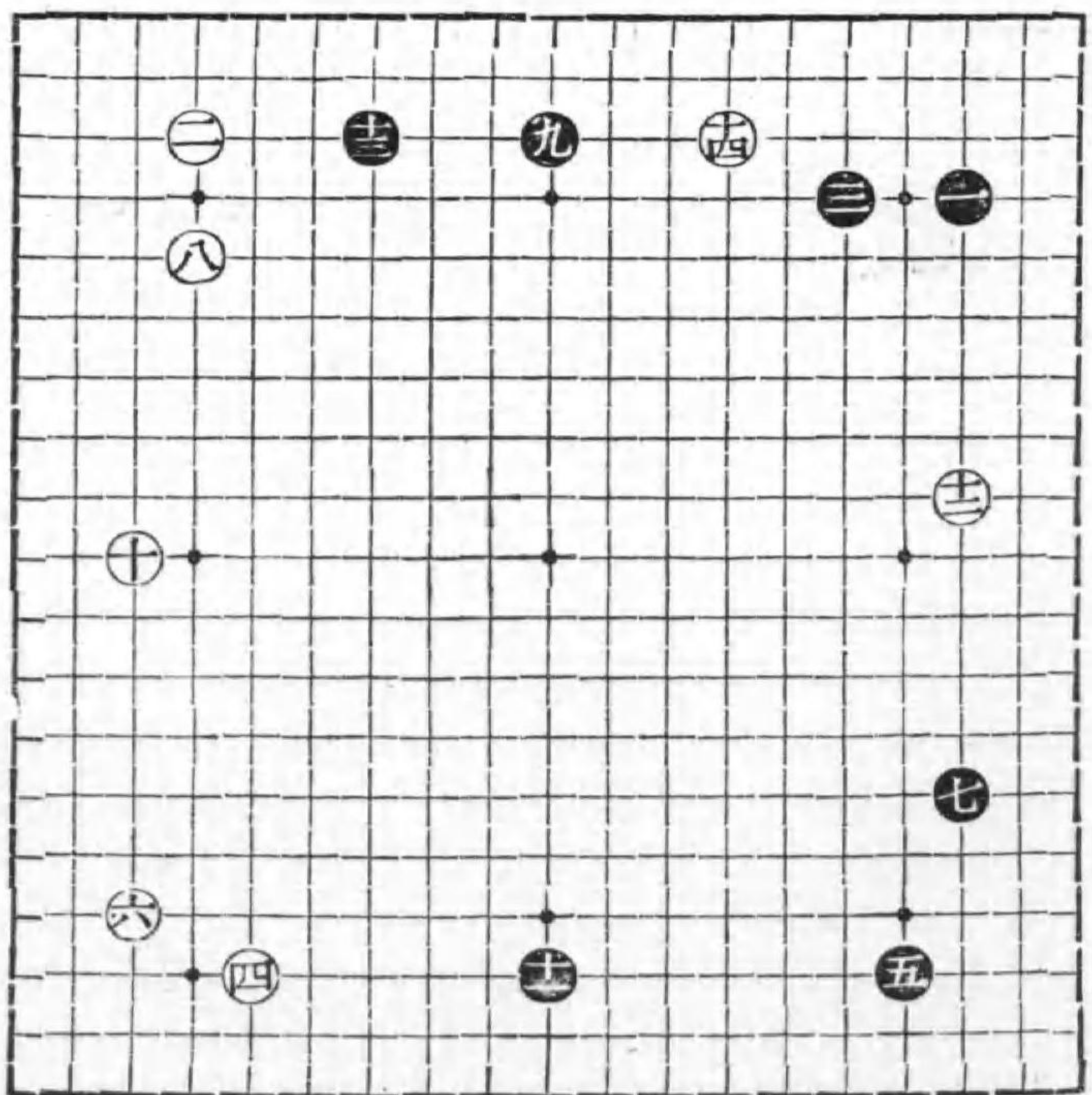
い

布石が如何に巧妙でも、力戦に長じない——

相手なら、本譜の如く一例ではあるが、黒に二ヶ所締らせ——

白十四と打込み、無論十四は取られぬ、戦端開始も面白い作戦である。

碁は相手によつて打ち變えよ。と碁の古歌にもある相手の特長を知らぬは兵家ではない。といふ意。



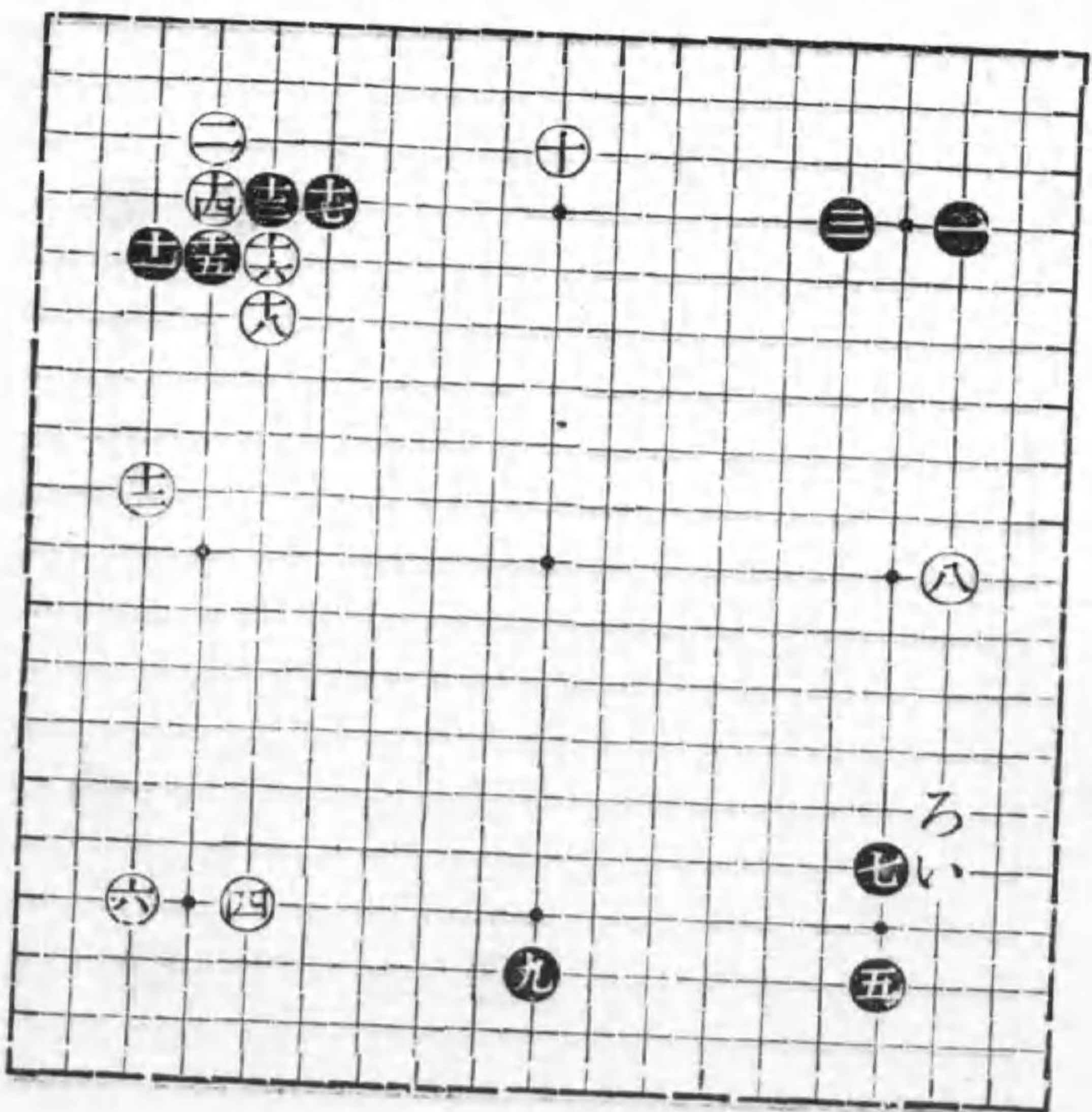
三三一

相先

白八は黒八と一手で、即ち黒七が(い)(ろ)の何れでも低位、だが斯様黒七では八の所が上下を通して最好點。白八は其爲である。

白十は黒十一を豫定に入れ、以下十八と、戦ふ作戰である。

見られよ、白十の一手は黒十七の方。また白十二の一手は黒十五の方。と戦ふに密接な關係。と。

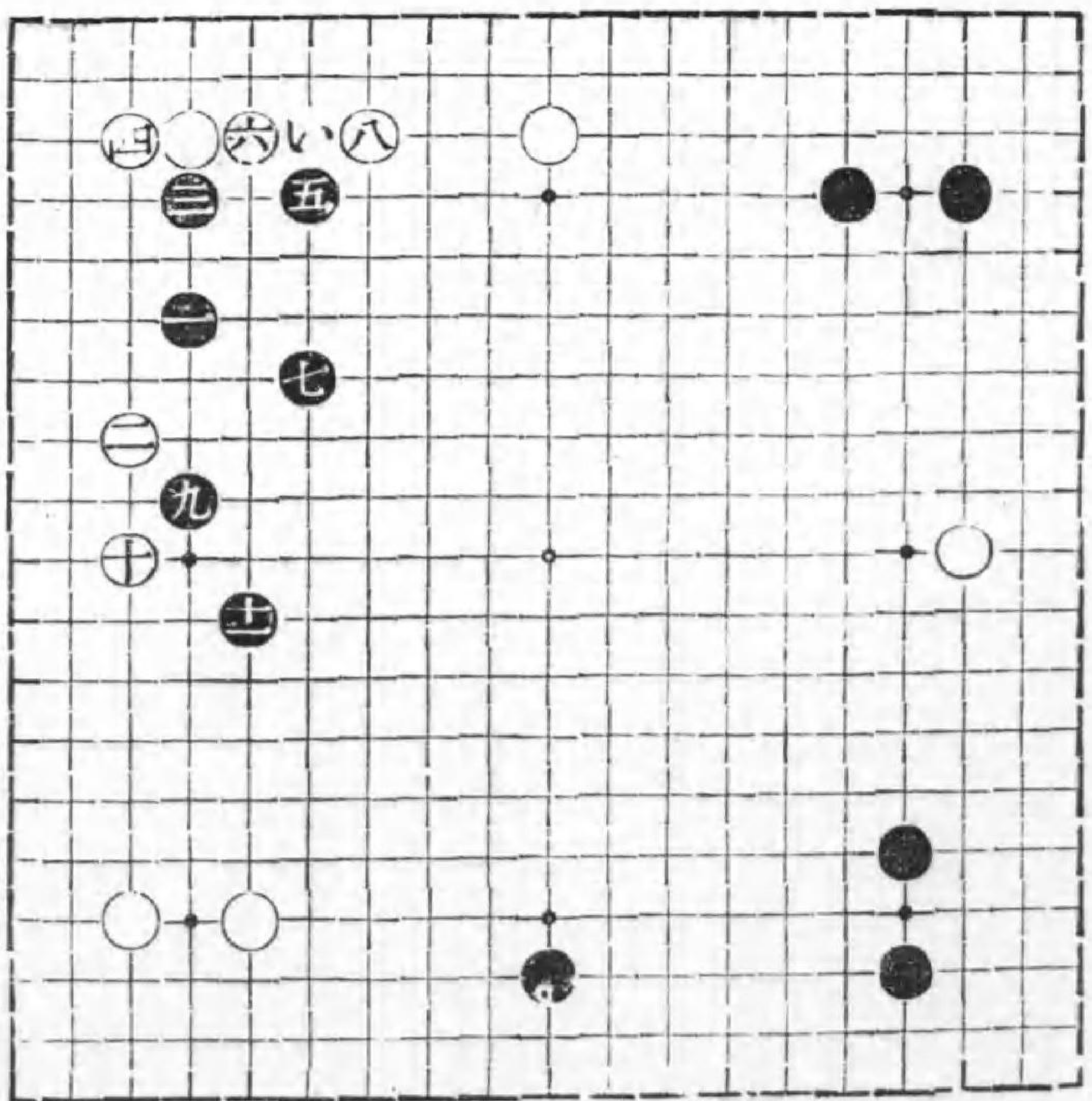


前譜黒十一に白十三と思つては、白十八と成つて、前途は別とし、先づ白の意中を行くものである。

それが本譜黒一より十一まで――

黒七は次に(い)。で白八。白八は――

其右の白一手が愚化、八から右へ白一手は詰らぬ意味。といふ黒臨機應變の次第である。



定石

定石は先づ左圖に見られる如く、黒十六までの一型である。即ち白一は碁碁に現はれる、黒二と白一の前に來させぬ、黒に地を與えない、其かわり黒の外部が厚層、といふ互角の分れを言ふのである。

定石の定義は、互角であつて、何れかが損では、損の方が避けるから、定石は成立たないものである。

重ねて言ふ、定石は公平無私のもので、其應用如何が精神である。

それは定石の用ひ所で、定石が反對に害、といふ事が多いからである。次説より應用の效果——

また古來より定石と今に用ひられる、が悪いのも混合され、それも明瞭にしよう。

定石博士の定石知らず、

また貴下の定石通には感心しました、が？

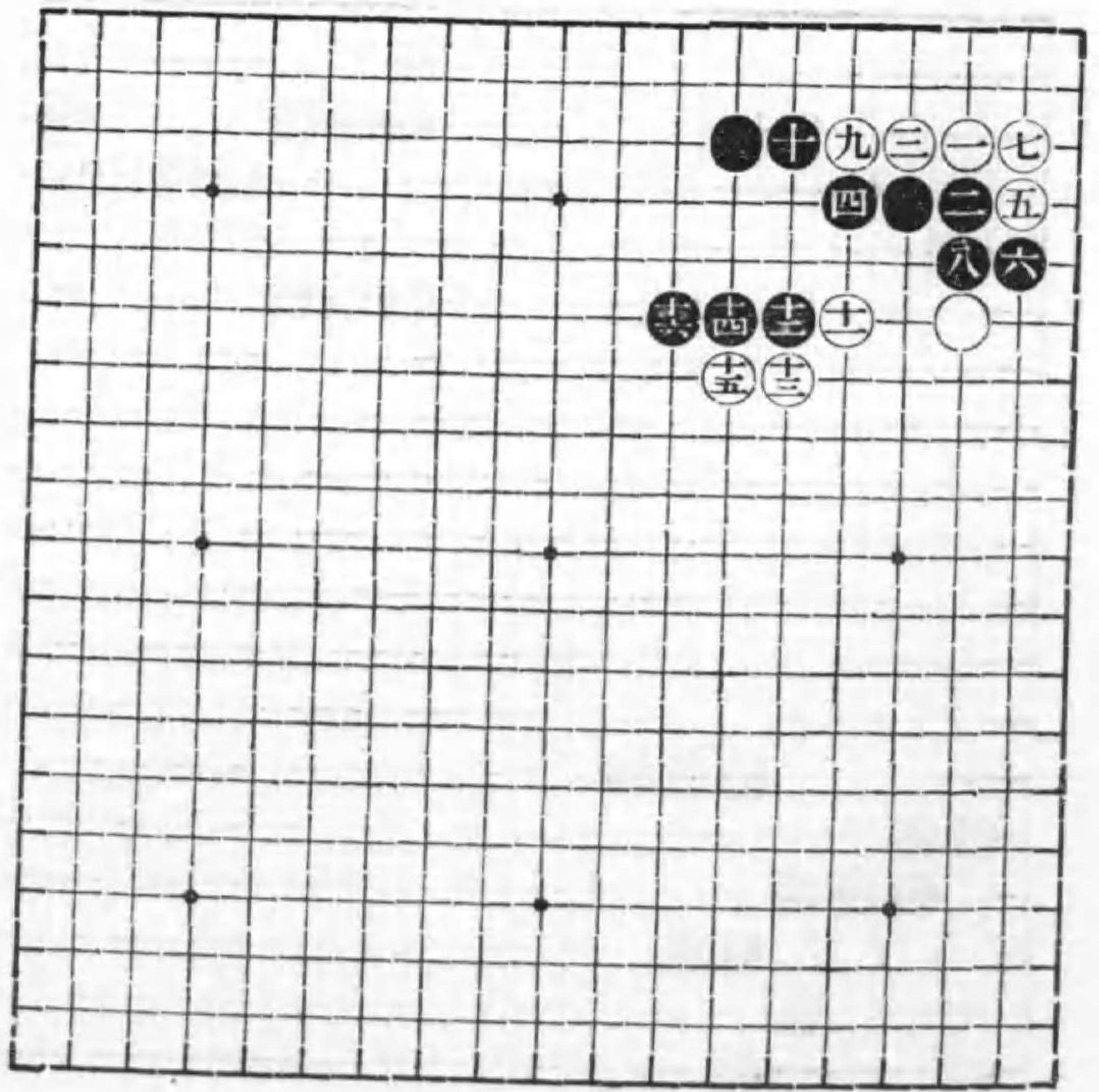
等と云はれるのは論語讀みの論語知らず、また彼人は通人だが——

通が嫌味。

如何に定石通でも、知つたか振りは、嫌はれるものである。

定石通りにやつてゐるのは萬年修業と云はれる、それを活字引。

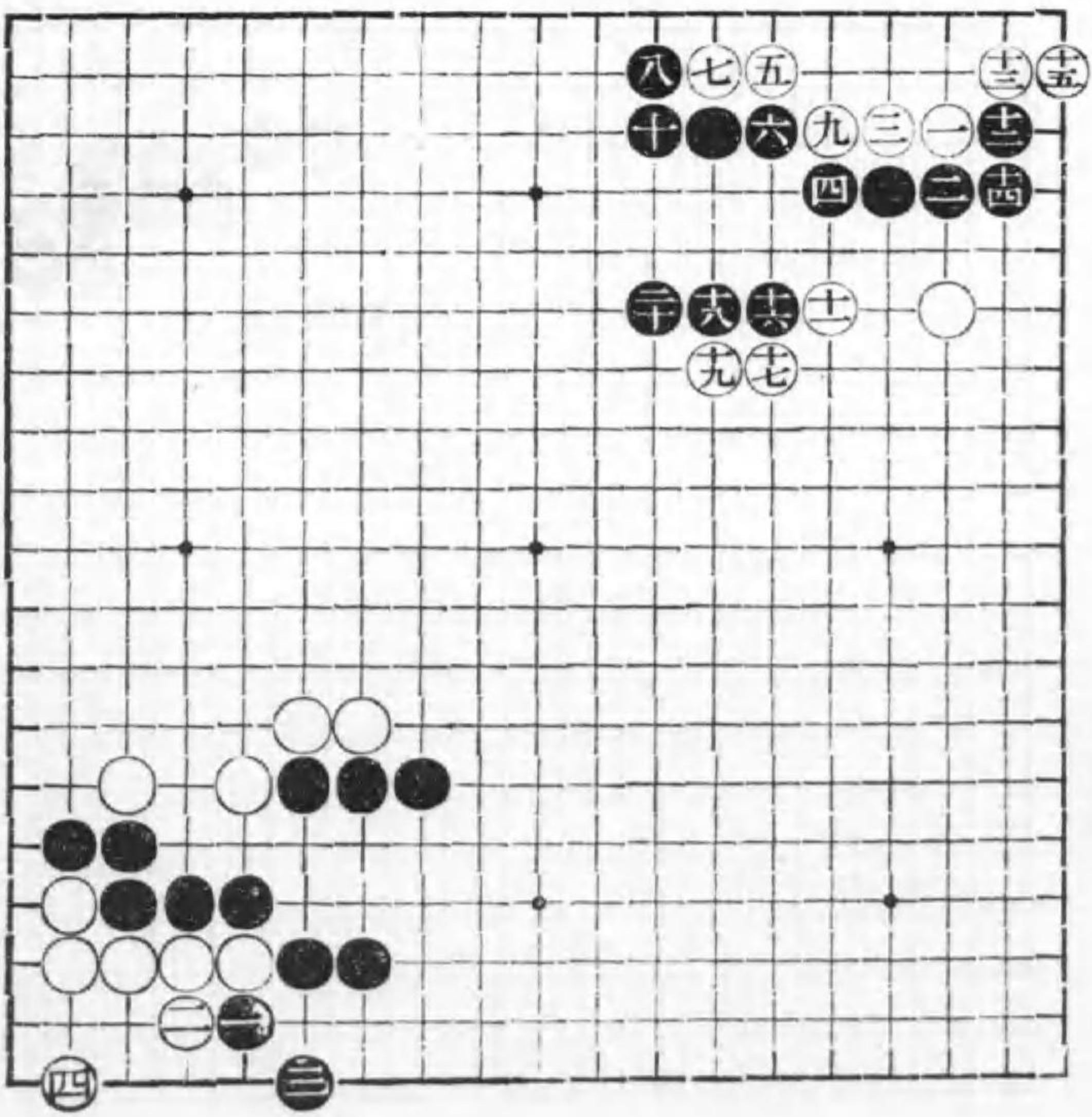
定石



右上隅白一より十五までの、白五は以下九と成つて白いからの定石である。また左下隅参考の前譜白九までは、黒一黒三と其れが先手。

但し將來の事で、假りに黒が危険な時、三までが活點。等にも白効果だからである。

黒六も肝要の定石、六を七だと――

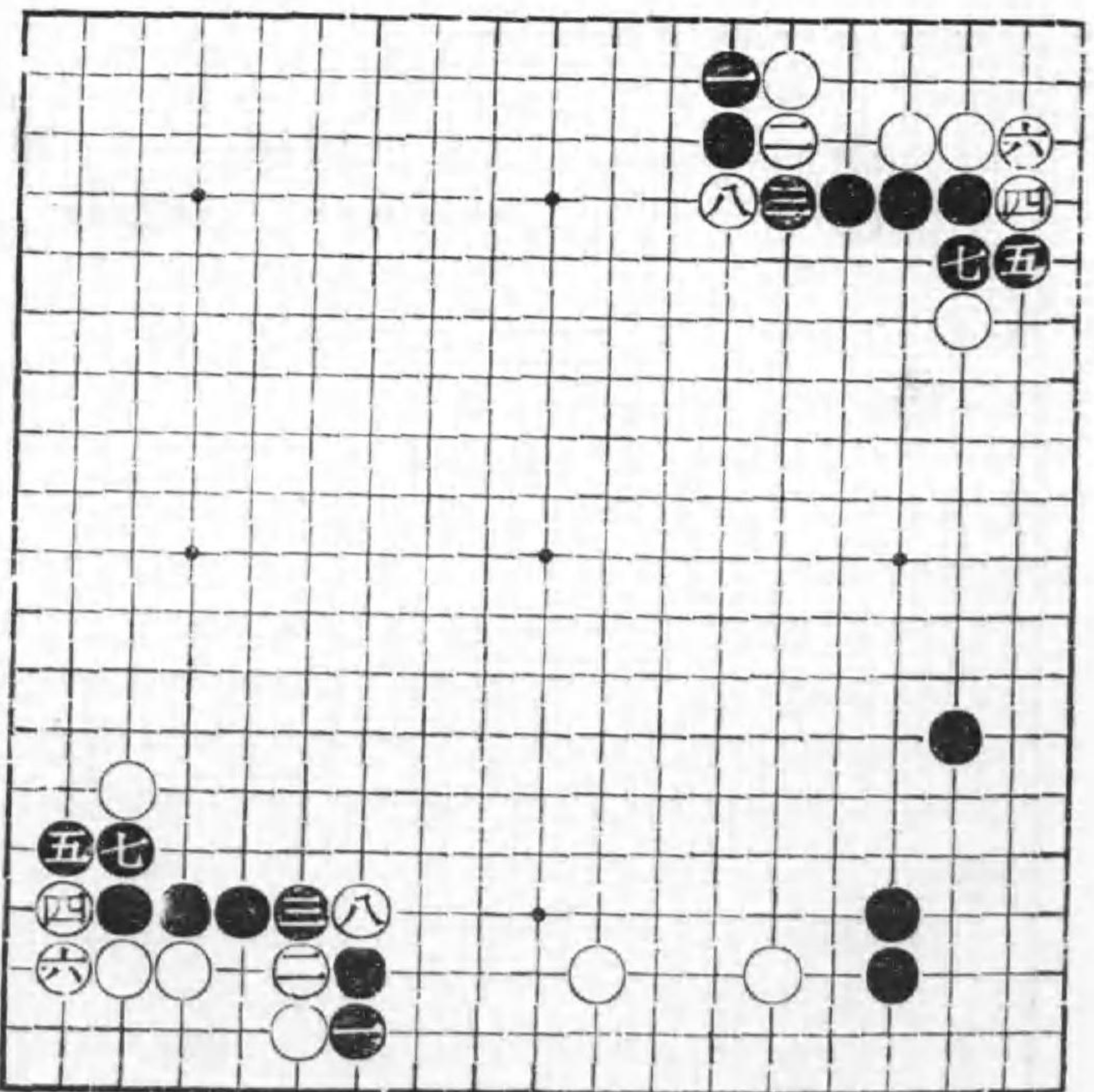


前譜黒六を七だと、其七を本譜黒一とし――

以下白八と、白に切られて黒が悪い。

それが下圖一帯の如きだと、黒一の方が殊に前途不安である。

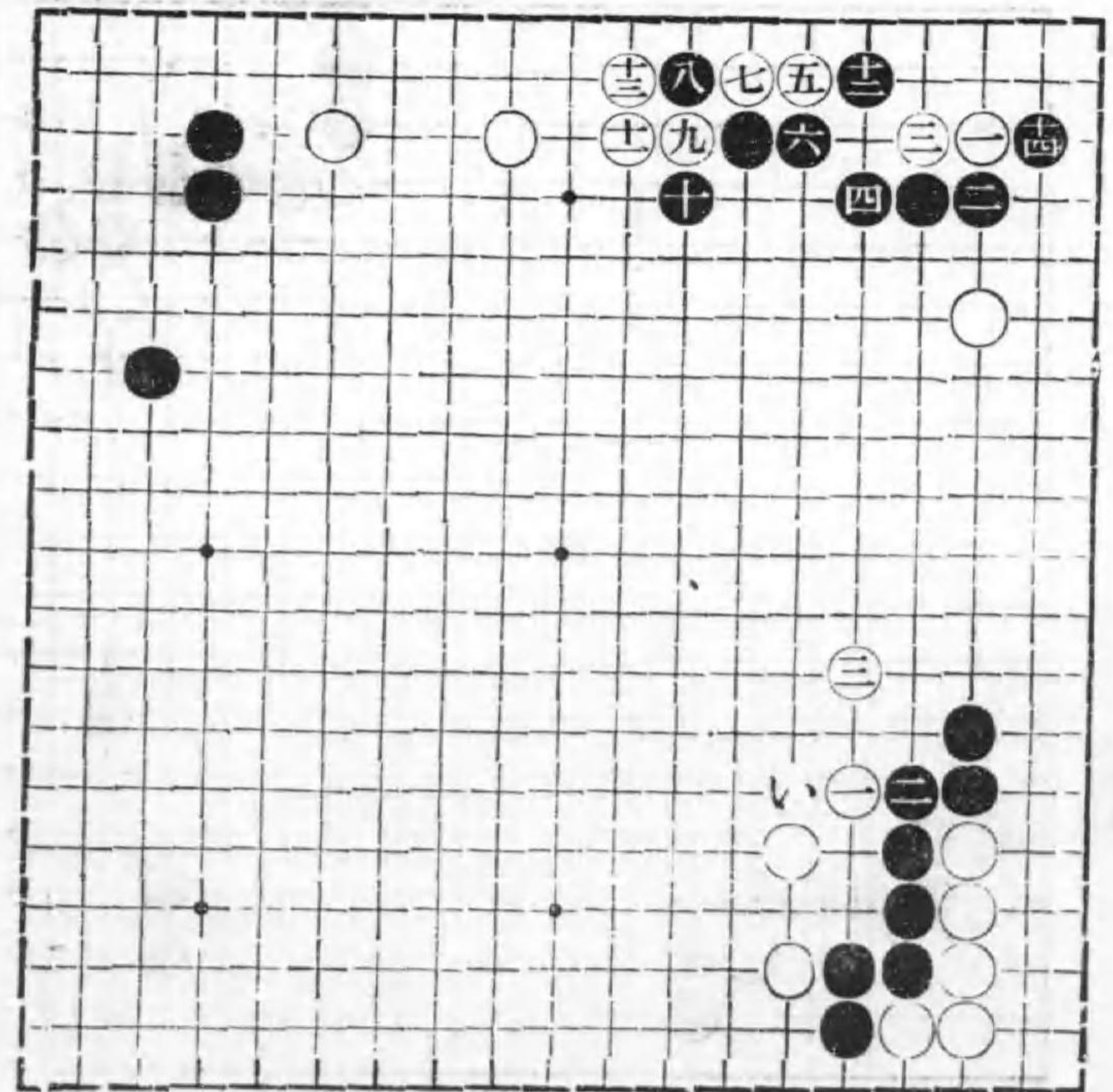
黒一を二の所が定石は以上で明瞭であらう。



上面、白九と切つたら以下黒十四と變化、黒悪くない、此れも定石である。
然し周圍の關係上、黒十四までを黒好まぬ場合もあらう。

其際には黒八を九——
なほ白八なら、黒十一と要するに白を左へ渡らせ、白地は細い。

右下隅、白三と成つて黒面白くない。それで白一の前、黒(五)の譯。



上面一帯通觀せられよ。

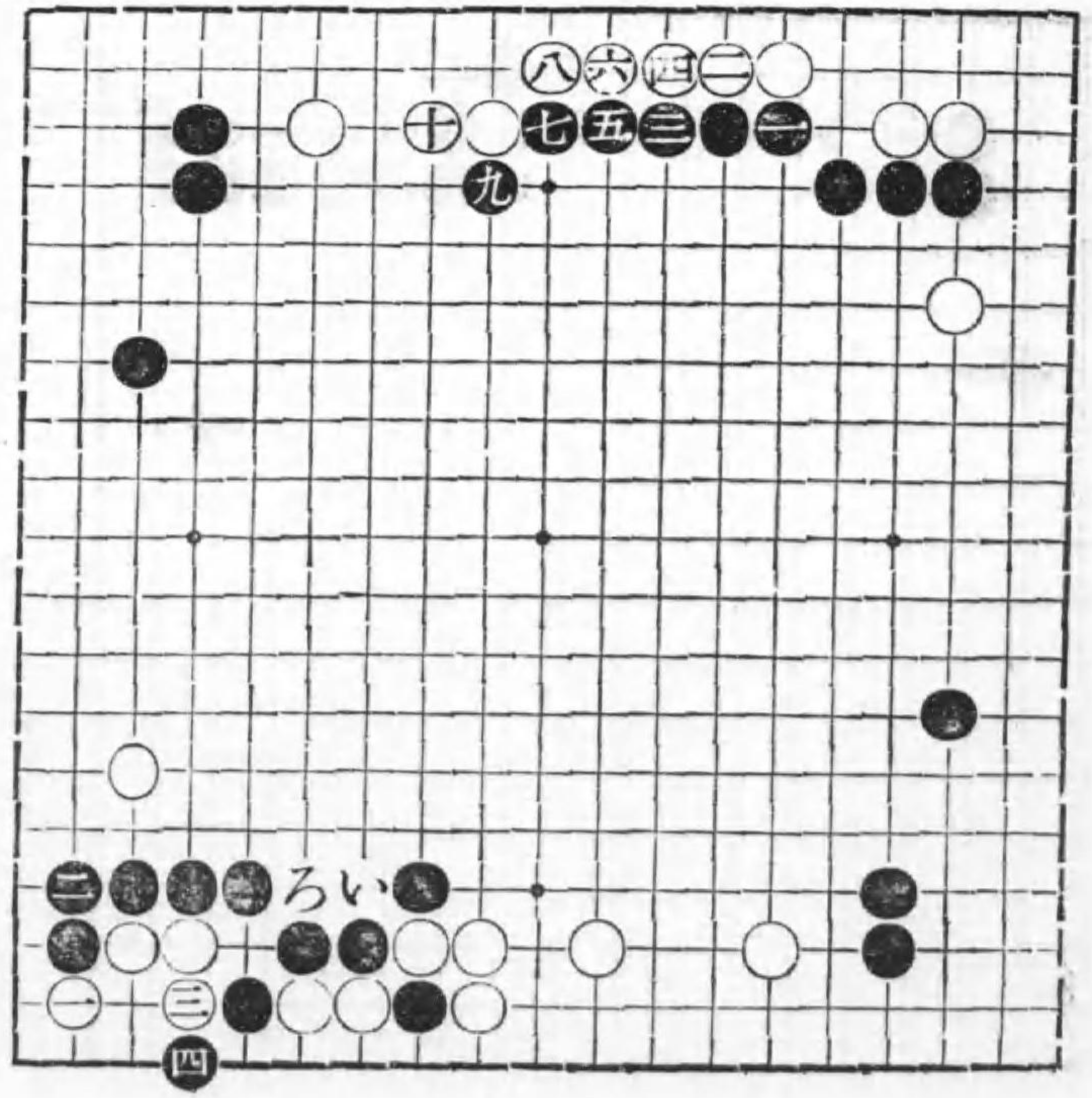
前譜に白地が細いと云つたは本圖白十まで。

そして黒は先手——
で黒損とは想はれまい。

それで黒三を四でなくとも可と云ふ事情。

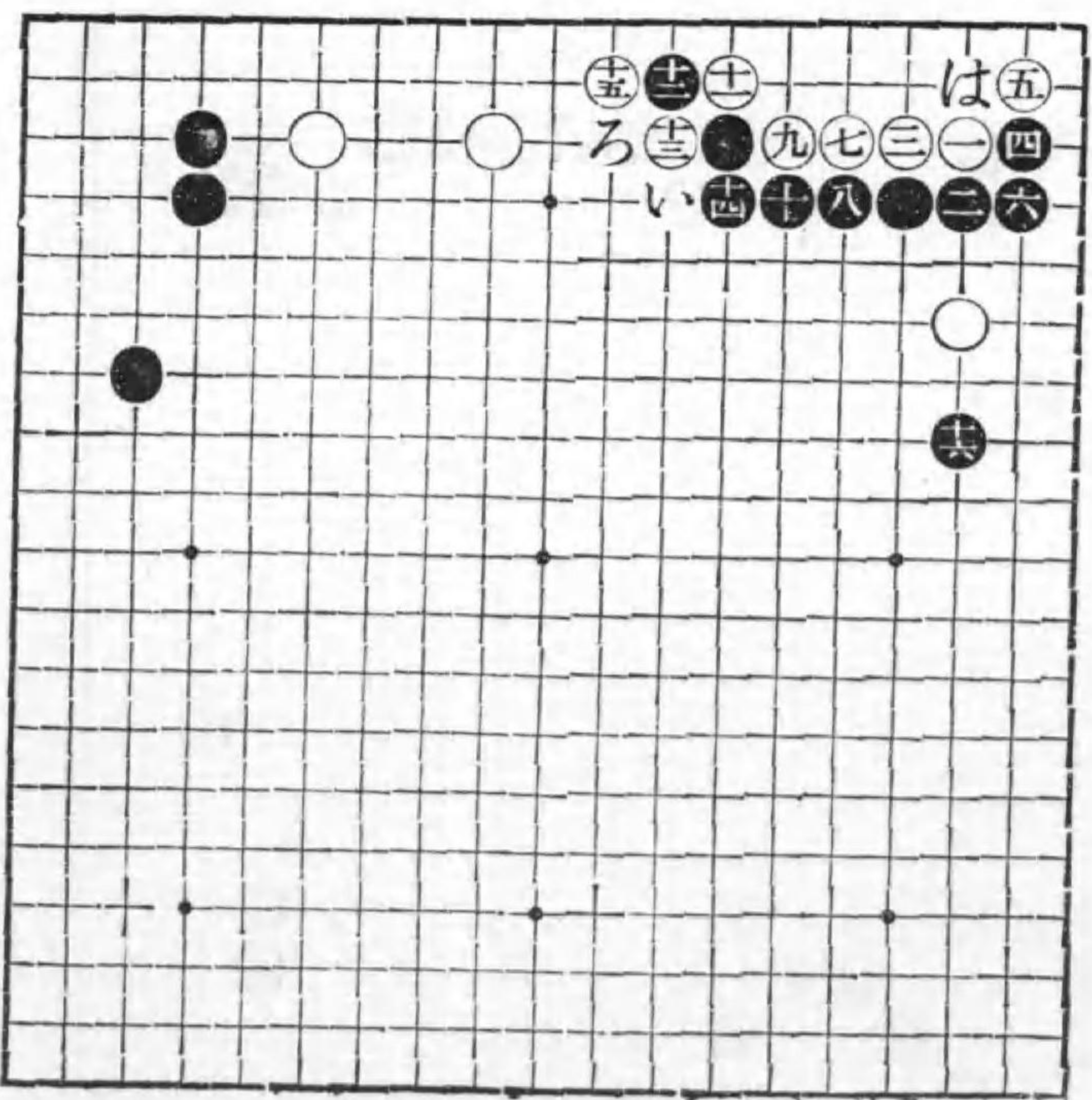
下圖、黒四の防戦を見られよ。

白一を(い)なら黒(ろ)と注意しておく。



黒四を八で黒面白くないと見た其れが以下黒十五までの、いふ所の臨機應變である。

本圖は前にも出したが、今頃忘れた事と想ひ再度—
なほ黒(い)白(ろ)、そして黒(は)—
それは何だかを憶ひ出されよ。
手段の部だが、定石である。

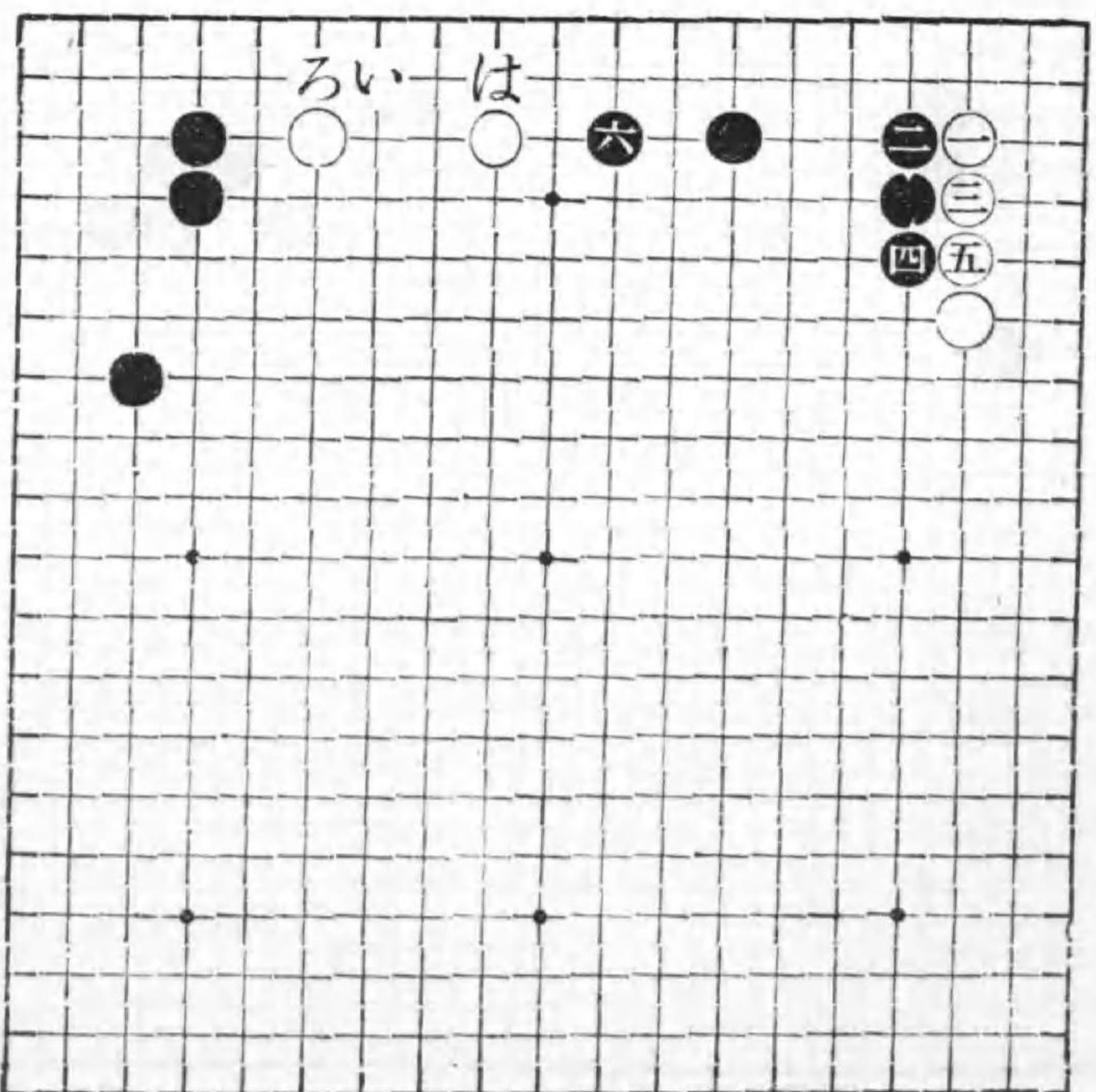


黒二を三と必ずでもない即ち以上黒六と成つて、黒(ろ)。

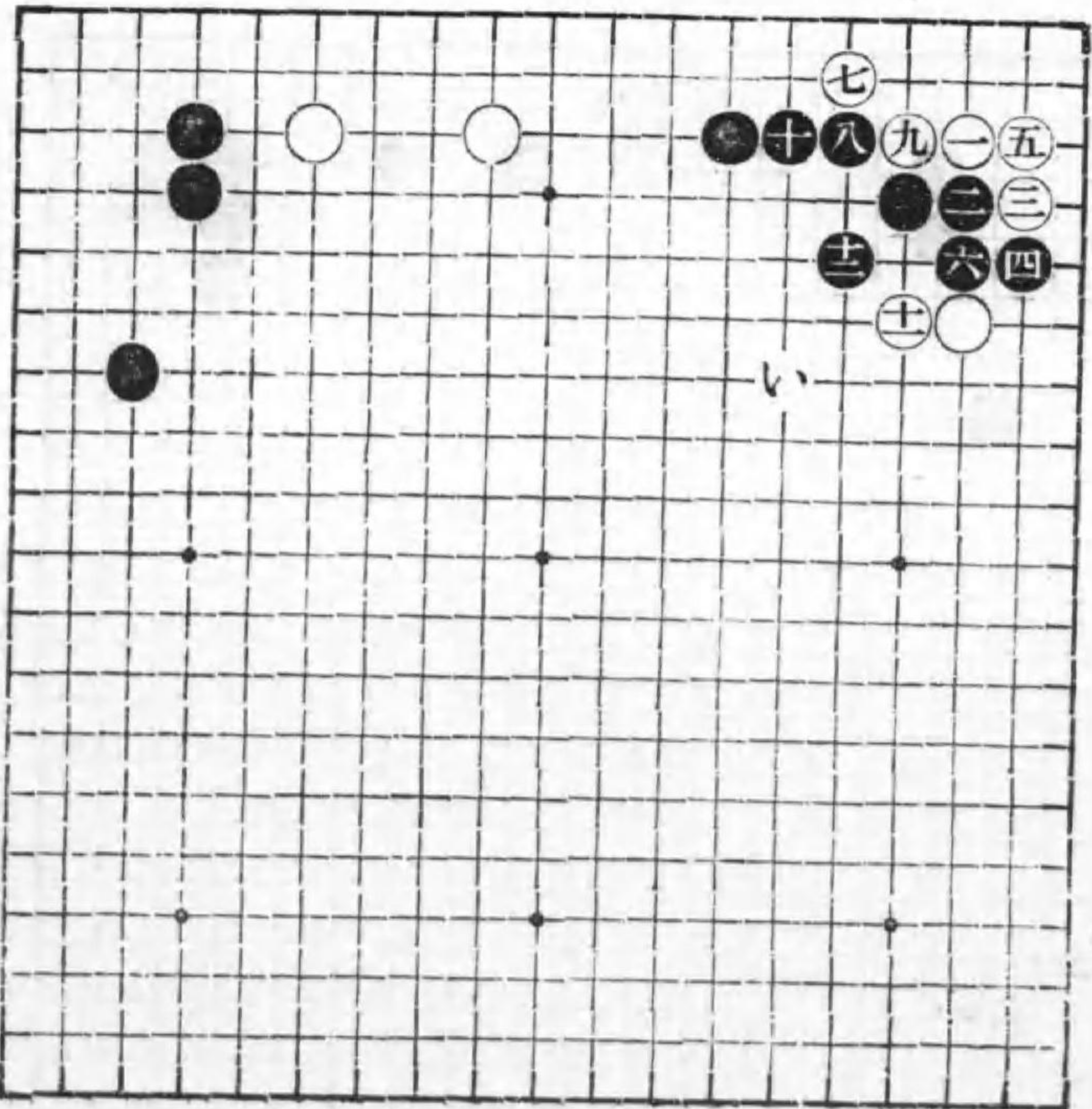
に白(ろ)は黒(は)。と黒に手段もあつて—

黒六までも明朗の應接である。

第一黒六は他に好點があれば絶対必要でもない自由の立場。

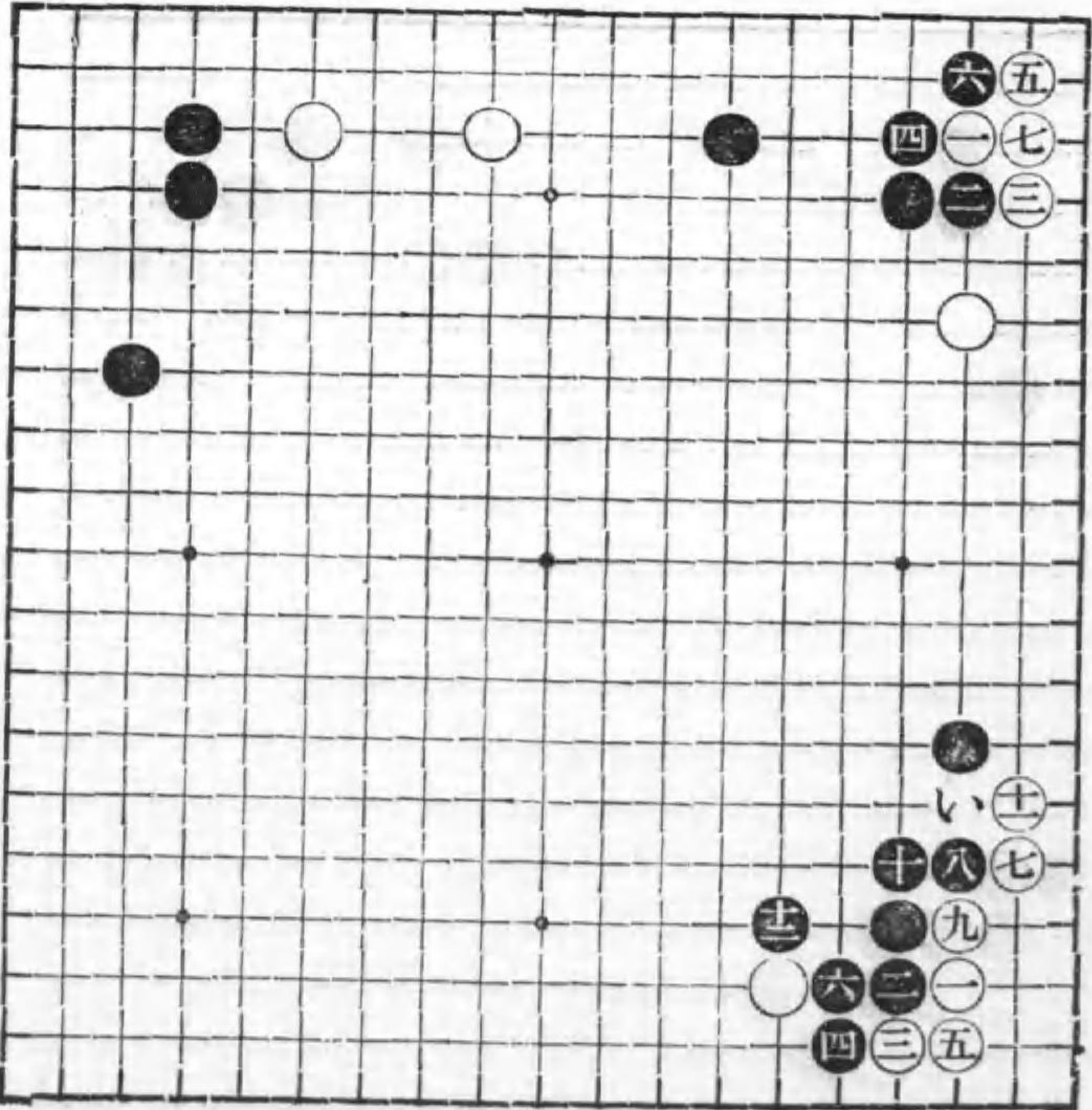


黒十二までも、白一に對して定石である。
 が白三を九だと、黒五。これは前譜にも見られる、白面白く——
 ない、即ち白三の手順であつて——
 黒十二の次に白(い)。と白の思ひの儘である。
 見られよ、黒は地も無い攻められる立場を。
 それで——



三四二

右上隅、白一に黒二より白七まで——
 此れも黒先手を執る。定石である。
 右下隅、黒十を(い)だと次に白十二と——
 黒は後手。
 それで黒十、十二と、十二の下の白を壓迫。
 其れも上邊の如き場合に黒用ひる定石である。



三四三

定石

前譜右下隅の續行——

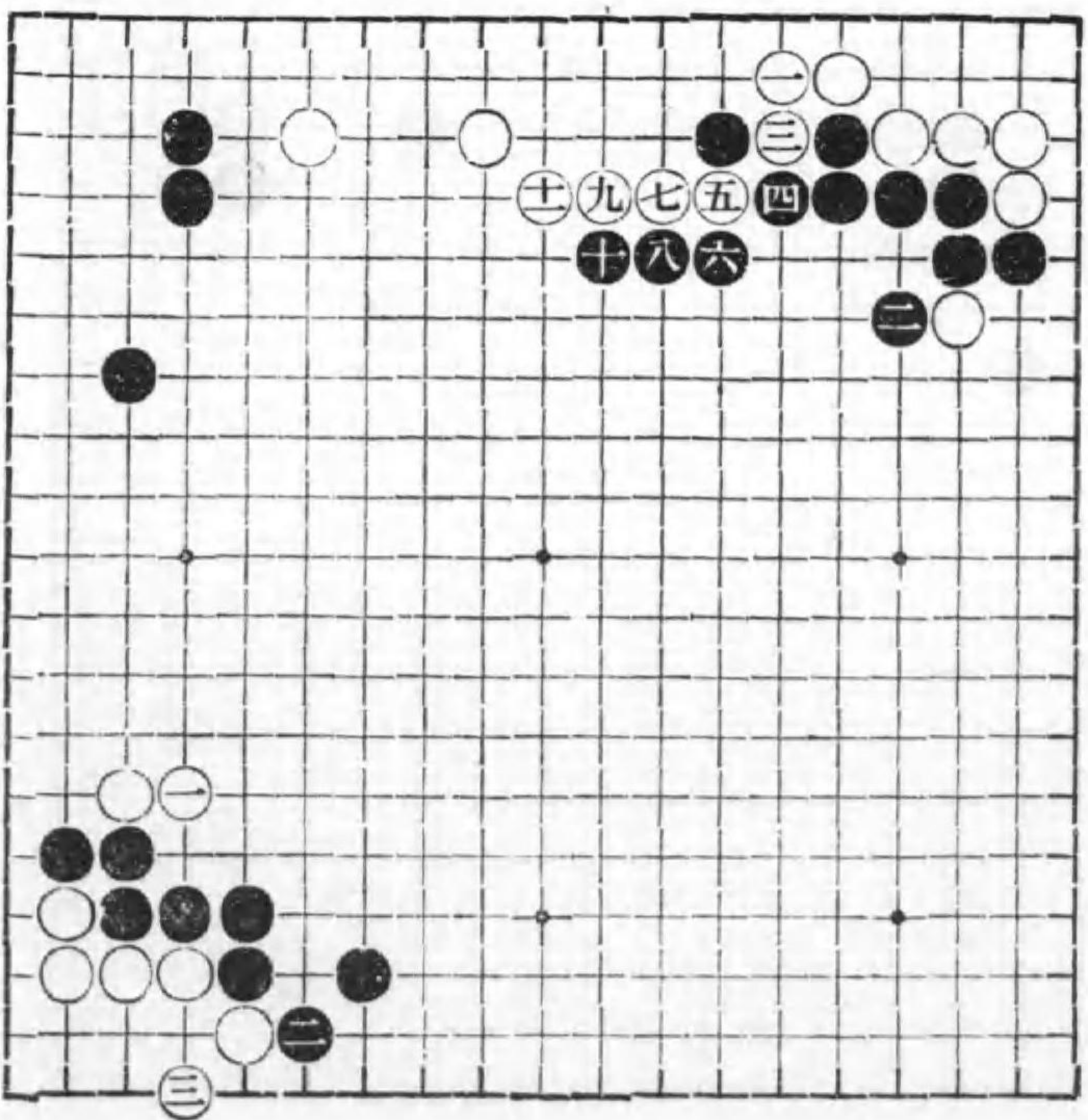
黒二は次に白三と五には
以下白十一まで——

と白地にさせ、黒は外部
旺盛を目指すもの。

白に取込まれた黒一子を
逃げ出す如きは、黒二と相
反する行動である。

白一を左下隅一だと、以
下白三と成つて——

黒二は何ともいへない心
地の一手。白三は堪えられ
ない一手。と思へぬ哉、



白二十三までは、白九を
二十三だと——

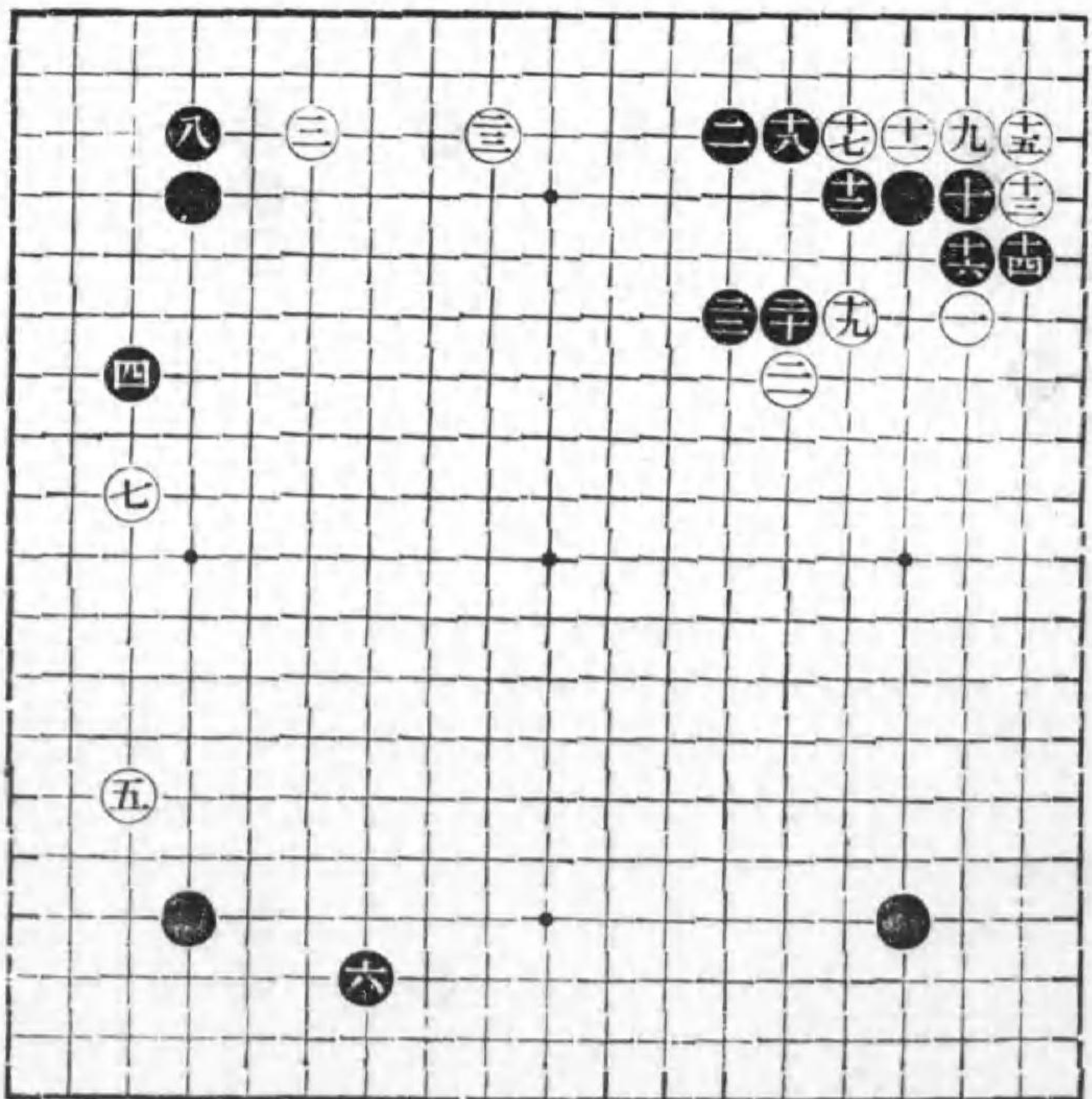
黒十と、それがあまりに
も黒に賭易い——

即ち定石である。黒は八
の方と同様の地を拓し、黒
優勢の事情。

それで白二十三まで豫定
の運びである。

其處で黒十を何とか——
工夫と思はれやう。

即ち定石通りを避け。



上面一帯通観の事。

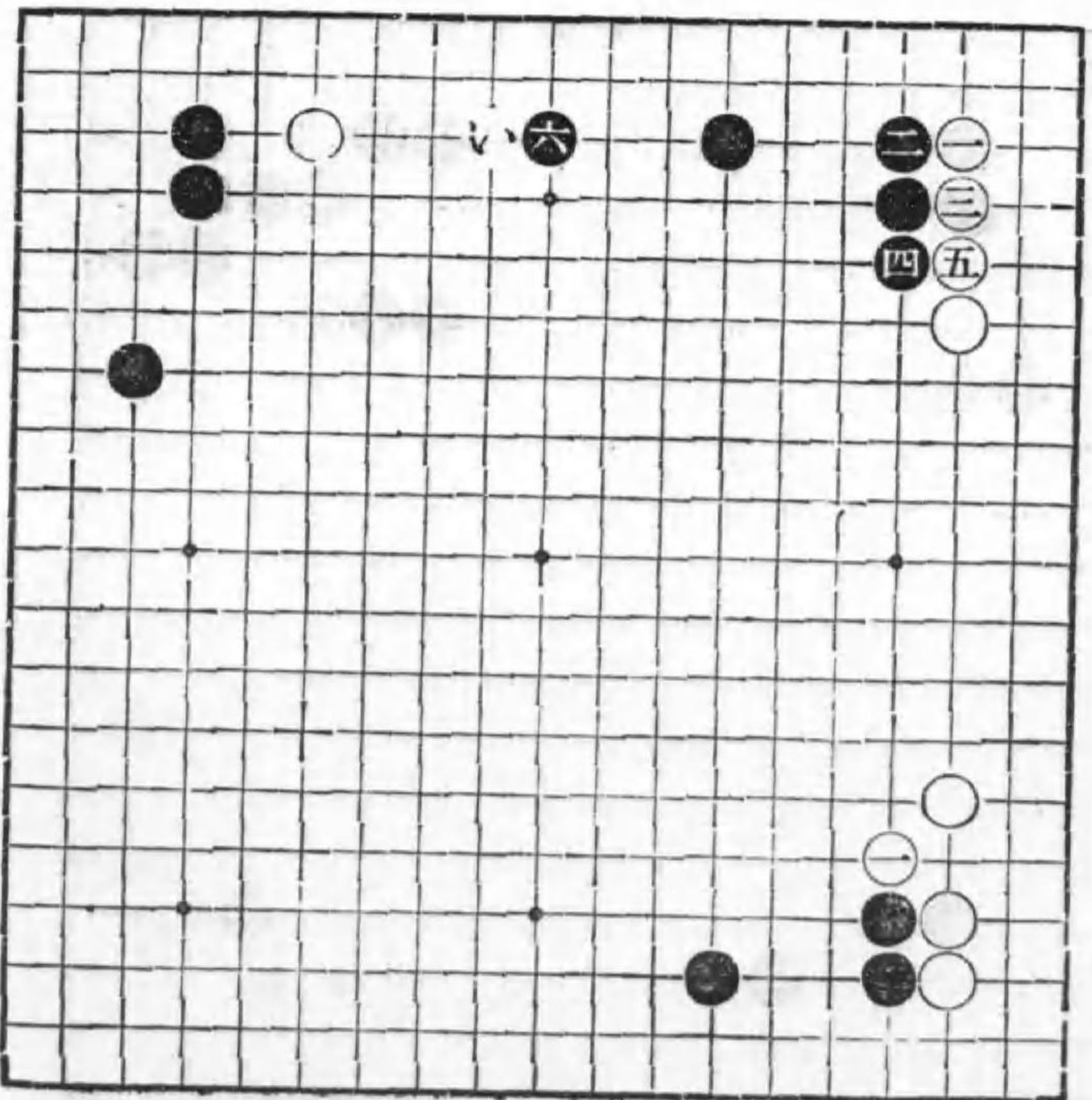
白一に黒二より六までが
前譜白二十三までの白の豫
定計劃排撃である。

白五を(い)なら黒五。で
黒結果良好。

で黒四は必要、といふ理
は、右下隅――

白一と白に跳捲られて、
下の黒二子が悪化。

も含むからである。味の
いい等は白一の事。



黒一に白二なら、黒三白
四、さて其處である――

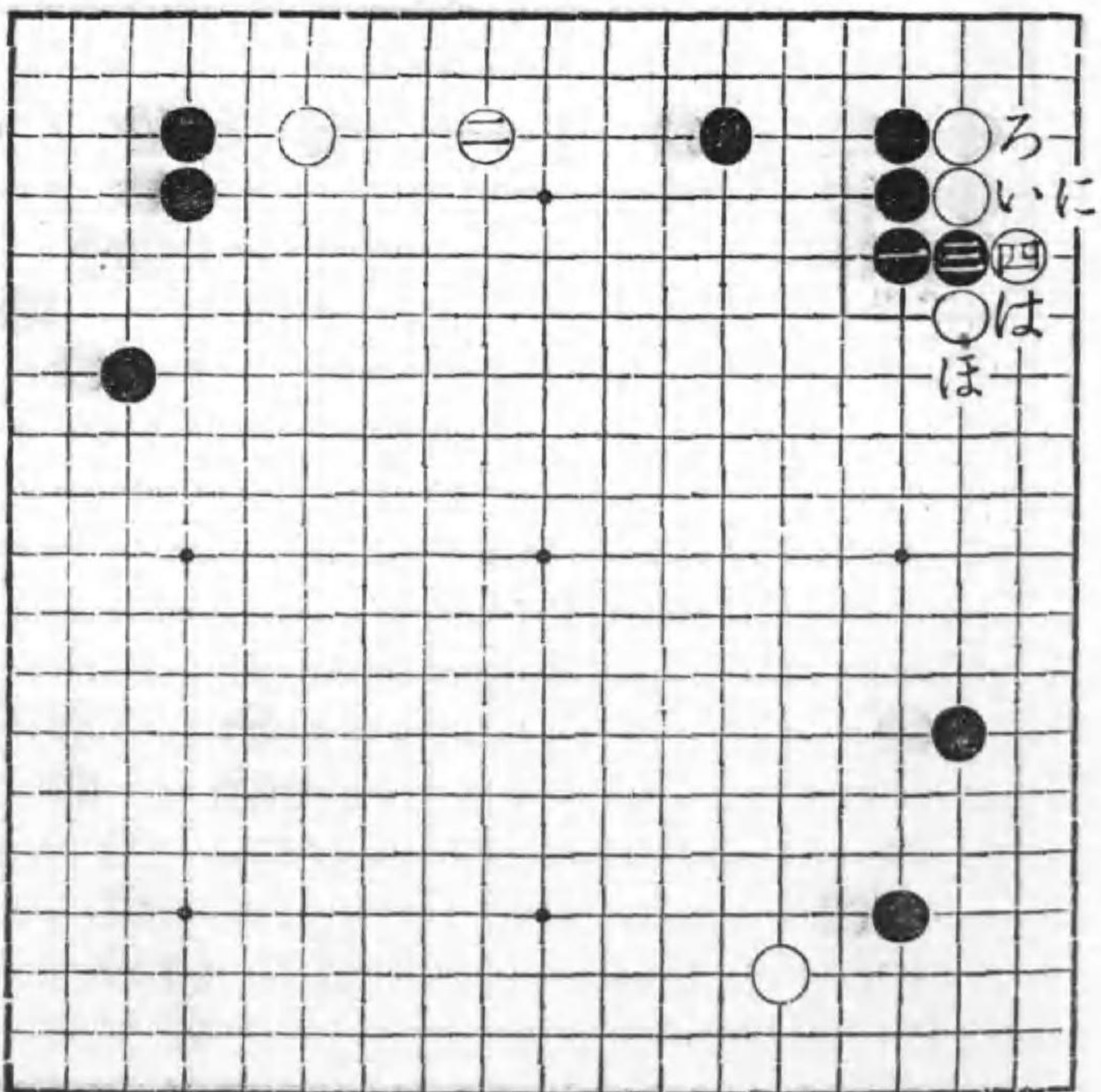
黒右下隅などの場合は、
次に黒(い)――

には白(ろ)黒(は)白(に)
黒(ほ)。

即ち右邊に黒良好だから
である。

でない時は黒(い)を外か
ら(は)。

黒(ほ)までは其白一子征
に取られての事。

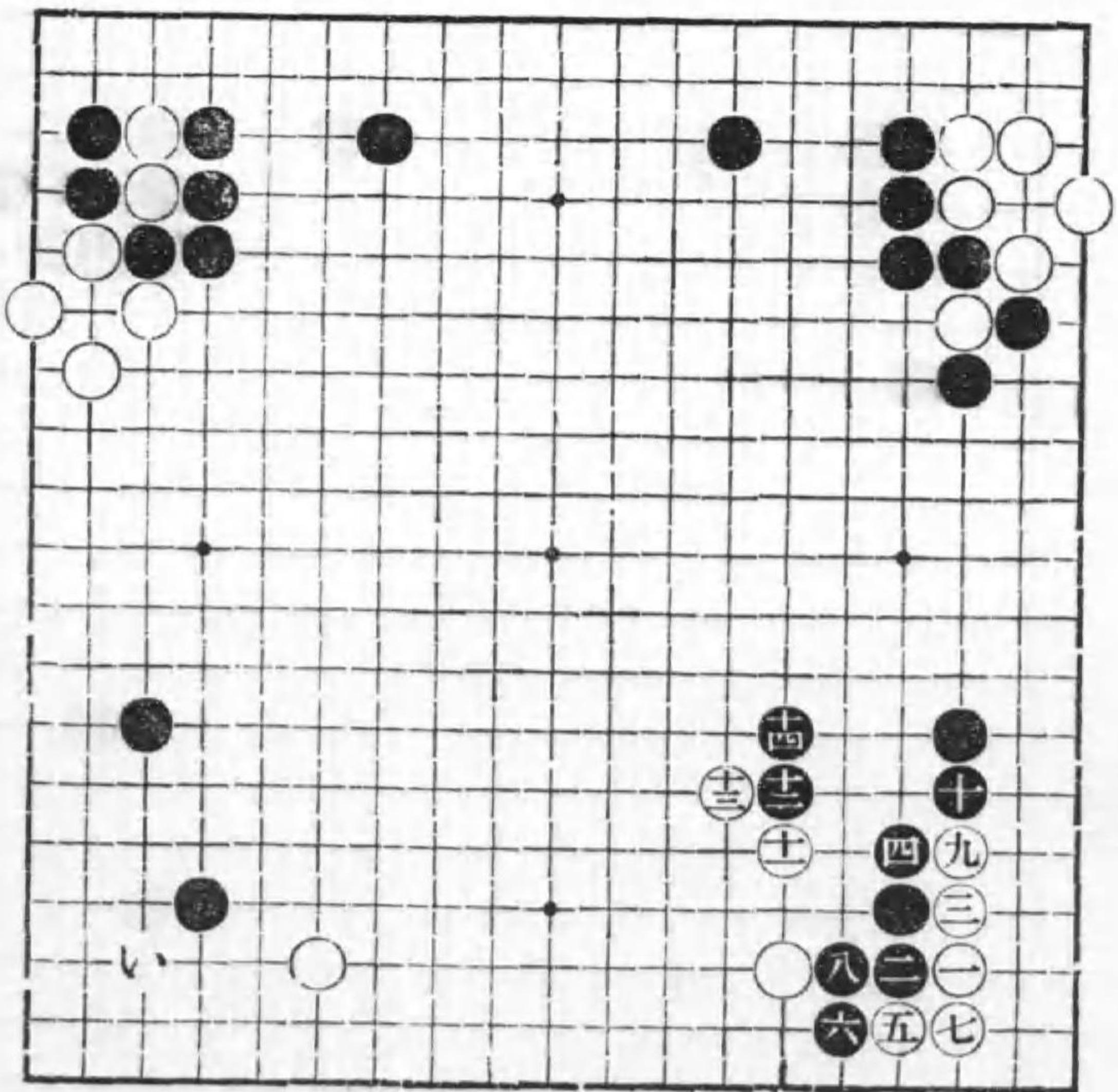


右側一帯通觀の事。

そして白一より黒十四までも見られよ——

何と右側黒地の雄大。とされば白の立場より、白一の定石は、其際採らない事。

前譜黒(い)を、(は)の方は、それが左側一帯、次に白(S)。



右上隅白一より黒十四までも定石であつて——

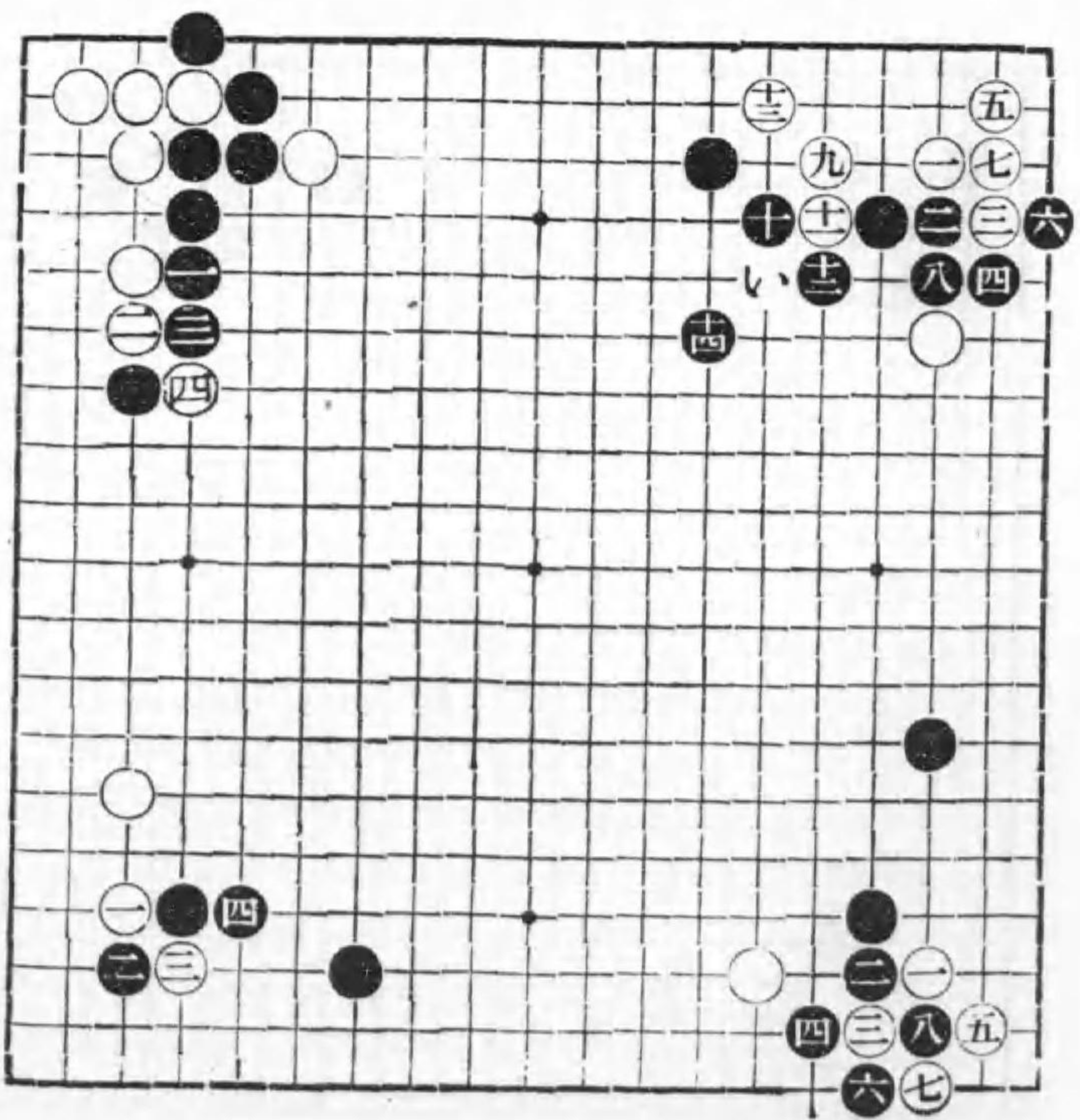
白九には黒十。また黒十四の粘ぎ、それは(い)と白に切られる、等も注意肝要の中。

左上隅、前述黒十を十一は、白四と白に切られて、黒悪し。

右下隅白七の劫には黒怖れない。で黒六も定石。

左下隅黒四は定石だが——

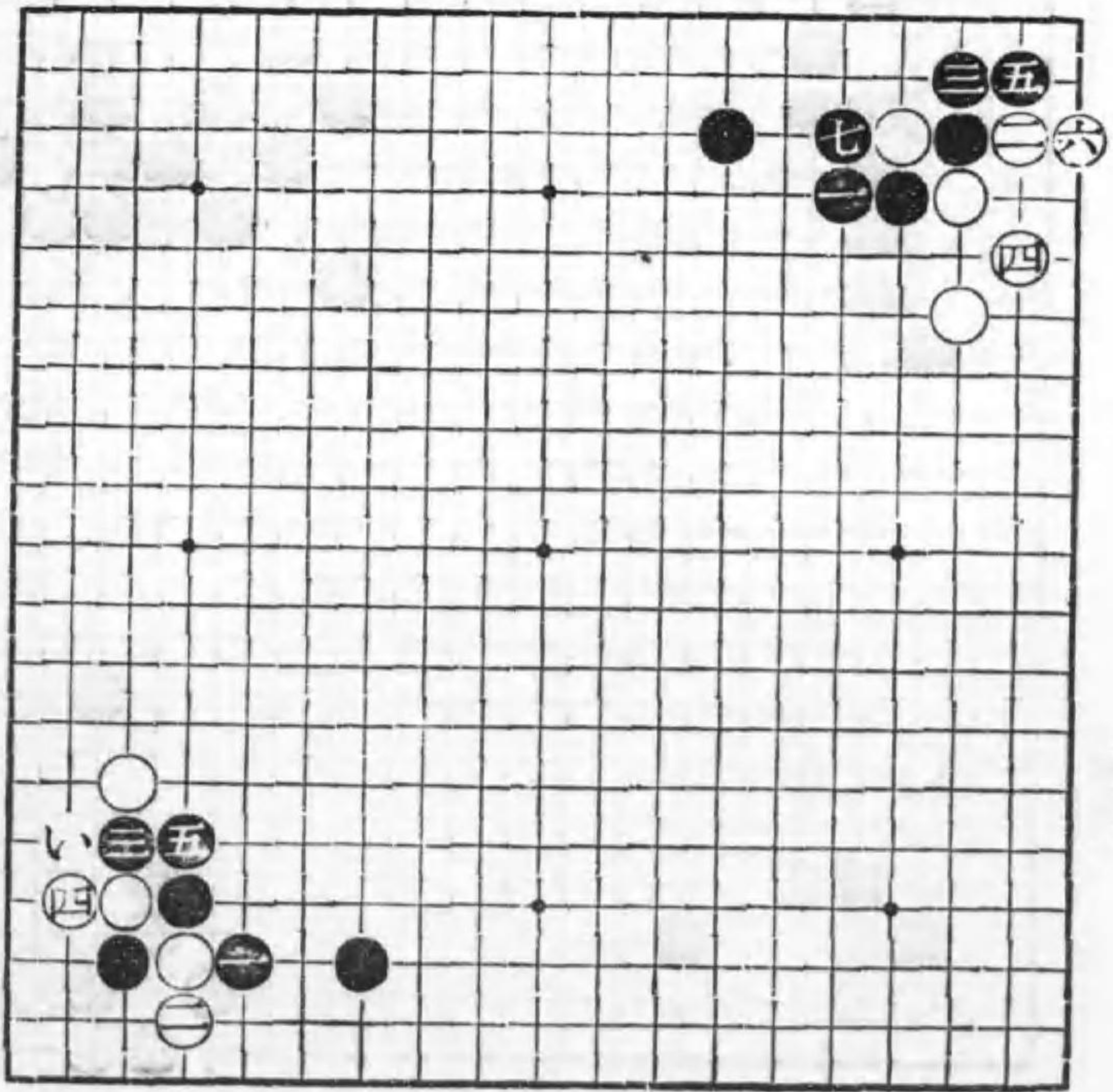
定石



右上隅黒一は以下七まで
それは定石である。
が白六までは白の待望で
あつて、黒七までは採らな
いといふより――

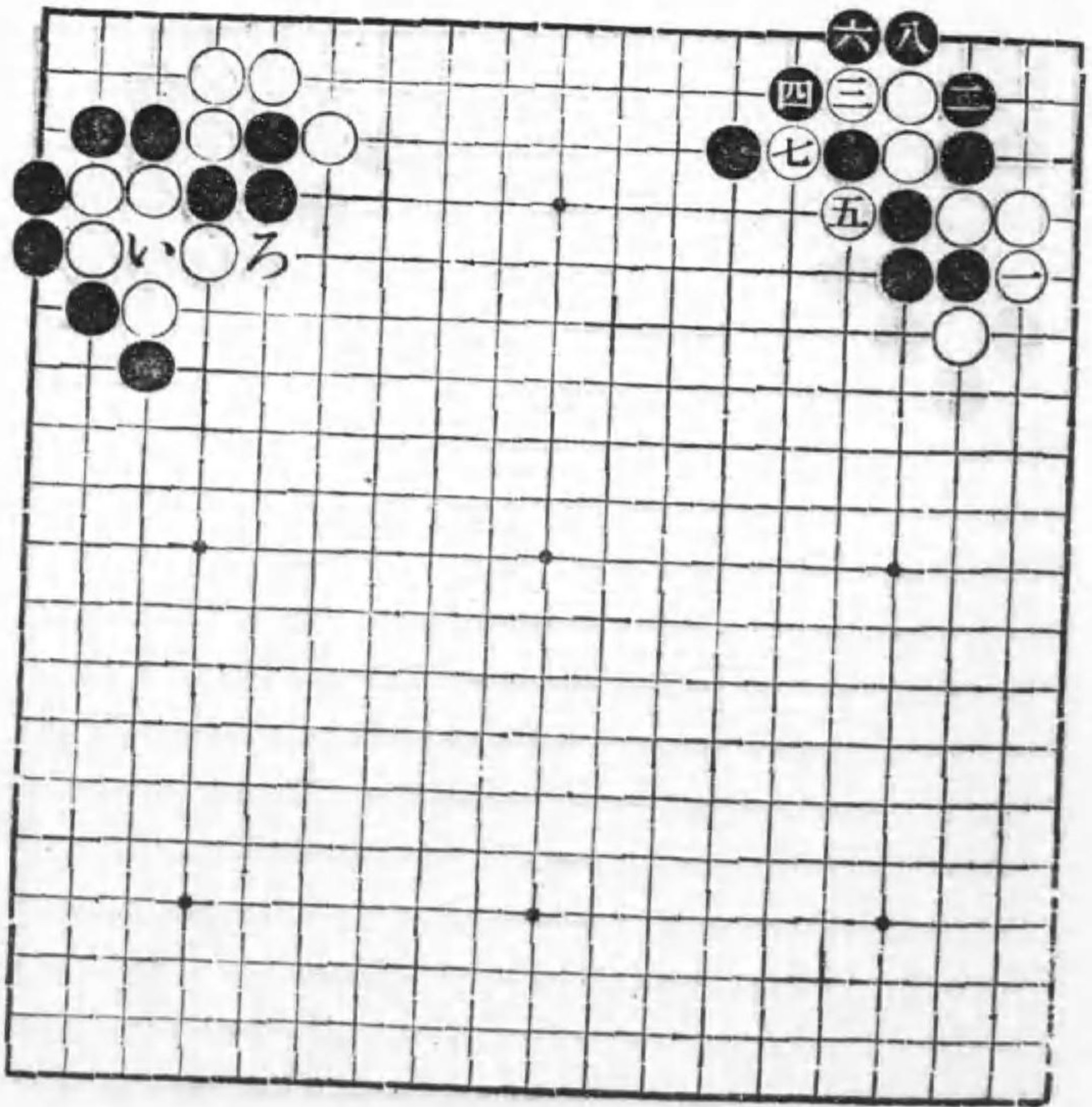
無論黒の立場として黒七
までは、癢、と決定の定石
である。

さて其次第であるが、先
づ左下隅――
黒一より五までを見られ
よ、次に白(5)。



三五〇

右上隅、白一より黒八ま
では言ふに及ばぬ――
白大悪果で、黒八までが
左上隅――
次に白(い)は黒(ろ)で征。
征に取られて堪つたもの
ではない。が征で取らなく
とも、黒好果である。
それは、次圖に明瞭であ
る。



三五一

定石

右上隅、黒十四は(い)で例へば――

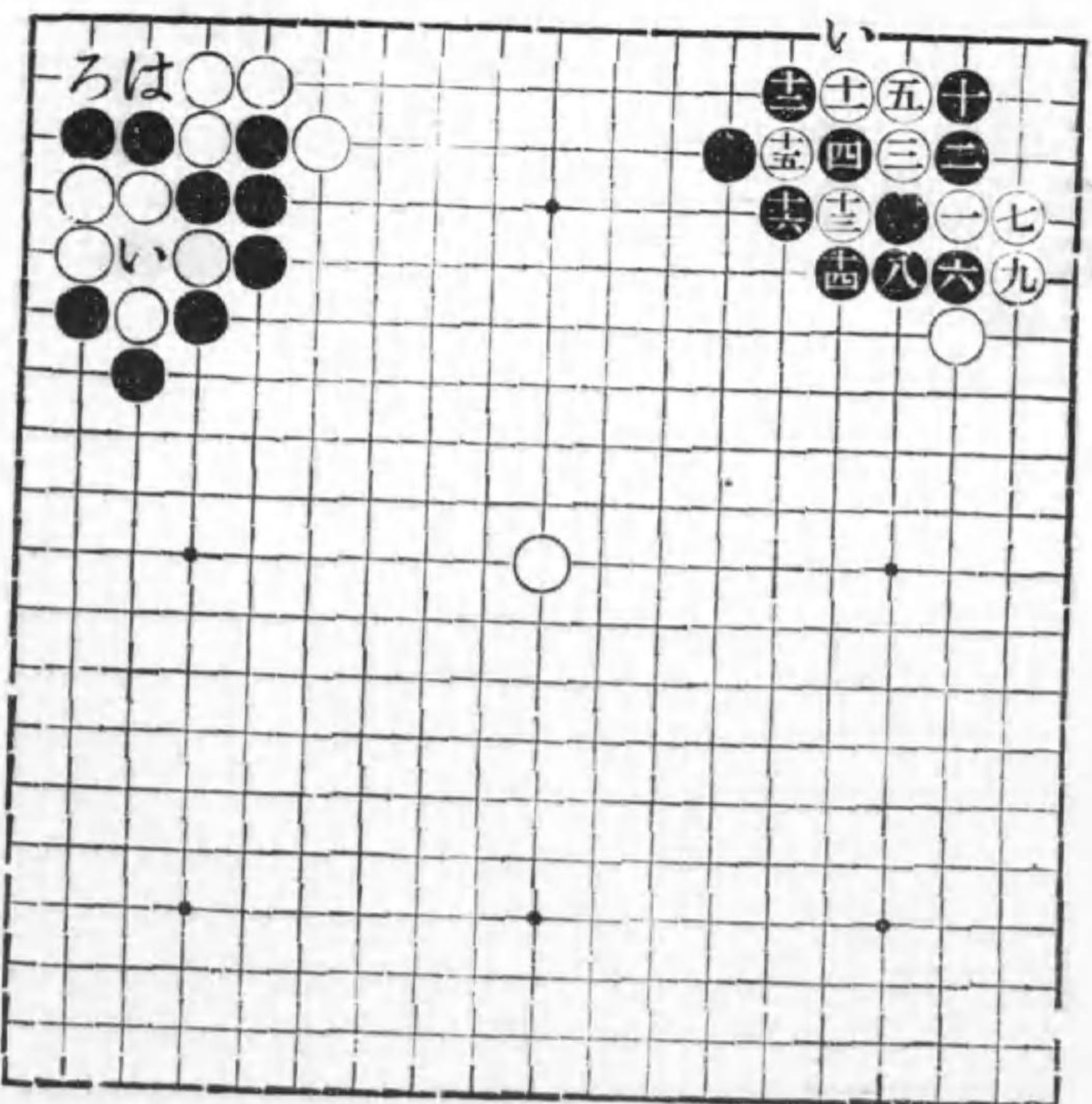
白中央に在る際白を征に取られないからで――

それが黒十六まで。

そして左上隅を觀られよ即ち黒十六と成つたもの。

白(い)には粘げないから白(ろ)黒(い)と白二子を打上げ、白(は)。

で黒先手、即ち始めは白先手、此れを黒好果。



右上隅――

前譜白(は)までが此圖である。

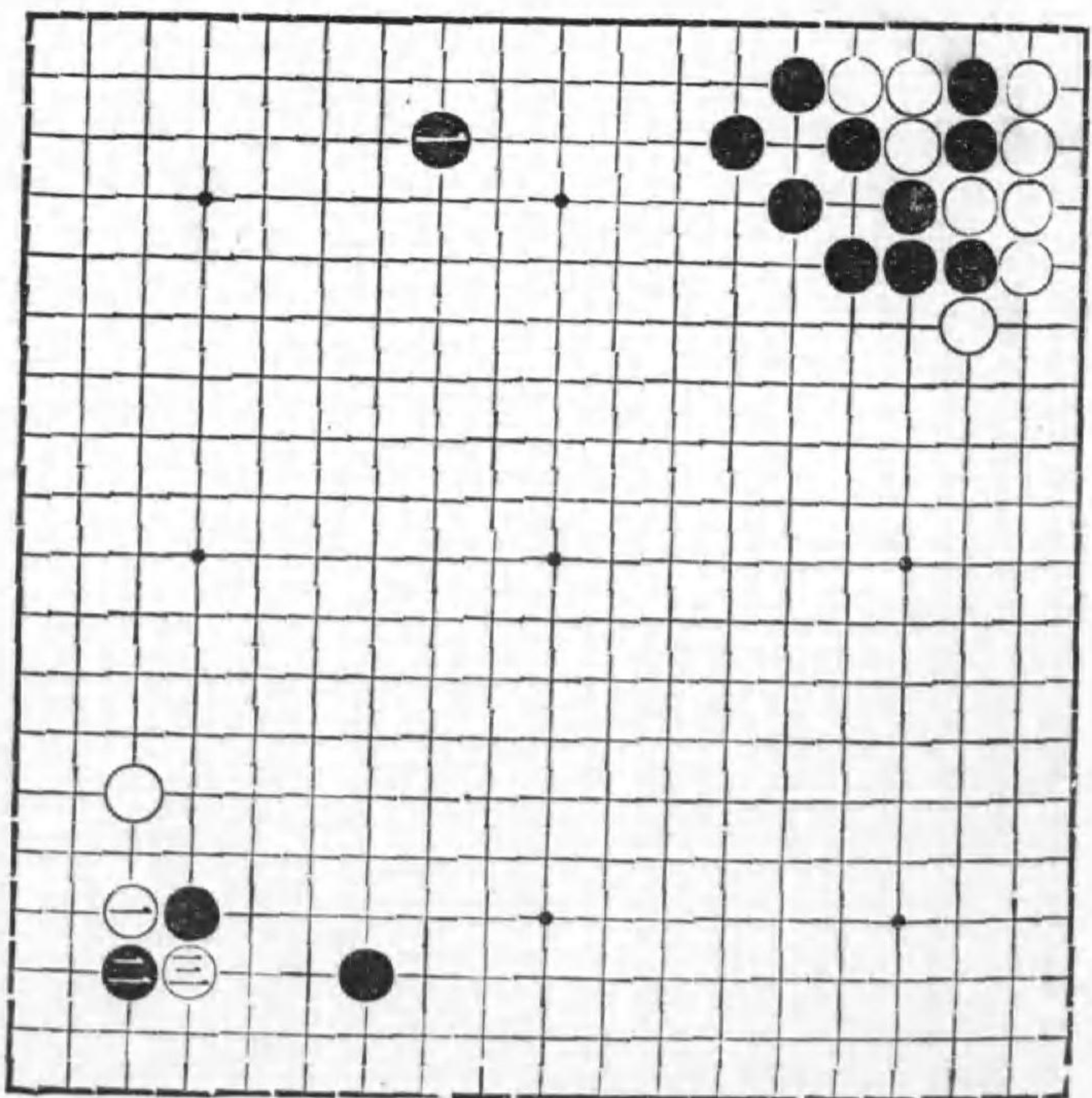
しかも黒先手。先手とは左下隅白一で明瞭の事。

さて右上隅、彼我の比較は、假りに黒一として――

白地と問題に成らなう、黒大いに優る……

と鑑識は出来る筈。

第一、黒一は其處に限らぬ自由の立場にある。



右上隅、黒十四は、例え

ば中央に黒一子在つて――

白(い)と、黒八以下三子

は白に征で取られぬ。

等は黒大いに考へもので

ある。

征に取られないと黒十四

の時、得意の態――

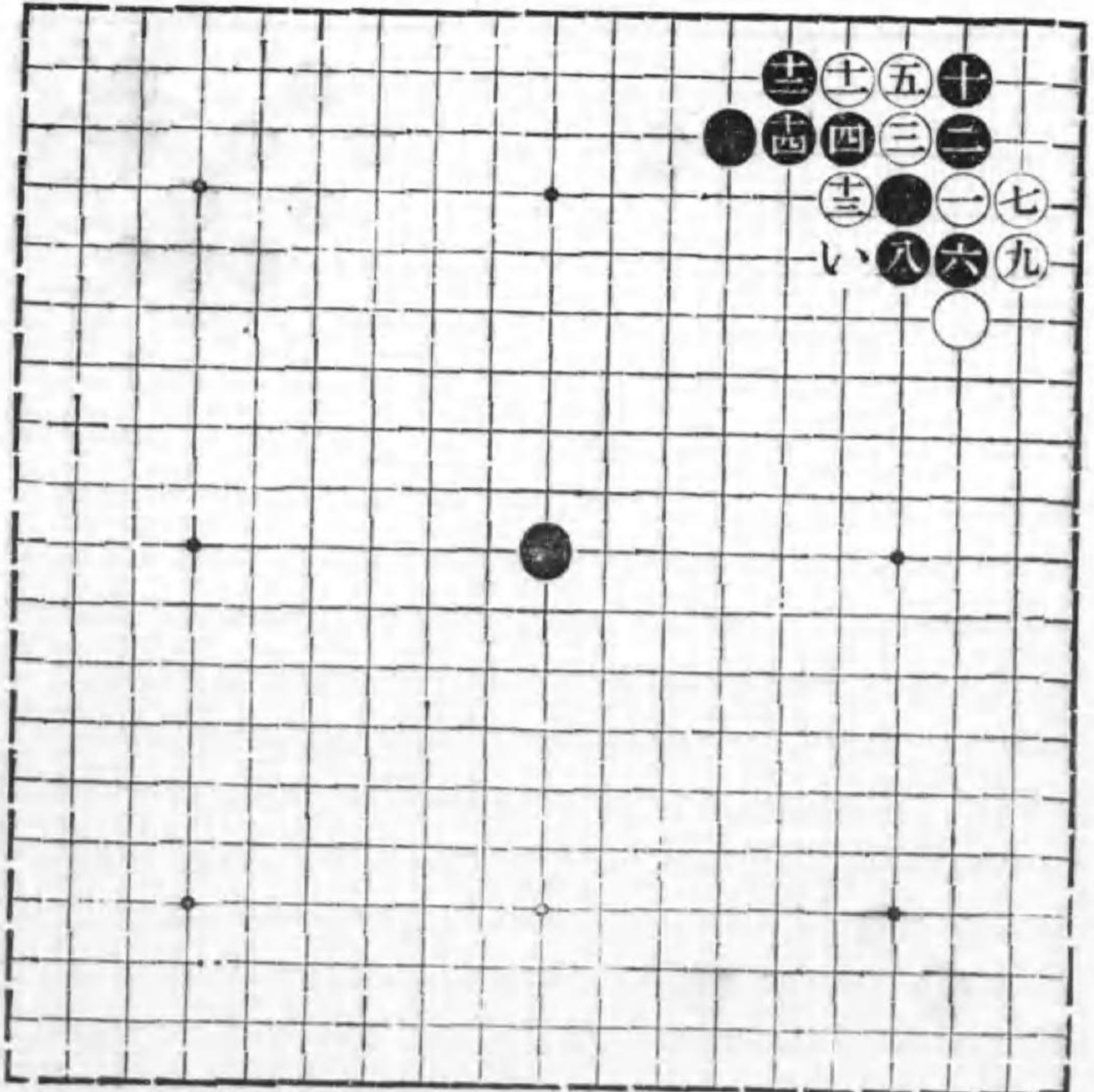
そんな對局中の情景があ

らう。

先づ初段に六七子の、し

かも力自慢で煙草の煙りを

輪に吹き。



前譜白十三に黒十四まで
が本圖の白丸黒丸。

されば白の手番、白一が

其れであつて――

以下白五まで。黒は馬鹿

を見るのである。

黒二を(い)だと白(ろ)。

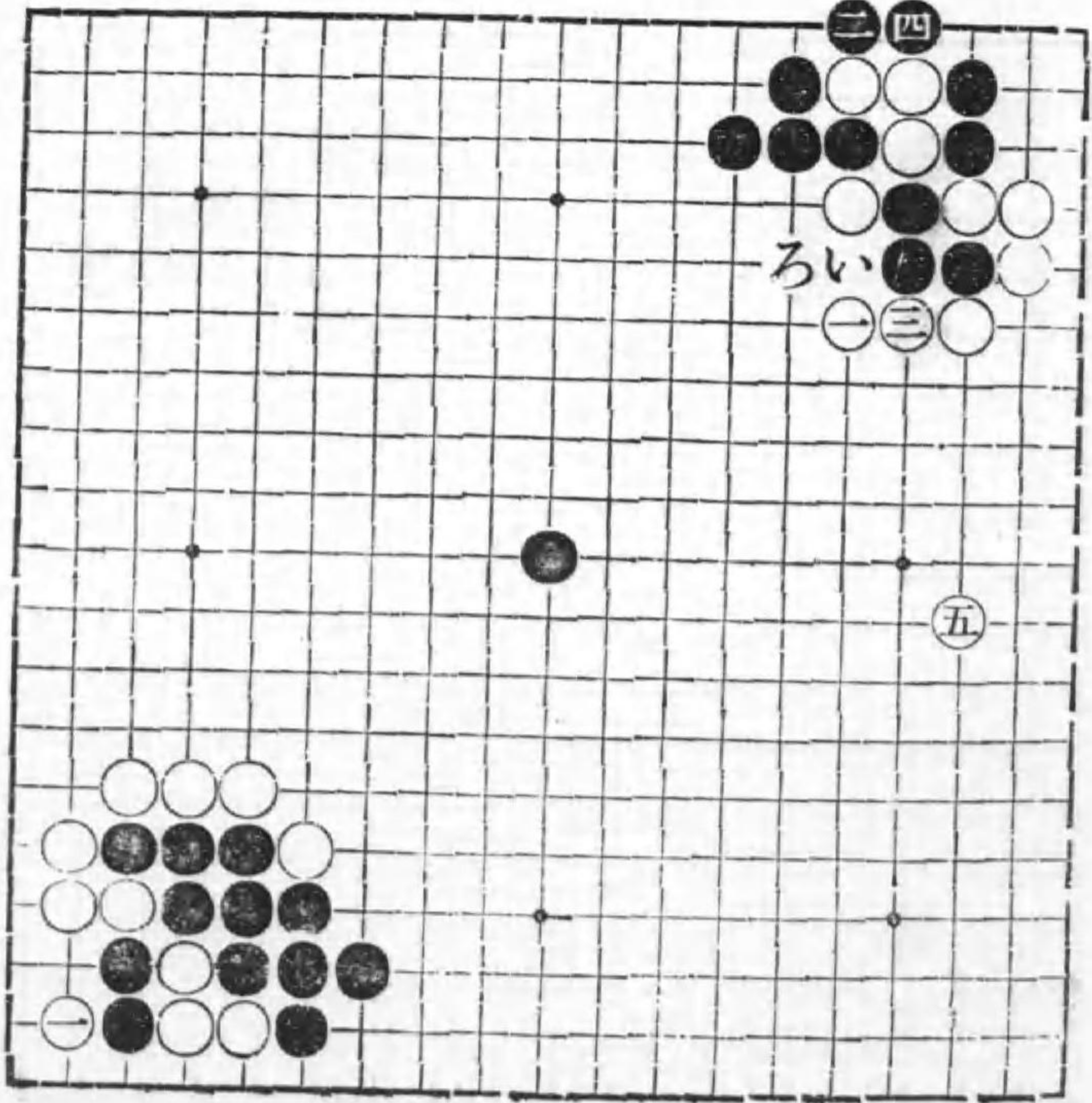
其結果は――

左下隅白一まで。と成ら

う。左様――

成らないのは、まだしも

即ち一層黒損。

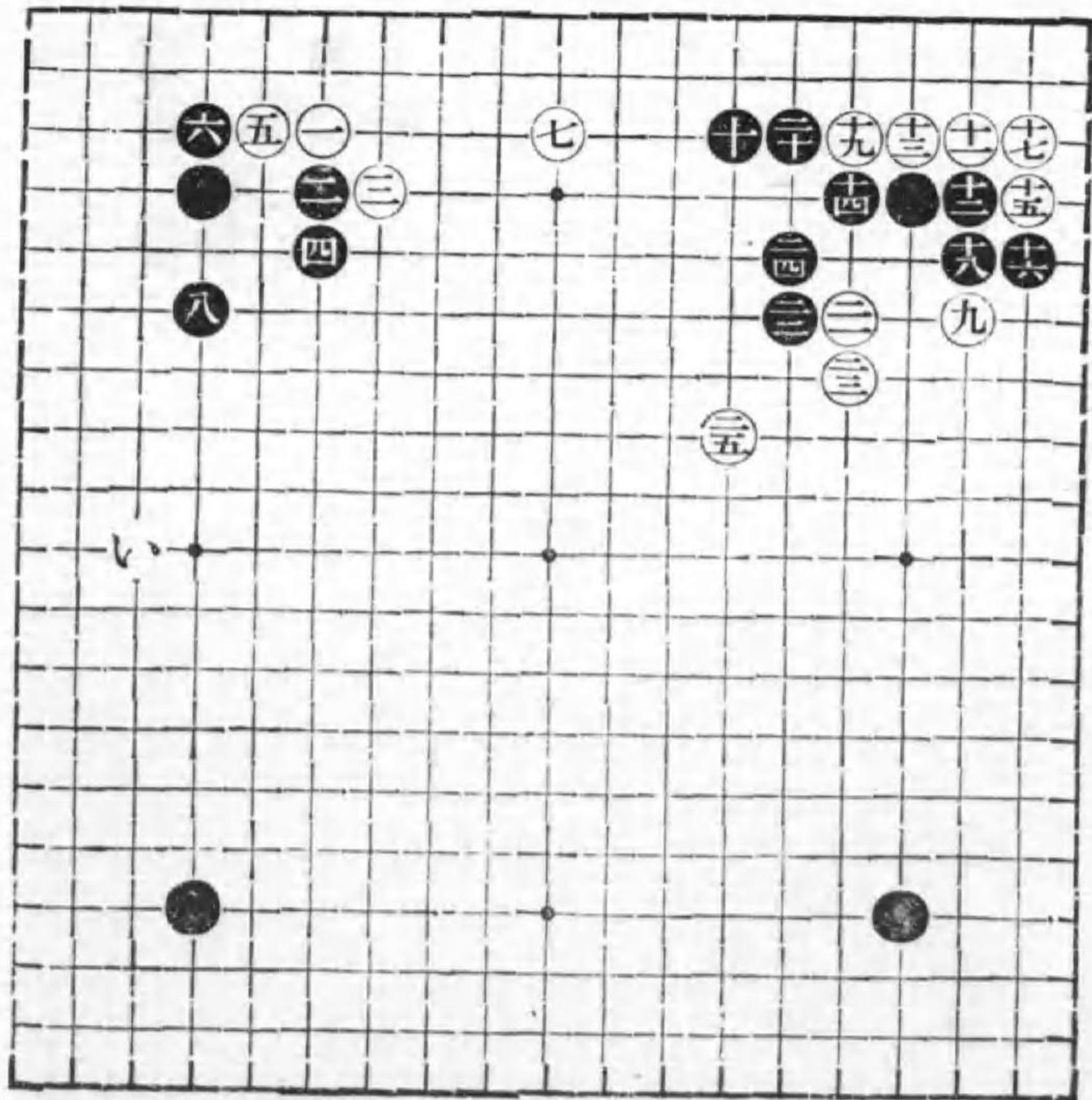


上面一帶通觀の事。

黒八は(い)でも可。併し九子や八子なら左様八でも可。と前にも言つてある。さて白一より黒八までの定石に、白九はそれも定石である。

即ち白九を二十は、既に白七があつて重複だからである。處で――

白九に黒十、そして白二十五までも定石。だが黒は詰らない。



三五六

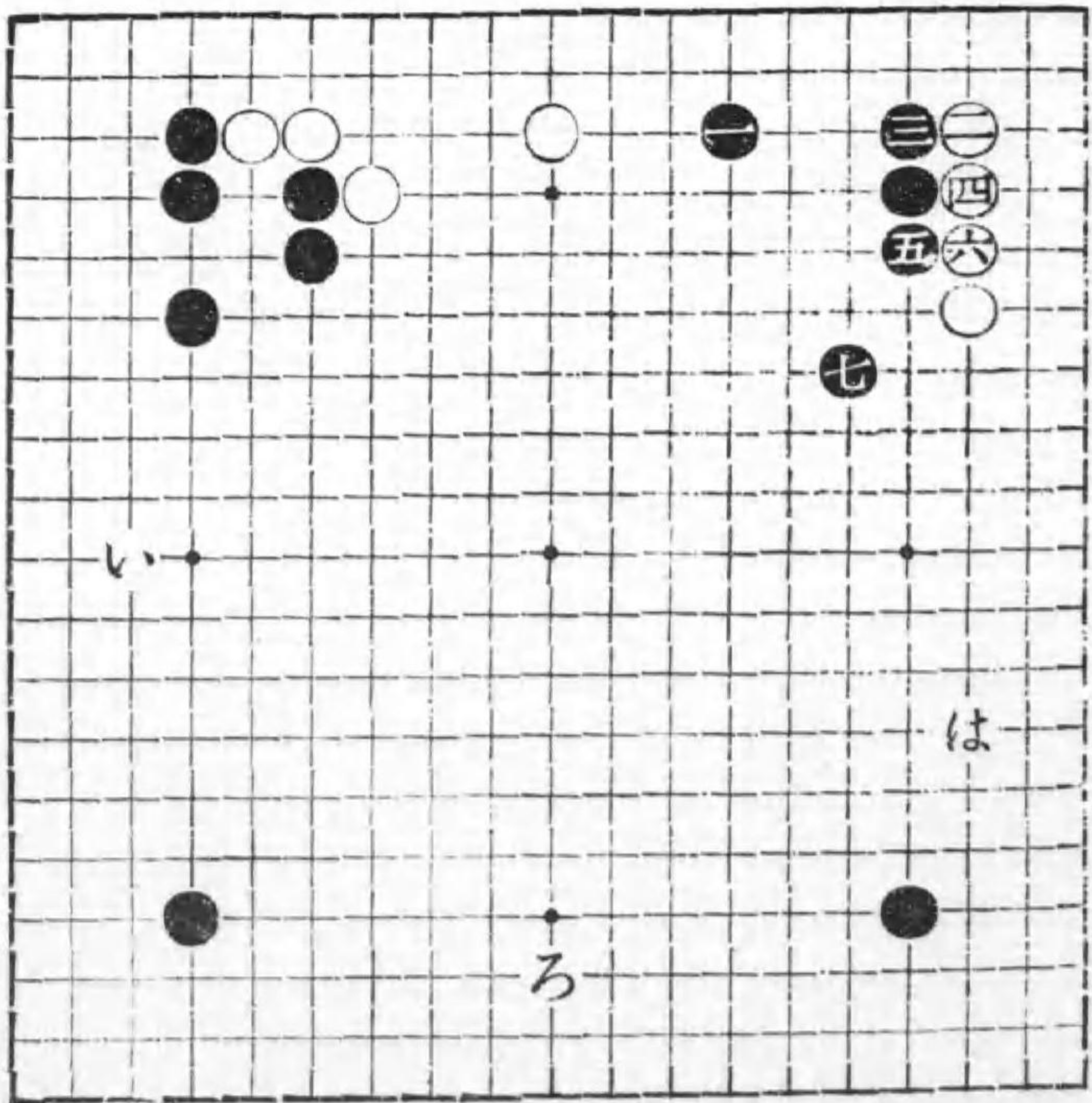
上面一帶通觀の事。

白二に黒五までも、次に黒七で黒悪くはない。

此意味は前にも言つたが、前回白二十五も違つた爲、それで重ねて現はしたものでなほ黒七は――

(ろ)(ろ)(は)の何れでも黒はいゝのである。

従來、黒三を四と決定的に定石としたが、黒五迄を不可なし、と改めおく。



三五七

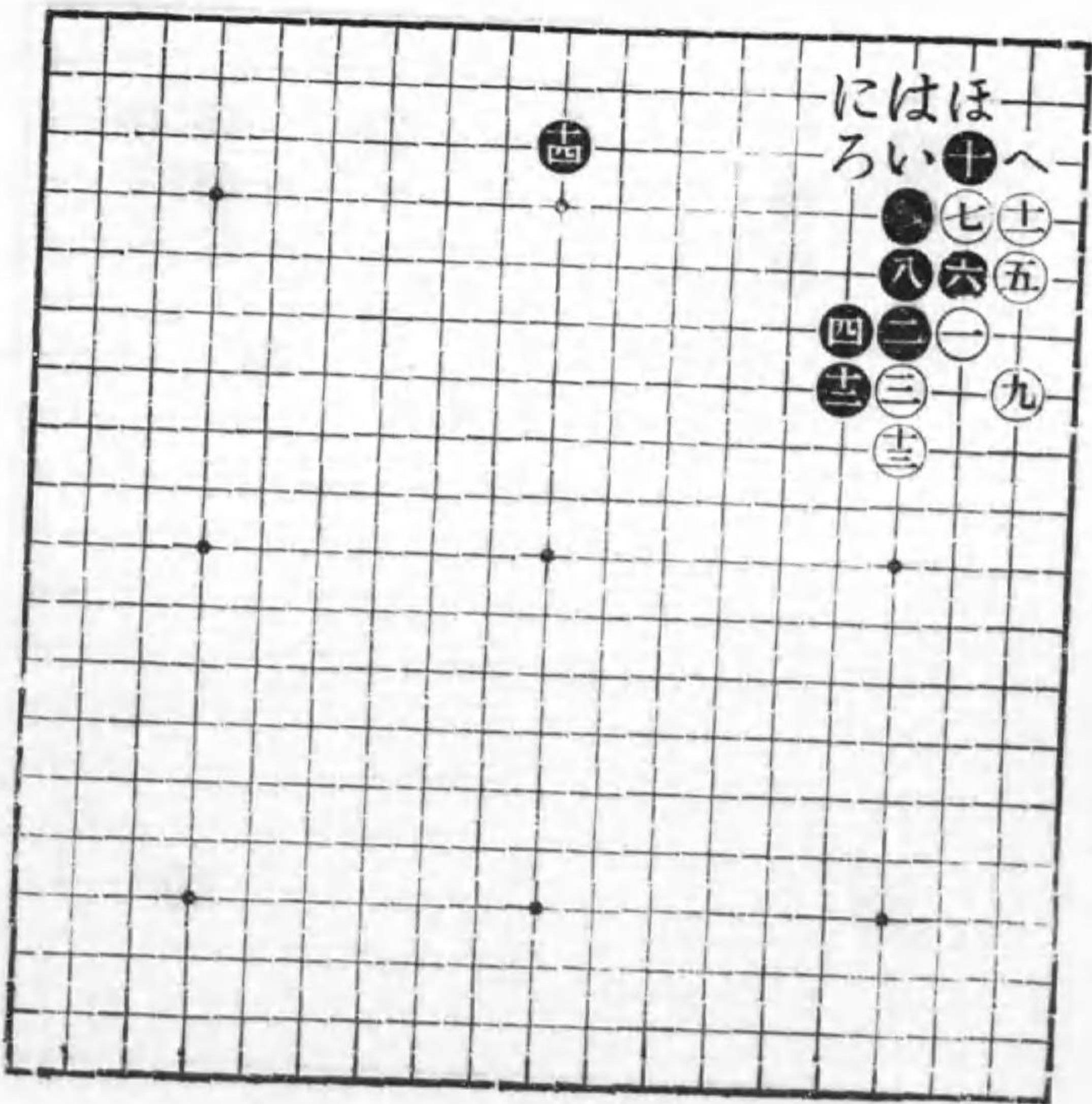
白一より黒十四までも、
定石であつて——

其構成分子の肝要な所は
白十一を十二なら、黒十一
と白七を打抜。

また斯様に白十一と粘ぎ
には、黒十二である。

そして白(い)には、次に
黒(ろ)白(は)黒(に)白(ほ)
と、黒十の一子を捨。

黒先なら黒(へ)。



本圖は前譜の参考である

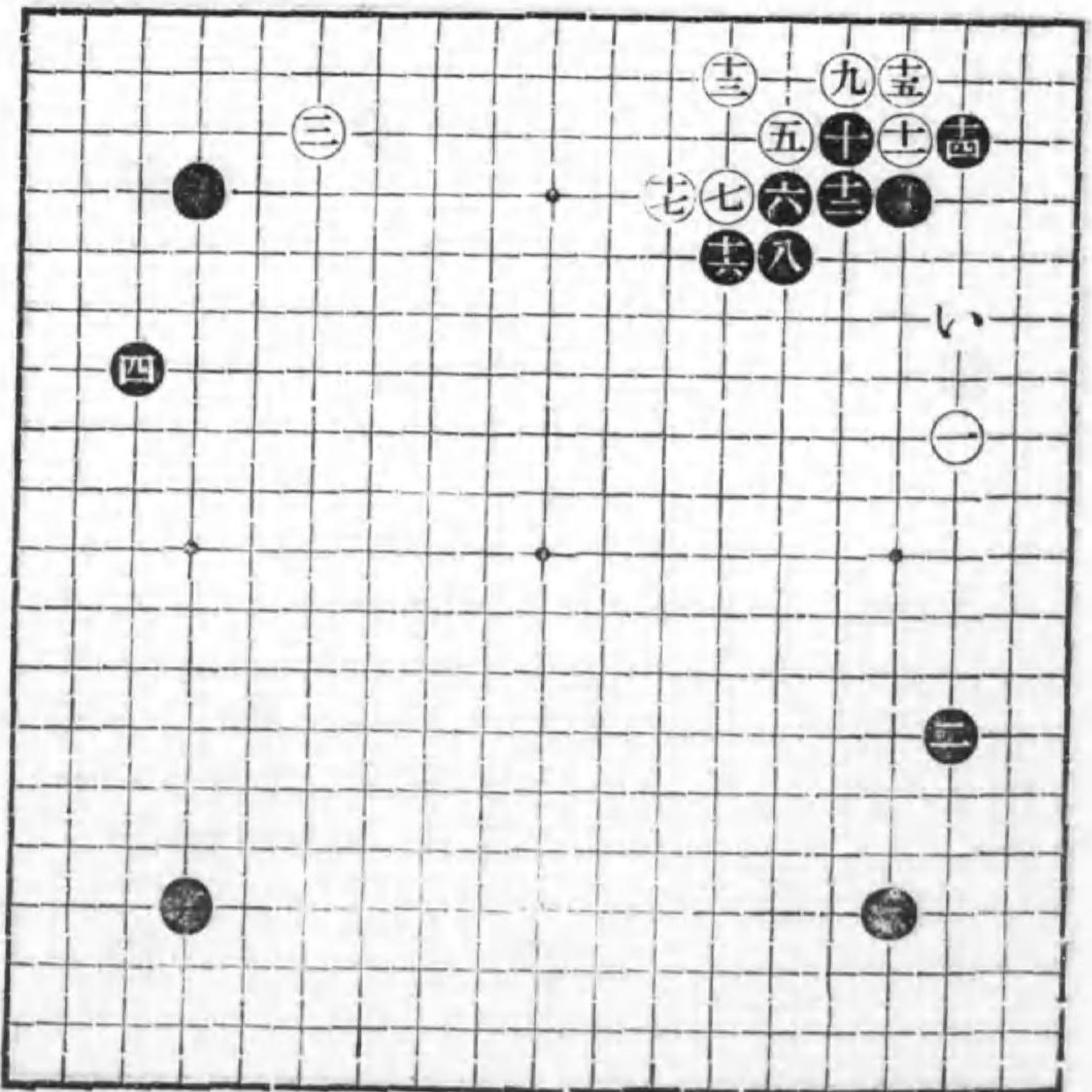
白一に黒二と打つ事もあ
つて、そして白五に——

以下白十七までは、定石
だが、白——

それが在つて次に黒(い)
等は、黒の手數八手で割合
不利の定石である。

それで黒六は他に轉じ、
また黒が將來打つ時は、黒
六を十、白六黒(う)等。と
知られよ。

定石



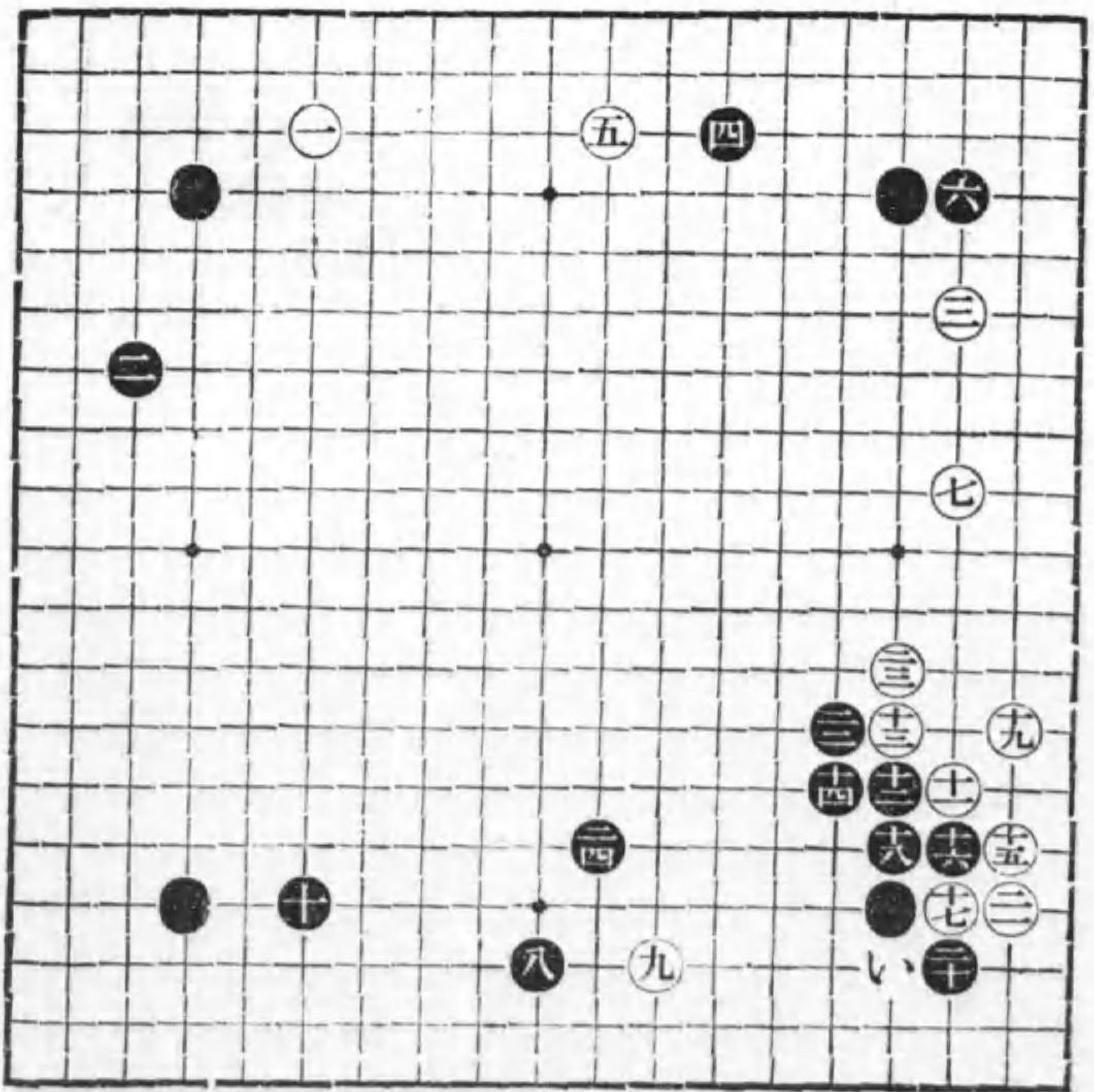
本圖は、白が定石、悪用である。

白十一より二十三までは三と七の白に二子が在つて白二十三の――

方は堅固。と合體、それを定石運用の誤りといふ。

のみならず黒二十四で白九が何と活計、此方も面白くない問題化である。

次に白(い)と黒一子取りは、それも白後手白悪い。



右上隅の白は堅固と見える筈。

さすれば左上隅白一。

即ち黒(い)と黒を堅固に

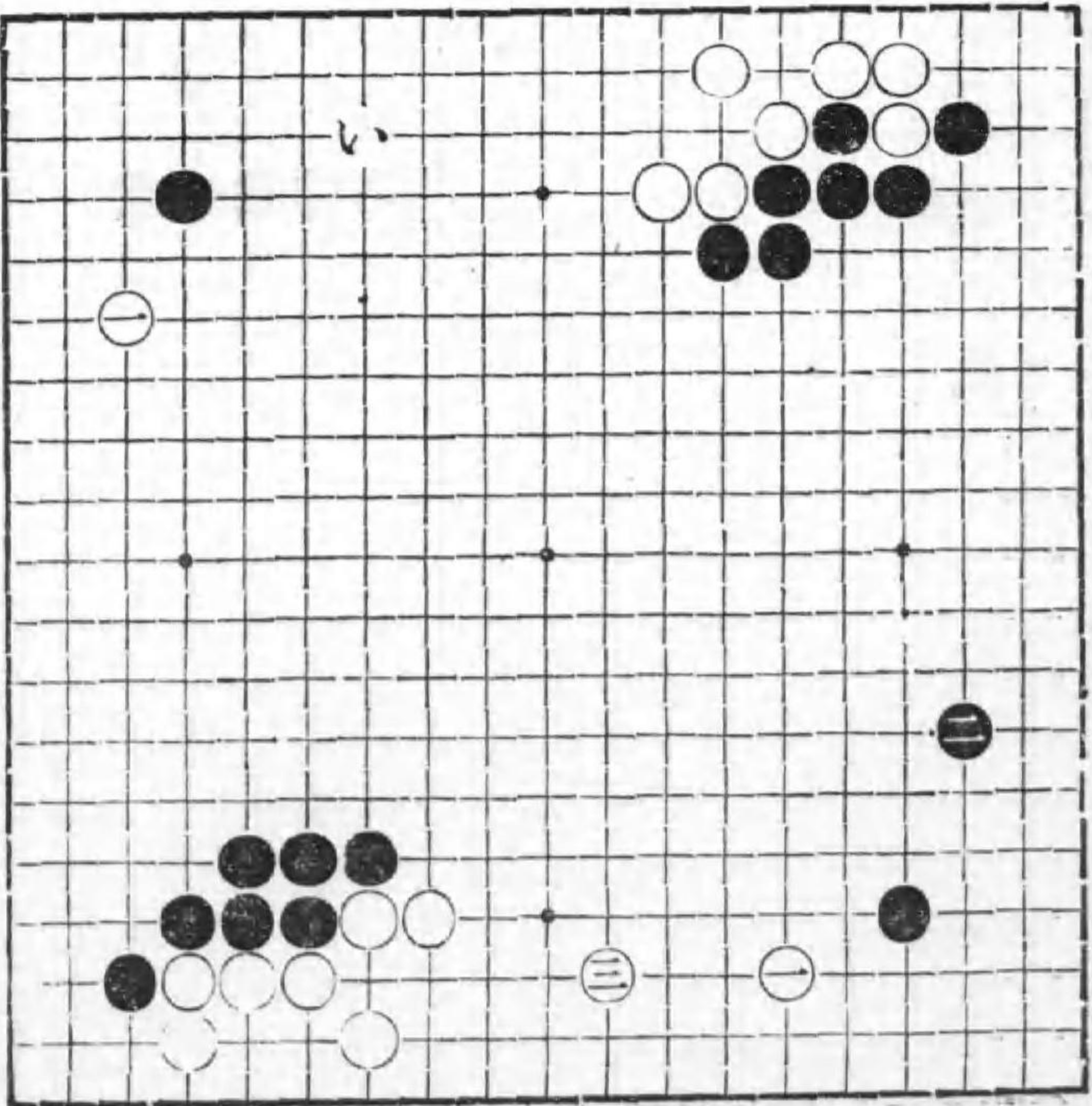
引寄せ、戦つて白有利の理

此れは原則だから、念を

入れ悟られ度い。

下圖白一と三、等は不原則。と知られよ。

また勝敗の分も、それが等が原因の一。とも悟られよ。

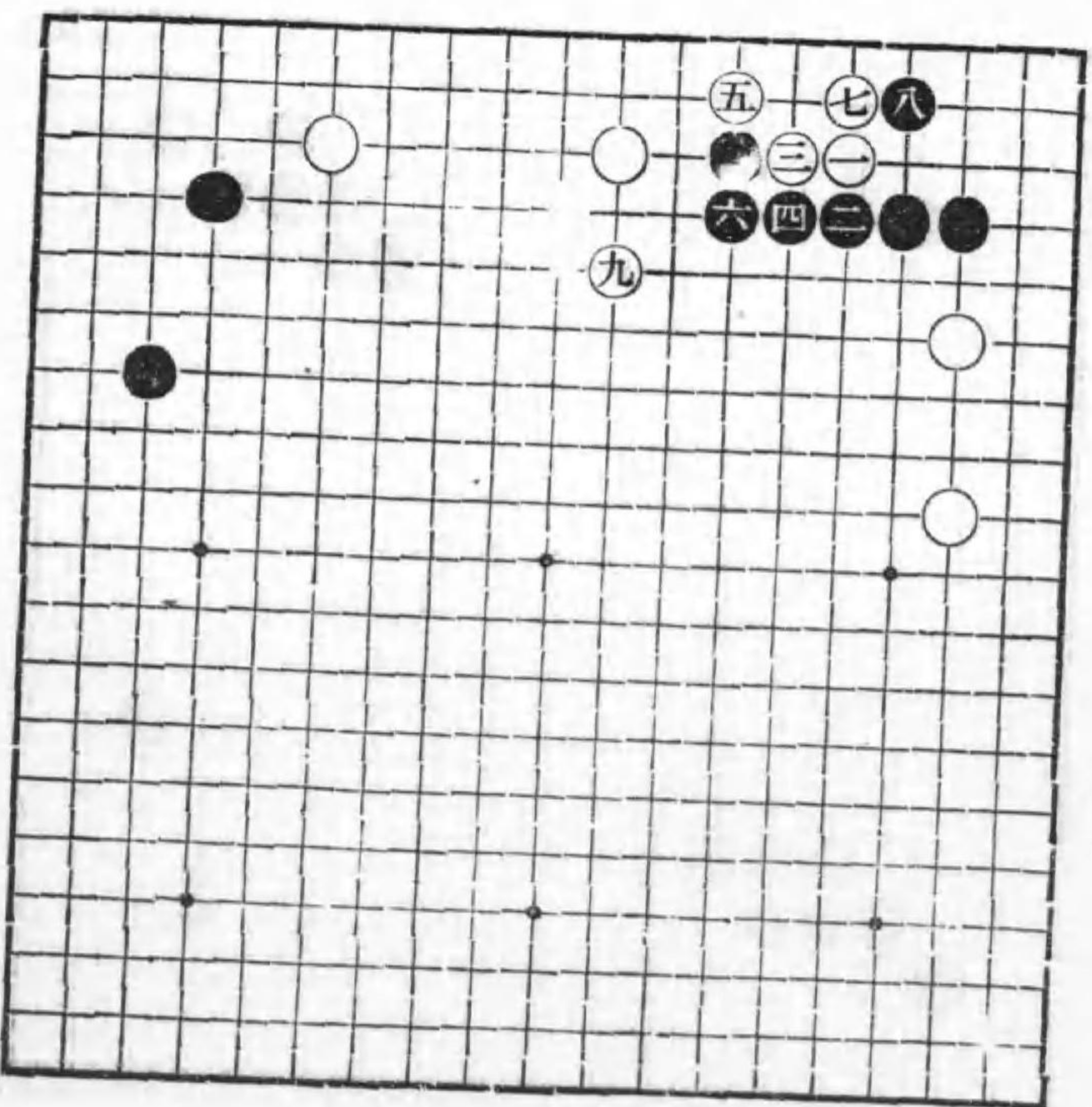


白一に黒八までは、定石である。

が上面一帯の如き際にあつては、第一に損と見られ黒不利の定石である。

黒に不利とは右下隅黒の手数は七手、に割合い悪い黒地をいふ。

しかも白先手であつて、次に白九。此れで上面白七手、比較に及ばぬ白の好展開である。



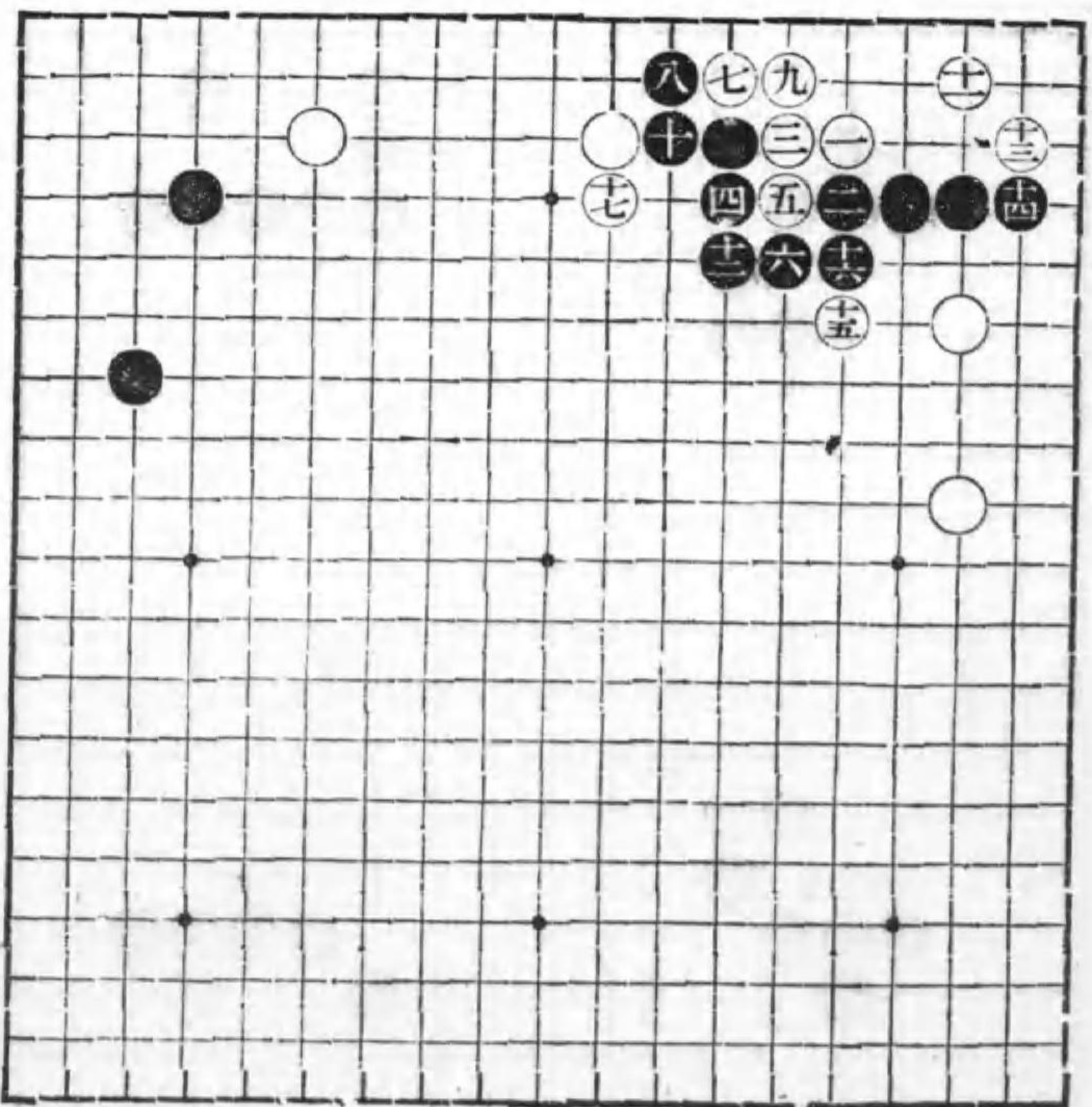
黒四が強行である、即ち前譜の様子、白を左方へ渡らせないからである。

併し白十七までも定石である。

處で本譜の如き周囲の關係にあつては――

白を内部で活かした替りの、黒の外部厚層利用が黒に至難。また黒の立場から人によつては――

黒は危険。とも見やう。



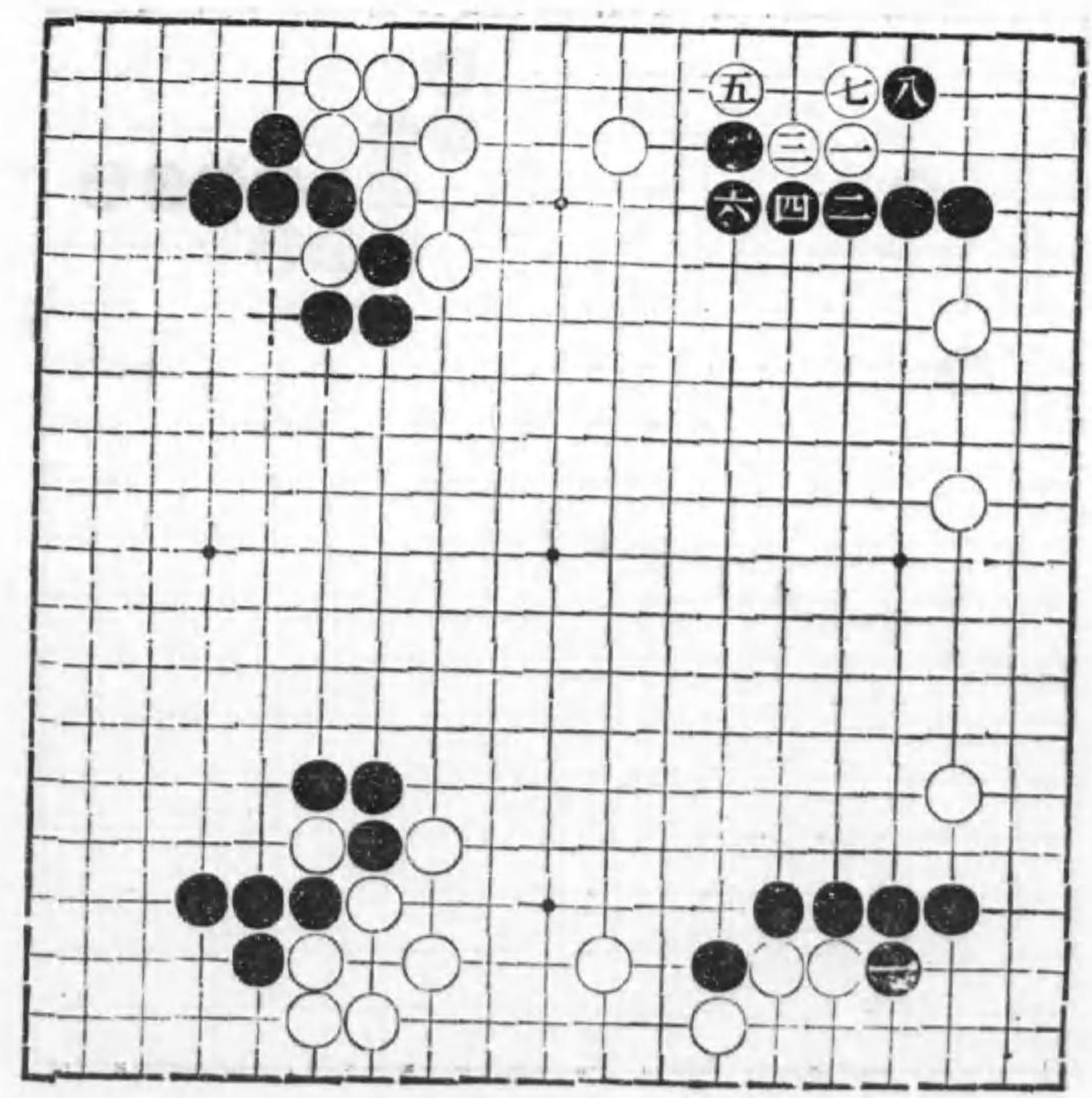
上圖——

黒二より八までの應手は
左下隅の方に——

其様な白堅あつて、白を
渡らせ、八までの定石活用
である。

黒四を六で白の渡りを止
めても、左方の白を攻めら
れぬからである。

なほ黒六などは、右下隅
に見る黒一と、それが優も
の。と此問題はかたづけ。



三六四

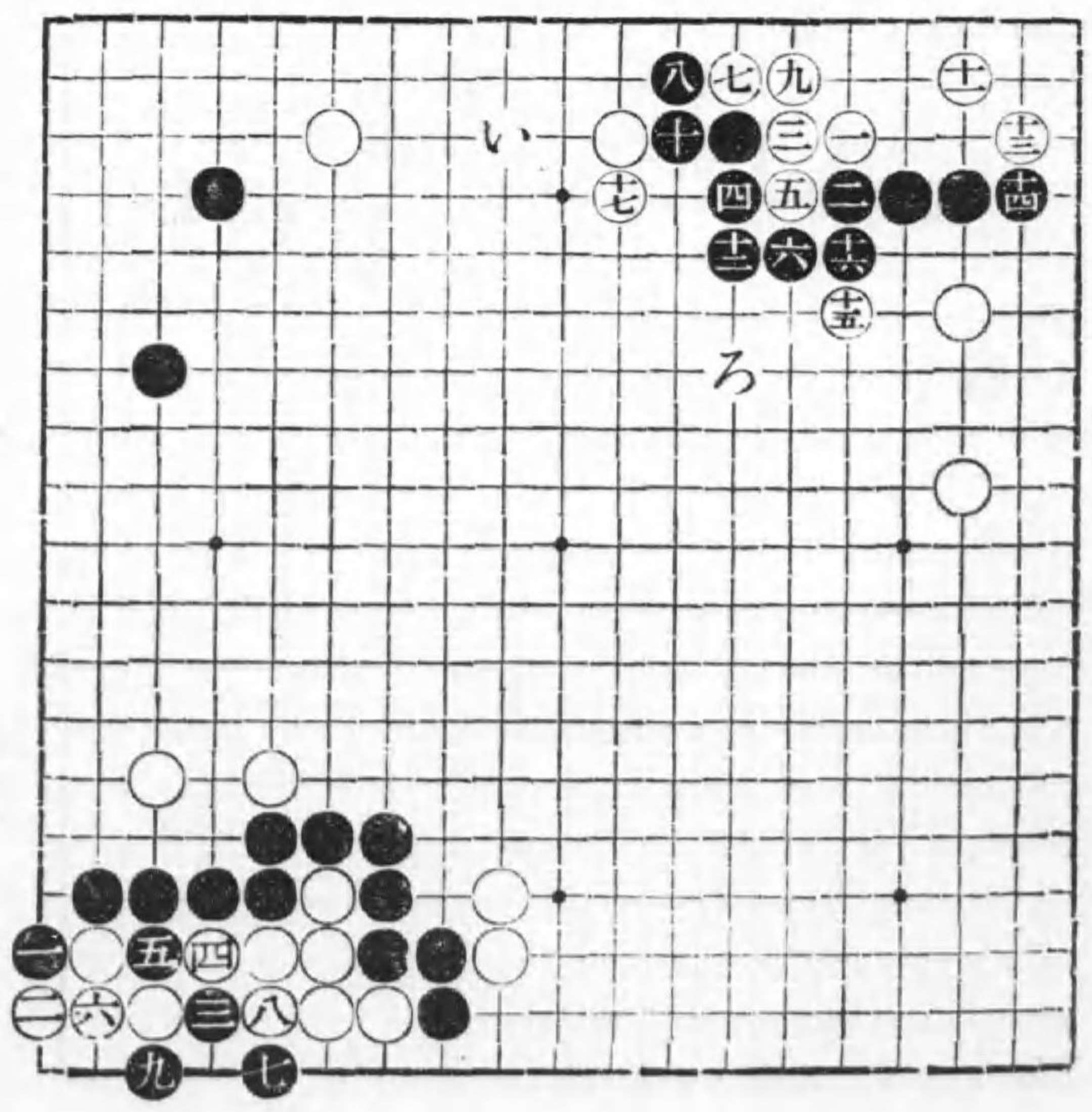
上圖——

白十七と成つて、黒(い)
と打込む、黒に勇勢あり、
哉——

どうして先づ(ろ)位に逃
げるといふだらう。

(い)と打込むは初段近い
(ろ)と逃げる人は初段に、
サア、六七子かな。

左下隅黒一より九までの
劫手段、を知る人が、上圖
に(ろ)。



三六五

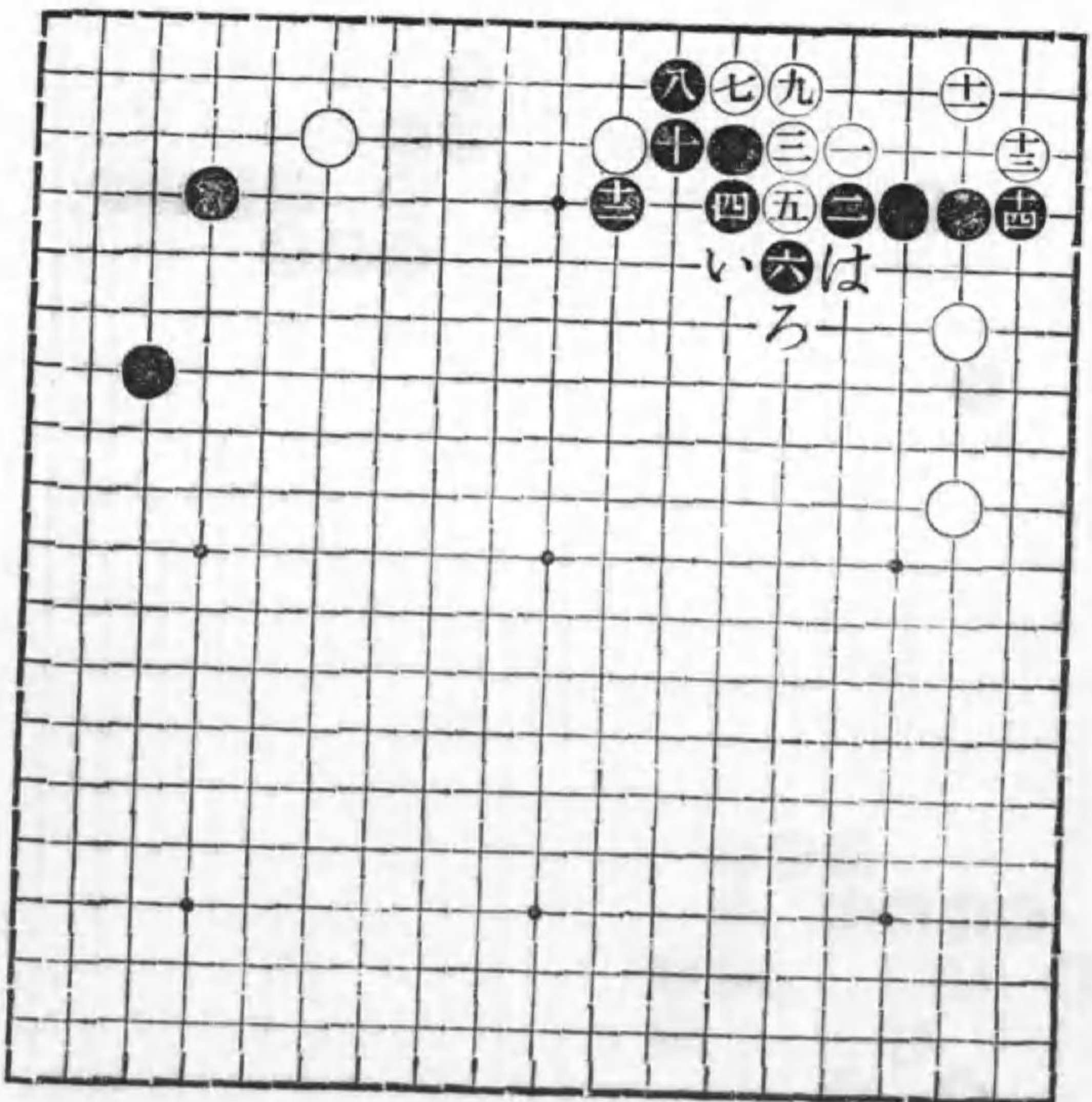
定石

黒十二は其れが定石である。十二を(い)は定石といつた時代もあるが、左様十二の方が――
將來黒に好展開、それで改良されてゐる。

黒十二の次に白(い)なら黒(ろ)。

また白(い)を(は)なら、其れは次圖。

重ねていふ、黒十二を定石と覚えられよ。



黒一、何と其の白の能動を制し、次に白(い)は、黒(ろ)――

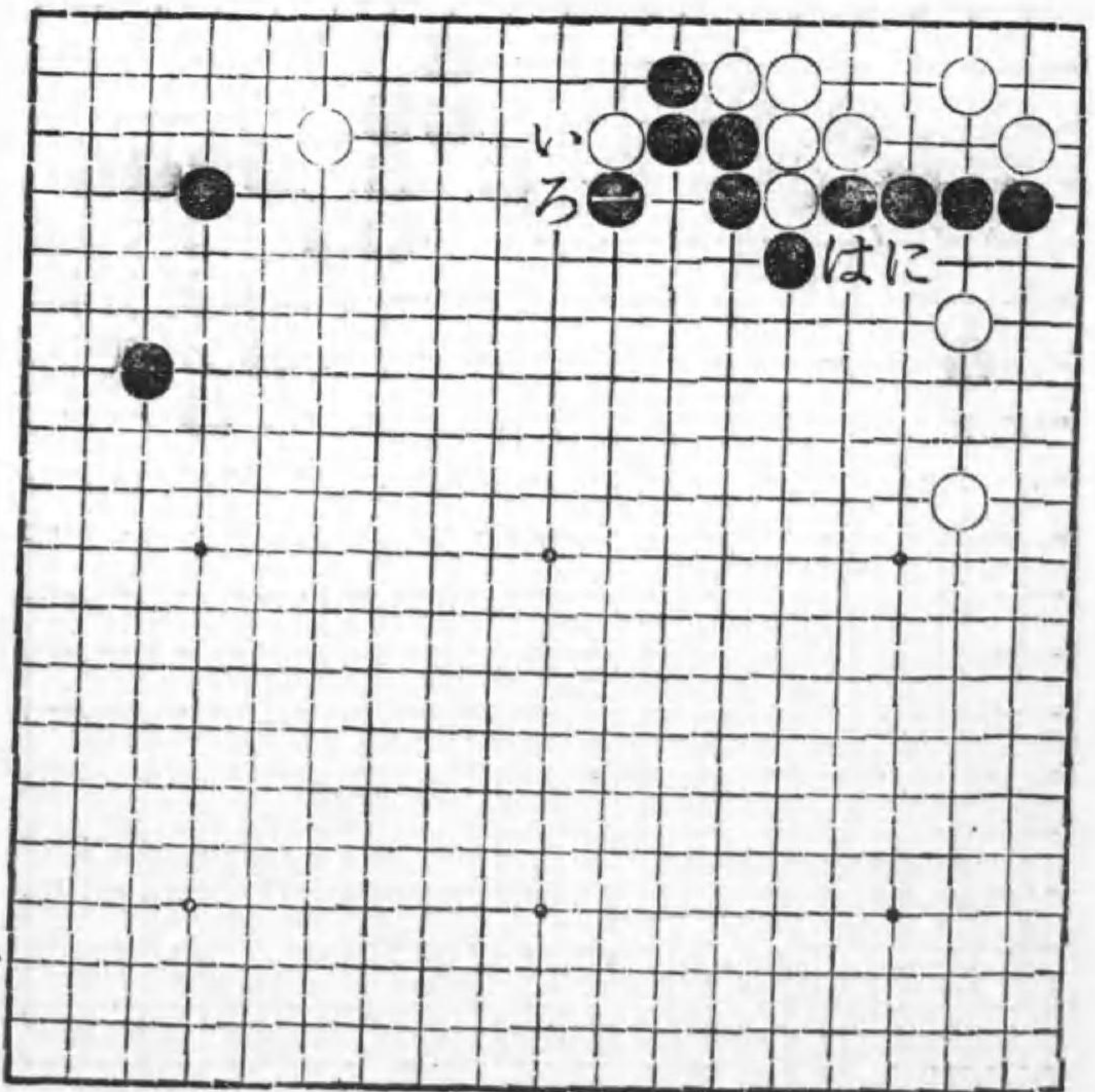
では白重い悪手である。

さて黒一に、白(は)が問題であつた。

白(は)に黒(に)。等は落第である。

黒一に白(い)の人と、白(は)に黒(に)の人と。

先づ同格である。それは次圖に判る。



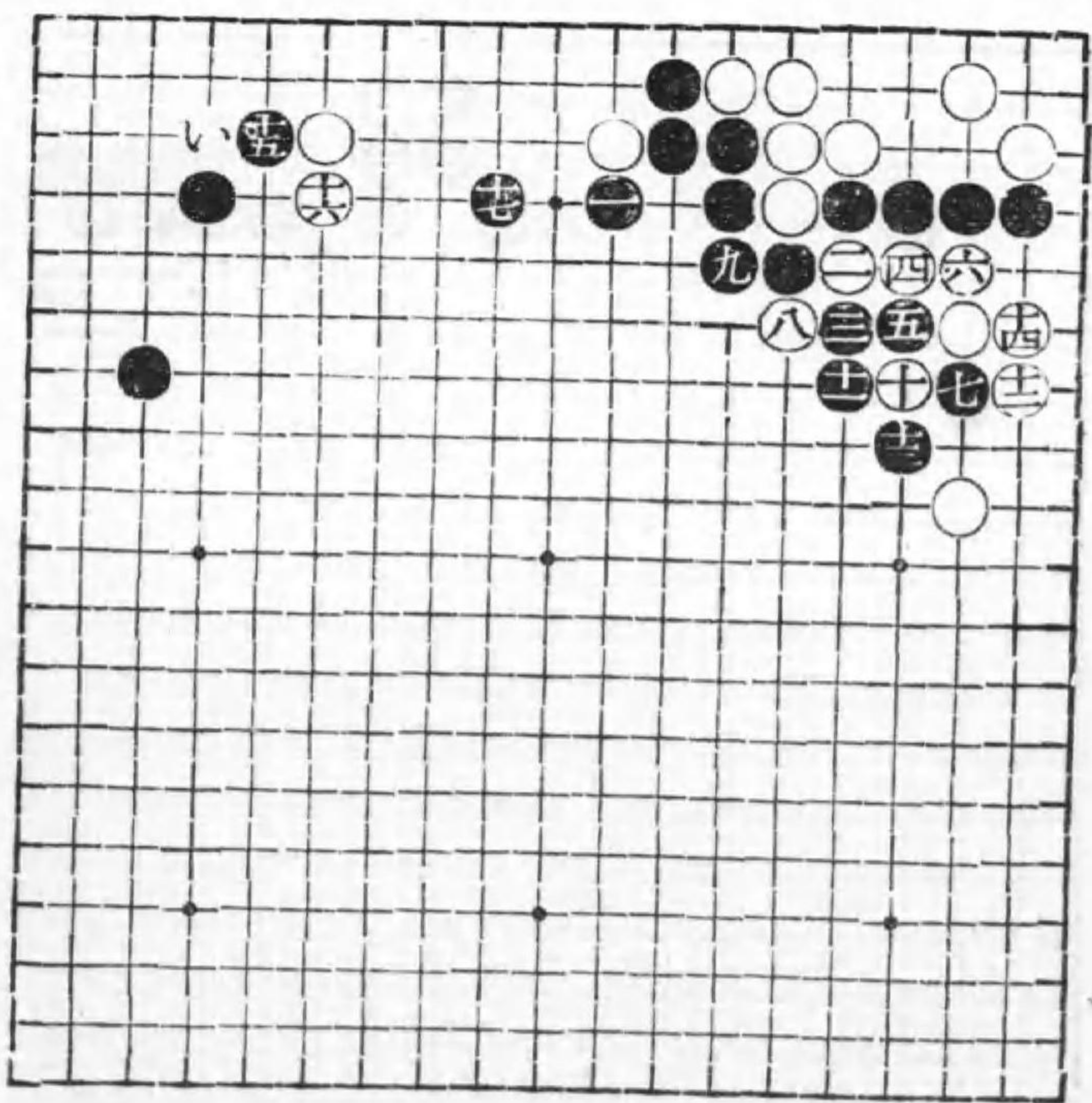
白二に黒三より七までが
黒に前途明朗——

それは白八の他は無い、
また白十の他は無い——

といふ事が以下黒十七と
なつて、即ち黒は隅の黒四
子を捨。

黒の外野は廣大、此れを
明朗といふ。

次に黒十五を(い)の定石
で無い、それも觀賞せられ
よ。



白二と黒は白に切られて
何とかして——

黒四子を助けたいと執念
一生懸命、考えてゐる。

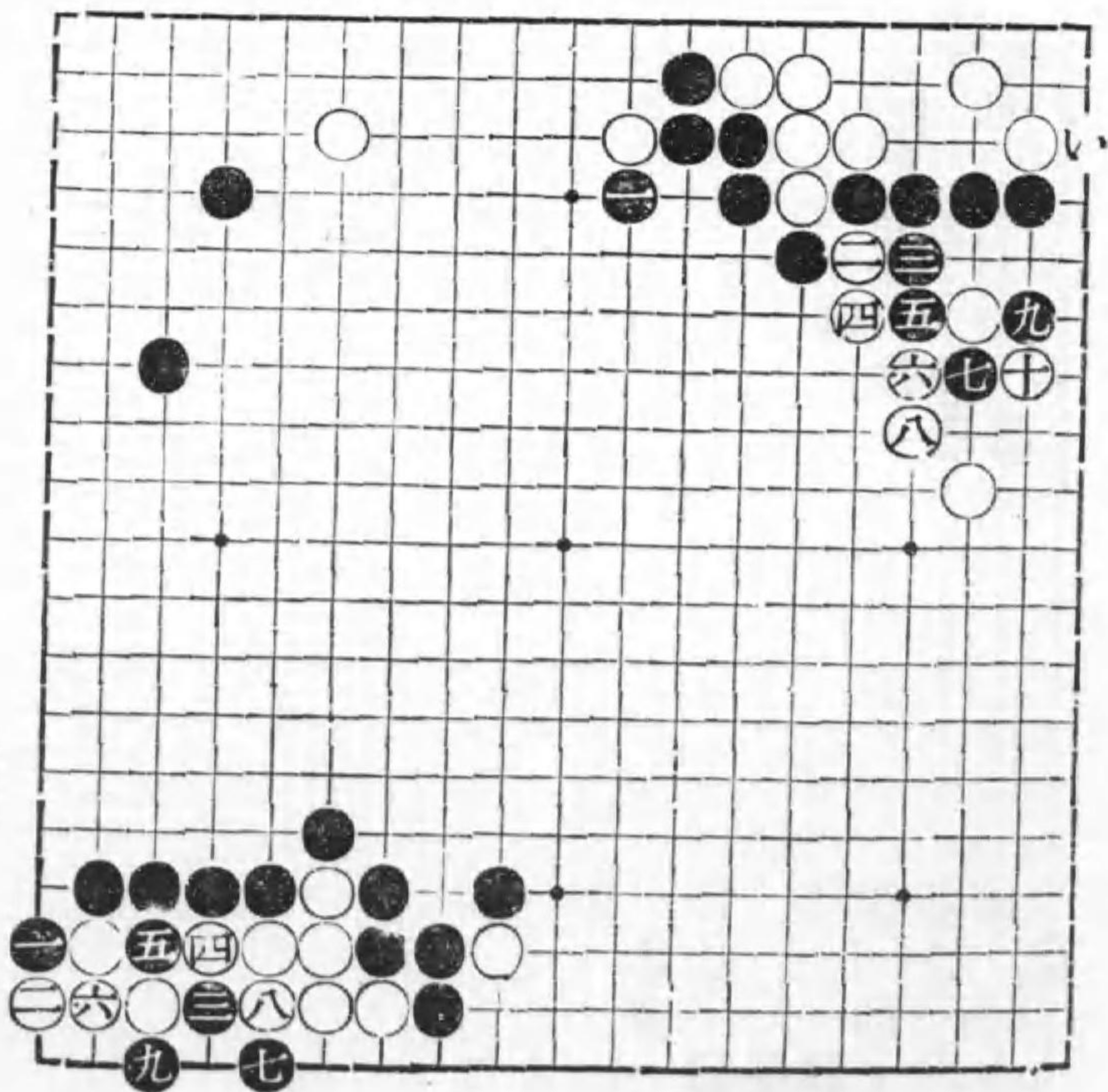
といふ、對局の情景があ
らう——

それが以下白十まで、黒
に活きは無い。黒大敗であ
る。黒(い)——

等が分る人は十までの黒
悪果は見透す。

即ち兩録の左下隅の劫。

定石



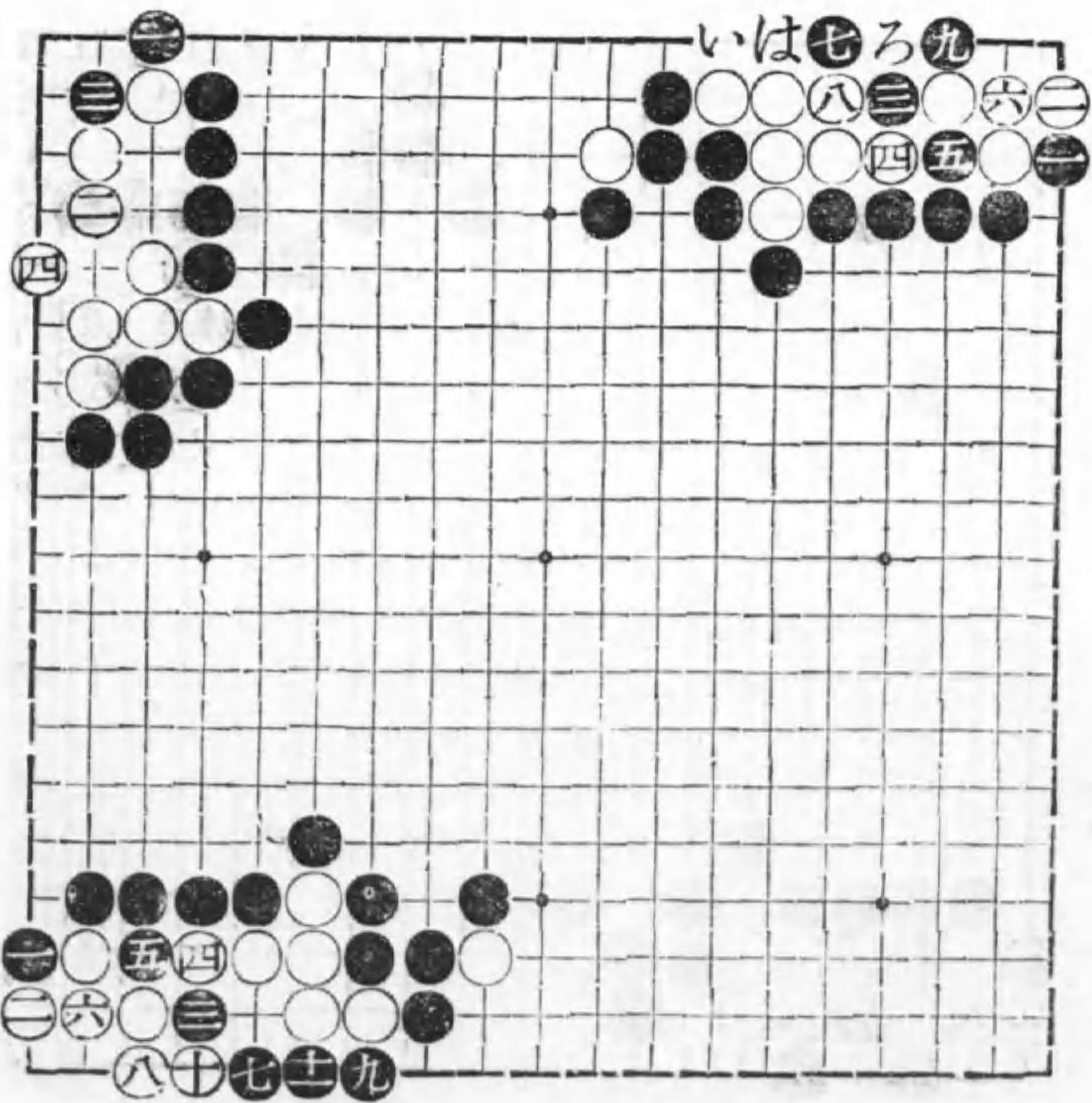
黒一より九までの劫を、
黑白ともに知つてゐれば定
石である。

白八を九だと黒(い)。
白(ろ)は黒(は)。

それが左下隅黒十一まで
白は取られるのである。

白は劫争を避けやう、劫
立ても白に少ない、また敗
けでも無い形勢——

等の時は左上隅黒一に白
四まで。此れも定石。



三七〇

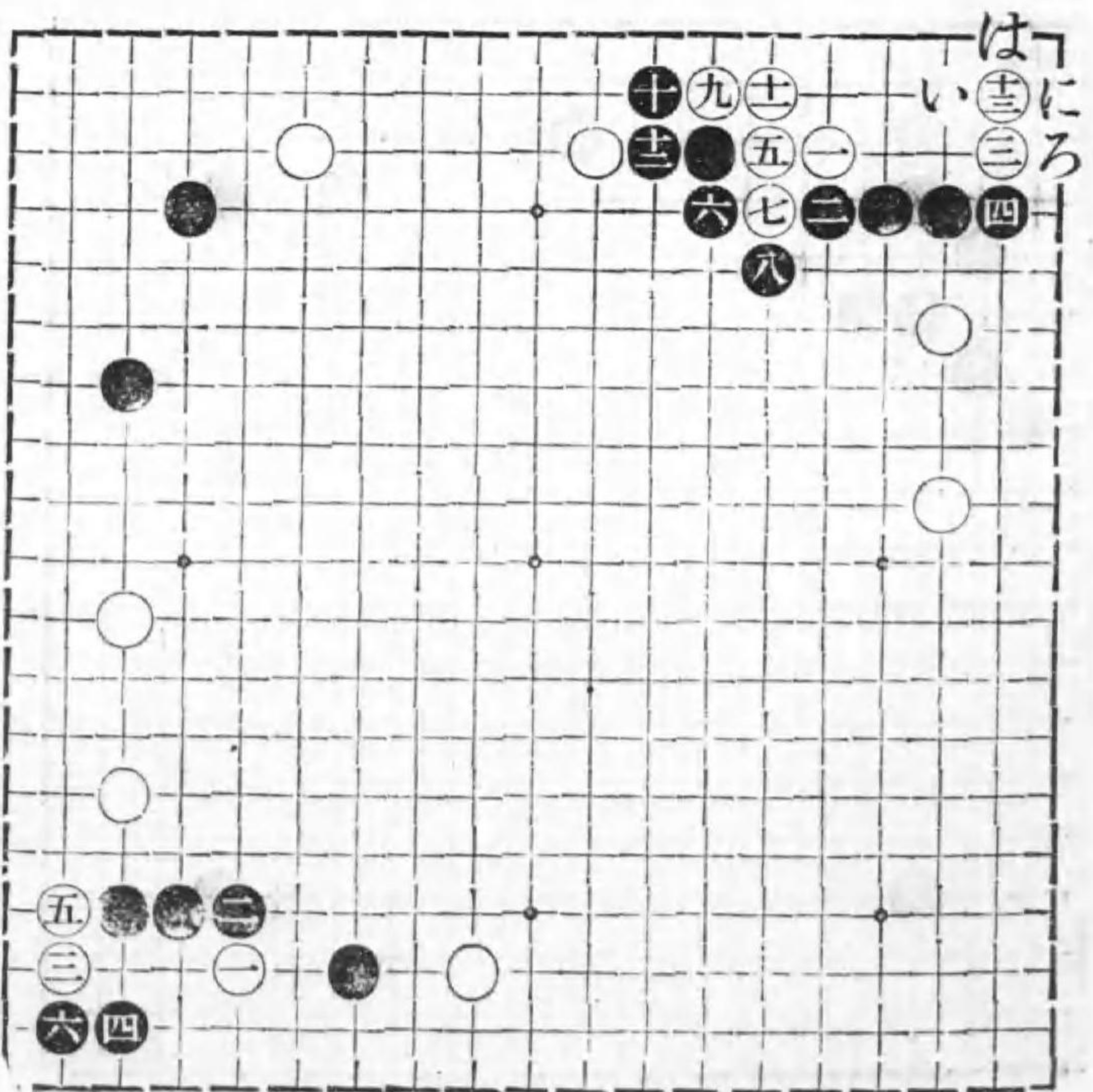
白十三を(い)が前圖の劫
である。

が本圖白十三までは、次
に黒(ろ)なら——

白(は)黒(に)白(は)。
白確實の活。

即ち白三と白は手順變更
の白十三まで。

では黒は詰らない、とい
ふ場合は、左下隅白三に黒
四と六。此れも定石である



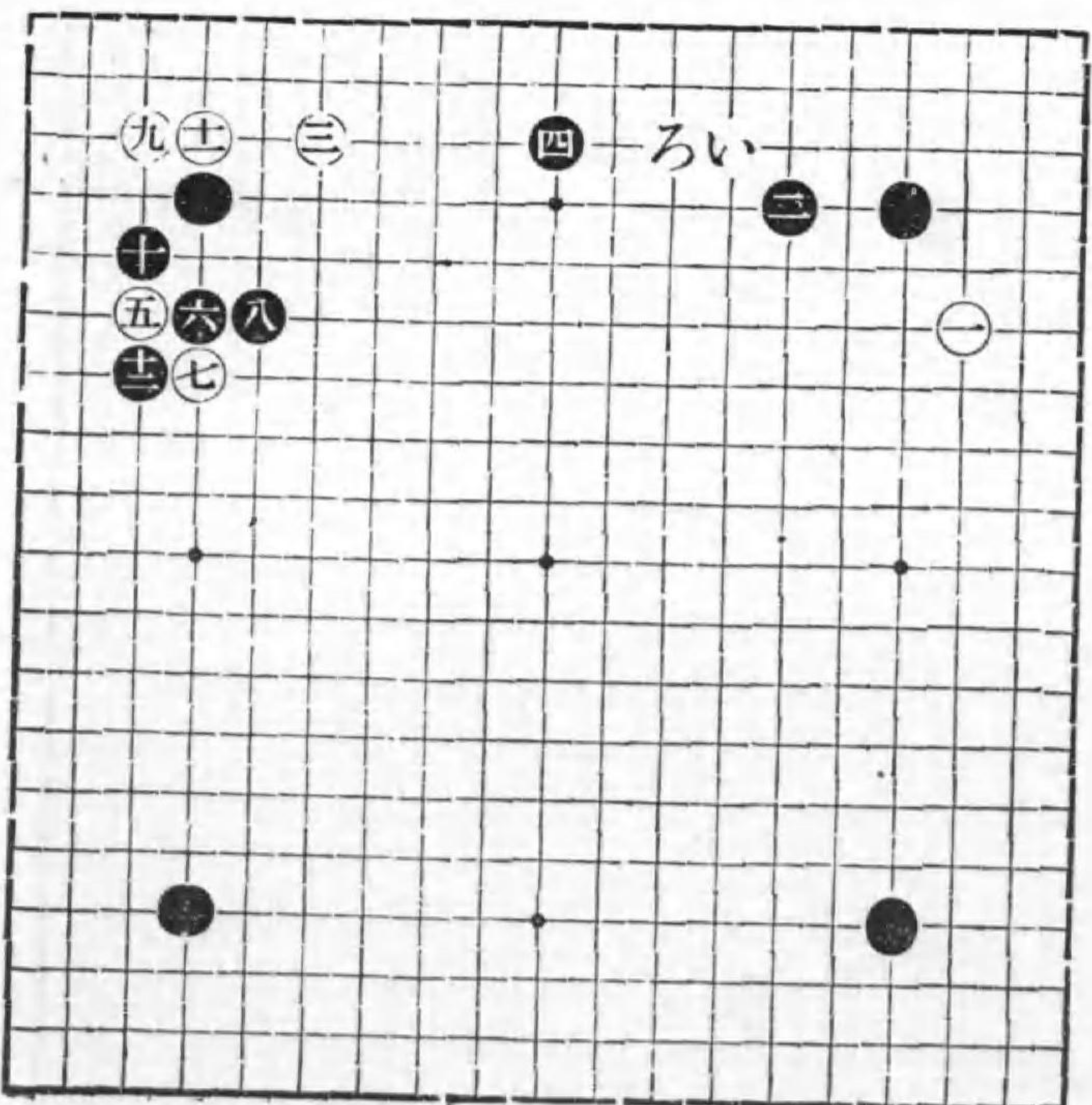
定石

三七一

白一に黒二は二を(い)より、位、を高く打つ、定石である。

また白三に黒四も四を六だと、白(ろ)と白の注文通りに成らない定石である。それに黒四は二と好釣合と味到され度い。

左上隅に移つて、白九に黒十と十二も定石である。が白に三を治められ、黒面白くない。と思つたら。



前譜黒八を本圖黒一が以下黒五まで――

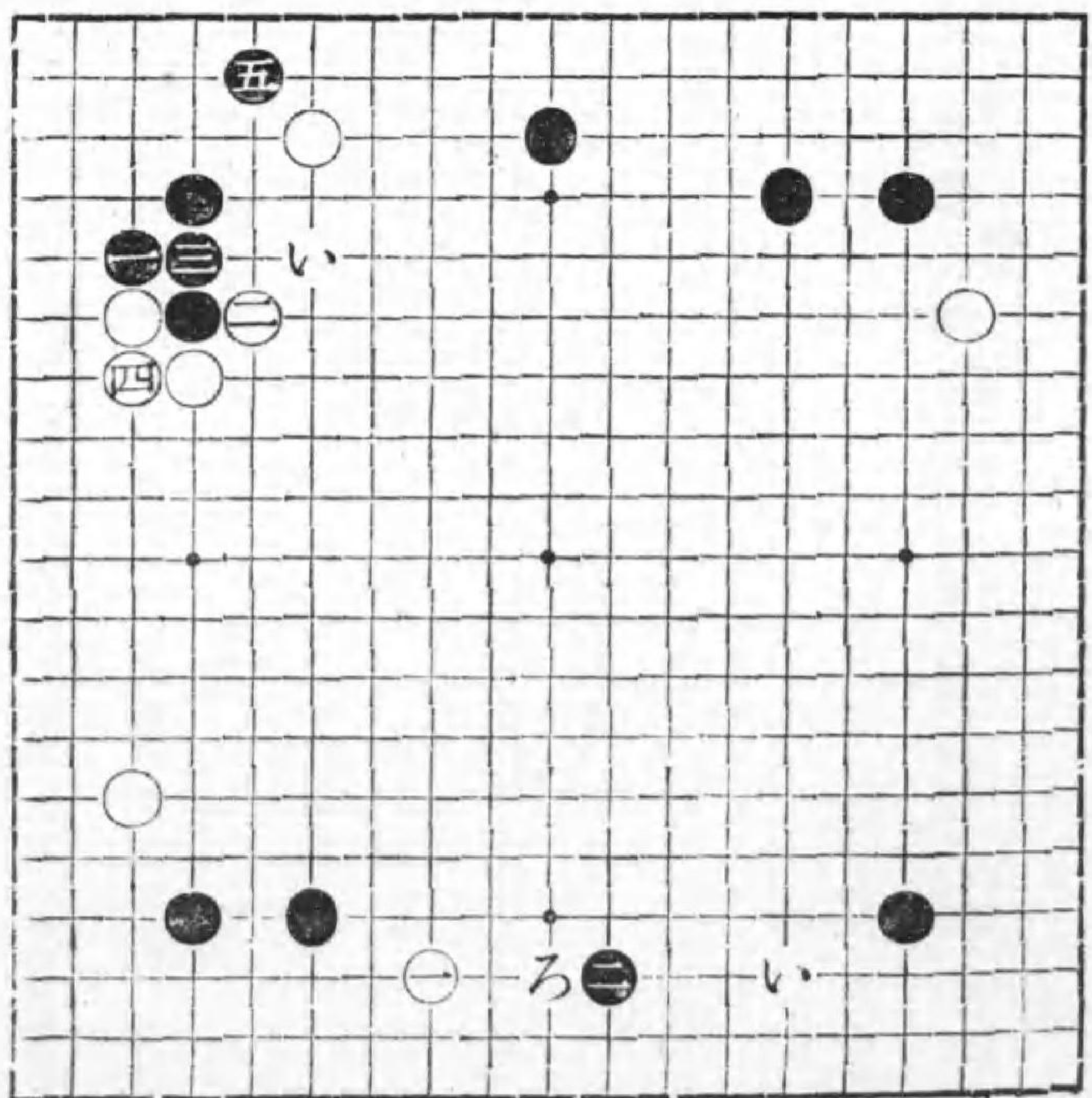
黒五までも前譜白三に安定を與えない――

黒四の待望もあつて定石である。

即ち黒五も(い)を待望。

待望とは前譜白三奪取の目的をいふ。

下圖白一に黒二は、定石である。白一を(い)は、黒(ろ)。と知られよ。



置碁の定石は三百種にものぼり、それを全部出しては大變である。それに基本と成るものは二割位、後は變化に利用のものでもあつて、今までに基本も出てゐる、また利用原理も説き、次より相先定石に移つて左圖で終りにしやう。

右上隅も基本定石である。次に白(い)なら、黒手拔でもよし、(ろ)の點が明いてゐたら(ろ)も大場である。黒六を七以下の定石は既に出てゐる。

左上隅も基本定石、また黒六を九以下も前述通り、即ち黒六を九に、白七黒(は)、白(に)、黒八、に白六は黒(ほ)、白(へ)、といふ成型の定石である。

左下隅は、白五を六だと黒(と)。そして白(ち)の基本定石も出て居る。それが白に不都合の場合、白七まで採る、七までは變通定石である。

右下隅も變通定石、即ち白三を(り)が通常、それが白に面白くない時、以下黒十二まで。黒十を十一は氣力に乏しい。黒十二の次に白(ぬ)なら、黒(る)。

人間、日常の事も基本定石は少ない――

商店も定價を付けて、客人の來るのを、待つて居るそれが基本定石。

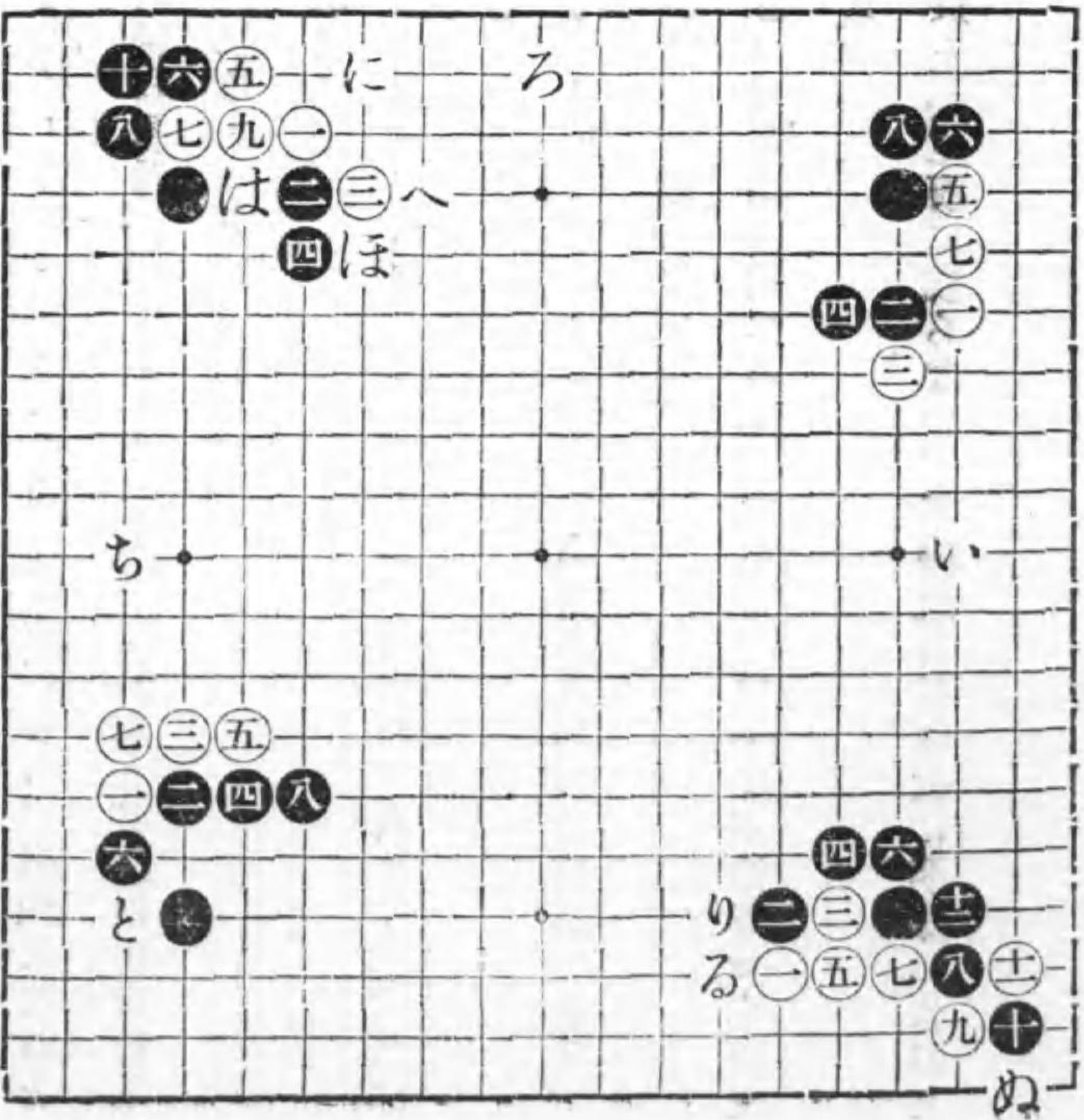
定價を値切られ、賣つてしまふのを變通定石、

そんな事は、かうしようといふのも變通定石。

今日は今日は、を交すのは基本定石。

此れ位にしやう。

定 石



置碁定石は、黒に置かれて夫れだけ局面が狭いから約三百種ぐらひ。相先になると道理上、廣いのであつて約五百種にも及ぶのである。が大切な基本と其變通だけにしやう。此れで立派に世の中が渡れる——といふ程度に。

黒七は次に(い)を指す定石である。

白八は右側廣大に、拓す定石である。八を(ろ)は廣すぎ、白悪い。八を(は)、又は(い)も後の都合によつて用ひる定石である。

黒九は次に(い)と打込む其れと、九の次に白(に)なら黒(ほ)と兩用の定石である。黒(ほ)を(へ)でも(と)でも、一樣には限らない。

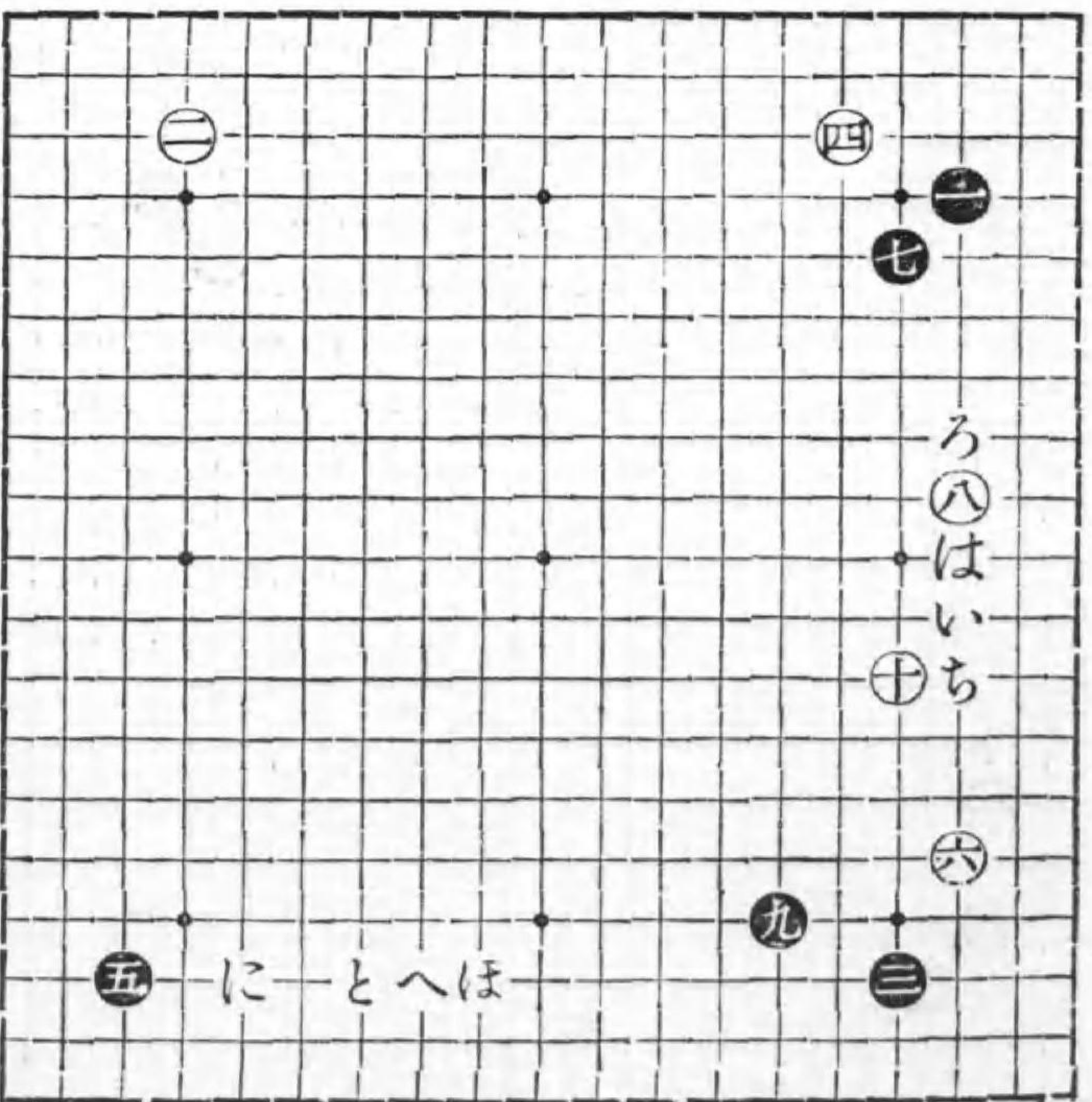
白十は(い)と黒に打込まれる、其防備に用ひる定石である。白十は不恰好であつて十を(ち)は低位、不恰好である。

さて周圍の關係に依つて、以上が定石に成らない。其變通自在は次に明瞭にされるのである。

黒七と九は、何んで異様に用ひるのか——

と考へに及ぶ人は向上、等閑視の人は、向上も遅いものである。

彼の人の帽子の色が違ふ等は餘計な考へ事、黒七と九の意路は、行方が違ふ。



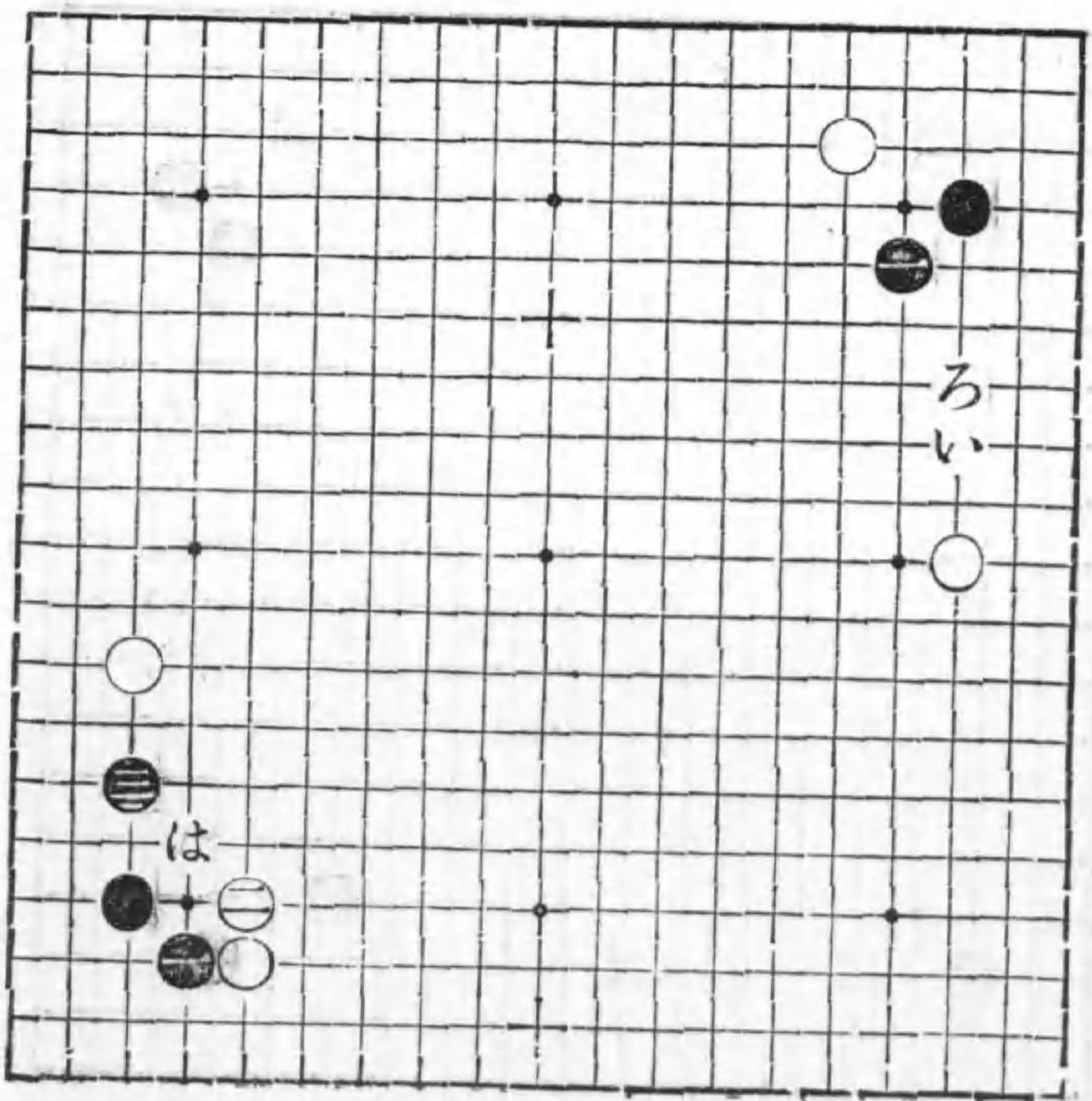
右上隅——

白丸二、黒丸一、即ち白
二手、黒一手、と其の様な
場合はよく現はれる所。
其所に黒一は次に(い)で
も狭い。

それより(ろ)の方が一
り得である。

と考えられ度い。

左下隅黒一を(は)より、
三までの得の事、即ち場合
が現にれるもの。



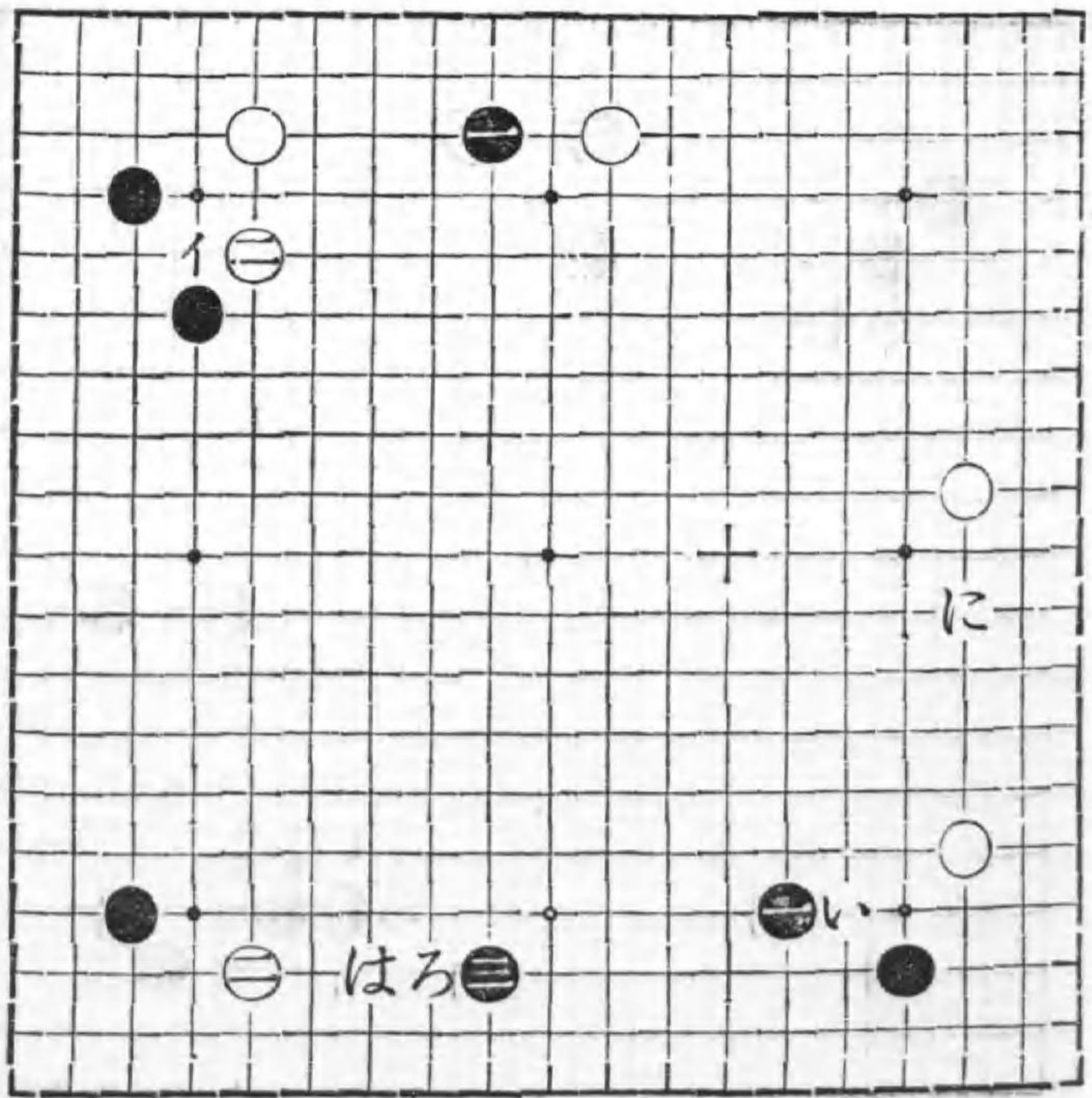
下圖黒一は一を(い)より
左方へ一路進んで居る。

されば白二に黒三より、
黒(ろ)、又は黒(は)。

と第一白二を挾撃に便利
といふもの。

また黒一は(に)と打込ん
だ時——

上圖に移つて黒一に白二
は手持無沙汰で調子がか
ない。其黒丸(い)に在れば
白二が當つて好調子。



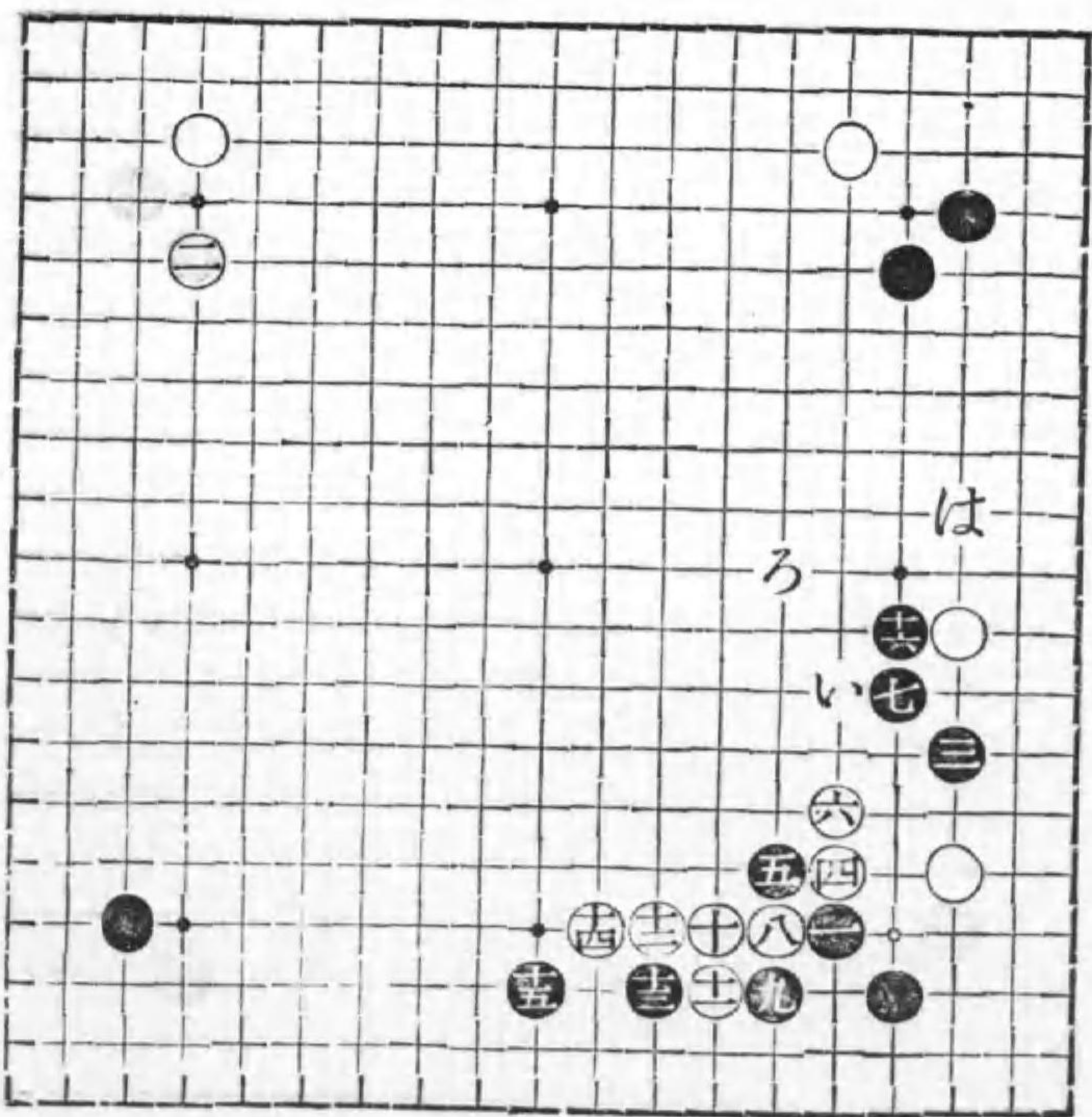
黒一に白二。

そうして黒三と打込みには、以下白十六まで。黒はあまり――

期待のできない、次に黒七を(い)なら白(ろ)。

要するに白の狭い所で黒三は事を好むといふもの。

黒三の打込みは(は)と黒に在つて、どうやら可能な手段である。



黒一は以下白六まで、そして黒(い)は――

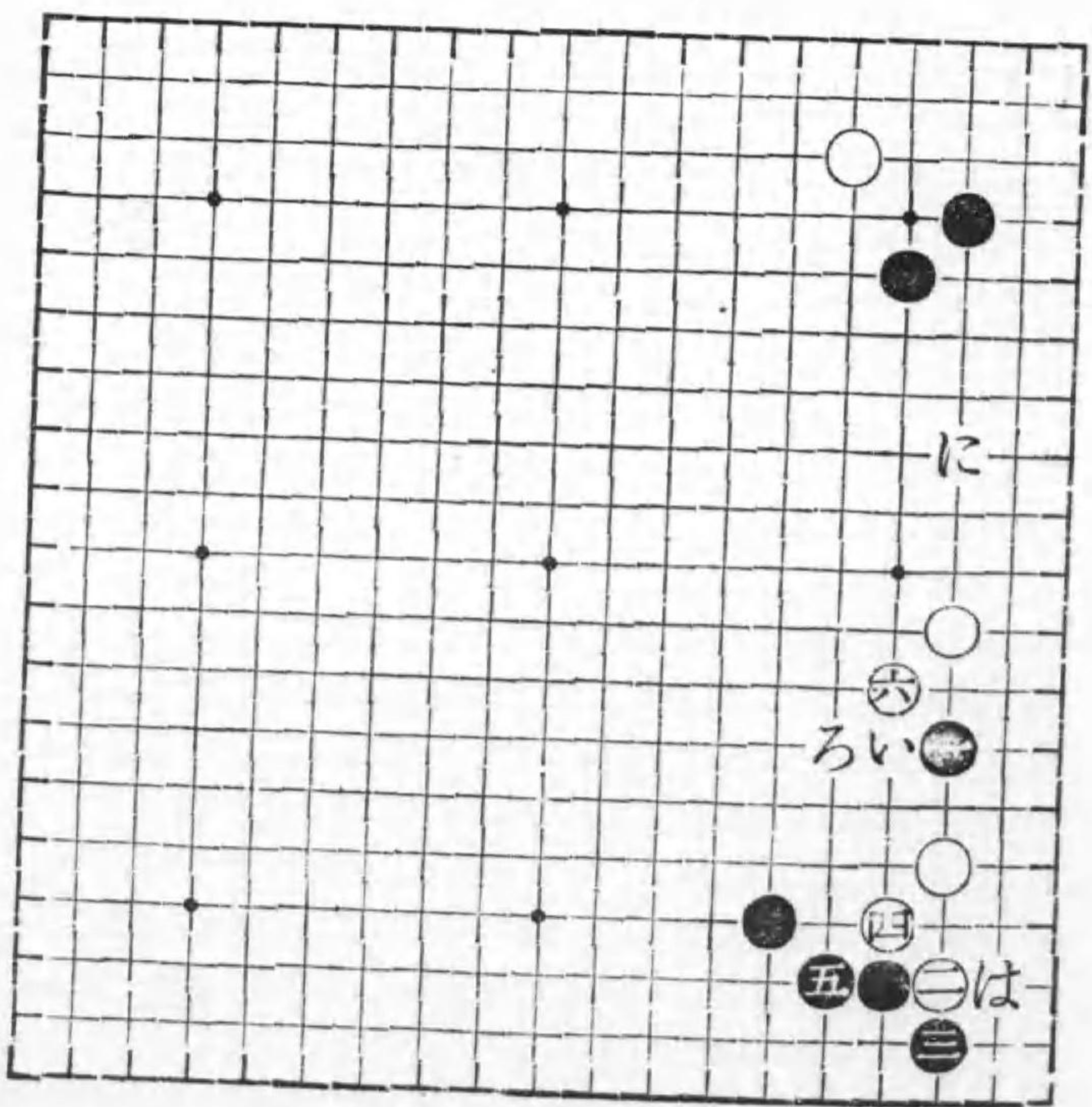
白(ろ)。

で黒(い)と一は重い事に因つて不結果である。

黒五で(は)は別問題。だが白に不結果ではない。

また白二を(に)でも、一の下白丸白一子は――

要するに黒に一手で取られはしない。



黒五は三間挟みといつて
其目的は――

黒七より以下十五まで。

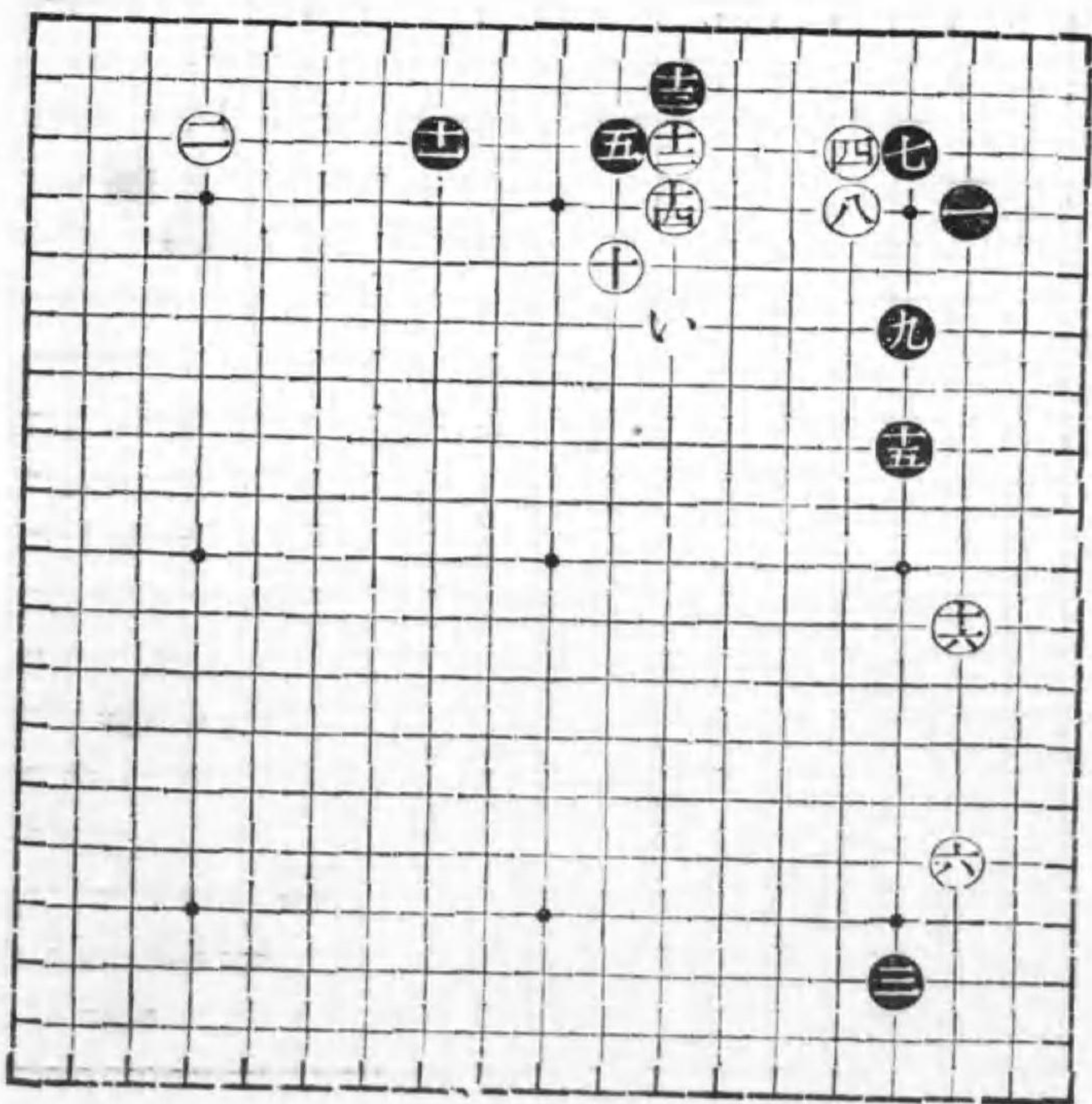
即ち左右に黒地、其目的
の定石である。

白八を手拔は、黒八。で

白四が悪化。

また白十を手拔は黒(い)
と白八の方を攻められ。

併し黒十五の次に、白十
六で白悪く無い、それが定
石成立の理。



黒一は白二の時――

黒直に三以下五だと――

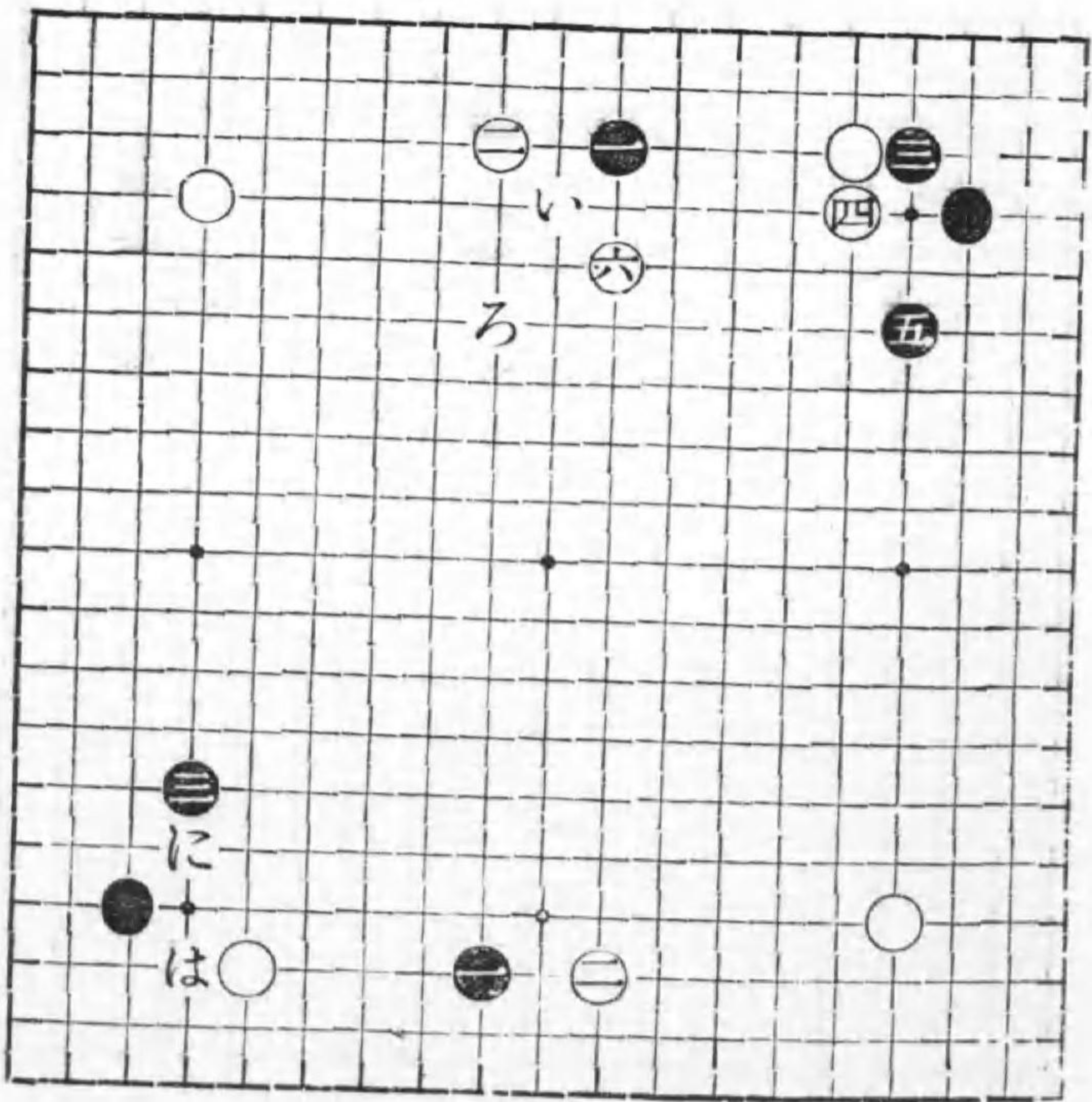
次に白六と成つて、白六
に黒(い)は白(ろ)。

では黒苦しい、其前途で
ある。と分る筈。それで下
圖を観られよ。

白二などの時は、黒三が
定石である。

黒三は次に(は)。

また黒三を(に)も定石で
ある。



黒一に白二より五までは定石である。

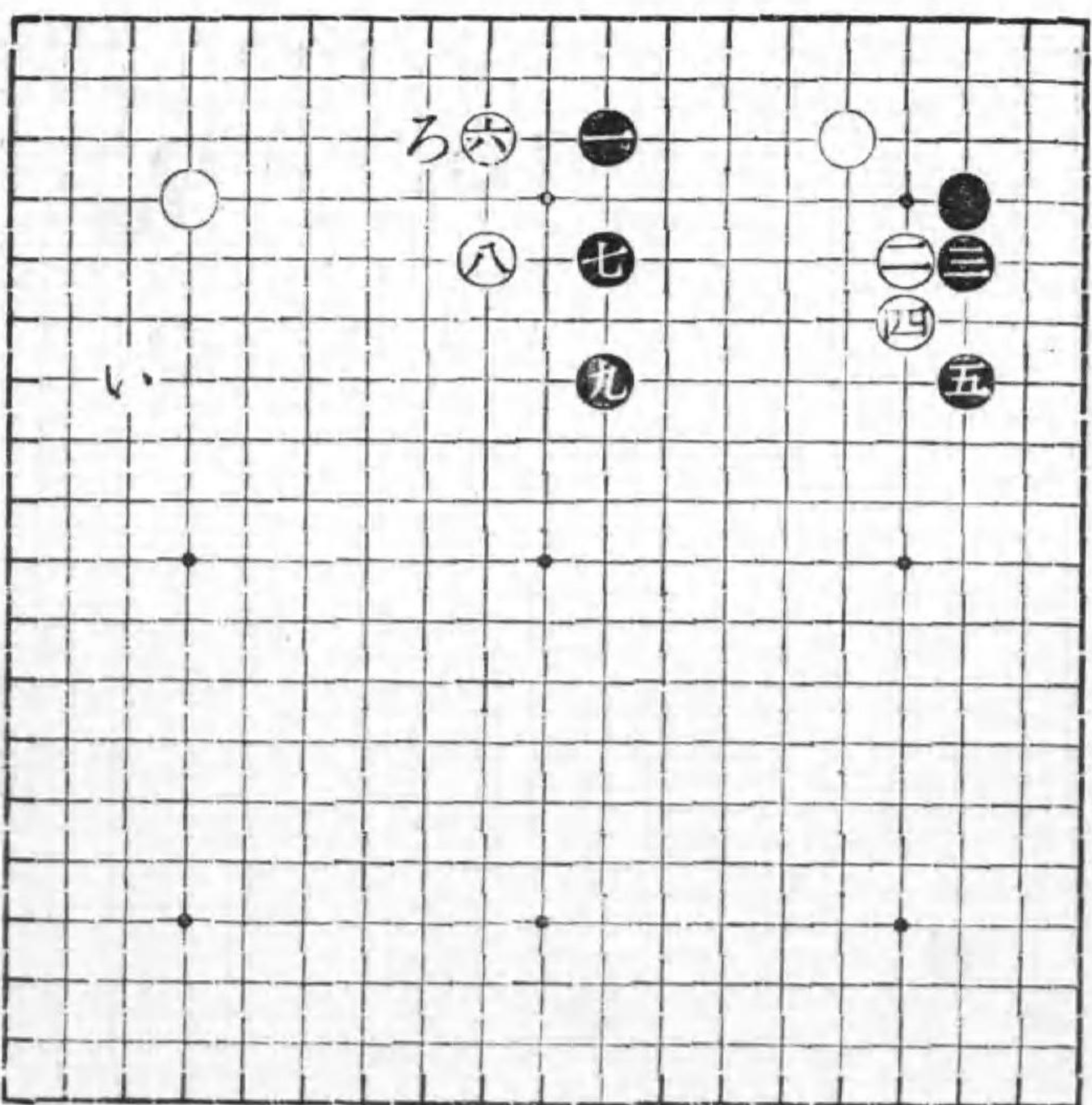
そして白六と八が、白四までに伴ふもの。

白六を假令ば(い)等は見當ちがひである。

即ち次に黒(ろ)で、黒一が安定。と同時に、白四までが――

下らない、立場に悪化である。

と思えやうといふもの。



三八六

本譜白二も前譜白四までと殆んど同様の意味。

即ち黒一の目的である、

黒(ろ)を――

一時免かれ、他に轉じる

事もある――

また白四、白六と直に。

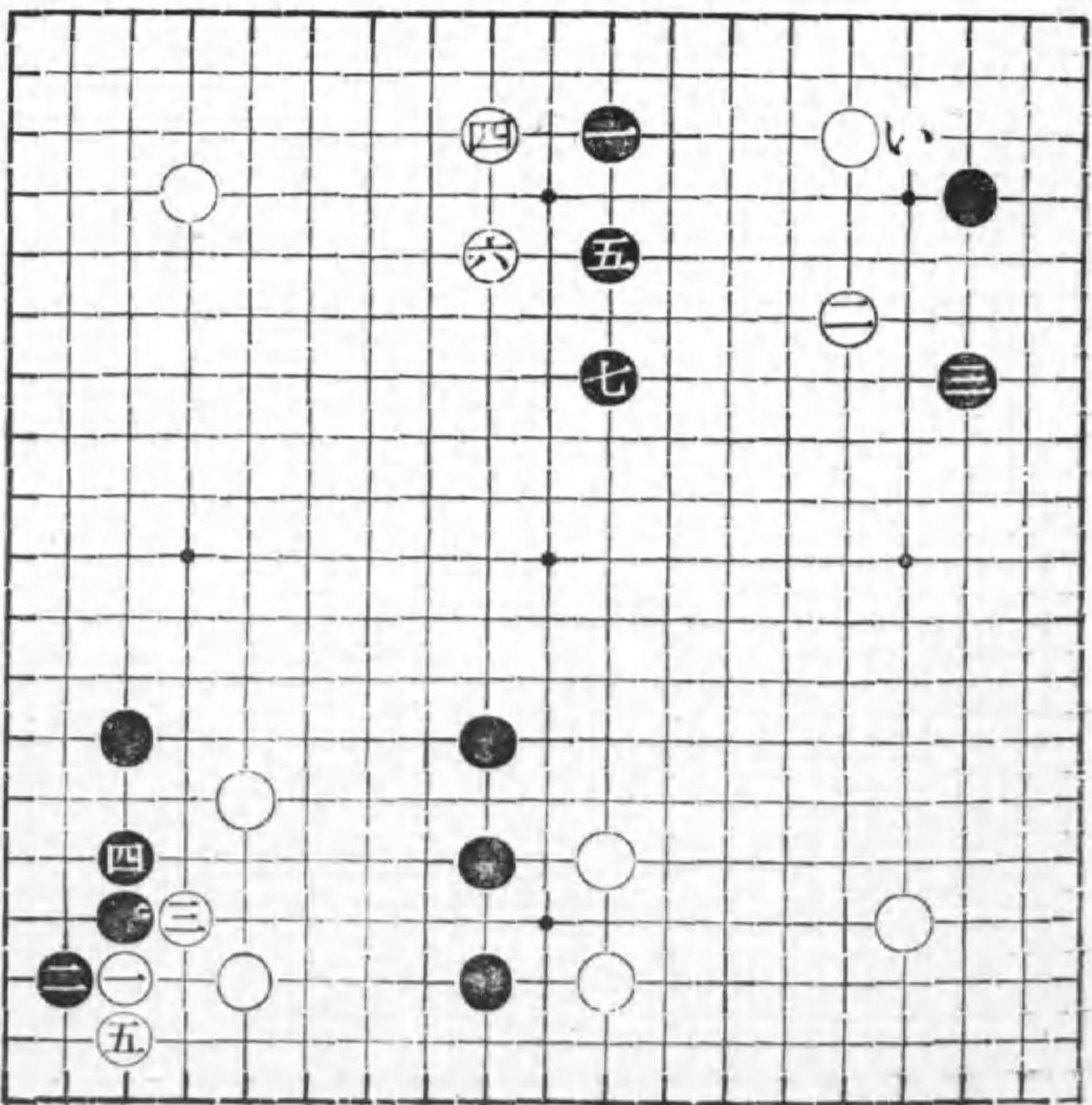
といふ前提である。

下圖白一より五までは、

上圖黒七の時でも――

また早いと思つたら後で

も、といふ治まり方。



三八七

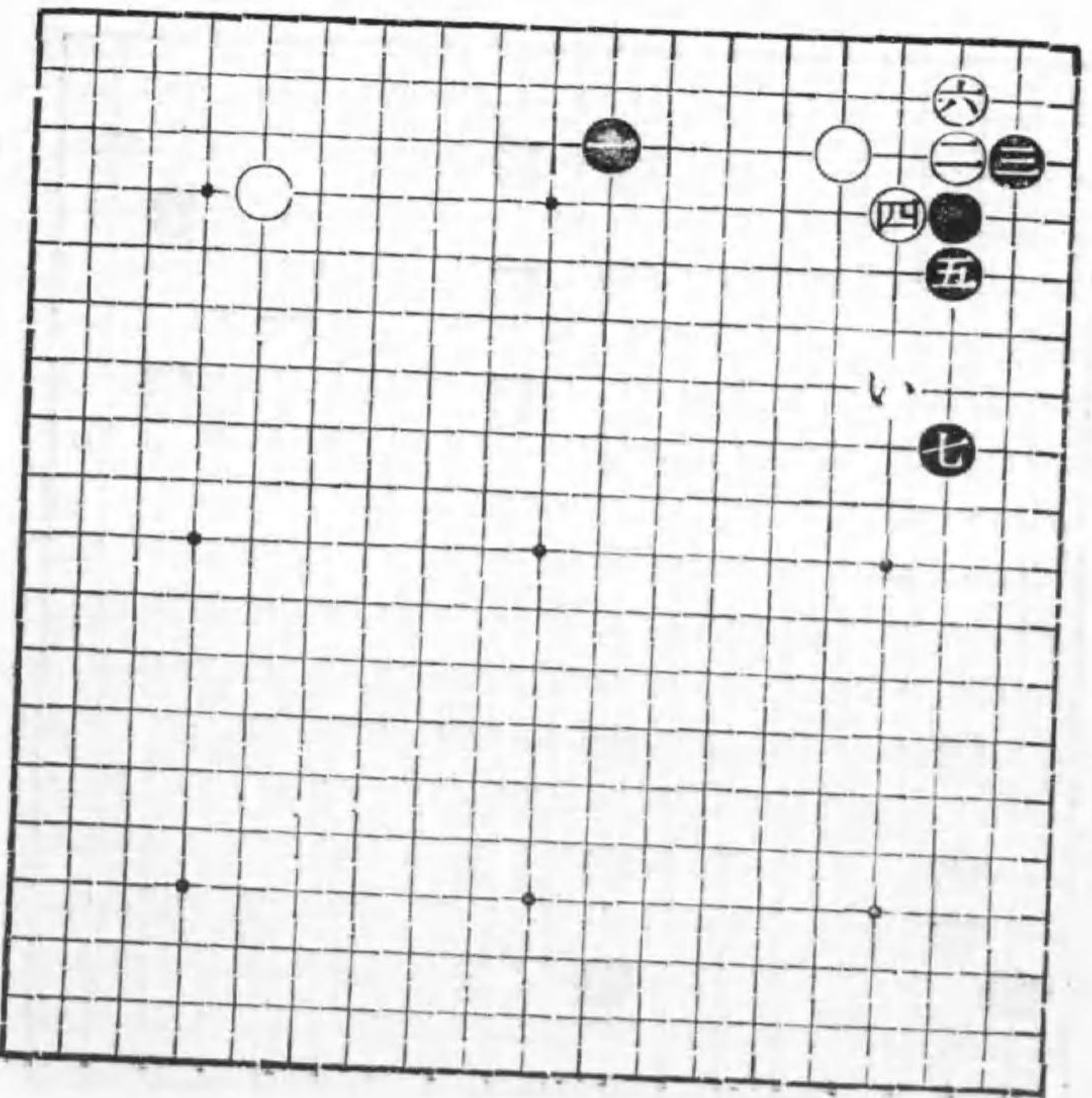
黒一に、白二より六まで、其白丸白一子、安定の定石である。

無論立場を變え黒からでも。併し白として少し堅實すぎ、の感はある。

黒七を(い)も變通定石である。

また黒七を手抜の場合、其他もある。

斷つておくが左上隅の白を様々に變更だが無關係。

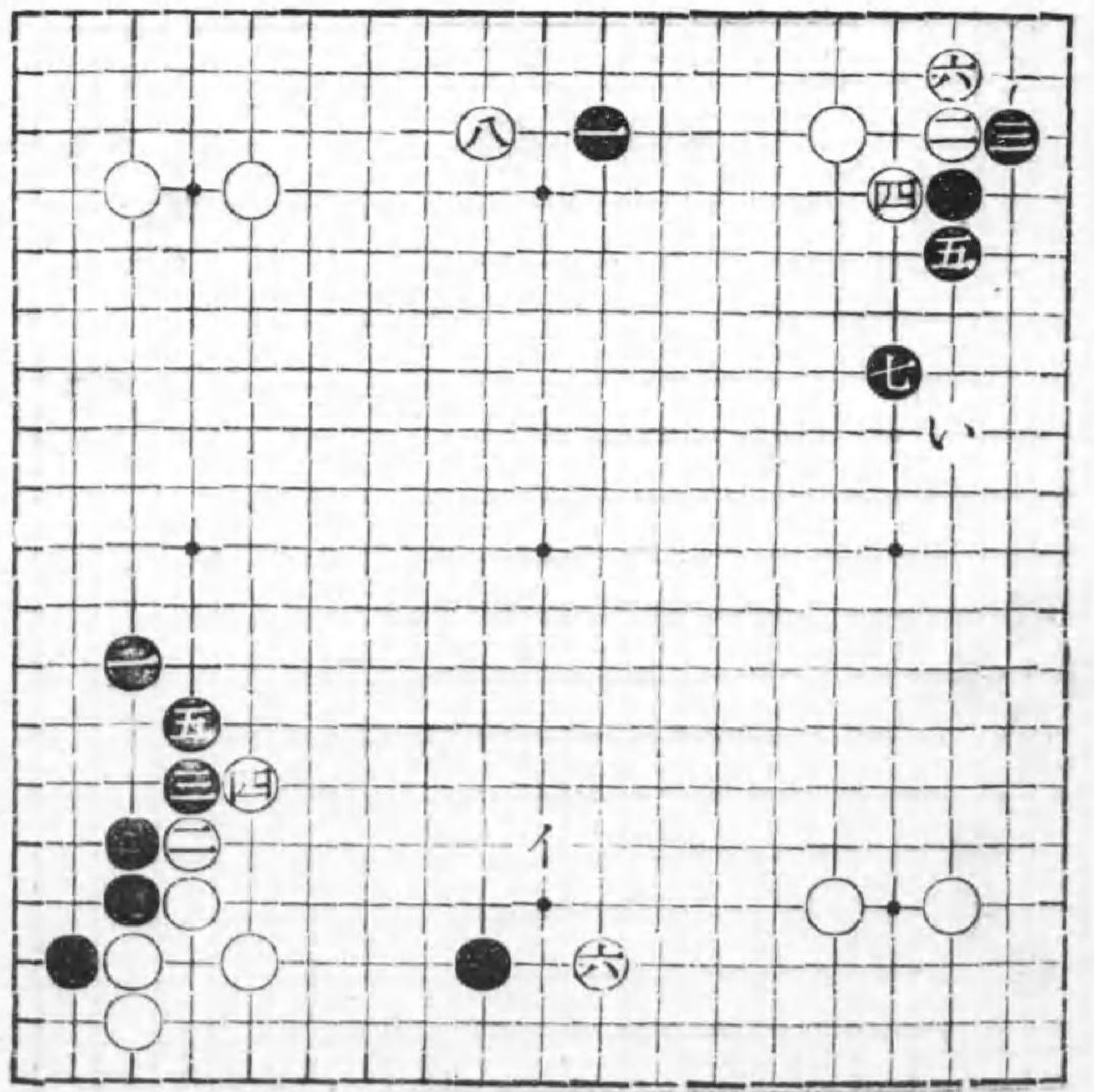


三八八

本圖は左上隅、白の構へと密接な關係にある。即ち白八まで成つて、黒七は黒一に援助の意味。と實感あらう。

黒七を(い)だと、(い)を一とした下圖を觀られよ、白六は次に(イ)。

等で左上隅の如き際に、白右上隅六までは、次の白八をも黒七で考えるのである。なほ黒七で別の方途も。



三八九

黒七を八と必要でもない
それが、黒七の變通定石で
ある。

黒九は軽い應手である。

次に白(い)なら黒(ろ)白

(は)黒(に)。と要するに黒

五以下三子と――

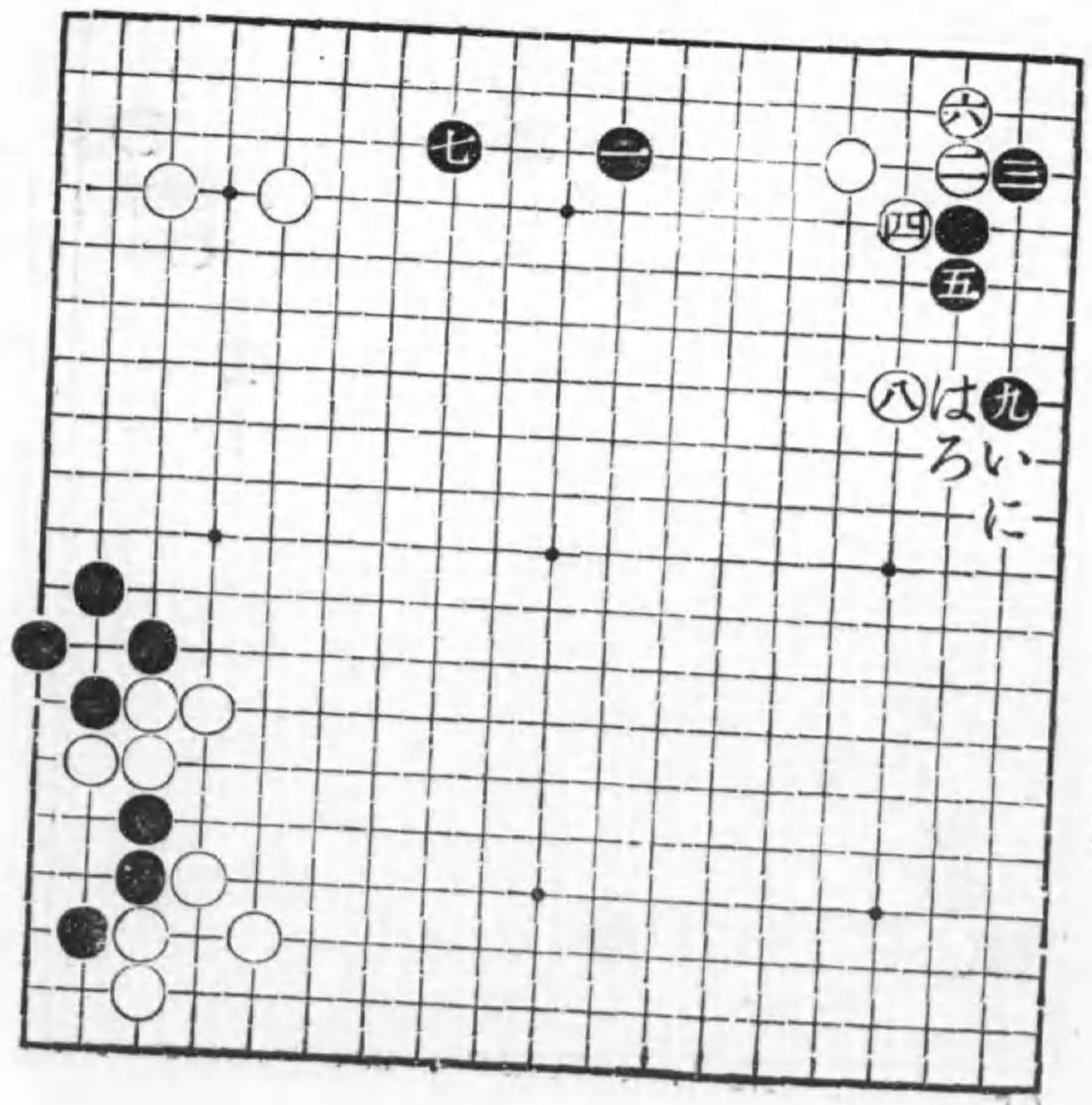
振替つて、黒先手、黒有

利である。

要するに、といふ所は左

下隅の如きもので白(い)

は悪い。



上面――

黒一に白二なら黒三も軽

い應手である。

即ち次に白(い)は黒(ろ)。

従つて白(は)、黒(に)と、

以下「いろは」順、黒(ち)ま

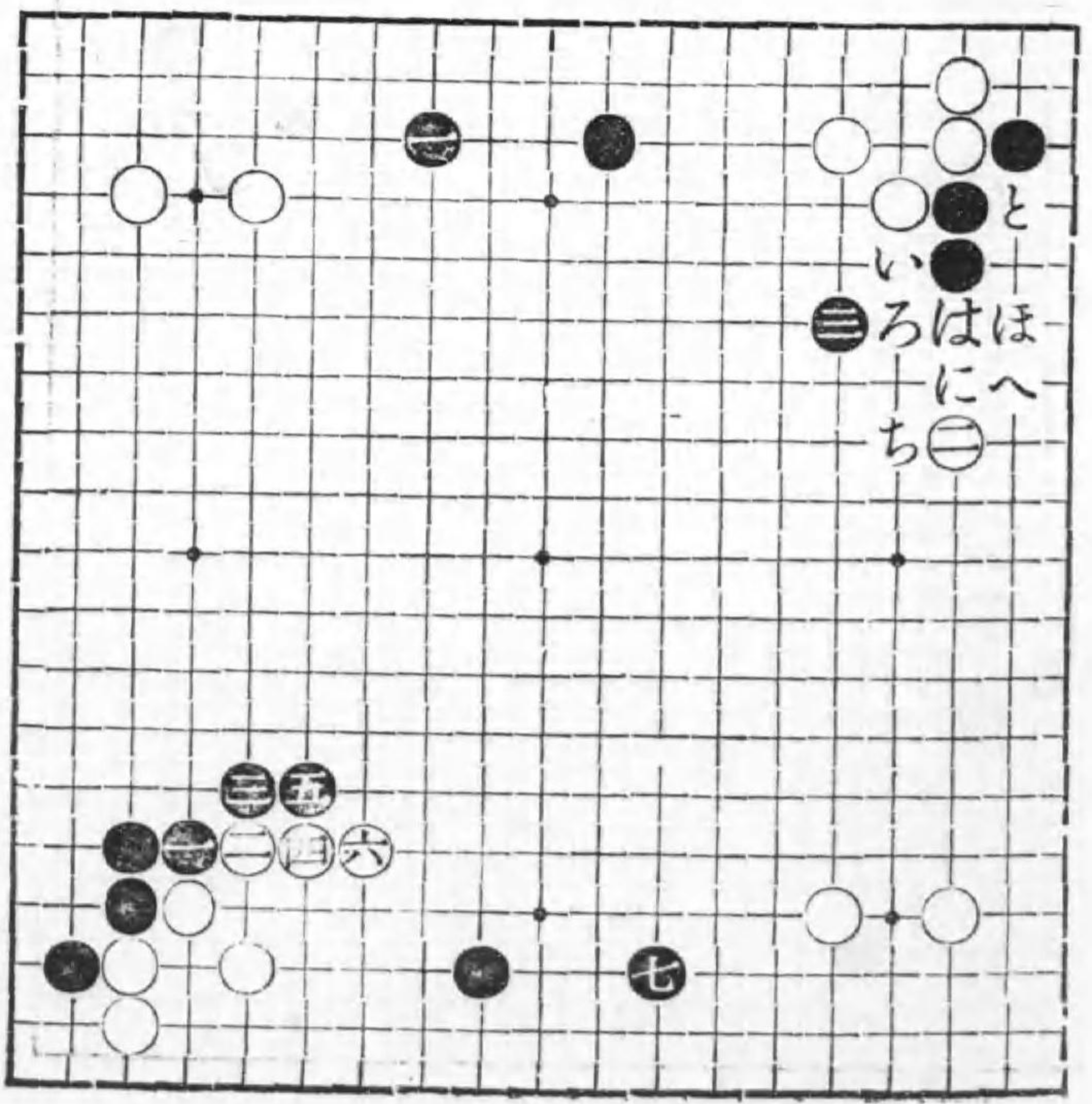
で此れも黒有利である。

軽い意味は捨る變通自在

を含み。

下圖黒七までも黒可。

定石



右上隅

白一に黒六までも、黒の立場で用ひて可。と重ねて断つておく。

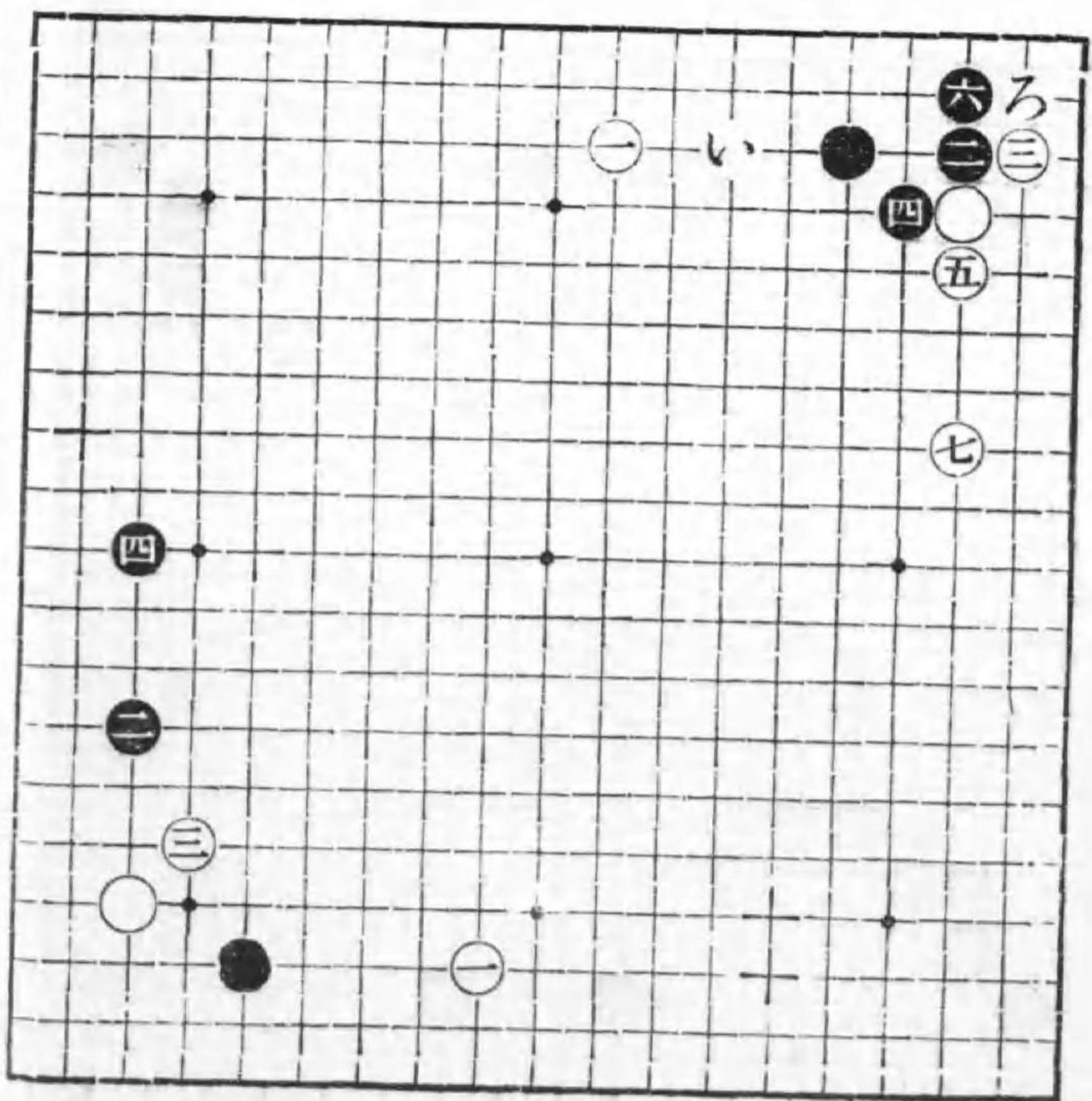
白の方で示すと黒が用ひてどうか、と疑念を解く爲。

なほ白(い)は黒(ろ)、白

(ろ)は黒(い)。それが黒安定の譯。

左下隅

白一に黒四までも定石である。



右上隅白一には、黒二と

四が定石である。

黒二を(い)だと黒(ろ)と成つて

それが左下隅の方。

そして一寸高等の次第だ

が、將來、悟る事でもあら

うから、左側の白丸二手を

前譜左下隅

黒二、黒四、の夫れとは

一路上方、で白便宜の利。

判らなければ將來大徹。

定石

